大和川今池遺跡Ⅱ

二〇〇九年八月

財団法人　大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書　第192集

松原市

大和川今池遺跡Ⅱ

―都市計画道路大和川線および都市計画道路堺松原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2009年８月

財団法人　大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書　第192集

松原市

大和川今池遺跡 Ⅱ

―都市計画道路大和川線および都市計画道路堺松原線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

大和川今池遺跡は、大阪府の南部の堺市と松原市に跨って所在する縄文時代から中近世にかけての複合遺跡です。当遺跡は、宝永元年（1704）に行われた大和川付け替え工事によって、一部がその河川域に組み込まれることとなりました。

これまでの調査では、難波京朱雀大路が南に延伸する位置に「難波大道」と呼ばれる古代の官道跡が検出されています。他に、古墳時代から中近世に至る各時代の集落跡や水田などの生産遺構が確認されています。

今回の調査は、大和川今池遺跡の北東部に当たり、これまであまり明らかになっていなかった弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての土坑や落込みを検出しており、当時の集落が付近に展開していたことが想定できるようになりました。

それと共に、この地域では珍しい古墳時代中期の古墳が検出されました。主体部は確認できませんでしたが、家型埴輪や円筒埴輪が多数検出され、長原遺跡の高廻り２号墳と類似する小方墳であることがわかりました。

また、飛鳥時代から奈良時代にかけての掘立柱建物で構成される集落跡を確認することができました。これに伴い、遺物も多量に出土しております。

なお、それ以降の古代の水田面を広範囲に検出することができました。

さらに、中世の井戸や土坑、中近世の井戸や溝などを検出し、豊富な遺物を得ることができました。

こうした成果は、これまでに実施した発掘調査の成果を追認・補強するものであり、当遺跡における集落の拡がりを考える上で、極めて重要な成果となるものです。

最後に、調査に際して、大阪府富田林土木事務所・松原市天美西地区町会協議会・油上清交会地域大和川線対策委員会、大阪府教育委員会ならびに松原市教育委員会をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成21年８月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、大阪府松原市天美西３丁目地内に所在する大和川今池遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、都市計画道路大和川線および都市計画道路堺松原線建設事業に伴い、大阪府富田林土木事業所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。

3．発掘調査・遺物整理に関わる受託契約期間および調査体制については以下のとおりである。調査・遺物整理に当たっては、随時当財団職員の助言・協力を得た。

〔発掘調査〕

大和川今池遺跡　発掘調査（06－１）

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　大和川今池遺跡発掘調査

受託契約期間　平成18年８月１日～平成20年３月31日

調査体制　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘

南部調査事務所長　大野　薫

調査第二係長　岡本　茂史（平成19年３月まで）・

森屋美佐子（平成19年４月から）

技師　竹原伸次・市村慎太郎

専門調査員　福田基樹

〔遺物整理〕

大和川今池遺跡遺跡遺物整理（08－１）

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　大和川今池遺跡遺物整理委託

受託契約期間　平成20年９月１日～平成21年８月31日

調査体制　調査部長　赤木克視（平成21年３月まで）

調査部長兼調査課長　福田英人（平成21年４月から）

調整課長　田中和弘（平成21年３月まで）

南部調査事務所所長　大野　薫（平成21年３月まで）

調整グループ長　金光正裕（平成21年４月から）

調査第二係長（平成21年３月まで）・南部総括（平成21年４月から）森屋美佐子

4．本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、（調整グループ中部事務所）中部調査事主査　片山彰一が担当した。

5．調査にあたっては、以下の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

大阪府富田林土木事務所・松原市教育委員会・大阪府教育委員会・天美西地区町会協議会・油上清

交地域大和川線対策委員会

6．本書の執筆・編集は、市村・森屋が担当した。

7．本調査に関わる出土遺物・実測図・写真・カラースライド・デジタルデータ等は財団法人　大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系「世界測地系2000」）第Ⅵ座標系を基準にした。

2．発掘調査および遺物整理については、『(財)大阪府文化財センター　遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）の内容に準拠して行った。

　なお、その詳細については第Ⅲ章に記述している。

3．本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はＮ６°27′Ｗに、真北はＮ０°13′Ｅに偏位する。

　また、遺構図に記載した座標値はｍで表示している。

4．標高については、すべて東京湾平均海面（T.P.）＋値を使用している。

5．遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、調査時において検出順に付与した１からの連番号であり、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付して「10土坑」などと表記した。

　また、掘立柱建物や杭列など、複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物１」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表示している。

6．各種遺構・遺物の記述に当たっては、規模等の数値について、遺構がｍ単位、遺物がcm単位を基準としている。なお、それぞれの数値については最小で小数点第２位までの表記としている。

7．遺物番号は、挿図単位毎の通し番号で、写真に関しては、挿図番号と同一の番号を記載している。

8．本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器類を４分の１および８分の１とし、石器は２分の１・等倍を基本としたが、各遺物の寸法に応じて適宜縮尺を変更した。

　遺物写真に関しては、縮尺は任意である。

9．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版　標準土色帖』2006年版を基準としている。

10．遺構挿図・遺物挿図に関しては、IllustratorCS２で作図を、写真図版に関しては、フィルムで撮影後デジタル化し、InDesignCS２で作成を行っている。

　なお、報告書の編集は、InDesignCS２で行っている。

本 文 目 次

序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　位置と環境
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の方法
　第１節　現地調査 …… 8
　第２節　整理作業 …… 10

第Ⅳ章　調査の成果
　第１節　基本層序 …… 11
　第２節　遺構面 …… 13
　第３節　弥生時代後期～古墳時代の遺構と遺物 …… 20
　第４節　古代の遺構と遺物 …… 68
　第５節　中近世の遺構と遺物 …… 122

第Ⅴ章　総　括
第１節　遺構の変遷 …… 171

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　調査区配置図
第３図　大和川今池遺跡の周辺地形図
第４図　大和川今池遺跡周辺の遺跡分布図
第５図　地区割り図
第６図　第１調査区　北壁断面図
第７図　第２調査区　北壁断面図
第８図　第３調査区　北壁断面図（１）
第９図　第３調査区　北壁断面図（２）
第10図　第４調査区　北壁断面図
第11図　第５調査区　北壁断面図
第12図　第６調査区　北壁断面図
第13図　第１調査区　弥生時代～古墳時代平面図
第14図　2467土坑平面・断面および出土遺物実測図
第15図　2468土坑出土遺物実測図
第16図　2355・2379・2397溝断面図
第17図　2397溝出土遺物実測図
第18図　第２調査区　弥生時代 ～古墳時代平面図
第19図　古墳１平面・断面図
第20図　古墳１遺物検出状況図（１）
第21図　古墳１遺物検出状況図（２）
第22図　古墳１出土遺物実測図（１）
第23図　古墳１出土遺物（２）
第24図　古墳１出土遺物（３）
第25図　古墳１出土遺物（４）
第26図　古墳１出土遺物（５）
第27図　古墳１出土遺物（６）
第28図　第２調査区　弥生時代～古墳時代主要遺構平面図
第29図　796 土坑平面・断面図および出土遺物実測図
第30図　865 土坑平面・断面および出土遺物実測図
第31図　894 土坑平面・断面図
第32図　894 土坑出土遺物実測図（１）
第33図　894 土坑出土遺物実測図（２）
第34図　894 土坑出土遺物実測図（３）
第35図　1140土坑平面・断面および出土遺物実測図

第36図　1152土坑平面・断面および出土遺物実測図
第37図　1017土坑平面・断面および遺物出土状況図
第38図　1017土坑出土遺物実測図
第39図　1090土坑平面・断面図および出土遺物実測図
第40図　1167土坑平面・断面および出土遺物実測図
第41図　1784ピット平面・断面および出土遺物実測図
第42図　各ピット出土遺物実測図
第43図　409 落込み出土遺物実測図
第44図　916 落込み平・断面および出土遺物実測図（1）
第45図　916 落込み出土遺物実測図（2）
第46図　897 落込み平・断面図
第47図　897 落込み出土遺物実測図（1）
第48図　897 落込み出土遺物実測図（2）
第49図　372 土坑出土遺物実測図
第50図　包含層出土遺物実測図（1）
第51図　包含層出土遺物実測図（2）
第52図　包含層出土遺物実測図（3）
第53図　包含層出土遺物実測図（4）
第54図　包含層出土遺物実測図（5）
第55図　包含層出土遺物実測図（6）
第56図　第 3 調査区　弥生時代～古墳時代平面図
第57図　1913溝断面および出土遺物実測図
第58図　19土坑平面・断面および19・21土坑出土遺物実測図
第59図　17・18溝断面および出土遺物実測図
第60図　第 3 調査区　包含層出土遺物実測図
第61図　第 4 ・ 5 調査区　包含層出土遺物実測図
第62図　第 6 調査区　弥生時代～古墳時代平面図
第63図　2106土坑平面・断面および出土遺物実測図
第64図　第 6 調査区　包含層出土遺物実測図
第65図　第 1 調査区　古代平面図
第66図　掘立柱建物 1 平面・断面図
第67図　2339・2347・2362溝断面および2347溝出土遺物実測図
第68図　2416落込み平面・断面および出土遺物実測図
第69図　第 1 調査区　包含層出土遺物実測図
第70図　第 2 調査区　古代平面図
第71図　掘立柱建物 2 平面・断面図および各柱穴出土遺物実測図
第72図　掘立柱建物 3 平面・断面図
第73図　掘立柱建物 4 平面・断面図

第74図　掘立柱建物５平面・断面図
第75図　掘立柱建物６平面・断面図
第76図　掘立柱建物７平面・断面図
第77図　掘立柱建物８平面・断面図
第78図　掘立柱建物９平面・断面および柱穴出土遺物実測図
第79図　掘立柱建物10平面・断面図
第80図　掘立柱建物11平面・断面図
第81図　掘立柱建物12平面・断面図
第82図　掘立柱建物13平面・断面図
第83図　掘立柱建物14平面・断面図
第84図　掘立柱建物15平面・断面および柱穴出土遺物実測図
第85図　掘立柱建物16・17平面・断面図
第86図　1182土坑平面・断面図
第87図　1182土坑出土遺物実測図
第88図　759 土坑平面・断面図
第89図　759 土坑出土遺物実測図（１）
第90図　759 土坑出土遺物実測図（２）
第91図　344 井戸平面・断面図
第92図　344 井戸出土遺物実測図（１）
第93図　344 井戸出土遺物実測図（２）
第94図　344 井戸出土遺物実測図（３）
第95図　1135井戸平面・断面および出土遺物実測図
第96図　1135井戸出土遺物実測図
第97図　1539・1562・1846・1902土坑平面・断面図
第98図　1539・1562・1846土坑出土遺物実測図
第99図　792・845土坑平面・断面図および出土遺物実測図
第 100 図　335 溝断面および出土遺物実測図
第 101 図　第２調査区　溝断面図
第 102 図　各溝出土遺物実測図
第 103 図　第２調査区　包含層出土遺物実測図(1)
第 104 図　第２調査区　包含層出土遺物実測図（２）
第 105 図　第３調査区東端部　古代平面図
第 106 図　掘立柱建物18平面・断面図
第 107 図　1486土坑平面・断面および出土遺物実測図
第 108 図　2167土坑平面・断面および出土遺物実測図
第 109 図　1951溝断面図
第 110 図　第３・４調査区　包含層出土遺物実測図
第 111 図　第５調査区　包含層出土遺物実測図

第112図　第6調査区　古代平面図
第113図　2338溝断面図
第114図　2009溝断面図
第115図　2004ピット出土遺物実測図
第116図　古代水田平面図
第117図　第6調査区西端部　古代平面および各遺構出土遺物実測図
第118図　1979溝断面図
第119図　1979溝出土遺物実測図
第120図　包含層出土遺物実測図(1)
第121図　包含層出土遺物実測図(2)
第122図　包含層出土遺物実測図(3)
第123図　第1調査区　中世平面図
第124図　掘立柱建物19・柵1～3平面・断面図
第125図　第2調査区　中世平面図
第126図　398ピット出土遺物実測図
第127図　672溝断面図
第128図　737溝断面図
第129図　672・737溝出土遺物実測図
第130図　第2・3調査区　包含層出土遺物実測図
第131図　第4調査区　中世平面図
第132図　第4調査区　Ⅰ－2層出土遺物実測図
第133図　599井戸平面・断面および出土遺物実測図
第134図　547井戸平面・断面および出土遺物実測図
第135図　549井戸平面・断面および出土遺物実測図(1)
第136図　549井戸出土遺物実測図(2)
第137図　554・577井戸平面・断面および出土遺物実測図
第138図　100・134井戸平面・断面および出土遺物実測図
第139図　74・101井戸平面・断面および出土遺物実測図(1)
第140図　74・101井戸出土遺物実測図(2)
第141図　529土坑平面・断面および出土遺物実測図
第142図　63土坑平面・断面および出土遺物実測図
第143図　73土坑平面・断面および出土遺物実測図
第144図　44・69・131土坑平面・断面および出土遺物実測図
第145図　ピット出土遺物実測図
第146図　544・582・584・585溝断面図
第147図　544溝・溝内落ち込み出土遺物実測図
第148図　578溝出土遺物実測図
第149図　584・585溝出土遺物実測図

第150図　98流路出土遺物実測図(1)
第151図　98流路出土遺物実測図(2)
第152図　545落込み平面・断面および出土遺物実測図
第153図　包含層出土遺物実測図
第154図　第5調査区　中世平面図
第155図　273井戸平面・断面図
第156図　273井戸出土遺物実測図
第157図　98流路断面図
第158図　1995井戸出土遺物実測図
第159図　1997井戸出土遺物実測図
第160図　2113井戸平面・断面および出土遺物実測図
第161図　2206井戸平面・断面および出土遺物実測図
第162図　2116・2207・2209土坑平面・断面および出土遺物実測図
第163図　1996溝断面および出土遺物実測図
第164図　2201溝平面・断面および出土遺物実測図
第165図　2210落込み出土遺物実測図
第166図　第6調査区　中世平面図
第167図　2228土坑平面・断面図および出土遺物実測図
第168図　2307・2235土坑平面・断面図
第169図　2307・2235土坑出土遺物実測図
第170図　2294土坑平面・断面および出土遺物実測図
第171図　2215溝平面・断面および出土遺物実測図
第172図　大和川今池遺跡変遷図(1)
第173図　大和川今池遺跡変遷図(2)
第174図　大和川今池遺跡変遷図(3)

表　目　次

表1　既往調査報告書一覧

写　真　目　次

写真1　現地公開風景
写真2　天美小学校見学風景

写 真 図 版 目 次

図版１　遠景
　１．大和川今池遺跡　遠景
図版２　出土遺物
　１．大和川今池遺跡古墳１・779土坑
図版３　第１調査区
　１．東壁断面（１）　２．東壁断面（２）
　３．東壁断面（３）　４．東壁断面（４）
　５．第３面　全景
図版４　第１調査区
　１．第３面　西半部全景　２．第３面　東半部全景
図版５　第１調査区　弥生時代後期～古代
　１．2339・2347溝　２．2339溝　断面
　３．2347溝　断面　４．2467土坑
　５．2397溝　６．2355溝　全景
　７．2355溝　断面
図版６　第１調査区　古代
　１．掘立柱建物１　２．2389柱穴
　３．2390柱穴　４．2391柱穴
　５．2386柱穴　６．2388柱穴
　７．2383柱穴　８．2384柱穴
　９．2385柱穴
図版７　第１調査区　古代
　１．2369土坑　２．2362溝
　３．2461落込み　４．2461落込み
　５．第２面　全景
図版８　第１調査区　中世
　１．掘立柱建物19　２．2348柱穴
　３．2350柱穴　４．2351柱穴
　５．2352柱穴　６．2353柱穴
　７．2354柱穴
図版９　第２調査区
　１．第３面　３－１トレンチ東端部　２．第３面　３－１トレンチ中央部
図版10　第２調査区
　１．第３面　３－１トレンチ西端部　２．第３面　４－２トレンチ全景

図版11　第２調査区

1．第３面　４－１トレンチ全景　　2．南壁断面

図版12　第２調査区　弥生時代後期～古墳時代

1．第３面　検出状況　　2．894土坑　断面

3．894土坑　出土遺物（１）　　4．894土坑　出土遺物（２）

5．897落込み

図版13　第２調査区　弥生時代後期～古墳時代

1．916落込み　　2．1140土坑

3．1140土坑　出土遺物（１）　　4．1140土坑　出土遺物（２）

5．1017土坑　　6．1017土坑　出土遺物

7．923土坑　　8．898土坑

図版14　第２・３調査区　弥生時代後期～古墳時代

1．1152土坑　　2．372土坑

3．1784ピット　　4．409落込み

5．古墳１（３－１トレンチ）　　6．古墳１（４－２トレンチ）

7．古墳１（３－２トレンチ）　　8．古墳１（６－２トレンチ）

図版15　第２・３調査区　古墳時代

1．古墳１　断面（１）　　2．古墳１　断面（２）

3．古墳１　埴輪検出状況（１）　　4．古墳１　埴輪検出状況（２）

5．古墳１　埴輪検出状況（３）　　6．古墳１　埴輪検出状況（４）

7．古墳１　埴輪検出状況（５）

図版16　第２調査区　古代

1．掘立柱建物２～４　　2．掘立柱建物２　816柱穴

3．掘立柱建物２　820柱穴　　4．掘立柱建物２　821柱穴

5．掘立柱建物２　823柱穴　　6．掘立柱建物２　1222柱穴

7．掘立柱建物２　865柱穴

図版17　第２調査区　古代

1．掘立柱建物３　836柱穴　　2．掘立柱建物３　837柱穴

3．掘立柱建物３　863柱穴　　4．掘立柱建物３　515柱穴

5．掘立柱建物４　832柱穴　　6．掘立柱建物４　827柱穴

7．掘立柱建物４　1143柱穴　　8．掘立柱建物４　1145柱穴

図版18　第２調査区　古代

1．掘立柱建物５・６　　2．掘立柱建物５　902柱穴

3．掘立柱建物５　903柱穴　　4．掘立柱建物５　910柱穴

5．掘立柱建物５　913柱穴

図版19　第２調査区　古代

1．掘立柱建物６　959柱穴　　2．掘立柱建物６　961柱穴

3．掘立柱建物６　965柱穴　　4．掘立柱建物６　967柱穴

5．掘立柱建物６　978柱穴　　6．掘立柱建物６　979柱穴
7．掘立柱建物６　1040柱穴　　8．掘立柱建物６　1042柱穴

図版20　第２調査区　古代
1．掘立柱建物７・８　　2．掘立柱建物７　1048柱穴
3．掘立柱建物７　1049柱穴　　4．掘立柱建物７　1055柱穴
5．掘立柱建物７　1059柱穴　　6．掘立柱建物８　1029柱穴
7．掘立柱建物８　1183柱穴

図版21　第２調査区　古代
1．掘立柱建物９　（４－１トレンチ）　　2．掘立柱建物９　（３－１トレンチ）
3．掘立柱建物９　449柱穴　　4．掘立柱建物９　451柱穴
5．掘立柱建物９　1616柱穴　　6．掘立柱建物９　1803柱穴

図版22　第２調査区　古代
1．掘立柱建物10　　2．掘立柱建物10　1762柱穴
3．掘立柱建物10　1736柱穴　　4．掘立柱建物10　1746柱穴
5．掘立柱建物10　1766柱穴　　6．掘立柱建物10　1772柱穴
7．掘立柱建物10　1774柱穴

図版23　第２調査区　古代
1．掘立柱建物11　　2．掘立柱建物11　1653柱穴
3．掘立柱建物11　1674柱穴　　4．掘立柱建物11　1681柱穴
5．掘立柱建物11　1692柱穴　　6．掘立柱建物11　1851柱穴
7．掘立柱建物11　1853柱穴

図版24　第２調査区　古代
1．掘立柱建物12　　2．掘立柱建物12　1583柱穴
3．掘立柱建物12　1586柱穴　　4．掘立柱建物12　1589柱穴
5．掘立柱建物12　1645柱穴　　6．掘立柱建物12　1646柱穴
7．掘立柱建物９　1616柱穴

図版25　第２調査区　古代
1．掘立柱建物13　　2．掘立柱建物13　1374柱穴
3．掘立柱建物13　1381柱穴　　4．掘立柱建物13　1513柱穴
5．掘立柱建物13　1547柱穴　　6．掘立柱建物13　1545柱穴
7．掘立柱建物13　1543柱穴

図版26　第２調査区　古代
1．掘立柱建物14　　2．掘立柱建物14　1396柱穴
3．掘立柱建物14　1397柱穴　　4．掘立柱建物14　1399柱穴
5．掘立柱建物14　1401柱穴　　6．掘立柱建物14　1403柱穴
7．掘立柱建物14　1409柱穴

図版27　第２調査区　古代
1．掘立柱建物15　　2．掘立柱建物15　991柱穴

3．掘立柱建物15　993柱穴　　4．掘立柱建物15　1003柱穴
5．掘立柱建物16・17　　6．掘立柱建物16　1346柱穴
7．掘立柱建物17　1263柱穴　　8．掘立柱建物17　1273柱穴

図版28　第２調査区　古代
1．759土坑　検出状況　　2．759土坑　検出状況
3．759土坑　埴輪上層検出状況　　4．759土坑　埴輪下層検出状況
5．759土坑　断面

図版29　第２調査区　古代
1．1182土坑　　2．1182土坑　埴輪検出状況
3．344井戸　断面　　4．344井戸　第２層出土遺物
5．344井戸　完掘状況　　6．1135井戸　断面
7．1135井戸　上層出土遺物　　8．1135井戸　下層出土遺物

図版30　第２調査区　古代
1．1562井戸　　2．1539土坑
3．1739土坑　　4．1902土坑
5．792土坑　　6．845土坑
7．335溝　　8．345溝

図版31　第２調査区　古代
1．1172溝　　2．976柱穴
3．1068柱穴　　4．1302柱穴
5．1395柱穴　　6．1569柱穴
7．1698柱穴　　8．1892柱穴

図版32　第２調査区　中世
1．第１面全景（３－１トレンチ）　　2．第１面全景（４－１トレンチ）
3．第１面全景（４－２トレンチ）

図版33　第３調査区
1．第３面　全景（３－２トレンチ）　　2．第３面　全景（５トレンチ）
3．第３面　全景（６－２トレンチ）

図版34　第３調査区
1．第３面　全景（６－２トレンチ）　　2．第３面　全景（６－１トレンチ）
3．南壁断面（６－２トレンチ）

図版35　第３調査区　弥生時代後期～古代
1．17・18溝　　2．17溝　断面
3．18溝　断面　　4．19土坑
5．19土坑　完掘状況　　6．2167土坑
7．2167土坑　出土遺物

図版36　第３調査区　古墳時代～古代
1．1913溝・掘立柱建物18　　2．1913溝

3．掘立柱建物18　1928柱穴　　4．掘立柱建物18　1929柱穴
5．掘立柱建物18　1930柱穴　　6．掘立柱建物18　1933柱穴
7．掘立柱建物18　1935柱穴

図版37　第３調査区　古代
1．第２面(３－２トレンチ)　　2．第２面(５トレンチ)
3．第２面(６－２トレンチ)　　4．第２面(６－１トレンチ)

図版38　第４調査区
1．第３面(７トレンチ)　　2．第３面(８トレンチ)
3．第２面(７トレンチ)　　4．第２面(７トレンチ)

図版39　第４調査区　古代
1．第２面　東端(８トレンチ)　　2．第2面　中央部(８トレンチ)
3．第２面　西端部(８トレンチ)

図版40　第４調査区　中世～近世
1．第１面　(７トレンチ)　　2．第１面(８トレンチ)
3．南壁断面(８トレンチ)

図版41　第４調査区　中世～近世
1．599井戸　　2．547井戸
3．549井戸　　4．549井戸　２段目
5．549井戸　完掘　　6．100井戸
7．134井戸　　8．74井戸

図版42　第４調査区　中世～近世
1．101井戸　　2．73土坑
3．73土坑　出土遺物　　4．44土坑
5．544溝　　6．584溝
7．585溝　　8．98流路

図版43　第５調査区
1．第２面(９トレンチ)　　2．第２面(10トレンチ)
3．第２面(11トレンチ)　　4．第２面(12トレンチ)
5．第１面(９トレンチ)　　6．第１面(10トレンチ)
7．第１面(11トレンチ)　　8．第１面(12トレンチ)

図版44　第５調査区
1．東壁断面(９トレンチ)　　2．西壁断面(10トレンチ)
3．南壁断面(11トレンチ)　　4.南壁断面(12トレンチ)

図版45　第５調査区　中世～近世
1．273井戸　　2．2113井戸
3．2113井戸　曲物井筒　　4．2206井戸
5．1997土坑　　6．2209土坑
7．2201溝　　8．98流路

図版46　第６調査区

１．第３面(13・14トレンチ)　　２．第３面(15トレンチ)

３．2106土坑

図版47　第６調査区

１．2338溝　　２．2338溝

３．2004ピット　　４．轍

図版48　第６調査区　古代

１．第２面(13・14トレンチ)　　２．第２－２面(15トレンチ)

３．第２－１面(13・14トレンチ)　　４．1979溝

図版49　第６調査区

１．第１面(13・14トレンチ)　　２．第１面(15トレンチ)

３．西壁断面(13・14トレンチ　)

図版50　第６調査区

１．2224柱穴　　２．2228土坑

３．2235土坑　　４．2294土坑

５．2307土坑　　６．2307土坑　底部

７．2215溝

図版51　第１～３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

2467・2468土坑、2379溝、古墳１

図版52　第２・３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

古墳１

図版53　第２・３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

古墳１

図版54　第２・３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

古墳１

図版55　第２・３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

古墳１

図版56　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

865土坑・894土坑

図版57　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

894土坑

図版58　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

894土坑

図版59　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

894土坑・1152土坑・1140土坑、1784ピット

図版60　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

1017土坑・1167土坑

図版61　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物
916落込み・897落込み
図版62　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物
包含層（１）
図版63　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物
包含層（２）
図版64　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物
包含層（３）
図版65　第２～４調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物
包含層（４）
図版66　第６調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物
2106土坑、包含層
図版67　第２・６調査区　弥生時代～古代出土遺物
包含層、掘立柱建物２、1182土坑
図版68　第２調査区　古代出土遺物
759土坑
図版69　第２調査区　古代出土遺物
344井戸
図版70　第２調査区　古代出土遺物
344井戸
図版71　第２調査区　古代出土遺物
344井戸・1135井戸
図版72　第２調査区　古代出土遺物
1135井戸、1539土坑・792土坑、第２調査区　包含層
図版73　第３・６調査区　古代出土遺物
2167土坑・1486土坑、1979溝、2004ピット、第６調査区　包含層
図版74　第６調査区　古代出土遺物
第６調査区　包含層
図版75　第４・６調査区　古代・中世出土遺物
第６調査区　包含層、第４調査区　Ⅰ－２層
図版76　第４調査区　中世出土遺物
第４調査区　Ⅰ－２層
図版77　第4調査区　中世出土遺物
599井戸・547井戸
図版78　第４調査区　中近世出土遺物
74・101井戸、549井戸
図版79　第４調査区　中近世出土遺物
584溝・578溝・544溝

図版80　第４調査区　中近世出土遺物

98流路

図版81　第４・５調査区　中近世出土遺物

第４調査区　包含層、1995井戸・1997井戸・2113井戸

図版82　第５調査区　中近世出土遺物

2206井戸

図版83　第５・６調査区　中近世出土遺物

2206井戸、2210落込み、2228土坑

図版84　第６調査区　中近世出土遺物

2307・2235土坑、2215溝

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

１．調査に至る経緯

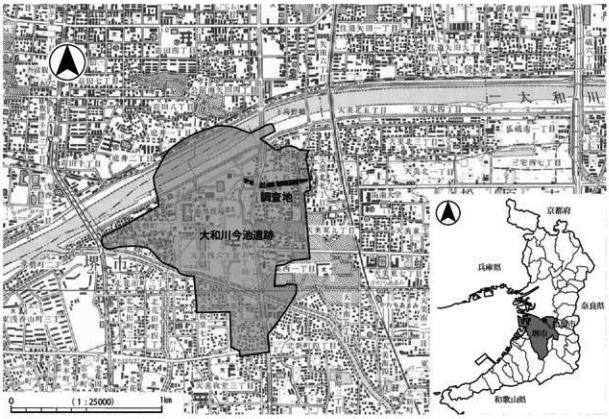
大和川今池遺跡は、大阪府松原市天美西・堺市常磐町・大阪市住吉区苅田・東住吉区矢田に所在し、南北約１㎞、東西約1.45㎞の範囲に広がる遺跡である。

当遺跡は、昭和52年度に大阪府下水道部によって周辺５市町の下水処理を実施すべく、「大和川下流西部流域下水道今池処理場」の建設が計画され、それに伴い堺市教育委員会が埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施したことに遡るものである。この結果、古墳時代を中心とする遺構・遺物が確認され、遺跡として周知されることになった。

今池処理場（現、今池水みらいセンター）内における調査は、大阪府・堺市・松原市の各教育委員会からなる大和川今池調査会が昭和53年より実施し、その後、大阪府教育委員会による調査が行われた。

これらの発掘調査の結果、旧石器時代以来の多数の重要な遺構や遺物が発見され、今日においても府内における著名な遺跡のひとつとして数えられている。中でも、５世紀から６世紀にかけての建物・井戸・溝などは、当時の集落（ムラ）を知ることができる資料となっている。

また、大阪市法円坂一帯に所在する難波宮の中央通である朱雀大路から南に延びる「難波大道」と呼ばれる古代の道路の側溝が、昭和54年度の調査などで確認されている。この「難波大道」は、古代以来の地割である「条里制」区画の基準線となっていたと推定されており、今回の調査地でもこの条里制に



第１図　遺跡位置図

伴う坪境溝や、坪内の畦畔が確認された。

その後、遺跡内を流れる大和川の河川改修事業に伴う発掘調査を平成８年度から平成13年度にかけて大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センター（以下、当センター）が行っている。

今回の調査は、都市計画道路大和川線建設に伴う事業で、東から三宅西遺跡・池内遺跡・大和川今池遺跡の３遺跡があり、平成16年度から当センターで順次調査が行われている。大和川今池遺跡の発掘調査は平成18・19年度に、遺物整理事業は平成20・21年度に行われ、21年８月に『大和川今池遺跡Ⅱ』として報告書を刊行した。

なお、今回の調査に先立ち、平成16年度には、阪神高速大和川線埋蔵文化財確認調査業務（その１）として、確認調査が行われた。このうち、30トレンチが今回の３－１・３－２・５トレンチに、32トレンチが７トレンチに、34トレンチが９トレンチに含まれる。また、同年度には、一般府道住吉八尾線外三宅西遺跡発掘調査委託として油上地区の確認調査が行われた。この調査地は、今回の２トレンチに含まれる（図２）。

２．調査の経過

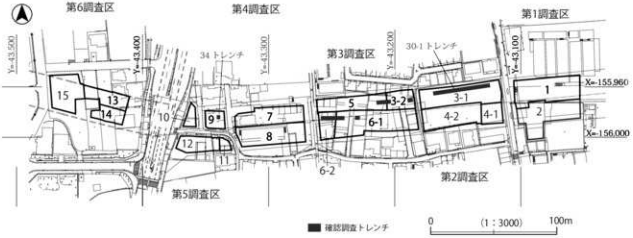
事業対象区域は、7,185㎡を測る。まず、本調査に付与された調査名は、大和川今池遺跡06－１である。今回の調査地は東西に長く、途中に府道や生活道路（通学路）等を挟んでいる。また、掘削土の仮置き場やレッカー撮影用のスペースを確保する必要もあり、これらに基づき、工区内を大きく15のトレンチに区分し、東から西へ工区番号を振り、調査を行った（図２）。さらに、調査の都合上、３トレンチ・４トレンチ・６トレンチは、細分して調査を行っており、それらについては、トレンチに枝番を付している（例：３－１トレンチ）。逆に、13・14トレンチは、一括して調査している。

なお、土壌環境調査結果を受け、２トレンチ、６－２トレンチ南側一部と13・14・15トレンチ間の一部は、調査対象から除外された。

３．調査の概要

各トレンチの調査期間（機械掘削開始～埋め戻し終了）は、調査開始順に以下のとおりである。

５トレンチ　　：平成18年11月22日～平成19年１月19日
８トレンチ　　：平成19年１月15日～２月27日
９トレンチ　　：平成19年２月13日～３月７日
４－１トレンチ：平成19年２月26日～３月20日



第２図　調査区配置図

7トレンチ　　：平成19年３月15日～４月20日
４－２トレンチ：平成19年４月13日～５月28日
３－１トレンチ：平成19年６月４日～７月23日
６－１トレンチ：平成19年６月20日～７月６日
３－２トレンチ：平成19年７月９日～８月７日
15トレンチ　　：平成19年７月30日～９月27日
６－２トレンチ：平成19年８月２日～10月15日
10トレンチ　　：平成19年８月27日～９月10日
11トレンチ　　：平成19年９月12日～10月２日
13・14トレンチ：平成19年10月５日～平成19年12月27日
１トレンチ　　：平成19年10月５日～平成19年12月25日
12トレンチ　　：平成19年10月22日～平成19年11月29日

３－１トレンチについては、地元向けの現地公開を平成19年６月30日に行い、137人の来跡があった（写真１）。また、７月２日には、天美小学校６年生の見学があり、引率教員も含め99人の来跡があった（写真２）。

以上の調査で、コンテナパッドに換算して約280箱におよぶ遺物が出土し、南部調査事務所古市分室において、平成20年９月１日から21年５月31日まで報告書作成に向けた遺物整理作業を行った。

本事業では、現地で作成した遺構図面の整理・編集、特徴的な遺物の抽出・接合・復原並びに実測、各種台帳類の作成・整備を行い、報告書に掲載する遺構・遺物挿図のトレース・版下作成、遺物の写真撮影と遺構・遺物写真図版の作成、報告書本文執筆・カンプの作成、遺物の収納をそれぞれ実施した。

印刷・製本を経て、８月31日に『大和川今池遺跡Ⅱ』の報告書を刊行した。

写真１　現地公開風景

写真２　天美小学校見学風景

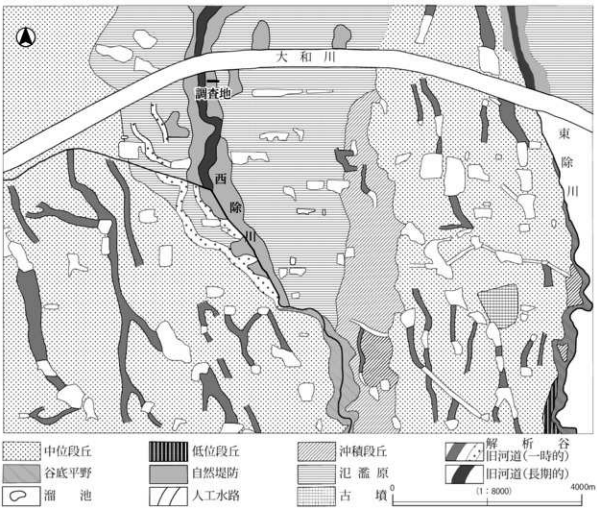
第２章　位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

大和川今池遺跡の立地する地域は、和泉山脈から北に伸びる洪積台地が途切れ、沖積平野へと移行しており、この洪積段丘中位の東端から、東側を流れる旧西除川の氾濫平野との境界部分に位置する。

標高は、9.50m～10.50mを測る。日下雅義氏の分類によると、本遺跡は中位段丘と旧西除川の氾濫原にあたる。遺跡の東側を流れていた旧西除川の両側は段丘地形をなしており、西方の段丘面は北西に向かって緩やかに傾斜している。東方の中位段丘は４～５ｍの比高をもって西方の氾濫原である沖積段丘に漸次移行し、下流の氾濫原では旧西除川に沿って自然堤防状の微高地が見られる。本遺跡の東側では、この自然堤防の地形や一時的に流れた旧河道跡が確認できる。

旧西除川は、大阪狭山市に現存する古代の溜池である狭山池から流れ出て、その東側を流れる旧東除川と共に北に向かって流れていた。両河川は、下方浸食を繰り返し、谷底平野が発達したため、周辺の洪積台地部では灌漑用として掘削された大小様々な溜池が点在するようになる。今池もこうした溜池の一つであった。北上する流れは、旧大和川の流れとあいまって、本遺跡の北側に向かって扇形に広がる



第３図　大和川今池遺跡の周辺地形図

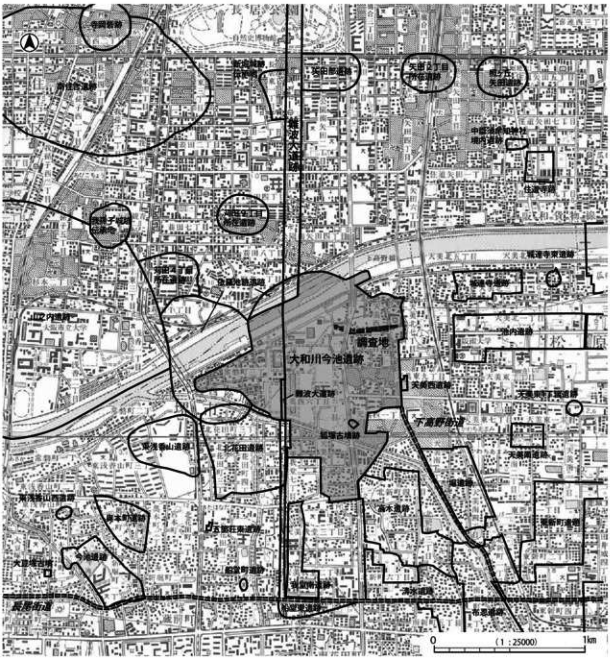
河内平野に洪水の被害を頻繁にもたらした。河内平野の洪水被害を解消すべく、1704年（宝永元年）に江戸幕府によって大和川が付け替えられ、東西方向に流れを向け大阪湾に注ぐようになった。西除川もやがてこの地域の地盤の上昇に伴い、西に屈曲し大和川に流路を変えることとなった。

その後、現在に至るまで、田園地帯が広がっていた。

第２節　歴史的環境

本遺跡が所在する河地平や南部には、多数の遺跡が存在し、かつそれらの考古学的に重要な遺跡がある。

旧石器時代　竪穴遺構と伴に国府型ナイフ形石器が検出された坂石南花田遺跡や大阪市長原遺跡・瓜破遺跡・大堀遺跡・遠里小野遺跡・住吉大社境内内遺跡・松原市清堂遺跡・上田町遺跡などがあげられ



第４図　大和川今池遺跡周辺の遺跡分布図

る。

本遺跡では既往の調査で、遺構は確認されていないが、包含層から翼状薄片石核や国府型ナイフなどの石器が出土している。

縄文時代　この時期の遺構・遺物を検出した遺跡には、大阪市山之内遺跡・岸ノ里遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡・堺市南榎町遺跡などが上げられる。なかでも、長原遺跡では縄文時代晩期の指標である「長原式」土器が検出されている。

本遺跡では、包含層から石鏃が出土し、既往の調査では有舌尖頭器なども出土している。

弥生時代　この時代には、本遺跡周辺でも活発な活動が見られるようになる。堺市北花田遺跡・南花田遺跡・田出井遺跡・三国ヶ丘遺跡・大阪市遠里小野遺跡・住吉大社境内内遺跡・南住吉遺跡・瓜破遺跡・瓜破北遺跡・長原遺跡・桑津遺跡・加美遺跡・松原市天美南遺跡・城連寺遺跡・河合遺跡・布施遺跡・池内遺跡・三宅西遺跡など枚挙に暇がない。

本遺跡では、弥生時代後期の遺構・遺物が第２調査区を中心に検出されているが、遺跡全体でみると希薄である。

古墳時代　この時代になると、遺跡数が格段に増加する。大阪市瓜破北遺跡・喜連東遺跡・長原古墳群・加美古墳群・堺市田出井山古墳（伝反正陵）・天王古墳・鈴山古墳・松原市新堂遺跡・三宅遺跡・三宅西遺跡・池内遺跡・上田町遺跡などがある。

本遺跡では、庄内・布留期の遺構・遺物が第１・２・６調査区でわずかに検出される。中期には、第２・３調査区で、円筒埴輪・家型埴輪を伴う埋没古墳が１基、第１～３調査区で溝・土坑などが検出されている。

既往の調査では、布留期の竪穴住居址や掘立柱建物・井戸・土坑・溝、５・６世紀代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが検出されている。

古代　飛鳥・奈良時代になると、減少し周辺地域の遺跡数は減少し、平安時代になるとさらに少なくなる。大阪市山之内遺跡・津守廃寺・瓜破廃寺・堺市新金岡３丁遺跡・北三国ヶ丘遺跡・松原市池内遺跡などがある。

本遺跡では、この時期が最も遺構・遺物量が多い。第１～３調査区にかけて掘立柱建物が11棟、埴輪転用棺・井戸・土坑・溝などが検出され、その上面では、第２調査区を除く前面で、水田面を検出している。さらに、第１調査区の西端部では、阿麻美許曽神社への参道の側溝と思われる溝が検出されている。

既往の調査では、最も脚光を浴びた「難波大道」が数次に亘る調査で検出されている。なお、東半部で、同時期の掘立柱建物・井戸・土坑などが検出され、奈良時代に入ると水田遺構や飛鳥時代と同様な遺構が検出されている。平安時代では、遺構数も減少している。

中世　平安時代末から始まる新田開発に伴って、洪積段丘上の削平が目立ち、周辺では、この時代の遺跡が点在している。大阪市寺岡砦跡・我孫子城跡伝承地・新堀城跡伝承地・堺市長曽根遺跡・新金岡町遺跡・北三国ヶ丘遺跡・南花田遺跡・五箇荘東遺跡・松原市高木遺跡などがある。

既往の調査では、掘立柱建物・井戸・土坑・区画溝や瓦溜めなどが検出されており、本遺跡の調査では、中世前期の土坑がわずかに点在し、中世後期から近世に至る水田面と井戸を検出している。

第１表　既往の調査刊行図書一覧

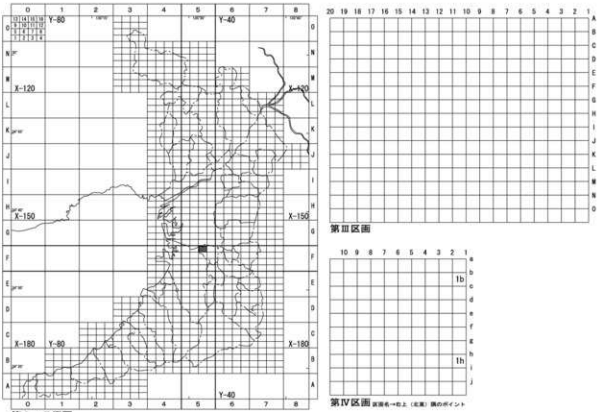
著　者　名	出　版　年	収　録　書　名	編　集　機　関
森村健一	1978	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その１－	大和川・今池遺跡調査会
森村健一他	1979	『大和川・今池遺跡－第１地区発掘調査報告－』	大和川・今池遺跡調査会
森村健一	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その２－	大和川・今池遺跡調査会
森村健一	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その３－	大和川・今池遺跡調査会
森村健一	1979	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その４－	大和川・今池遺跡調査会
森村健一編	1980	『大和川・今池遺跡Ⅱ－第３・４・５発掘調査報告書』	大和川・今池遺跡調査会
森村健一	1980	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その５－	大和川・今池遺跡調査会
森村健一	1980	『大和川今池遺跡』－発掘調査資料その６－	大和川・今池遺跡調査会
森村健一編	1981	『大和川・今池遺跡Ⅲ－第６地区・「古道」発掘調査報告書』	大和川・今池遺跡調査会
岩瀬透・倉谷保裕編	1983	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』	大阪府教育委員会
松原市教育委員会	1984	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和59年度	松原市教育委員会
宮野淳一編	1985	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅱ	大阪府教育委員会
松岡良憲・黒田淳	1986	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅲ	大阪府教育委員会
松原市教育委員会	1986	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和60年度	松原市教育委員会
松原市教育委員会	1987	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和61年度	松原市教育委員会
岩瀬透	1988	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅳ	大阪府教育委員会
岩瀬透・中遠健一	1988	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅴ	大阪府教育委員会
松原市教育委員会	1988	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和62年度	松原市教育委員会
松原市教育委員会	1989	『松原市遺跡発掘調査概要』昭和63年度	松原市教育委員会
岩瀬透	1990	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅵ	大阪府教育委員会
岩瀬透	1990	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅶ	大阪府教育委員会
横田明	1991	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅷ	大阪府教育委員会
林日出子	1992	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅸ	大阪府教育委員会
桝本哲	1992	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅹ・『南花田遺跡』Ⅵ	大阪府教育委員会
坂田育功・森屋直樹	1993	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅺ・『清堂遺跡発掘調査概要』Ⅰ	大阪府教育委員会
藤田道子	1995	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅺ	大阪府教育委員会
西口陽一	1996	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』Ⅻ	大阪府教育委員会
岩瀬透	1997	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』XIII	大阪府教育委員会
地村邦男	1998	『大和川・今池遺跡発掘調査概要』	大阪府教育委員会
(財)大阪府文化財センター	1998	『大和川今池遺跡現地説明会資料』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2000	『大和川今池遺跡（その１・その２）』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2000	『大和川今池遺跡現地説明会資料』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2001	『大和川今池遺跡（その３・その４）』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2002	『大和川今池遺跡（その５・その６・その７）』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2007	『大和川今池遺跡現地公開会資料』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2008	『大和川今池遺跡現地説明会資料』	(財)大阪府文化財センター
(財)大阪府文化財センター	2009	『大和川今池遺跡Ⅰ』	(財)大阪府文化財センター

第３章　調査の方法

第１節　現地調査

現地における調査は、当センターが策定した『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に基づき実施した。

調査箇所の呼称については、受託年度（西暦下２桁）－発注番号（発注順）を組合わせて表記する原則に基づき、06－１調査区と呼称し、さらに必要に応じてトレンチ名を付した。このうち、調査地の地



第５図　地区割り図

区割については、国土座標を利用し、第Ⅵ座標系に基づく地区割によっている（図５）。

これに準じると今回の調査地の第Ⅰ・Ⅱ区画上の位置はＦ５－15となる。ちなみに、この第Ⅰ・Ⅱ区画は調査地内では変化しないため、以後の報文中で用いる際には省略している。遺物の取り上げもこの世界測地系に即しており、取り上げ区画には最小単位を10ｍとする第Ⅳ区画までを用いた。

水準は、全国的に共通の基準となっている東京湾平均海水位（T.P.：TOKYO PEIL）を用いている。

調査に先立ち、防塵措置のために万能塀を設置し、周辺住民の意向により採光確保の要望があった場合には、透明アクリル板も併用した。また、土壌の飛散防止や軟弱地盤に対する工事車両等の進入路確保のため、敷鉄板の敷設を行った。

現地における調査は、各トレンチとも、現地盤測量、機械掘削、同出来形測量、人力掘削、同出来形測量、埋め戻しの手順を踏んだ。なお、機械掘削では盛土層、旧作土層などを除去した。人力掘削においては、断面観察および排水のために調査区周囲に側溝を掘削し、この段階で確認調査成果をも鑑み、調査対象面を想定した。のち詳細な断面観察を行い、断面図を作成した。これと併行し、遺構面検出を行い、精査の後、図化および写真撮影を行った。

調査における写真撮影には、35㎜白黒フィルム・リバーサルフィルム、デジタルカメラを主に用い、全景写真や一部の遺構などには６×７白黒フィルムを、特に重要な場合には、同リバーサルフィルムを用いた。なお、撮影対象を記す当センター所定の写真写しこみラベルは、調査名・調査区・内容（地区割）、撮影方向・撮影日・撮影者を記したものであり、35㎜白黒フィルムのみに写しこみをした。

また、遺構面の写真撮影においては、高所作業車による撮影を行った。さらに、遺構面ごとに基本的に縮尺100分の１の平板測量を行い遺構平面図を作成し、個別の遺構や出土遺物などについても、平面図・断面図・立面図等を適宜作成した。また、各トレンチでは、遺構分布が密な場合や微細な地形復元が必要と判断された遺構面については、ヘリコプターおよびレッカーによる空中写真測量で50分の１の平面図を作成した。この空中写真測量は、基本的に最終面について実施している。

遺構番号の付与は、遺構の種類にかかわらず、調査順に１から連番で使用し、数字の後に遺構種類を明記している（例：2347溝）。また、掘立柱建物および古墳は、整理作業時に新たに番号を付与し、掘立柱建物１というように、区別し記述ている。

各トレンチ調査では、適宜、大阪府教育委員会による立会を受けた。

遺構から検出した遺物は、遺構面・遺構ごとおよび各包含層ごとに取り上げ、当センターの定めたマイラーベースの現場遺物取り上げ用ラベルを添付し、調査名－調査区名・地区名・層位／遺構面・遺構名・出土年月日・登録番号を記した。この際、付与した登録番号は、１から2893までの出土順の通し番号で、トレンチを横断している。

遺物の台帳登録・洗浄・注記といった基礎的な整理作業は、現地における発掘調査の合間に随時実施した。

第２節　整理作業

遺構の整理は、断面図・平面図の整合性を確認し、遺物整理で得られた知見と照合し、再発掘をしていく作業である。調査の時点で、トレンチに区分されていた地区割りを遺跡を詳細に捉えるために、統合して、以下の６箇所の調査区に再区分した。

第１調査区－１トレンチ　　**第２調査区**－３－１、４－１・４－２トレンチ

第３調査区－３－１、５、６－１・６－２トレンチ

第４調査区－７、８トレンチ　　**第５調査区**－９、10、11、12トレンチ

第６調査区－13・14、15トレンチ

まず、当遺跡の全体の堆積状況を確認するために、各調査区の北壁断面図を作成し、層序と遺構面の関係を把握した。また、それに基づいて、各遺構面の全体図の作成を行った。なお、層と面の関係は、第Ⅰ層の上面が第１面という具合である。

次に、各遺構の切り合いおよび所属時期の検証を行い、主要遺構の平面・断面図を作成した。

現地調査で出土した遺物は、土器・石器・木器などを合わせるとコンテナパッドに換算して約280箱を数えた。それらを、調査区・遺構面・遺構・包含層ごと、および、時期・種類ごとに再整理し、この中から、重要と判断されるものについて、約1200点を抽出し、接合を行い、1096点を実測し、約200点を石膏を入れ復原し、約350点を写真撮影した。

また、これらの作業に併行して、報告書の作成および刊行後の遺物管理を効率的に行うために、File Maker社のFileMakerPro6.0を用いて、マニュアルに則り遺物登録台帳を作成した上で、掲載遺物と未掲載遺物に区分し、所定のコンテナラベルを添付し、収納を行った。

なお、本報告書掲載の挿図類は、遺構・遺物図のすべてをAdobe社のＷｉｎｄｏｗｓ版PhotoshopCS２を用いて図面の合成・調整を行い、次に、同社のIllustratorCS２を用いてトレース作業を行うという手順によって作成している。さらに、遺物の版下作成については、InDesignCS２を用いてレイアウトおよび編集を行った。

このほか、各調査区の全体図に関しては、現地調査の段階で作成した空中写真測量の成果であるデータ図面（DXF形式）をAutoDesk社のAutoCad LT2007を用いて簡単な加工を施した後、Illustrator上において加工・調整を施して最終的な図面として用いている。空中写真測量を実施していない面に関しては、１／100で作成された平板図面を基にAdobe社のＷｉｎｄｏｗｓ版PhotoshopCS２を用いて図面の合成・調整を行い、次に、同社のIllustratorCS２を用いてトレース作業を行うという手順によって作成している。

写真図版に関しては、遺構は現地で撮影した35㎜および６×７フィルムをデジタル化し、遺物については、撮影時点でデジタルカメラを使用している。いずれも、400ｄｐｉのＴＩＦファイルにデータ化し、InDesignCS２を用いてレイアウトを行い、キャプションや遺物番号を付与し、編集している。

報告書の作成は、InDesignCS２を用いてすべてデジタルで編集している。

第４章　調査の成果

第１節　基本層序

今回の調査地は、遺跡の北西端部分にあたり、東西約450mを測り、各調査区で地山層上層に強く暗色を呈する粘土～シルト層（以下「黒色土層」と記す）が確認でき、これを鍵層として認識した。詳細は後述するとし、上層より基本層序を記していく。

盛土層（０層）　調査区の東端部の15トレンチを除き、全ての調査区で確認された。後述する旧作土層より上層を一括している。層厚約１～２m前後を測る。シルト～細砂をベースとし、層中には薄い土壌化層が見られる箇所もあった。陶磁器片やガラス瓶などが出土し、時期は現代である。機械掘削により除去した。

旧作土層（０－１層）　一部現代の攪乱により削平されている箇所が見られたが、基本的に全ての調査区で安定して見られた。盛土以前の作土層である。層厚約0.1～0.2mを測り、黒色（2.5Y2/1など）と強く暗色を呈する部分が多い。機械掘削により除去した。

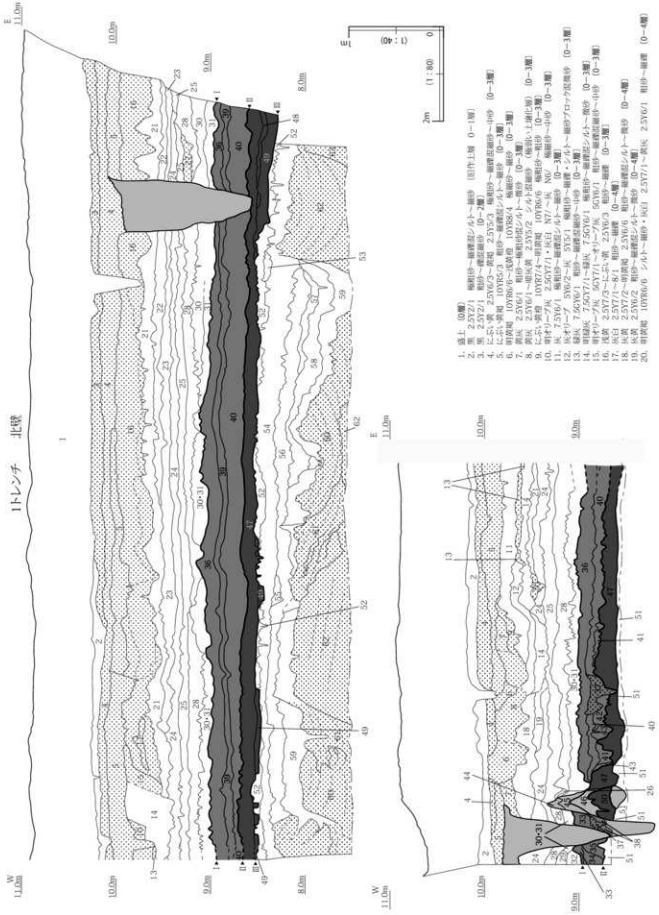
近世以降作土層等（０－２層）　層厚約0.1～0.2mを測り、にぶい黄褐色（10ＹＲ5/3）の粗砂～細礫混じりシルト～微砂などからなり、第１調査区では複数層に細分できたが、ほかの調査区では部分的に旧作土層下に薄く見られる程度である。時期については、機械掘削による除去層のため判然としないが、同層以下の層で近世の陶磁器が出土していることから、近世以降と考えられる。

近世砂層（０－３層）　灰白～黄灰色（2.5Y7/1～6/2）粗砂～細礫混じりシルト～微砂などからなる。第１調査区のみで確認した厚さ0.４m程の一部でラミナが見られる砂層である。時期については、確認調査でも不明とされ、今回の調査でも機械掘削による除去層のため判然としないが、近世頃と考えられる。今回の調査区東側に存在した旧西除川からもたらされたと考えられる。

中世～近世作土層（０－４層）　黄灰～灰黄色（2.5Y4/1～6/2）シルト～微砂などからなり、細砂から小礫などが混じる。基本的に上方粗粒化傾向であり、上部の層ほど砂質傾向が強い。土壌化の度合いは様々で、層中一部ではシルト～砂層の薄い自然堆積層も見られた。第１調査区では、この層よりも上層に上述の各層が見られたが、その他の調査区では旧作土層を除去した段階で確認できる層である。この層の途中までを機械掘削により除去し、以下は人力掘削を行った。出土遺物には瓦器など中世の遺物も含むが、陶磁器などの近世遺物も含む。

中世～近世層（Ⅰ層）　後述する「黒色土層」直上に見られる層で、黄褐色（2.5Y5/4）粘土～シルトからなる部分が多いが、第４調査区西側から第６調査区東側では、灰色（５Ｙ５/１）細砂～細礫に変化している。ほとんどの調査区では、この層上面から遺構面検出を行った。第１調査区や第３調査区付近などでは細分できたが、第２調査区部分などでは、上述の中世～近世作土層による削平を受けているようであり、良好には確認できなかった。瓦器や輸入白磁碗などや近世陶磁器の出土から、時期は中世～近世と考えられる。

弥生～古代（Ⅱ層）　「黒色土層」の黒～暗褐色（10ＹＲ2/1～3/3）などを呈する粘土～シルトで構成される部分が多いが、調査箇所により、強く暗色を呈する箇所や淡い黒褐色を呈する箇所など、差異が見られた。



第6図　第1調査区　北壁断面図

21. 灰黄　2.5Y6/2　細砂混シルト　（弱こた壌化　作土層か?）〔0－4層〕
22. 暗灰黄　2.5Y5/2　粗砂～極粗砂混シルト～微砂　（作土層）〔0－4層〕
23. 灰黄　2.5Y6/2　粘土～シルト　（弱こた壌化　作土層か?）〔0－4層〕
24. 灰黄　2.5Y6/2　細砂混シルト　（弱こた壌化　作土層か?）〔0－4層〕
25. 黄灰　2.5Y6/1　細砂混シルト　（作土層か?）〔0－4層〕
26. 灰　5Y5/1～灰白　5Y7/1　シルト～細砂　〔0－4層〕
27. 明黄褐　10YR7/6～7/8　粗砂～極粗砂　〔0－4層〕
28. にぶい黄橙　10YR6/4～灰白　10YR7/1　シルト混細砂　〔0－4層〕
29. 灰黄　2.5Y7/2　細砂　〔0－4層〕
30. 灰白　2.5Y7/1～黄灰　2.5Y6/1　細砂ブロック混シルト　〔0－4層〕
31. 灰　5Y6/1　粘土～シルト　（土方粗粒化）〔0－4層〕
32. 黄灰　2.5Y6/1～5/1　シルトブロック混細砂　〔0－4層〕
33. 黄灰　2.5Y4/1～暗灰黄　2.5Y5/2　粘土～シルト　〔Ⅰ層〕
34. 灰白　5Y7/1　シルトブロック混細砂　〔Ⅰ層〕
35. にぶい黄褐　10YR5/4　シルト　〔Ⅰ層〕
36. 黄灰　2.5Y6/1　明黄褐　10YR6/6　シルト～微砂　（粘性ややあり）〔Ⅰ層〕
37. 黄灰　2.5Y6/1　粗砂～細礫混砂　黄褐　2.5Y5/3　細砂　〔Ⅰ層〕
38. にぶい黄褐　10YR5/4　シルトブロック混細砂　〔Ⅰ層〕
39. 黄橙　10YR8/6～明黄褐　10YR6/8・
緑灰　10GY6/1～5/1　シルト～微砂　〔Ⅰ層〕
40. 黄橙　10YR8/6　シルト～細砂　（土方粗粒化）〔Ⅰ層〕
41. 明黄褐　10YR6/6　にぶい黄褐　10YR5/4　シルトブロック混細砂　〔Ⅰ層〕
42. 灰白　2.5Y7/1～明黄褐　2.5Y6/6　シルトブロック混細砂・極粗砂～粗砂　〔Ⅰ層〕
43. 灰　5Y5/1～6/1　シルト～微砂　〔Ⅰ層〕
44. 黄灰　2.5Y5/1～暗灰黄　2.5Y5/2　粗砂混シルト～微砂　〔Ⅰ層〕
45. 黄灰　2.5Y5/1～4/1　シルト～微砂　〔Ⅰ層〕
46. にぶい黄褐　10YR5/4～褐　10YR4/6　シルトブロック混シルト　〔Ⅰ層〕
47. 暗青灰　5B4/1　シルト～微砂　（作土層・Ⅱ層）
48. 緑灰　10GY5/1　シルト～微砂　〔Ⅱ層〕
49. オリーブ黒　5Y3/1～黒　5Y2/1　シルト～微砂　〔Ⅱ層〕
50. 黄灰　2.5Y6/1～4/1・褐灰　10YR4/1　粗砂～細礫混粘土～シルト　〔Ⅱ層〕
51. 黄褐　10YR5/6　極粗砂ブロック混粗砂～細礫　（地山）
52. オリーブ灰　2.5GY6/1・明黄褐　10YR6/6～浅黄橙　10YR8/4　シルト　（地山）
53. 浅黄5Y7/3～オリーブ黒5Y6/3　シルト　（地山）
54. 明黄褐　10YR7/6～2.5Y6/6シルト～微砂　（地山）
55. 灰白　7.5Y7/1　シルト～極粗砂　（地山）
56. 明黄褐　10YR7/6～6/4　粘土～微砂　（地山）
57. 明黄褐　2.5Y6/6～灰白　7.5Y7/1　粘土～シルト　（地山）
58. 明黄褐　2.5Y6/6～オリーブ灰　7.5Y6/1　シルト～微砂　（地山）
59. 緑灰　10GY6/1～黄褐　2.5Y5/6　シルト～極細砂　（地山）
60. 黄褐　10YR5/6～灰オリーブ　7.5Y6/2　細砂～中砂　（地山）
61. 灰白　7.5YR/1～6/1　中砂～粗砂　（地山）
62. 灰オリーブ　7.5Y5/2～灰白　7.5Y7/1　粗砂～細礫　（地山）
63. オリーブ灰　2.5GY6/1　粗砂～細礫　（地山）

なお、第４調査区西半部以西では、この「黒色土層」を細分できた。ほとんどの調査区で、この「黒色土層」上面と下面（＝地山層上面）を遺構面とし調査を行ったが、第１調査区では同層が部分的に残存するのみであり、同層上面での調査は行わなかった。詳細は後述するが、この上面では条里水田が検出された調査区がある。弥生時代後期から古代の遺物が出土している。

さらに、第６調査区西端部では、この層が高まり状に堆積し、この箇所のみ遺構面が３枚検出されている。

本層は、地点により後述する地山層の層準と調和的に乱れる変形構造が認められた。この構造は、平面・断面の観察から地震動によるものと推定でき、Ⅱ層下面を上限としていたことから、以前にⅡ層堆積時に発生した地震による荷重痕跡と見ることができる。この地震動の影響により、遺構面の状態は良好ではなかった。

地山層　基本的に、明黄褐～灰黄色（10Ｙ Ｒ6/6～2.5Ｙ7/2）といった色調で、層相は粘土～シルトを基本とするが、第１調査区西側から第２調査区東側では、粗砂～細礫を多量に含む粘土～シルト層であった。これらからの遺物の出土はない。

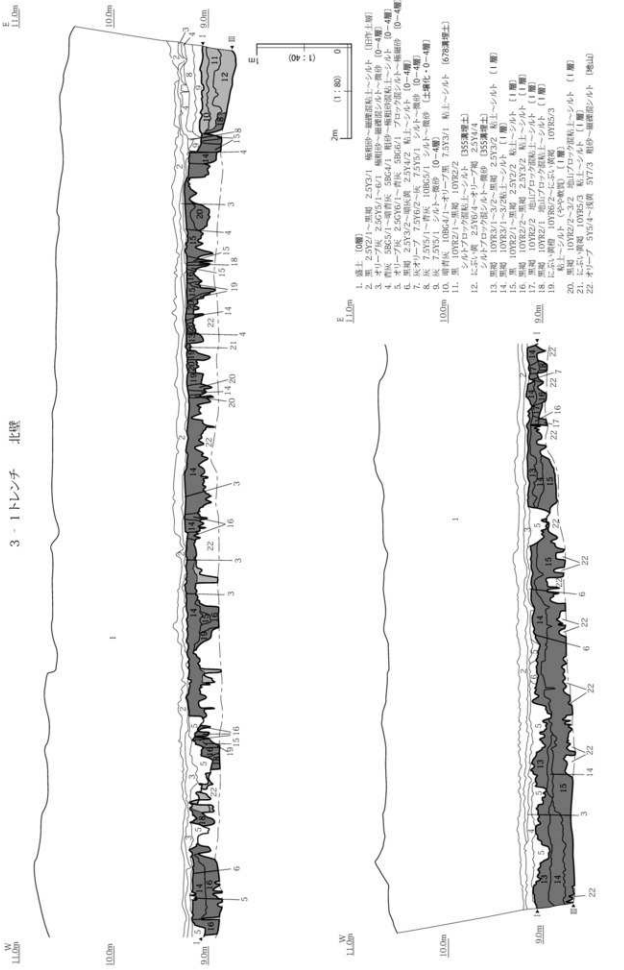
なお、４－１トレンチの井戸で確認できた地山層の粗砂～細礫層は、井戸検出面（概ねT.P.9ｍ）からマイナス２ｍまであり、下部ほど礫が粗粒のようであった。さらに、土壌環境調査に伴う６－２トレンチ部分のボーリングコアを観たところ、G.L.－4.6～4.7ｍ付近（T.P.5.5ｍ程）には木片を含む暗色帯が見られた。

第２節　遺構面

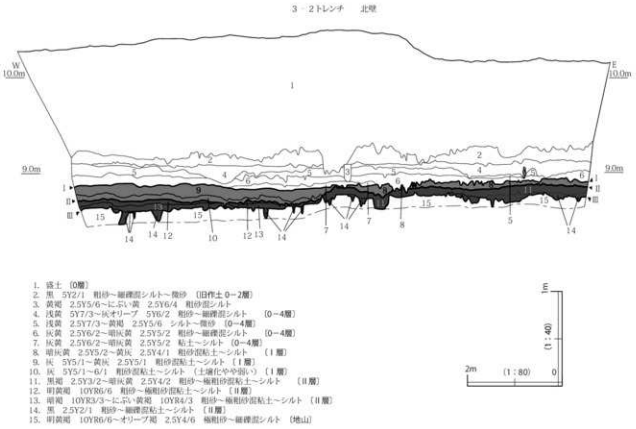
次に、各遺構面の概要を記す。現況では、西側から東側に向けて高くなり、その比高差は約２ｍを測り、西端で約T.P.9ｍ、東端で約T.P.11mである。

第１面　第１面はＩ層上面で、第６調査区の東端部を除くほぼ全面で検出されている。第２調査区がT.P.9.5ｍと最も高く、両側に向かって低くなってゆき、西端部ではT.P.8.6ｍ、東端部ではT.P.9ｍを測る。第３調査区の５トレンチから西方では、Ⅰ－１面・Ⅰ－２面と２面検出している。

Ⅰ面およびⅠ－１面で、中世から近世の水田や井戸・溝などを検出し、近世陶磁器・土師器や中世後期の土師器・陶器・瓦質土器などを検出している。



第７図　第２調査区　北壁断面図



第８図　第３調査区　北壁断面図（１）

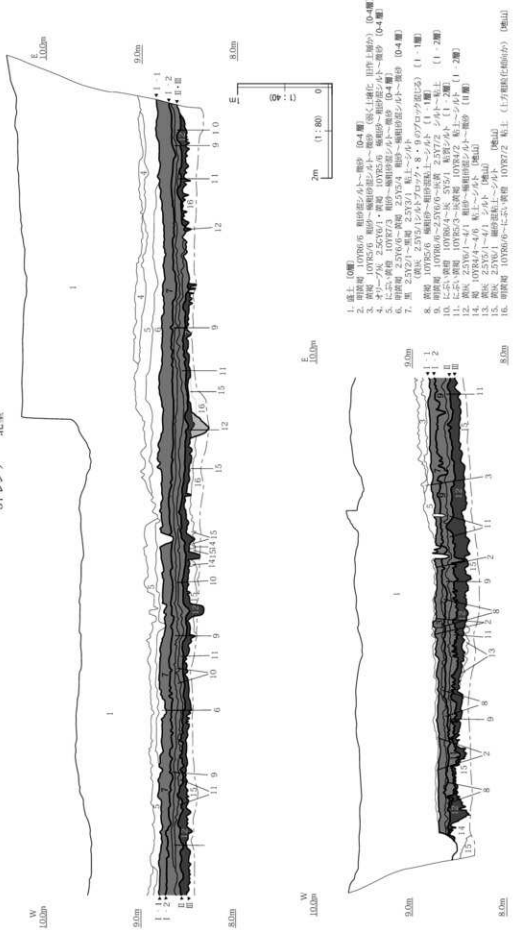
Ⅰ－２面では、土坑やピットなどから、瓦器椀・瓦器小皿・土師器小皿などの中世前期の遺物を検出している。

第Ⅱ面　第Ⅱ面は、Ⅰ層下面およびⅡ層上面で第２調査区を除き検出されている。第Ⅰ面と同様に、第２調査区がT.P. 8.8 mと最も高く、第５調査区でT.P. 8.1 mと低くなり、そこから西方に向かってはわずかに高くなる。第４調査区の西半部では、Ⅱ－１面・Ⅱ－２面と２面検出している。なお、先述した様に、第６調査区の西端部では、Ⅱ－１面・Ⅱ－２面・Ⅱ－３面と３面検出している。

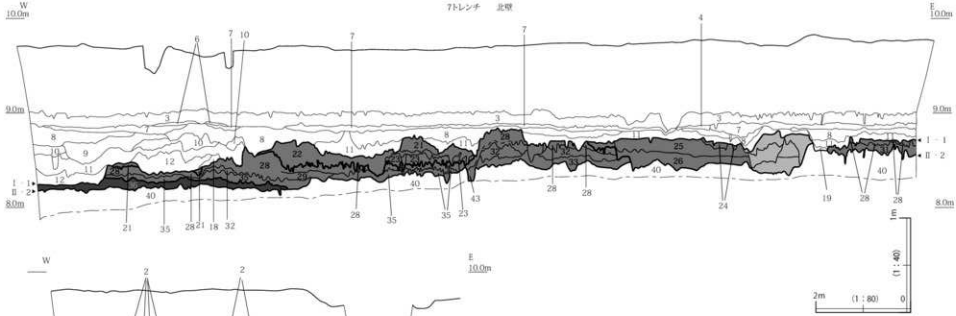
第２調査区を除く、第１調査区から第５調査区および第６調査区のⅡ－２面で、全面に水田が広がっていた。他に、古代の遺構を検出している。

第Ⅲ面　第Ⅲ面は、第１調査区から第３調査区、および第６調査区で検出されており、第２調査区がT.P. 8.9 mと高く、第１調査区東端部ではT.P. 8.4 m、第３調査区西端部ではT.P. 8.4 mを測る。第６調査区では、T.P. 8.2 mとやや低くなる。この面で、弥生時代後期から古代の遺構を検出している。

第１調査区から第３調査区の東部にかけて、弥生時代後期前葉から古墳時代前期の溝や土坑などを検出し、古墳時代中期（５世紀前葉）の第２・３調査区にかけて埋没古墳を１基・第６調査区で６世紀代の土坑を１基検出している。なお、同一面で、第１調査区から第３調査区東端部にかけて古代の掘立柱建物を18棟や井戸・土坑・溝なども検出している。



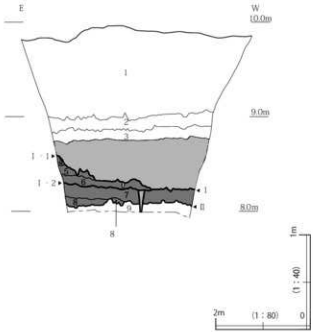
第９図　第３調査区　北壁断面図（２）



1. 盛土 〔0層〕
2. 灰 N5/～黄灰 2.5Y5/1 シルト 〔旧作土層 0－1層〕
3. 暗青灰 5B4/1 極粗砂～細礫混シルト～微砂 〔旧作土層 0－2層〕
4. 灰 5Y5/1 極粗砂混シルト～微砂 〔旧床土 0－2層〕
5. 青灰 5B5/1・灰白 5Y7/2～灰オリーブ 5Y6/2 細砂～中砂 （部分的に極粗砂～粗砂混） 〔0－4層〕
6. 灰 5Y4/1・暗青灰 5B4/1 シルト～微砂 〔0－4層〕
7. 黄褐 10YR5/6～黄灰 2.5Y6/1 極粗砂～粗砂混シルト～微砂 〔0－4層〕
8. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂～細礫混シルト～微砂 〔0－4層〕
9. 黄灰 2.5Y6/2～暗灰黄 2.5Y5/2 極粗砂～礫混シルト～微砂 〔0－4層〕
10. 灰黄 2.5Y7/2～黄灰 2.5Y5/1・灰 5Y6/1～5/1 極粗砂～粗砂混シルト～微砂 〔0－4層〕
11. 黄灰 2.5Y6/1～5/1 極粗砂～粗砂混シルト 〔0－4層〕
12. 灰 5Y6/1～N6/ 極粗砂～粗砂混粘土～シルト 〔0－4層〕
13. 黄灰 2.5Y6/1～5/1 極粗砂～粗砂混粘土～シルト 〔0－4層〕
14. 灰白 5Y7/1～灰 5Y4/1 極粗砂～粗砂混粘土～シルト 〔0－4層〕
15. 灰白 5Y7/1～灰 5Y4/1・黄褐 2.5Y5/4 極粗砂～粗砂混粘土～シルト 〔0－4層〕
16. 灰白 10YR7/1 極粗砂～細礫混シルト～微砂 〔0－4層〕
17. 灰白 10YR7/2 極粗砂～細礫混シルト～微砂 〔0－4層〕
18. 青灰 5B5/1・灰 5Y6/1～5/1 極粗砂～粗砂混シルト～微砂 〔0－4層〕
19. 灰黄 2.5Y7/2～黄褐 2.5Y5/6 細砂 〔0－4層〕
20. 黄灰 2.5Y6/1～暗灰黄 2.5Y4/2 極粗砂～大礫 〔Ⅰ－1層〕
21. 灰白 5Y7/2～灰 5Y5/1 シルト～細砂 〔Ⅰ－1層〕
22. 黄灰 2.5Y6/1～黒褐 2.5Y3/1 Ⅱ層ブロック混細砂 〔Ⅰ－1層〕
23. 褐灰 10YR6/1～灰黄褐 10YR6/2 粘土～微砂 〔Ⅰ－1層〕
24. 黒褐 10YR3/1 極細砂～細砂・粗砂混粘土～シルト 〔Ⅰ－1層〕
25. 黒褐 10YR3/1～褐灰 10YR4/1 極粗砂～粗砂混粘土～微砂 〔Ⅰ－1層〕
26. 黒褐 10YR3/1～2/2 極粗砂礫～礫混粘土～シルト 〔Ⅰ－1層〕
27. 灰 5Y6/1～黒 5Y2/1 細砂ブロック混粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
28. 黄褐 2.5Y3/1～黒 2.5Y2/1 粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
29. 黒 2.5Y2/1 粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
30. 灰黄褐 10YR4/2～黒褐 10YR3/1 地山ブロック混粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
31. 黒褐 10YR3/1～暗褐 10YR3/3 粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
32. にぶい黄褐 10YR5/4～4/3 粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
33. にぶい黄褐 10YR4/3～にぶい黄褐 10YR6/3 Ⅱ層ブロック混粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
34. 黄灰 2.5Y5/1～4/1 粘土～シルト （炭化物粒含む） 〔Ⅰ－2層〕
35. にぶい黄褐 10YR5/4～褐灰 10YR4/1 粘土～シルト 〔Ⅰ－2層〕
36. 黄灰 2.5Y4/1 粘土～シルト 〔Ⅱ－2層〕
37. 褐灰 10YR6/1～黄灰 2.5Y6/1 ブロック混シルト （東方へ粘土） 〔Ⅱ－2層〕
38. にぶい黄 2.5Y6/4 シルト～細砂 〔地山〕
39. 黄灰 2.5Y5/1～黄褐 2.5Y5/6 極粗砂～中砂 〔地山〕
40. 浅黄 2.5Y7/4～黄褐 2.5Y5/6 粘土～シルト 〔地山〕

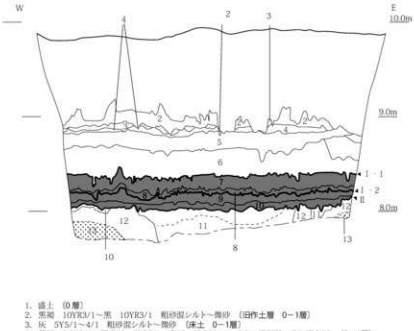
第10図　第4調査区　北壁断面図

10トレンチ　南壁



1. 盛土 〔0層〕
2. 黒褐　10YR3/1　粗砂混シルト微砂　〔旧耕土 0－1層〕
3. 暗緑灰　10GY4/1　シルト～微砂　〔床土 0－1層〕
4. 緑灰　10GY5/1　粗砂　〔Ⅰ－1層〕
5. 緑灰　7.5GY5/1　シルト～微砂　〔Ⅰ－1層〕
6. 褐　7.5YR4/4　粘土～シルト　〔Ⅰ－1層〕
7. 褐灰　10YR4/1　粘土～シルト　〔Ⅰ－2層〕
8. 黄灰　2.5Y5/1　粘土～シルトブロック　〔Ⅰ－2層〕
9. 黄灰　2.5Y5/1　粘土～シルト　〔地山〕

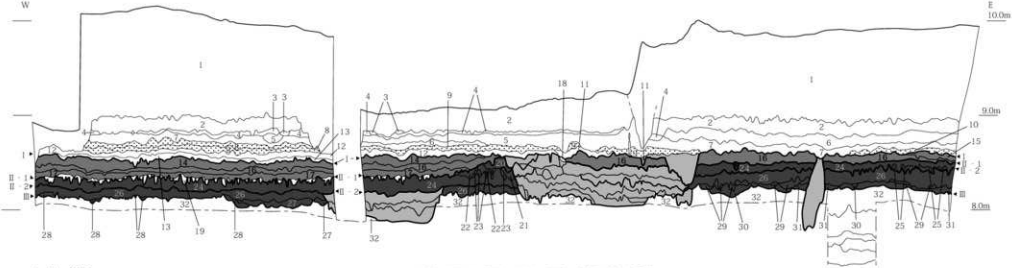
9トレンチ　北壁



1. 盛土 〔0層〕
2. 黒褐　10YR3/1～黒　10YR3/1　粗砂混シルト～微砂　〔旧作土層 0－1層〕
3. 灰　5Y5/1～4/1　粗砂混シルト～微砂　〔床土 0－1層〕
4. 黄褐　2.5Y5/4・明青灰　5BG7/1～青灰　5BG6/1　シルト～極細砂　(Mg斑あり)　〔0－4層〕
5. 明緑灰　10GY8/1～緑灰　10GY6/1・明青灰　10BG7/1～青灰　10BG6/1・オリーブ灰　10Y6/2　細砂　(一部粗砂～極粗砂)　〔0－4層〕
6. 黄褐　10YR7/8～5/8・灰白　2.5Y7/1～暗灰黄　2.5Y5/2　シルト～細砂　〔0－4層〕
7. 褐灰　10YR4/1～黒褐　10YR3/1　粘土～シルト　(粘性強)　〔Ⅰ－1層〕
8. 黒　10YR2/1～褐灰　10YR4/1　粘土～シルト　(一部中砂～粗砂混)　〔Ⅰ－1層〕
9. 褐灰　10YR5/1　中砂～粗砂混粘土～シルト　〔Ⅰ－2層〕
10. 褐灰　10YR6/1～4/1　中砂～粗砂混シルト　〔Ⅰ－2層〕
11. 灰白　10YR/1～N8/　シルトブロック混極細砂　〔地山〕
12. 灰白　N8/～N7/　シルト混細砂～極細砂　〔地山〕
13. 灰白　N8/～N7/　細砂～細礫

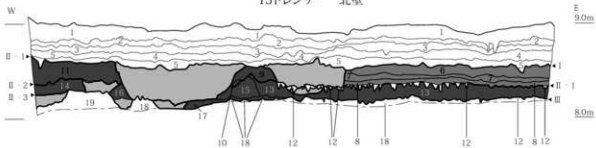
第11図　第5調査区　北壁断面図

13・14トレンチ　北壁



1. 盛土 〔0層〕
2. 黄灰 2.5Y5/1 中砂～極粗砂 〔現耕土 0－1層〕
3. 灰オリーブ 5Y5/2 細砂～中砂 〔床土 0－1層〕
4. 黄灰 2.5Y6/2 中砂～極粗砂 〔床土 0－1層〕
5. 黄褐 10YR5/6～褐灰 10YR5/1 中砂～粗砂 〔0－2層〕
6. 暗オリーブ 5Y4/4 中砂～粗砂 〔0－3層〕
7. 黄灰 2.5Y6/1～明黄褐 2.5Y6/8 中砂～粗砂 〔床土・0－4層〕
8. 黄灰 2.5Y6/1～明黄褐 2.5Y6/8 シルト混中砂～粗砂 〔0－4層〕
9. 明黄褐 10YR6/8～黄灰 2.5Y6/1 シルト混中砂～粗砂 〔0－4層〕
10. 灰 7.5Y6/1～明黄褐 10YR6/8 中砂～粗砂 〔0－4層〕
11. 明褐 7.5YR5/8～灰黄褐 10YR6/2 細砂（Mg斑あり） 〔0－4層〕
12. 灰 5Y6/1 上ぶい黄褐 10YR4/3 細砂混シルト（Mg斑あり） 〔旧耕土・0－4層〕
13. 灰 5Y6/1 シルト～微砂 〔0－4層〕
14. 黄褐 10YR5/8 細砂混シルト 〔I層〕
15. 灰オリーブ 5Y5/2 シルト～中砂混粗砂 〔I層〕
16. 明黄褐 10YR6/8～褐灰 10YR6/1 細砂混シルト 〔I層〕
17. 褐 10YR4/6～褐灰 10YR6/1 細砂～中砂混シルト 〔I層〕
18. 明褐 7.5YR5/6 細砂 〔I層〕
19. 褐灰 7.5YR6/1～明黄褐 10YR6/8 細砂混粘土～シルト（牛足跡埋土）
20. 黒褐 10YR2/3～褐灰 10YR5/1 粗砂～礫層 〔II－1層〕
21. 黒 5YR1.7/ 細礫混粘土～シルト 〔II－1層〕
22. 褐灰 5YR5/1 粗砂（Mg斑あり）〔II－1層〕
23. 黄褐 10YR5/8～褐灰 10YR5/1 粗砂混粘土～シルト 〔II－1層〕
24. 褐灰 10YR4/1 細砂混粘土～シルト 〔旧耕土・II－1層〕
25. 黒 2.5Y2/1～褐灰 10YR4/1 粘土～シルト 〔II－1層〕
26. 褐灰 7.5YR4/1 細砂混粘土～シルト 〔II－2層〕
27. 黄灰 2.5Y5/1 地山ブロック・シルト混細砂～中砂 〔II－2層〕
28. 褐灰 7.5YR4/1～明黄褐 2.5Y6/8 地山ブロック・細砂混シルト 〔II－2層〕
29. 褐灰 10YR4/1～黄褐 10YR5/8 粘土～シルト 〔II－2層〕
30. 黒褐 10YR3/1～にぶい黄 2.5Y6/4 粘土～シルト 〔II－2層〕
31. 黄灰 2.5Y6/1～褐灰 10YR5/6 粘土～シルト 〔II－2層〕
32. 黄 2.5Y7/8～黄灰 2.5Y6/1 粘土～シルト 〔地山〕

15トレンチ　北壁



1. 明灰黄 2.5Y5/2 中砂～極粗砂 〔現耕作土 0－1層〕
2. 黄灰 2.5Y6/1～明黄褐 10YR6/8 細砂～シルト混中砂 〔床土0－1層〕
3. 灰白 2.5Y7/1～黄 2.5Y7/8 細砂～シルト混中砂 〔旧耕作土・0－2層〕
4. 明黄褐 10YR6/8 細砂～シルト混中砂 〔旧耕作土・0－4層〕
5. 灰 5Y6/1～にぶい黄褐 10YR4/3 細砂混シルト 〔旧耕作土・0－4層〕
6. 黄褐 10YR5/8 細砂混シルト 〔旧耕作土・I層〕
7. 明黄褐 10YR6/8 細砂混シルト 〔旧耕作土・I層〕
8. 明黄褐 10YR6/8～褐 10YR4/6 中砂～細砂混シルト 〔旧耕作土・I層〕
9. 褐灰 10YR5/1～黄褐 10YR5/8 極細砂混シルト～細砂 〔I層〕
10. 黒 10YR2/1 極細砂混シルト～微砂 〔I層〕
11. 黒褐 10YR3/2 極細砂混シルト～微砂 〔旧耕作土・II－1層〕
12. 褐灰 7.5YR6/1～明黄褐 10YR6/8 細砂混粘土～シルト 〔床面足跡埋土〕
13. 褐灰 10YR4/1 細砂混粘土～マシルト 〔旧耕作土・II－2層〕
14. 褐灰 10YR4/1～黒褐 10YR3/2 礫混粘土～粗砂 〔旧耕作土・II－2層〕
15. 黒褐 2.5Y3/1 極細砂混粘土～シルト 〔II－2層〕
16. 黒褐 5YR2/1 細砂混粘土～粗砂 〔II－2層〕
17. 黒褐 10YR2/2 極細砂混粘土～シルト 〔II－3層〕
18. 黄 2.5Y7/8 粗砂～礫（直径2cm大）混粘土～シルト 〔地山〕
19. 黄褐 10YR5/6～褐灰 10YR4/1 中砂～極粗砂 〔地山〕

第12図　第6調査区　北壁断面図

第３節　弥生時代～古墳時代の遺構と遺物

当遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、西端の第１調査区から第３調査区東半部にかけての東西約170m間および第６調査区の全面で、土坑および溝などが検出された。なお、古墳時代中期には、第２・３調査区にまたがる埋没古墳が１基および第６調査区で土坑が１基検出されている。

以下、調査区ごとに記述していく。

１．第１調査区の遺構と遺物

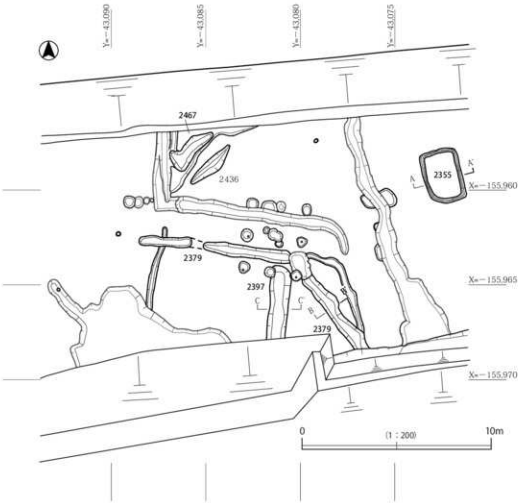
地山層上面のⅢ面で検出され、溝・土坑・ピットなどがある。なお、第１調査区では、他の調査区で明瞭に見られる「黒色土層」が調査区全体では見られず、地形的に低まった東端部や中央の一部などでのみ確認できた。このⅢ面では、弥生時代後期から古墳時代・古代・中世の遺構を同一面で検出しているが、便宜的に３時期に区分して記述していく。遺構は、調査区中央部で密である。

１）土坑

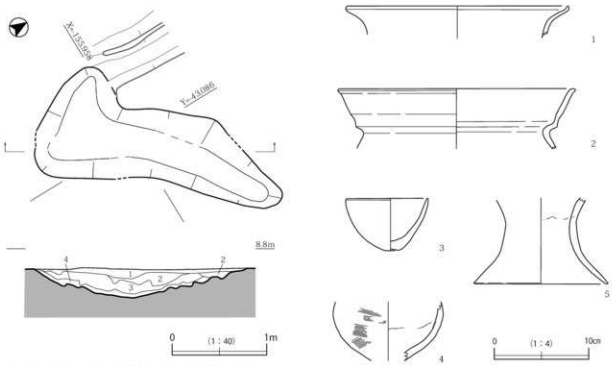
土坑は、本調査区で数基検出されているが、遺物が出土し時期の確定できたのは、１基のみである。

2467土坑　（第14・15図、図版５－４・51）

第１調査区の中央部北端に位置し、東西に長い不定形の土坑である。長辺が2.7ｍ・短辺が0.7～1.2ｍ・深さが0.35ｍを測る。埋土は４層に区分され、黒褐色シルト～微砂の上位２層には地山ブロックが



第13図　第１調査区　弥生時代～古墳時代平面図



1. 黒褐　2.5Y3/2　シルト～微砂（黄灰　2.5Y4/1　地山ブロック混）
2. 黒褐　2.5Y3/1　シルト（黄灰　2.5Y4/1　地山ブロック混）
3. 浅黄　5Y7/3～オリーブ　5Y6/6　シルト（地山ブロック）
4. 灰　5Y4/1　シルト～微砂

第14図　2467土坑平面・断面および出土遺物実測図

混入し、3層は地山のブロック層で、4層が灰色のシルト～微砂層である。地震変動により底面に凹凸がある。

遺物は、4層から検出している。

この土坑は、横断面図がないため、確とはし難いが、土坑状変形の「変形の後方」側に落ち込んだ表層の土壌と捉えることができる（『讃良郡条里遺跡Ⅵ』　2008　(財)大阪府文化財センター　P102参照）。

出土遺物には、図化できたものに、壷2点・甕1点・鉢1点・器台1点の計5点がある。いずれも破片で、(3)の小型鉢のみ図上復原が可能であった。

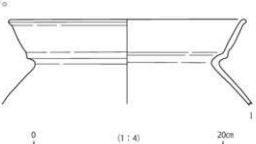
(1)は、大型広口壷の口縁部片で、短く外反する口縁部の端部がわずかに立ち上がり面をもつ。(4)は、小型壷の体部下半のもので、外面にハケメを施している。

(2)は、大型の二重口縁甕の口頸部片で、短く外反する口縁部がさらに屈曲し斜外方へ立ち上がり、上端面をもち、頸部が「く」の字状に屈曲する。角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

(3)は、小型の直口の鉢で、底部がわずかな上げ底である。

(5)は、器台の下半部を残し、筒状の体部に裾広がりの脚台部をもつ。透かしは穿たれない。

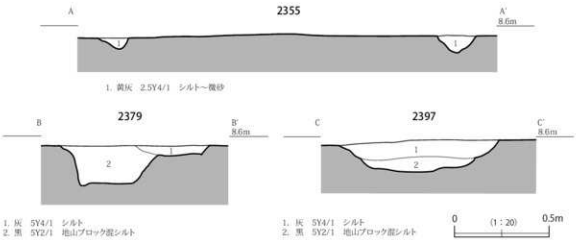
(5)のみが弥生時代後期前葉に属すが、他は、古墳時代前期庄内期に属すと考えられる。



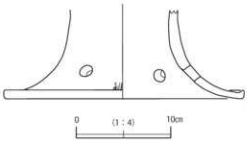
第15図　2468土坑出土遺物実測図

2468土坑　(第14図・16図、図版51)

2468土坑は、調査区中央の北端部で検出した。古代に属す2401溝の下層で検出されたことと、大部分が調査区



第16図　2355・2379・2397溝断面図



第17図　2397溝出土遺物実測図

外に伸びることから、詳細は不明である。

遺物で図化できるものは、古墳時代前期の二重口縁部をもつ甕の口頸部破片が１点のみ出土している。角閃石を含む生駒西麓産の土器である。

２）溝

溝には、調査区中央部分で検出された５条の溝がある。

2355溝　（第14・16図、図版５－６・７）

2355溝は調査区中央部の北東側で検出され、幅0.15～0.25m、深さ0.1～0.15mの溝が長辺2.8m・短辺1.9mの隅円方形状に巡る。埋土は、黄灰色のシルト～微砂１層である。

遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期の甕底部がわずかに出土している。

2379溝　（第14・16図、図版51）

2379溝は、調査区中央部で、東西方向から屈曲し南東方向に向きを変え、調査区外にに伸びる。この溝の西端部分では、削平を受け痕跡を残すのみであった。検出長約15m、幅0.5～0.8m、深さ0.25mを測る。古代の2392土坑に切られる。

埋土は、２層であるが、基本的には、黒色の地山ブロックが混じるシルトであるが、溝幅が広がる部分に灰色のシルトが上層に堆積していた。

遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土している。

2397溝　（第14・16・17図、図版５－５）

2397溝は、調査区中央で検出し、南北方向で南端部は調査区外に伸びる。検出長3.7m、幅0.9～1.1m、深さ0.2mを測る。

埋土は２層で、上層に灰色シルトが、下層に地山ブロックを含む黒色シルトが堆積していた。

古代の掘立柱建物１の2385・2388柱穴に切られる。

遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土している。図化できたのは、弥生時代後期の器台１点のみである。（１）は、下半部を残し、裾広がりの脚台端部はわずかに立ち上がり面をもつ。３方に円形の透かし孔を穿つ。外面にわずかにヘラミガキを残す。

第18図　第２調査区　弥生時代
～古墳時代平面図

2．第２調査区の調査

第２調査区の弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構と遺物は、当遺跡の中でもっとも多量に検出されている。

第Ⅲ面の地山層上面で検出された遺構（本来的には、「黒色土層」上面と下面で検出される遺構が、遺構埋土と遺構面を形成する層が類似しており、遺構検出が困難であったため、同一面で検出されている）には、古墳・ピット・土坑・溝・落込みなどがある。しかしながら、調査区全面に点在するピットは、遺物が出土していないものが多く、ほとんどのものが時期不明である。

本遺構面においても、第１調査区同様に、弥生時代後期から古墳時代前期・古墳時代中期・古代の遺構が同一面上で検出されているため、遺構の切り合いや遺物の所属時期などから、便宜的にここでは、古墳時代までを記述していく。

１）古墳

古墳は、第２調査区西端部と第３調査区東端部で検出され、両調査区の間には、現代水路が南北に縦断している。

古墳１（第19～27図、図版14－５～８・15・51～55）

古墳１は、前述したように、中央部分が大きく撹乱を受け、周溝の南西隅側が調査区外へ拡がっている。規模は、一辺約23.0mの方墳で、Ｎ－15°－Ｗを示す。

周溝は、南西隅が調査区外に伸びるため、確とはし難いが四周すると思われる。幅0.9～3.8m、深さ0.1～0.5mを測る。周溝は、南東部が残存状況が良好で、北西部では削平が著しかった。

埋土は、大きく２層に区分され、上層に粗砂が混じる黒褐色の粘土～シルト層、下層に粗砂が混じる黒色～黒褐色の粘土～シルト層が堆積していた。上層には古代の須恵器が、下層からは弥生時代後期の土器や古墳時代中期の須恵器・円筒埴輪・家型埴輪などが出土している。特に、西側周溝からは、家型埴輪や円筒埴輪が集中して出土した（第20・21図）

墳丘盛土は削平され残存していなかった。

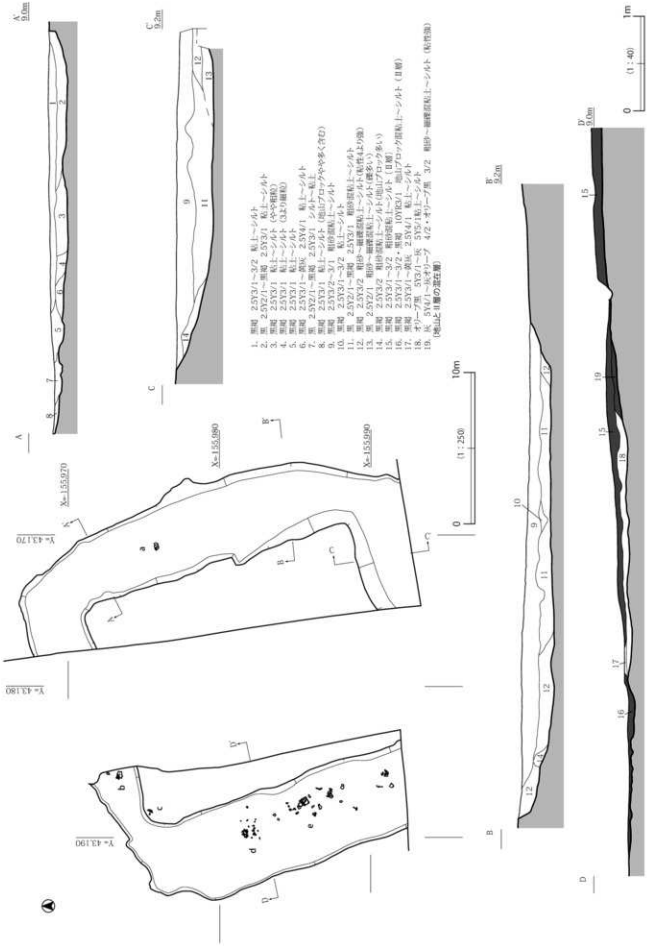
出土遺物には、先述したように、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器、古墳時代中期の須恵器・円筒埴輪・家型埴輪、古代の須恵器などがある。

第22図－１～８は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器で、下層の混入と思われる。（同図－９）は須恵器高坏の坏部を残存するもので５世紀代Ⅰ形式３段階のものである。（同図10～13）の坏身は６世紀代Ⅱ形式４段階、（同図16）はそれ以降の大型甕の口縁部破片、（同図14・15）の甕は両者供に口縁部を欠くが頸部の細さから７世紀代のものと思われる。（同図17）は大型の高坏または器台の坏部と考えられ外反する口縁部の端部は面をもち、椀状の坏部の屈曲部に凸線を１条施す。胎土・焼成から７世紀代のものと思われる。

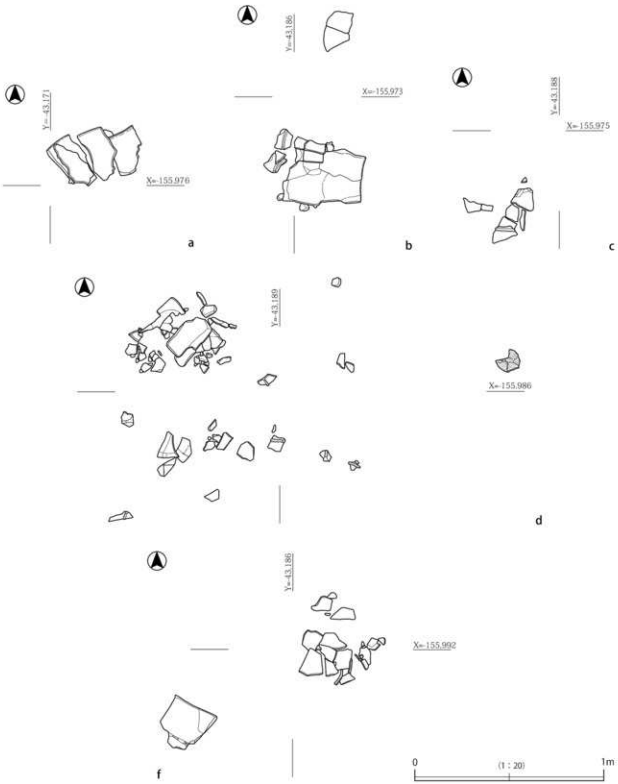
（18）は、砂岩製の石臼で約１／３を残存する。径31.4cm・厚さ 7.3 cmを測る。下面は周辺を約 4.5 cm幅で浅く削り出す。上面は一方に幅約 8.5 cmで片口を作り出し、周縁に幅約１cmにの平坦面を設け、深さ約１cmの皿状に窪ませている。古代以降に属するものか。

埴輪には、円筒埴輪と家型埴輪があり完存するものはない。

第23～25図の円筒埴輪は土師質のもので、口縁部を残すものは６体あり、口径30～46cmを測り、いずれも、わずかに外反し端部が凹面ないしは面をもつものである。凸帯は「M」字型のものが５帯付くと思われ、口縁部直下が約10cm以内と間隔が狭く、以下２～４段が12～15cm、最下段が約20cmを測り、器高



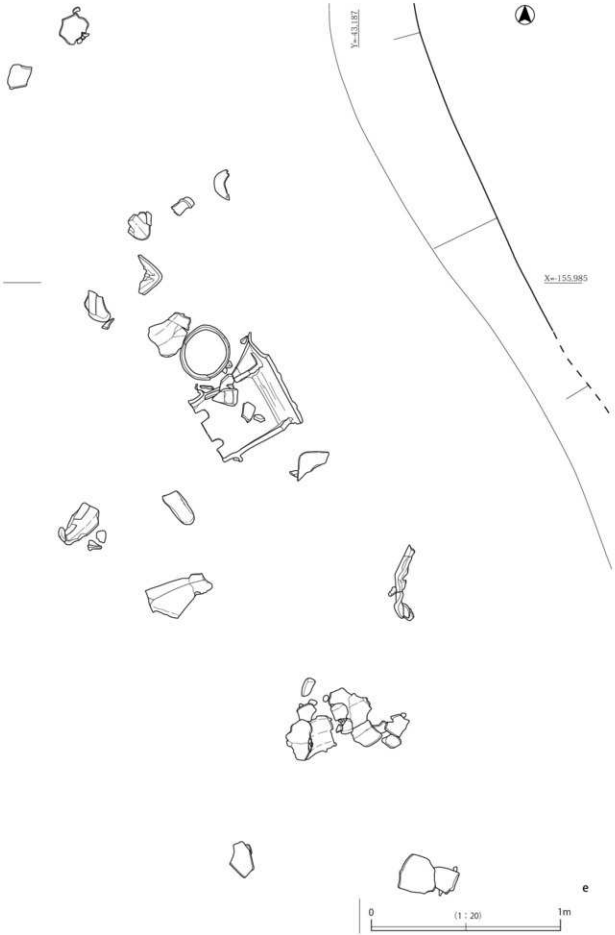
第19図　古墳1平面・断面図



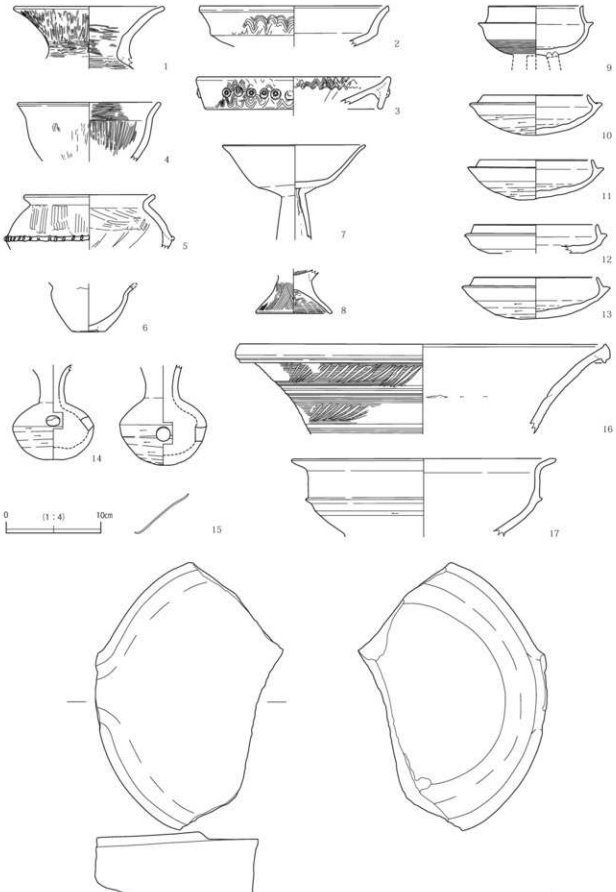
第20図　古墳１遺物検出状況図（１）

が約70cm程度のものと思われる。器厚は、約１cm前後を測り、最下段が約２cm前後と厚みをもつ。透かしは、２段目および４段目に、相対する２方向に長方形ないしは半円形に穿たれている。調整は、外面にナデ、内面に指ナデを施し指押さえを残す。

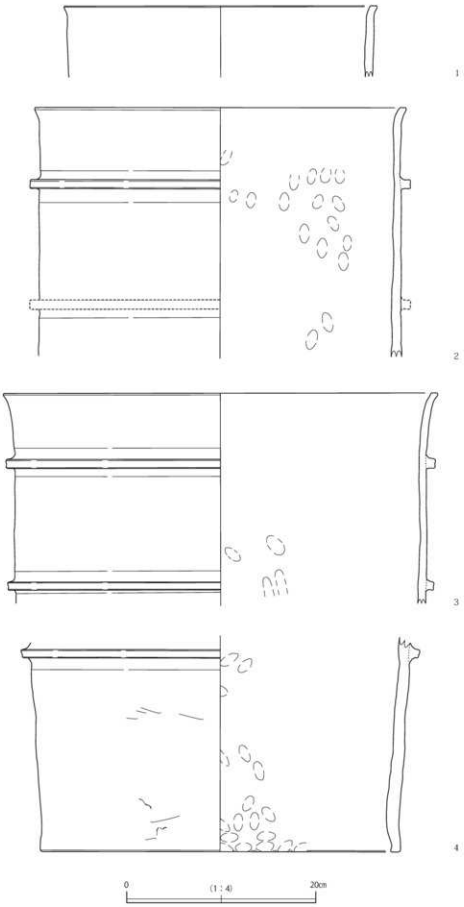
この古墳からは、20体以上の円筒埴輪が出土している。



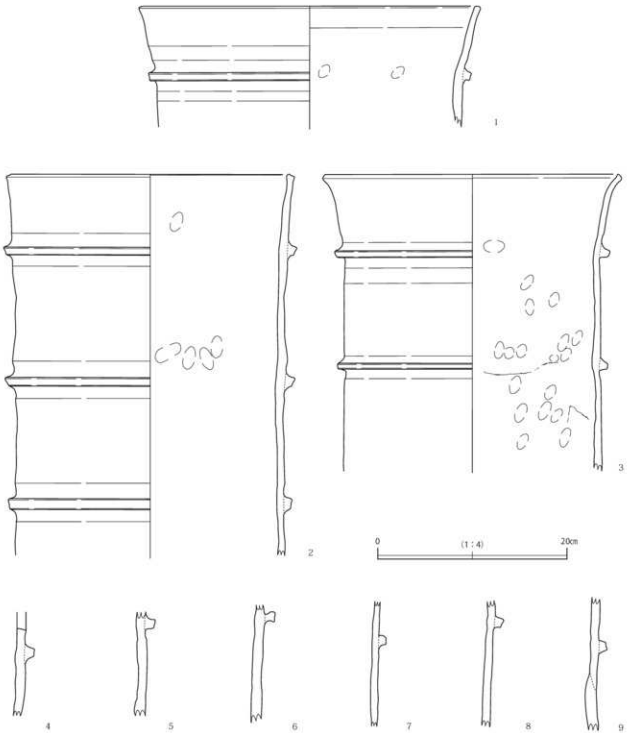
第21図　古墳１遺物検出状況図（２）



第22図　古墳１出土遺物実測図（１）



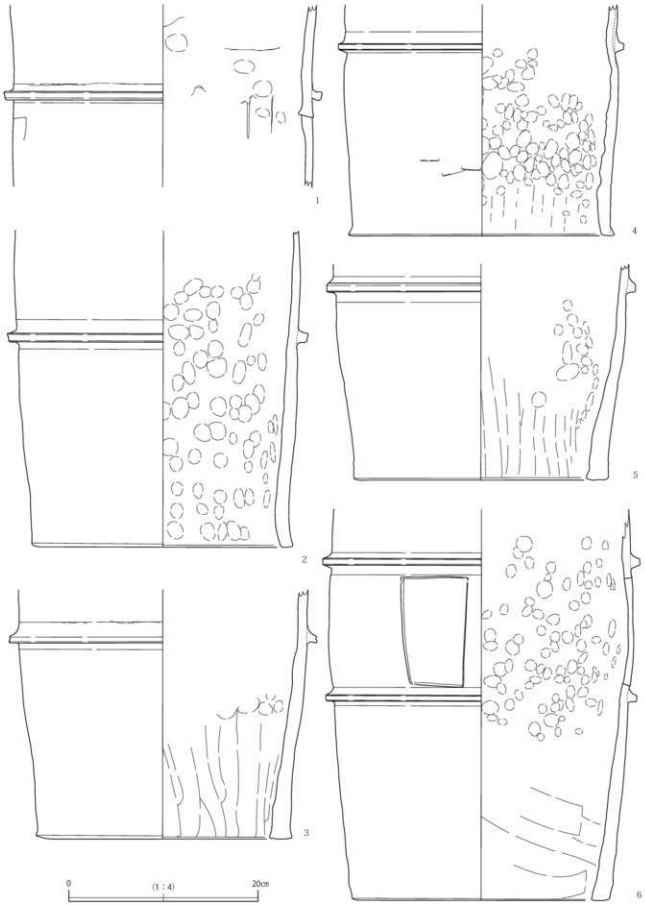
第23図　古墳１出土遺物（２）



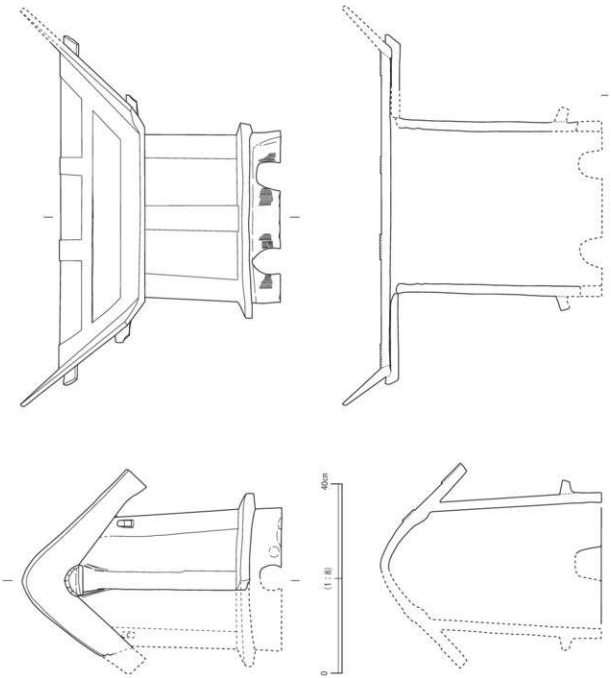
第24図　古墳１出土遺物（３）

家型埴輪は、図示できたものが２点（第26・27図）、以外に、写真図版53－写真１・２、写真図版54－写真３・４、写真図版55－写真５のように全容が不明なものなどがあり、この古墳からは、７個体以上が出土している。

第26図の家型埴輪は、西側周溝の北側から出土したもので、約１／２強が出土した。全長約82㎝・全幅約43㎝・高さ54.8㎝を測る。壁廻りは底辺が36.4×30.8㎝・高さ34.3㎝のわずかに上方に向けて窄まる直方体で、下から約６㎝のところに鍔状の凸帯が四周する。下端部の長辺に２箇所、短辺に１個所逆U字形の透かしが穿たれている。約１／２を欠損しているため、確とはし難いが、入り口の破片が出土

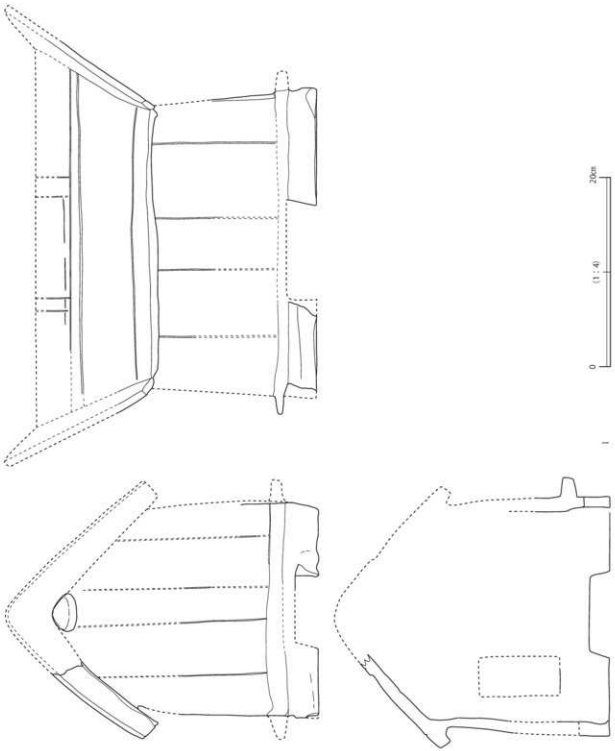


第25図　古墳１出土遺物（４）



第26図　古墳１出土遺物（５）

しており、長辺の１箇所に長方形の透かしが穿たれていたと思われる。柱は、幅約５㎝・厚さ 0.3 ㎝の粘土板を貼り付けることで表現し、短辺の中心柱は上端部を幅広く扇上に作り出す。長辺・短辺伴に３本ずつ、２間×２間の建物である。屋根は切妻造で、羽風板は、中央部分が約10㎝で、先端部が約６㎝と幅が狭まる。屋根には、縦方向に４箇所押縁が幅４～５㎝・厚さ３㎜の板状に施され、横方向には同様のものが両側に２箇所ずつ施される。棟木端部は、幅 6.4 ㎝・長さ19.2㎝・厚み 1.7 ㎝の粘土板を屋根に貼付け、両端部を半円形に斜め外方へ作り出している。桁は幅３㎝・長さ約10㎝弱・厚み約１㎝の粘土板を短辺の両端柱上部に貼付け、また、その長辺の一角を屋根裏に貼り付けて表現している。端部は下端を斜めに切り落としている。外面の壁面および屋根は、ハケメ状のナデが施され、下端部のみ部



第27図　古墳１出土遺物（６）

分的にハケメを施している。内面はナデを施すが、各部位の接合部付近は指ナデ・指押さえを残す。

第27図の家型埴輪は小型のもので、約１／３を残存する。全長約49㎝・全幅約27㎝・高さ約33㎝を測る。造りは、第26図と同様の切妻屋根である。壁廻りは、32.8㎝×25.2㎝・高さ17.2㎝のやや裾拡がりの直方体で、下から約3.8㎝のところに鍔状の凸帯が四周する。下端部の中央部に１箇所ずつ、方形の透かしを穿っている。中央部の柱は、長辺が5.4㎝・短辺が3.6㎝の幅で箆描沈線２条で表現し、両側の柱は角から同様の幅で１条の沈線で表現しており、２間×２間の作りである。壁の厚みは、下端部で

1.5 ㎝・上端部で 1.0 ㎝を測る。入り口は、短辺側に 1 箇所痕跡を残すのみである。

屋根の羽風はほとんどを欠損しており詳細は不明であるが、端部では幅 2.4 ㎝・厚み 0.8 ㎝を測り、上方へわずかに広がりをもつ。屋根には、縦方向に 2 本の押縁を幅 1.4 ㎝・ 2.2 ㎝の箆描沈線 2 条ずつで表現し、横方向の 2 本は、上方のものが、下端に段を設け、幅約 1 ㎝の上部に箆描沈線 1 条を施し、下方のものは、下端部から 2 ㎝の幅で沈線 1 条を施し表現している。

両端の棟木は残存しており、幅 3.2 ㎝・長さ 6.4 ㎝・厚さ 2.0 ㎝の断面紡錘形で、先端部をやや膨らませている。外面全体はナデを施し、内面に指押さえを残す。

写真図版53－写真 1 は、壁の一部を残存し、箆描沈線で梁と柱を表現している。器壁の厚みが 0.6 ㎝と薄いため、小型の家型埴輪と思われる。

同図版写真 2 は同様に壁の一部を残存し、棟木と屋根との接合痕があり、一角を残す。この埴輪は、下部の突帯が無く、その代わりに箆描沈線 2 条で表現されている。器壁の厚みは約 1 ㎝を測る。

写真図版54－写真 3 ・ 4 は、屋根の一部を残存している。写真 3 は、屋根の長辺下端部が残存しており、梁が 1 箇所接合しており、切妻造りと考えられる。屋根の押縁は、線刻で表現される。写真 4 は、屋根の一角が残存しており、寄棟造りと思われ、下面に壁面と接合するための補強として、三角形状の粘土板を貼り付けている。屋根の押縁は、縦方向に数本・横方向に 2 本、粘土板で表現されている。

写真 3 の裏側の 2 箇所に接合痕があり、写真 4 の上端にも接合痕があることと、胎土・焼成が類似することから、両者は同一個体と考えられ、屋根の形態が入母屋造りになる可能性が高い。

写真図版55－写真 5 は、屋根の羽風および棟木の一部が残存しており、羽風の棟木が接合する両側付近に、上下 2 個ずつの円形の透かしが 2 箇所に穿たれる。羽風の角度が鋭角なことと、拡がりが狭いことから、入母屋造りの上部の一部と考えられる。

なお、図示しえなかったが、壁面に逆 L 字状に付く突帯の破片が出土していることから、 2 階建ての家型埴輪があったものと思われる。

以上のことから、この古墳 1 からは、少なくとも、 7 棟以上の家型埴輪と、円筒埴輪が20基以上が配置されていたことが判る。

円形埴輪および家型埴輪の形態から、 5 世紀代の方墳と考えられる。

2）土坑

土坑は、第２調査区に散見されるが、遺物が出土し時期が確定できたのは、中央部に集中している。

796土坑　（第28・29図）

796土坑は、調査区中央部の東端部で検出され、古代の344溝に北側を切られているため、全容は不明である。検出長約1.2ｍ、幅1.25m、深さ0.1ｍを測る。埋土は、黒褐色の粘土～シルト層の１層である。

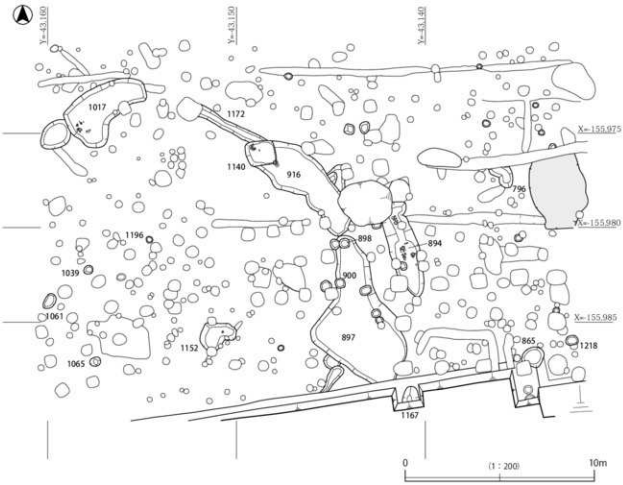
出土遺物は、わずかで、図化できたものは甕２点・高坏１点の計３点である。（１）は口頸部破片で、短く外反しさらに屈曲し立ち上がる口縁部に、「く」の字状に屈曲する頸部をもつ。（２）は口頸部から体部上半を残す。短く斜め外方へ開く口縁部の端部は丸みをもつ。頸部の屈曲はやや緩やかである。体部外面にナデ、内面に指ナデを残す。（３）は、高坏の脚台部下半を残す。中空の脚柱部に裾広がりの脚台部をもつ。脚柱部外面および脚台部内面に指ナデ・指押さえを残す。

いずれも、古墳時代前期初頭に属す。

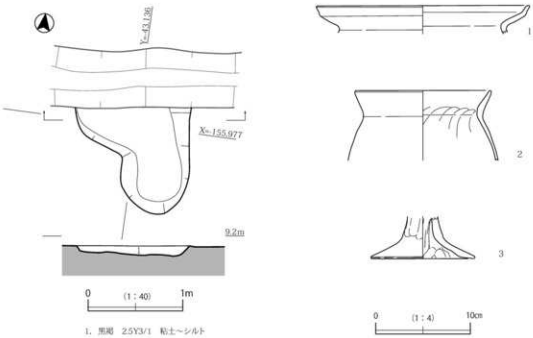
865土坑　（第28・30図、図版56）

865土坑は、第２調査区中央部の南東部で検出し、南端部の側溝および掘立柱建物２の1222柱穴に切られる。

平面形は不定形な円形で、径約1.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は、３層で黒色～黒褐色の粘土～シルト層である。遺物は、２層から出土している。



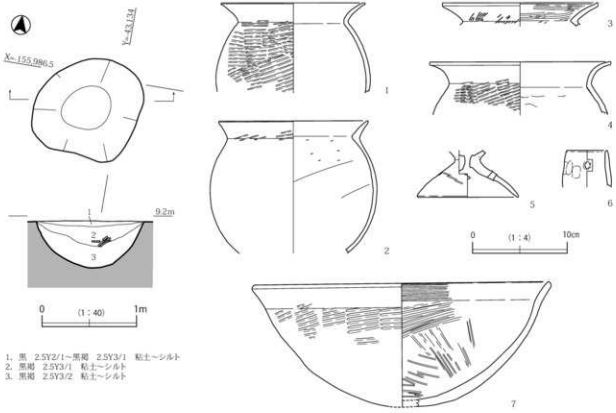
第28図　第２調査区　弥生時代～古墳時代主要遺構平面図



第29図　796 土坑平面・断面図および出土遺物実測図

図化できた遺物には、甕４点・鉢１点・小型器台１点・飯蛸壷１点の計７点である。

（１・４）は、第Ⅴ様式系甕で、体部外面に平行叩き目、内面にナデを施す。（２・３）は、庄内甕で、角閃石を含む生駒西麓産の土器である。（２）は、底部を欠損する。短く外反する口縁部の端部は丸みをもつ。屈曲する頸部に球形の体部である。体部外面に細かい叩き目後ナデ、内面にヘラケズリを施す。（３）は口頸部破片で、口縁部端部がわずかに立ち上がり、内面にハケメを施す。「く」の字状に屈曲す



第30図　865 土坑平面・断面および出土遺物実測図

る頸部をもつ。体部外面に細かい平行叩き目、内面にヘラケズリを施す。

（7）は、大型のわずかに外反する口縁部をもち、半球状の体部に丸底のもので、約2/3を残す。体部外面に叩き目、内面にヘラミガキを施す。

（5）は、口縁部を欠損し、半球状の脚部の中心部に径5㎜の穿孔がある。脚部の4方に円形の透かしを穿つ。（6）は、飯蛸壷の底部を欠損する。直口の口縁部に、径6㎜の紐孔を穿つ。

遺物から、古墳時代前期の庄内～布留期に属すと思われる。

894土坑　（第28・31～34図、図版12－2～4・56～59）

894土坑は調査区中央部の南半部で検出された、南北に長い楕円形状の土坑で、検出長径4.7m、短径1.5m、深さ約0.15mを測る。北西部を攪乱で切られる。

埋土は、3層からなり、1層に黄灰色シルト、2層に黒褐色粘土～シルト、3層にオリーブ黄色～灰色の地山ブロックが混じる粘土～シルトが堆積していた。

遺物は、1・2層から出土しており、土坑の北側と中央部に集中している。

出土遺物は、コンテナに約3箱あり、図化できたもので、壷12点・甕15点・鉢3点・高坏5点・器台5点の計40点を数える。

壷には、広口壷・長頸壷・細頸壷・直口壷がある。第32図－1は大型広口壷の口頸部を残存し、外反する口縁部の端部が垂下し、外端面をもつ。口頸部外面にヘラミガキ、内面にナデ後粗いヘラミガキを施す。口縁部端面に2個1対の円形浮紋を施す。同図－4・5は中型の広口壷の口頸部を残存し、（4）は、外半する口縁部の端部がわずかに上下に拡張し、外端面をもち、筒状の頸部である。（5）は、短く斜め外方に開く口縁部端部が面をもち、短い筒状の頸部である。前者は内外面にハケメ、後者はハケメ後ヘラミガキを施す。両者とも、口縁部端部に疑凹線紋を1条巡らしている。同図－6は、やや小型の無紋の広口壷の口頸部を残し、頸部の外面に粗いヘラミガキ・内面に指ナデ後粗いヘラミガキを施す。

同図－3・9～11は長頸壷で、（3）はわずかに外反する口縁部にやや短い筒状の頸部を持つ。（9）は口頸部破片で、頸部に棒状浮紋を1条残す。いずれも、内外面にハケメを施す。(10)は底部を欠損し、わずかに外方へ開く口縁部の端部が面をもち、やや短めの頸部に体部中央がやや張る。外面にヘラミガキ・内面にハケメを施す。(11)は復原完形で、口径13.0cm・器高27.0cmを測る。わずかに開く口頸部にやや扁平な体部、突出する底部の中央部がわずかに凹む。外面にハケメ後体部上端に部分的にヘラミガキを施す。

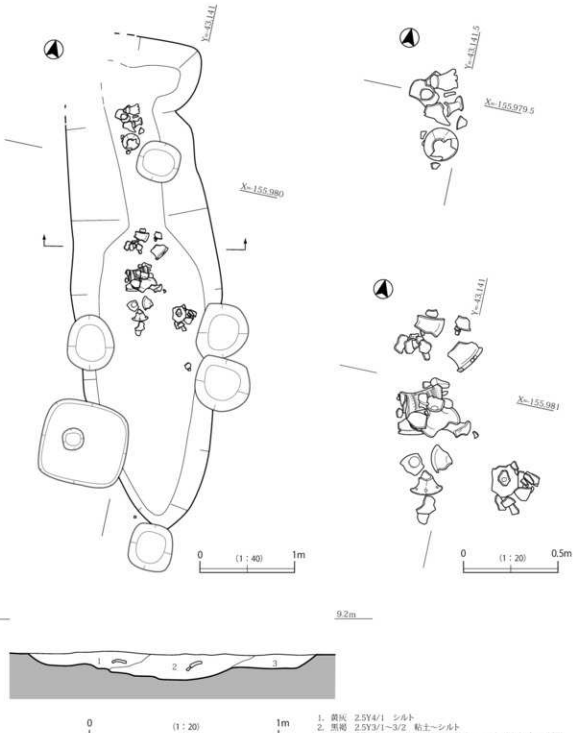
同図－2は、細頸壷の口頸部のみを残し、外面にヘラミガキを施し、内面に粘土紐の継ぎ目を残す。

同図－8は、二重口縁をもつ細頸壷の口頸部で、外面にハケメ後ナデ、内面にナデを施す。

同図－7は直口壷の口頸部で、外面にわずかにヘラミガキを残す。(12)は、壷の底部である。

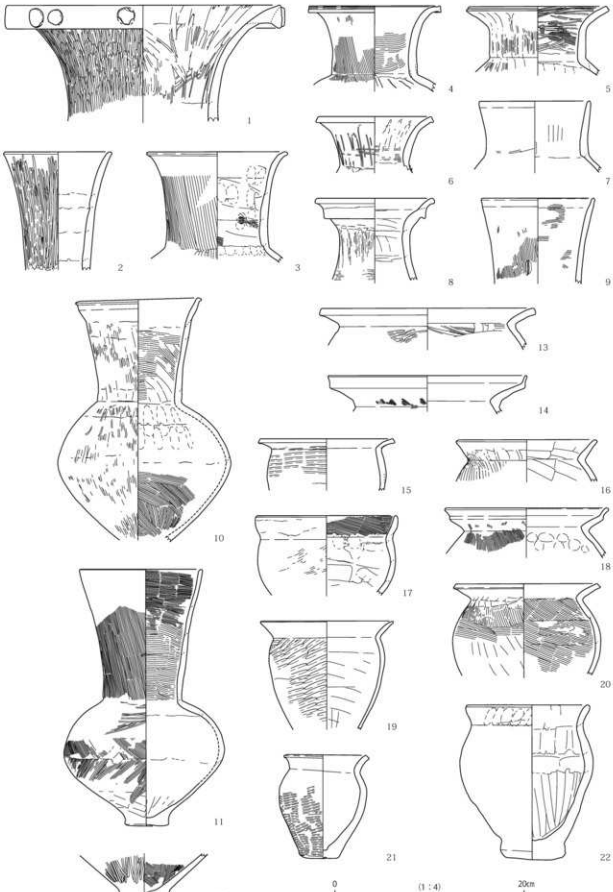
第32図15～22および第33図1～4は甕で、(13)は大型のもので頸部が「く」の字型に屈曲し口縁端部が面をもつ。体部外面に叩き目、内面にハケメおよびハケメ状ナデを施す。

第32図－14・18、第33図－1～3は口縁部の端部が屈曲しさらにわずかに外反するもので、頸部の屈曲は鋭い。(14・18)は体部外面にハケメ、（3）は叩き目後部分的にハケメおよび下端にヘラケズリ・内面に指ナデを施す。(15・20)は外反する口縁部の端部が面をもつやや小型のもので、前者は外面に叩き目・内面にナデを、後者は外面にハケメ後下半にナデ・内面にハケメを施す。(17)は口径が器高を上回るもので、頸部の屈曲も緩やかである。外面叩き目後ナデ、内面の口縁部にハケメ・体部に指ナデを施す。(19)は小型で底部を欠損する。外面に叩き目・内面に指ナデを施す。(16)は口縁部が外方へ開き、

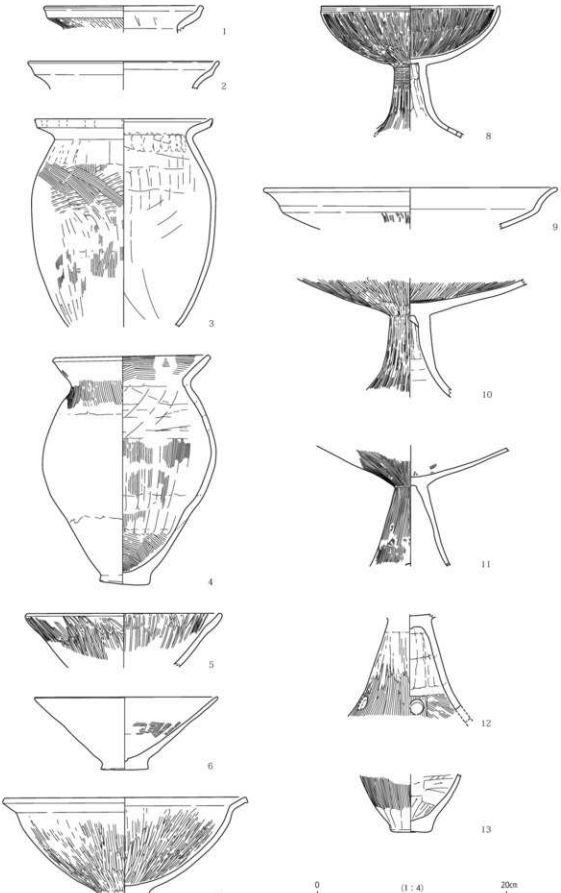


第31図　894土坑平面・断面図

外面にハケメ・内面にハケメ状ナデを施す。(22)は、口径12.8㎝・器高16.3㎝を測る頸部の屈曲が緩やかで、突出する平底である。器壁が約１㎝と厚い。外面にナデ・内面に指ナデを施す。(21)は小型で、口径 8.5 ㎝・器高10.8㎝を測る。口縁部端部が凹面をもち、体部上部が張りわずかに突出する底部の中央部が凹む。外面に叩き目・内面にナデを施す。第33図－４は、口径16.0㎝・器高24.0㎝を測る。口縁部端部が面をもち、屈曲する頸部に突出する平底をもつ。体部外面にハケメ後板状ナデ、内面の上端にナデ・以下ハケメを施す。(13)は甕の底部と思われ、外面にハケメ後ナデ・内面にヘラケズリを施す。



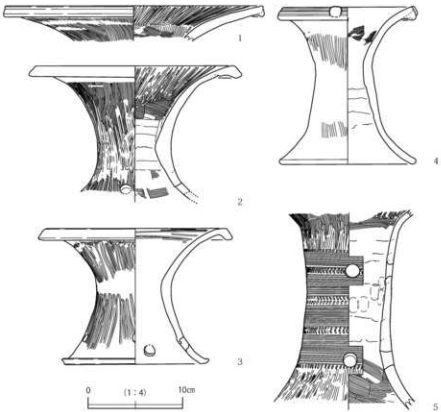
第32図　894 土坑出土遺物実測図（1）



第33図　894 土坑出土遺物実測図（2）

鉢には、外反する口縁部をもつ(第33図－５・７)と直口の(同図－６)がある。(５)は、外反が緩やかで、(７)は内面に稜をもつ。いずれも、内外面にヘラミガキを施す。(７)は約２／３を残し、口径25.4㎝・器高11.0㎝を測る。

高坏には椀形のもの(８)と、外反する口縁部を持つ(９)があり、他に脚柱部を残す(10～12)がある。(８)は脚台端部を欠損し、口縁端部が内傾する面をもち、外面に強いヨコナデ、脚柱部上端に沈線紋７条・刺突紋を施す。坏部内外面および脚部外面にヘラミガキを施し、脚部内面に絞り目を残す。(９)は口縁部のみを残存し、坏部外面にヘラミガキを施す以外はナデである。(10～12)は、外反する口縁部をもつと思われ、(12)は脚柱部の３方に円形の透かしを穿つ。いずれも、外面にヘラミガキを施す。



第34図　894 土坑出土遺物実測図(３)

第34図は器台で、(３・４)は復原完形である。前者が口径19.0㎝・器高14.3㎝、後者が口径13.7㎝・器高16.7㎝を測る。(１～３)は、無紋で口縁部が最大径をもつもので、口縁部の内外面にハケメ後ヘラミガキを施す。(２・３)は、脚台部の４方に円形の透かしを穿つ。(４)はやや小型で、口縁端部に疑凹線紋３条・円形浮紋を施す。(５)は口縁部端部および脚台端部を欠損する。脚柱部に刺突紋・沈線紋９条・綾杉刺突紋・沈線紋12条・綾杉刺突紋・沈線紋12条・綾杉刺突紋・沈線紋15条・刺突紋を施す。口縁部の内外面にハケメ後ヘラミガキ、脚柱部内面にナデ、脚台部外面にハケメ後ヘラミガキ・内面にハケメを施す。相対する２方２段に円形の透かしを穿つ。

長頸壺に頸部が太くやや短いものや、調整にハケメを多用するものがあること、甕の頸部に明瞭な稜があるものが多く球形に近い体部のものがあることなどから、弥生時代後期後半に属すと考えられる。

なお、全体量に比して器台が目に付くのもこの土坑の特徴である。

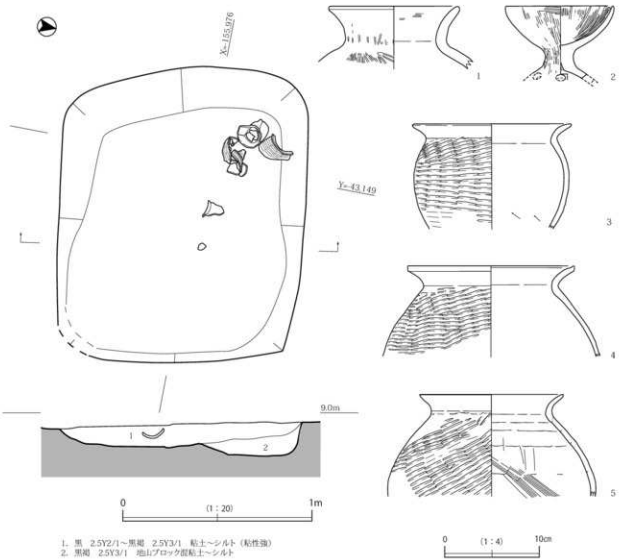
1140土坑　(第28・35図、図版13－２～４・59)

1140土坑は、調査区中央部で検出された隅円方形の土坑で、長辺 1.6 m、短辺 1.3 m、深さ 0.2 mを測る。1172溝および916落込みを切っている。

埋土は２層で、上層に黒色～黒褐色の粘土～シルト、下層に地山ブロックが混じる粘土～シルトが堆積していた。

遺物は、北西隅の１層から集中して出土している。

出土した遺物は、壺１点・高坏１点・甕３点の計５点である。(１)は大型広口壺の口頸部破片で、短



第35図　1140土坑平面・断面および出土遺物実測図

く外反する口縁部に短い筒状の頸部をもつ。外面にハケメ後粗いヘラミガキ、内面の口縁部にヘラミガキ・以下ナデを施す。

（2）は小型の椀形高坏で、脚台端部を欠損する。浅い椀状の坏部に短い半中実の脚柱部をもつ。坏部の内外面にヘラミガキを施す。

（3～5）の甕は、いずれも口縁部を含む破片で、（3）は中型、（4・5）は大型のものである。いずれも、体部外面に叩き目を施し、体部内面に（3・4）はナデ、（5）はナデ後部分的にハケメを施し、粘土紐の継ぎ目を残す。

所属時期は、古墳時代前期初頭と思われる。

1152土坑　（第28・36図、図版14－1・59）

1152土坑は、調査区中央部の南西寄りに検出された不定形の土坑で、長径 2.0 m・短径約 1.6 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は、地山ブロックが混じる黒色～黒褐色の粘土～シルトの1層である。

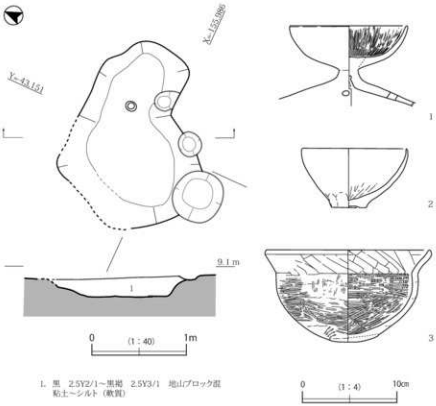
出土した遺物は、高坏1点・鉢2点の計3点である。

第36図－1の高坏は、小型の椀形のもので脚台端部を欠損する。浅い椀形の坏部に、短い筒状の脚柱

部に裾広がりの脚台部をもつ。外面は表面摩滅のため調整不明である。坏部内面にヘラミガキを施す。脚台部の４方に円形の透かしを穿つ。

鉢には、小型で内弯するものと、外反する口縁部をもつものがある。

（２）は、口径11.0㎝・器高 6.3 ㎝を測り、突出する底部の中央部がわずかに窪む。内外面伴に、ナデを施す。（３）は、口径12.0㎝・器高 9.7 ㎝を測る。外傾する口縁端部が面をなし、屈曲部の内面に明瞭な稜をもち、やや浅い椀状の体部に丸底である。口縁部内外面に板状ナデ、体部内外面にヘラミガキ、底部外面に叩き目後ナデを施す。



第36図 1152土坑平面・断面および出土遺物実測図

遺物の形態から、古墳時代前期初頭に属すと思われる。

1017土坑 （第28・37・38図）

1017土坑は、調査区中央部の西よりで検出された不定形の土坑である。長径 4.6 m・短径 2.8 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は、極粗砂～粗砂が混じる黒褐色粘土～シルト１層である。

遺物は、西側から集中して出土している。

出土遺物には、蓋２点・壺４点・甕６点・鉢１点・高坏２点・器台１点の計16点である。

蓋はつまみ部のみを残すもので、（１）はつまみ部中央がわずかに窪む。（２）高坏の脚柱部の作りに似ており、上部が平坦で柱空である。いずれも、内外面にナデを施す。

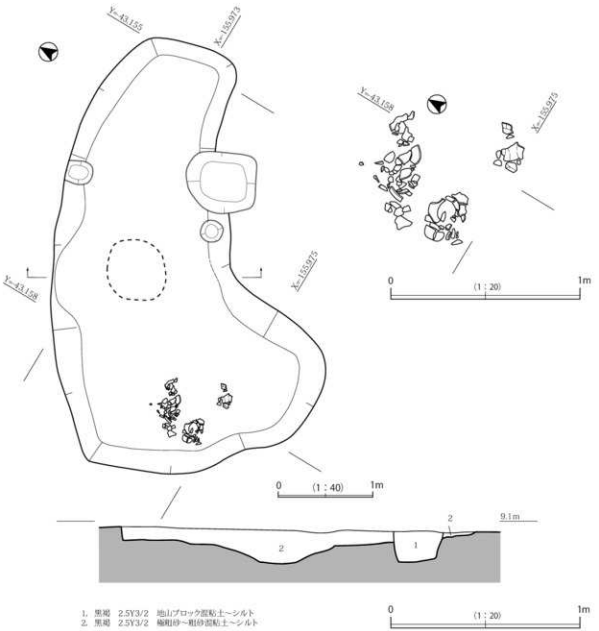
壺には、短頸壺（３）・二重口縁壺（４～６）があり、（４）は大型で、口縁部に８の字状の浮紋を付す。（５・６）は小型のもので、いずれも口頸部を欠損している。外面にヘラミガキを施す。

（８～12・16）の甕は、体部外面に叩き目・内面にナデを施す。いずれも、破片である。

高坏には、外反する口縁部をもつものがある。（13）は坏部のみを残し、屈曲し大きく外反する口縁部に浅い皿状の坏部をもつ。内外面伴に表面摩滅が著しくわずかにヘラミガキを残す。（14）は復原完形で約１／３を残す。口径16.4㎝・器高14.8㎝を測る。屈曲して外方に伸びる口縁部に浅い皿状に、中実の脚注部に裾広がりの脚台部をもつ。外面わずかにへらミガキを残す。坏部内面は、表面磨滅のため調整不明である。脚台部の四方に円形の透かしを穿つ。

鉢には大型の外反する口縁部をもつもの（７）がある。内外面伴にヘラミガキを施す。

（15）の器台は小型のもので 、口径 9.2 ㎝・器高 7.0 ㎝を測る。浅い皿状の坏部に中実の脚柱部に裾広



第37図　1017土坑平面・断面および遺物出土状況図

がりの脚台部をもつ。脚台部の三方に透かしを穿つ。坏部内外面および脚部外面にヘラミガキを施す。

出土遺物から、古墳時代前期初頭に属す。

1090土坑　（第18・28・39図）

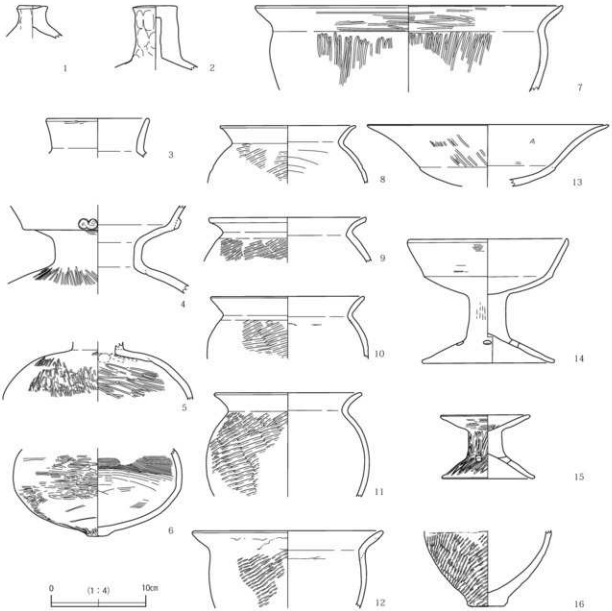
1090土坑は、調査区西半部の中央部付近で検出された不正形の土坑で、長径 2.0 m・短径 0.8 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は、黒色の中砂～粗砂混粘土～シルト 1 層である。

出土した遺物は、小型の壺底部が 1 点のみである。弥生時代後半後半から古墳時代前期初頭に属すと思われる。

1167土坑　（第18・28・40図、図版60）

1167土坑は、調査区中央部の南端で検出され、南半部が調査区外へ伸びる不定形の土坑である。検出長 0.8 m以上・検出幅 9 m以上・深さ 0.2 mを測る。



第38図　1017土坑出土遺物実測図

埋土は、黒色～黒褐色の粘土～シルトの単層である。

出土遺物は、壷２点・甕１点・高坏２点・器台１点の計６点で、壷には、広口壷（１）と長頸壷（２）があり、いずれも、口縁部破片である。（３）の甕は、口縁部端部がわずかに立ち上がり面をもつ。体部外面に叩き目後ハケメを施す。（４・６）は高坏の脚部で、後者は小型のものである。（５）は、小型器台の脚部で、三方に透かしを穿つ。

小型器台の存在から古墳時代前期初頭に属すと考えられる。

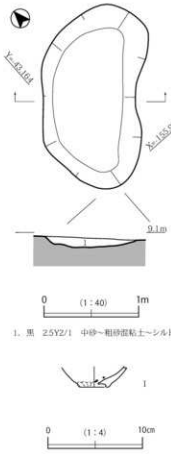
３）ピット

第２調査区からは、掘立柱建物の柱穴以外に建物に復原できない柱穴や径30cm前後のピットが多数検出された。ここでは、遺物が出土したものについて記述する。

1784ピット　（第18・28・41図、図版14－３）

1784ピットは、調査区北東部に位置し、径約 1.0 m・深さ 0.4 mの不正円形の土坑である。

埋土は、２層で、径約 0.3 mのに黄灰色の粘土～シルトが、周りに黒褐色～暗灰黄色の粘土～シルト



第39図　1090土坑平面・断面図および出土遺物実測図

が堆積していた。堆積状況から、柱痕を残す柱穴と考えられる。

遺物は、2層から鉢が1点のみ出土した。

鉢は復原完形で、口径20.6cm・器高11.0cmを測る。外反する口縁部がわずかに屈曲しさらに斜め外方へ伸び、やや扁平な体部に突出しわずかな上げ底をもつ。内外面伴にヘラミガキを施す。古墳時代前期初頭に属す。

その他のピット（第42図）

その他のピットからは、遺物がわずかに出土している。必ずしも、出土遺物の時期と遺構の時期が一致しているとは言い難いが、遺物の所属する時期を優先してここに掲載する。

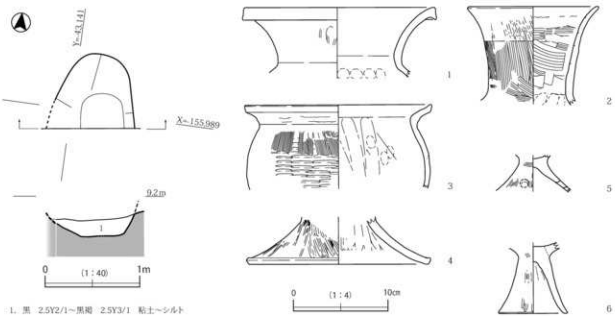
898ピット　898ピットは、897落込みの北端部で重複して検出されたもので、大型広口壺の口縁部が出土した。（1）は、短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもち、太短い頸部である。内外面供にヘラミガキを施す。

900ピット　900ピットは、898ピットの南約3mに位置し、897土坑の肩部で検出している。（3）は、甕の口縁部破片で、生駒西麓産の庄内甕である。

1061ピット　1061ピットは、調査区南西部に位置する。（5）はやや小型の甕で、内外面にナデを施す弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭のものである。

1065ピット　1065ピットは調査区南西部で検出された。（6）は甕の口縁部破片で、体部外面に叩き目後ハケメを施す古墳時代初頭に属すと思われる。

1196ピット　1196ピットは調査区西半部の南よりで検出された。（2）は広口壺の口縁部破片で、無紋のものである。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に属すと考えられる。



第40図　1167土坑平面・断面および出土遺物実測図

1218ピット　1218ピットは東半部南端で検出された。（4）は生駒西麓産の庄内甕の口縁部破片である。

1778ピット　1778ピットは東半部北より出検出され、（7）は小型器台の脚部破片で、外面にヘラミガキ・内面にハケメを施し、三方に透かしを穿つ。古墳時代前期初頭のものである。

4）落込み

落込みは、東半部で3箇所検出された。

409落込み　（第18・43図、図版14－4）

409落込みは、調査区東側南端部で検出され、調査区外へ続く不定形落込みであり、検出長約6m・検出幅約3m・深さ約0.1mを測る。

出土遺物には、壷2点・甕2点・高坏2点の計6点がある。

（3・4）は壷底部破片で、いずれも、突出する底部をもつ。

（1・2）は甕の口縁部破片で、いずれも、生駒西麓産の庄内甕である。

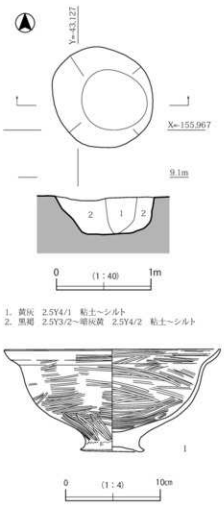
（5・6）は高坏の脚柱部破片で、前者は半中実である。いずれも、外面にハケメを施す。

916落込み　（第18・28・44・45図、図版13－1・61）

916落込みは、調査区中央部に位置し、北西から南西に伸びる不定形な溝状の落込みである。検出長約6m・幅2.7m・深さ0.2mを測る。北端部を1140土坑に切られ、南端部は897落込みと接する。

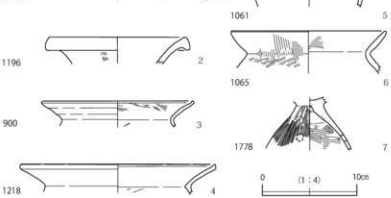
埋土は3層からなり、遺物は上層から出土している。

出土した遺物には、壷2点・甕5点・鉢2点・高坏1点の他に、器種不明の脚台が1点の計11点がある。

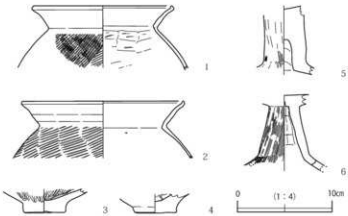


第41図　1784ピット平面・断面および出土遺物実測図

壷には広口壷と直口のものがあり、（第45図－1）は図上復原で、口径12.0cm・器高約23cmを測る。上方に開く口頸部に、やや扁平な体部、突出した底部中央部がわずかに窪む。口縁部端部に、刻み目を施す。体部外面にヘラミガキ・内面にハケメ後粗いヘラミガキを施し、内面に指押さえを残す。（2）は、復原完形で、口径12.0cm・器高30.6cmを測る。短く外反する口縁部に短い筒状の頸部、球形の体部に、突出しわずかに窪む底部をもつ。体部外面にヘラミガキ・内面にナデを施す。



第42図　各ピット出土遺物実測図



第43図　409 落込み出土遺物実測図

（第44図－１～３・７・８）は、体部外面に叩き目を施すもので、（１・２）のように頸部内面の屈曲が明瞭なものがある。

（同図－５・６）は直口の小型鉢で、前者は復原完形で、口径10.8cm・器高6.6 cmを測る。わずかに突出する底部をもつ。外面に叩き目・内面にハケメないしはナデを施す。後者は口縁部を欠き、底部に穿孔がある。外面に、叩き目・内面に板状ナデを施す。

（同図－４）は、高坏の脚柱部破片で、外面にヘラミガキ・内面にハケメを施す。脚柱部と脚台部の境目の三方に透かしを穿つ。

（同図－９）は脚台部のみを残存し、内外面伴にハケメ後ナデを施す。形態から壷か鉢の脚台と思われる。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に属すと思われる。

897 落込み　（第18・28・46～48図、図版12－５・61）

897落込みは、調査区中央部の南端部に位置し、南北に伸びる不定形な落込みで、南端部がわずかに調査区外に拡がる。北側を916落込みに接し、898・900ピットなどに切られている。検出長7.9 m・最大幅4.6 m・深さ0.3 mを測る。

埋土は、黒褐色粘土～シルトが主体で５層に区分され、西側がわずかに深くなる。

出土遺物には、壷９点・甕７点・鉢８点・高坏６点、その他に手焙１点・器台１点の計32点がある。

壷には、広口壷（第47図－１～３）と二重口縁壷（同図－７～９）があり、他に頸体部破片（４・５）、底部破片（第47図－６・第48図－21・22）などがある。

（１～３）は、大型の広口壷の口頸部を残すもので無紋である。

（７・８）は口縁部上端のみを残すもので、口縁部端部に前者には竹管紋、後者には円形浮紋上竹管紋を施している。（９）は、口縁部端部が上下に拡張し、端部に波条紋後円形浮紋上竹管紋を施している。

（４）は頸体部の境目に突帯上に刻み目を、（５）は体部に櫛描直線紋・列点紋・波条紋を施す。

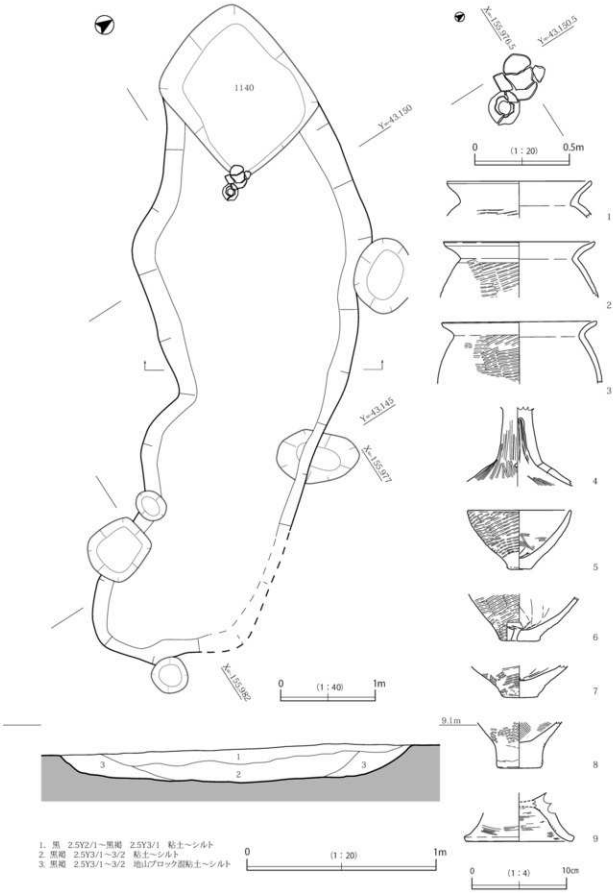
（６）は小型の壷の体部下半を残すもので、わずかに突出する平底をもつ。外面に丁寧なヘラミガキを施す。

（第48図－21・22）の底部は、大型壷の底部と思われ、突出する底部の中央部がわずかに窪む。両者伴に、外面にヘラミガキ・内面にハケメを施している。

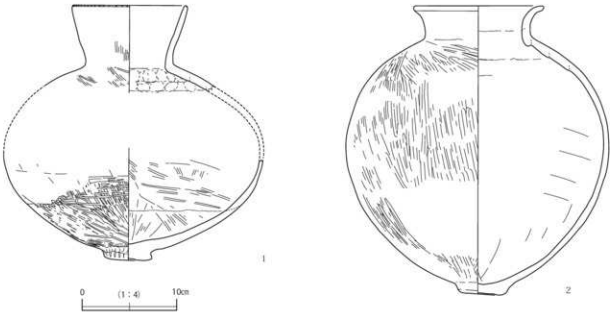
甕は総て体部に叩き目を施すもので、（第48図－19）のみが完形である。この土器は小型で、口径8.0 cm・器高9.0 cmを測る。（２）の体部外面には、叩き目後粗いヘラ状ナデが施される。

鉢には、直口のものと、外反する口縁部をもつものがある。（12・15）は、前者が小型で外面にナデ・内面にハケメを施し、後者は中型で外面に叩き目・内面にナデを施している。

（14）は、わずかに屈曲し内弯ぎみに伸びる口縁部をもつもので、内外面にヘラミガキを施す小型のものである。（13・16）は、口縁部が屈曲しさらに外反するもので、前者は小破片のため口径を復原できなかった。（18）は大型のもので、外反する口縁部端部がわずかに上方につまみ上げられ面をもつ。体部外面にハケメ後粗いヘラミガキ・内面にヘラミガキを施す。（24）は、高台状の脚台部を持つもので、外面



第44図　916 落込み平・断面および出土遺物実測図（1）



第45図　916落込み出土遺物実測図(2)

にヘラミガキ・内面にハケメを施す。(25)は、底部が平底の大型のもので、内外面伴にヘラミガキを施す。

高坏には、坏部を残存するもの(第48図－6～8)と脚部のみを残すもの(同図－9～11)がある。(6)は大型のもので、口縁部が大きく開く。(7・8)は、やや小型のもので、内外面にヘラミガキを施す。(9～11)の脚台部は、脚柱部が短いもので、(9・11)は外面にヘラミガキを施し透かしを四方ないしは三方に穿つ。

(5)は手焙の体部破片で、屈曲部に突帯上刻み目を施している。

(17)は器台の脚台部を残すもので、内外面にヘラミガキを施す。

以上の遺物から、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に属すと考えられる。

372土坑　(第18・49図)

372土坑は、調査区東端部で検出された土坑で、須恵器の蓋坏が各1点ずつ出土している。

形態から、ＴＫ10形式のものである。

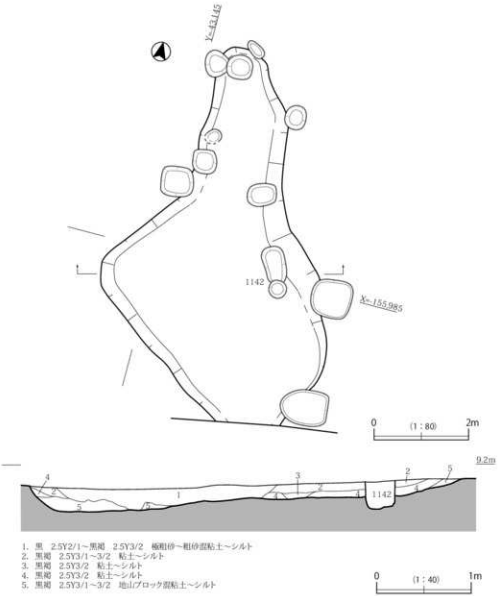
第2調査区の包含層から出土した遺物は、厳密には、Ⅰ・Ⅱ層に区分されるが、ここでは弥生時代後期～古墳時代にかけての遺物について掲載した。

弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺物(第50～54図)は、当遺跡の調査区の中で最も多量に出土したものである。出土した遺物には、壷・甕・鉢・高坏・器台などがある。

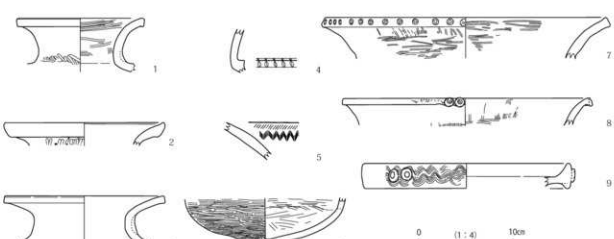
壷には、広口壷・二重口縁壷・長頸壷・直口壷などがある(第50図)。

広口壷には口頸部破片が多く、全容のわかるものが少ない。

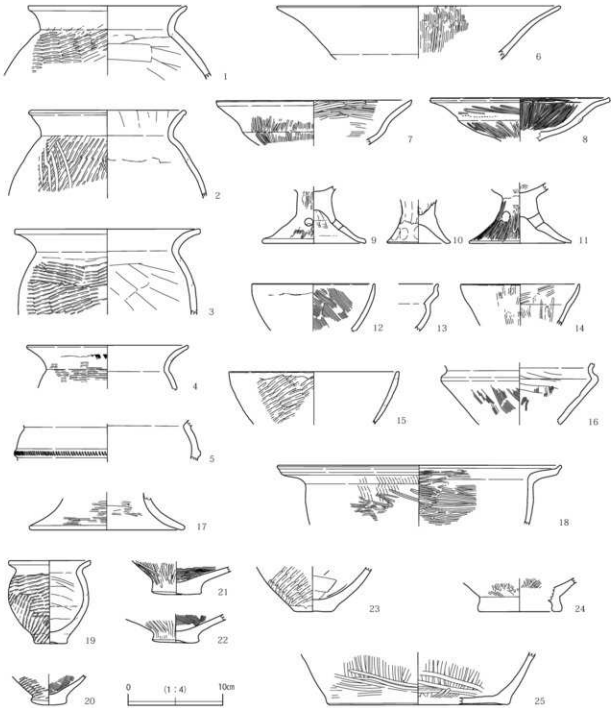
(3・4・11・12・25)は無紋のものである。(3・4)は短く外反する口縁部に短い頸部をもつ中型のもので、口縁部端部が面をもつ。前者が外面ハケメ後ヘラミガキ・内面ハケメ、後者が内外面にナデを施す。全容は(第45図－2)に似ると思われる。(11・12)は大型で、外反する口縁端部が面をもち、前者がわずかに立ち上がり、後者がわずかに垂下する。いずれも、外面にヘラミガキを施す。(25)は短く外反する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ面をもち、短い頸部に球形の大部をもつと思われる。体部外面にハケメ後ナデ・内面にヘラケズリ後上端部のみハケメを施す。



第46図　897 落込み平・断面図



第47図　897 落込み出土遺物実測図（1）



第48図　897 落込み出土遺物実測図（2）

（1・6・13・14）は口縁端部に凹線紋を1条～2条施している。（1）は器高が25cm前後の大きさのものと考えられ、（6・14）はやや大型、（13）は大型のものと考えられる。（2）は中型のもので、円形浮紋上竹管紋を、（10）は大型で口縁端部を垂下し面をもち、竹管紋を、（9）は大型で口縁端部を上下にわずかに拡張させ、上下に刻み目を、（18）は口縁端部を垂下させ面をもち、波状紋2帯を施している。

二重口縁壷には（19～22）があり、いずれも、口縁部の小破片である。（19）は口縁端部を上下に拡張させ、波状紋2帯上に円形浮紋上竹管紋を施す。（20）は口縁部端部を欠損し、屈曲しさらに外反する。口縁部に篦描鋸歯紋を施す。（21）は、屈曲し外反する口縁部の端部が面をもつ。内外面にヘラミガキを施す。口縁端部に刻み目・口縁部に円形浮紋上竹管紋を2個1対で数箇所に施す。（22）は大型のもので、

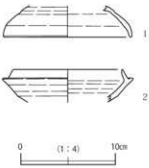
屈曲し外反する口縁部の端部が面をもち、凹線紋２条を施す。

長頸壺には、外反する口縁部をもつ(５)があり、口縁部端部がわずかに立ち上がり凹面をもつ。内外面伴にハケメを施す。

直口壺には、小型の(７・８・15)と大型の(16・23・24)があり、前者は長頸壺が小型化したものである。(７)は口縁端部に凹線紋２条を施す。

(17・26)は底部を残すもので、前者は大型でわずかな平底で生駒西麓産である。後者は突出する平底で、体部外面にヘラミガキを施す。

甕には、弥生時代第Ⅴ様式系の叩き目を施すもの、ナデを施すもの、ハケメのものがあり、古墳時代前期初頭の庄内甕がある。



第49図　372土坑
出土遺物実測図

叩き目のある甕には、完形になるものが１点のみ(第53図－17)である。(17)は小型で口径8.8㎝・器高5.8㎝を測る。わずかに斜め外方に開く口縁部に上げ底のものである。概して、頸部の屈曲が鋭く口縁端部が面をもつものが多く、(２・４・20)がわずかに立ち上がり面をもち、(１・11)がわずかに上下に拡張し端部に凹線紋１条を施す。(20)は体部に押捺紋を施す。内面の調整はナデを施すものが多く、(14)がハケメ、(15)がヘラケズリを施している。

ナデを施すもので、体部外面に(21)は叩き目後ナデ、(22)は指押さえを施す小型のもので、(９・10)はＳ字状口縁をもつ。(19)は二重口縁をもつもので、体部の肩部に部分的に押捺紋を施す。(18)は口縁端部がわずかに拡張し、口縁端部に凹線紋２条を施す。形態から壺甕の部類に入る。(24)は頸部の器壁が約２㎝と分厚い。(８)は脚台部を残存している。

(23)は口縁部内外面にハケメを施し、(25・26)は底部を残存するもので、前者は中央部がわずかに凹み外面に叩き目後ハケメ・内面にハケメを施す。後者はわずかな平底をもち内外面にハケメを施す。

第54図の甕は、総て生駒西麓産の体部外面に細かい叩き目を施すもので、(３～７)には叩き目後ハケメを部分的に施す。

鉢には直口のものと、外反する口縁部をもつものがある(第52図)。

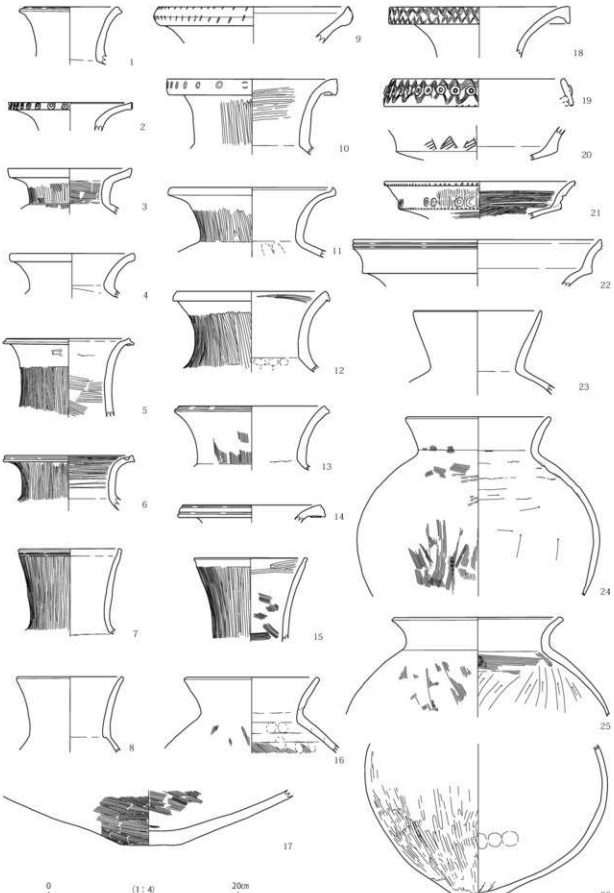
(２・15～19)は小型で直口のもので、(16・17・19)が斜め外方へ開き、(２・15・18)が椀形のものである。(19)は丸底である。(13)は口縁部を欠き突出する底部中央に穿孔し、外面に叩き目を施す。(７)は平底の口縁部を欠くもので、内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

第51図－20は台付の鉢で、復原完形である。口径6.4㎝・器高12.0㎝を測り、内傾する口縁部に皿状の底部から屈曲して立ち上がる体部に、短い筒状の脚柱部に裾拡がりの脚大分をもつ。外面にハケメ・内面に指押さえを残す。

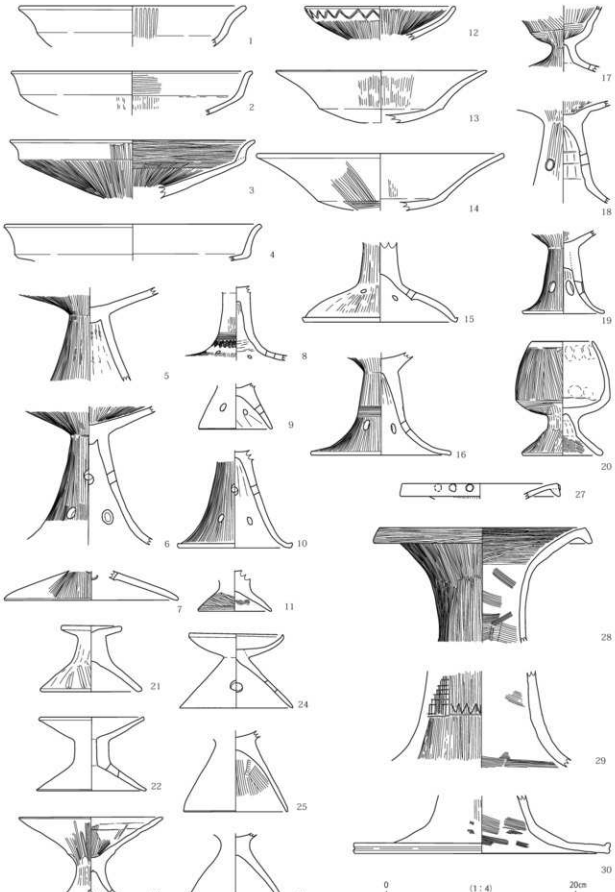
外反するものには、小型の(３・４)、中型の(10～12)、大型の(１・９)がある。(４)は復原完形で、口径17.6㎝・器高8.2㎝を測り、扁平な体部にわずかに突出するドーナツ底をもつ。体部外面に叩き目後ナデを施す。(１)は片口のもので、体部外面に叩き目後ヘラケズリを施す。(９)は屈曲してさらに外反する口縁部で、外面にヘラミガキ・内面にハケメ後ヘラミガキ、(10)は外面にハケメ・内面にヘラミガキを施す。(12)は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

(５・６)は小型坩で、前者が底部を欠き、後者が口縁部を欠く。(第51図－17)は、脚台をもつ小型坩で、両端を欠損する。内外面にハケメを施す。

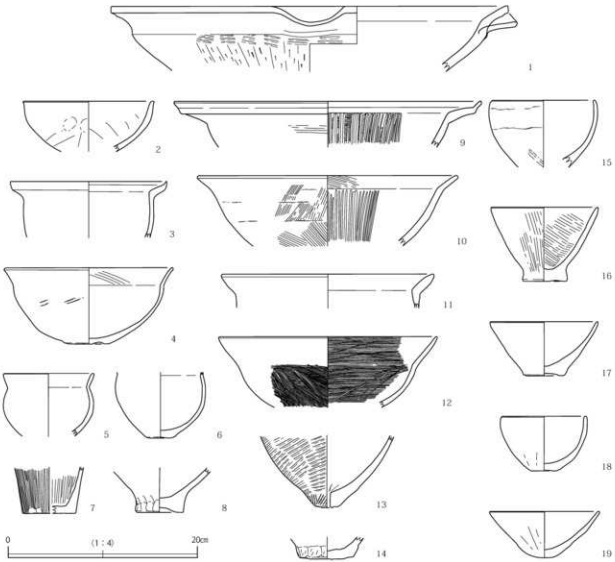
(14)は底部のみを残し、底測部に面取り状のヘラケズリ、底面をヘラケズリするもので、鉢ないしは甕の底部と思われる。



第50図　包含層出土遺物実測図（1）



第51図　包含層出土遺物実測図（2）



第52図　包含層出土遺物実測図（３）

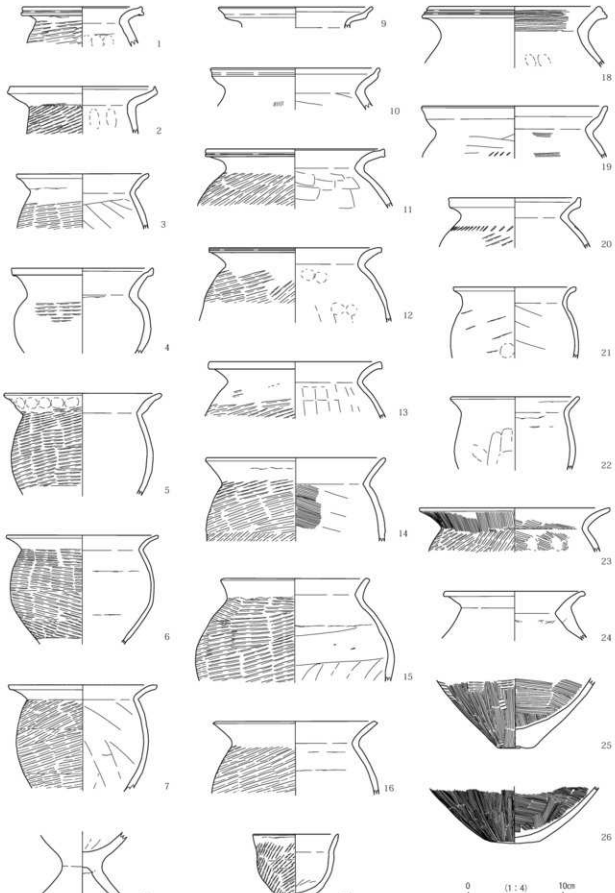
高坏には、直口のものと外反するものがあり、他に脚部のみのものがある（第51図）。

(12)は皿状のやや小型の坏部のみを残すもので、内外面にヘラミガキを施し、口縁部に波状紋を１条施す。(23)は復原完形で、口径14.8㎝・器高９.４㎝を測る小型のもので、斜め外方に開く坏部にやや小ぶりの脚台部をもつ。外面に粗いヘラミガキ・内面にハケメを施す。坏部内面に粘土紐の継ぎ目を２本残す。黄白色の他地域産と思われる土器である。

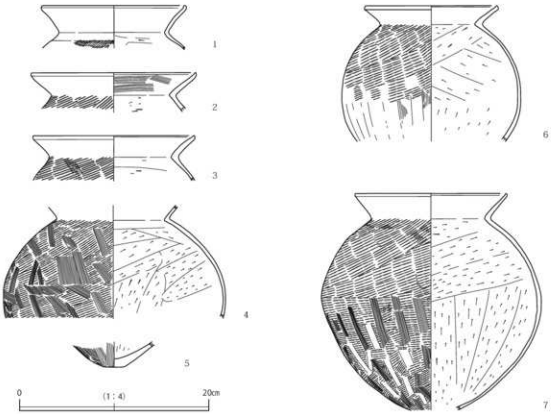
（１～４・13・14)は外反する口縁部をもつもので、（１～４)は外反が短く、他は大きく開く。坏部のみを残存しており、（１・４)の外面がナデ以外はヘラミガキを施す。

（５・６・８・10・15・16・18・19)は、脚部のみを残し、外面にヘラミガキを施し、脚台部の三方ないしは四方に、透かし孔を穿つものが多い。脚柱部と脚台部の境目に、（８)は櫛描直線紋・波状紋を、(16)は疑凹線紋７条を施す。（７)は、椀形の高坏の脚台部である。（９・11)は小型のものである。

器台には、弥生時代後期のもの、古墳時代前期初頭のものがある。前者には、（第51図－27～30)があり、(27・28)は口縁部を、(29・30)は脚台部を残している。(27)は外反し垂下する口縁部端部が面をもち、円形浮紋を施す。(28)は同様の形態で無紋のもので、内外面にヘラミガキを施す。(29)は脚台端部を欠損し、外面に箆描文様が施される。(30)は脚台端部がわずかに立ち上がり面をもつ。端部に凹線紋



第53図　包含層出土遺物実測図（4）



第54図　包含層出土遺物実測図（5）

1条を施す。

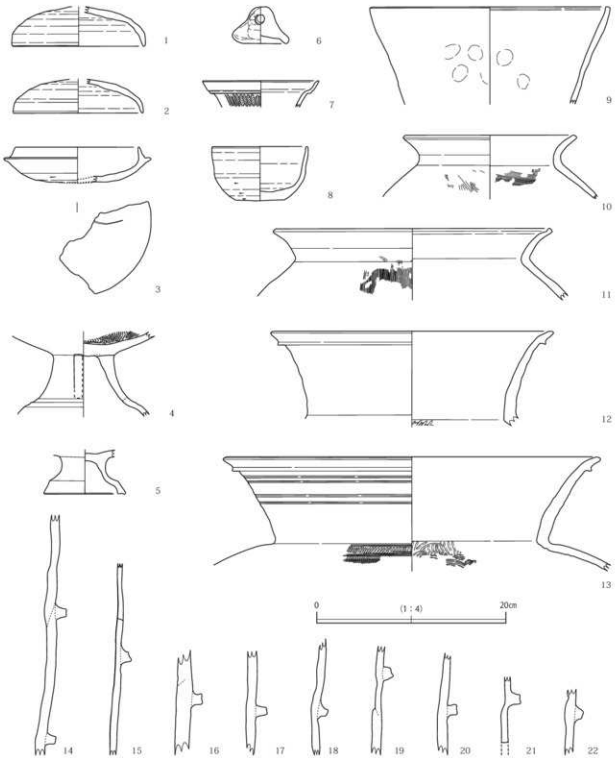
小型の器台には3種類あり、その一は(21)で、円盤上の坏部に中実の脚柱部に裾拡がりの脚台部をもつ。口径4.4㎝・器高7.0㎝を測る。外面に粗いヘラミガキを施す。その二は(22)で、浅い皿状の坏部に短い脚柱部に裾拡がりの脚台部をもつ。口径10.4㎝・器高7.8㎝を測る。脚柱部の中心に円形の透かしを穿つ。脚台部に透かしを穿つ。表面摩滅のため調整は不明である。その三は(24～26)で、浅い皿状の坏部に裾拡がりの脚台部をもつものである。(24)は復原完形で、口径10.0㎝・器高8.1㎝を測る。口縁端部がわずかにつまみ上げられ面をもつ。脚台部の四方に透かしを穿つ。内外面伴に表面摩滅のため調整は不明である。(25・26)は、透かしが無いものである。

以上の遺物から、所属時期は、弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭までの時期幅があることがわかる。

同様に、古墳時代中期以降の遺物として、須恵器や土師器・土師質の埴輪が出土している。

須恵器には、坏蓋・高坏・甕・鉢・甕などがあり、土師器には甑・甕などがある。(第55図－1～3)の坏蓋は、口径14㎝前後・器高4㎝前後のもので、(3)の底部には箆記号が残る。

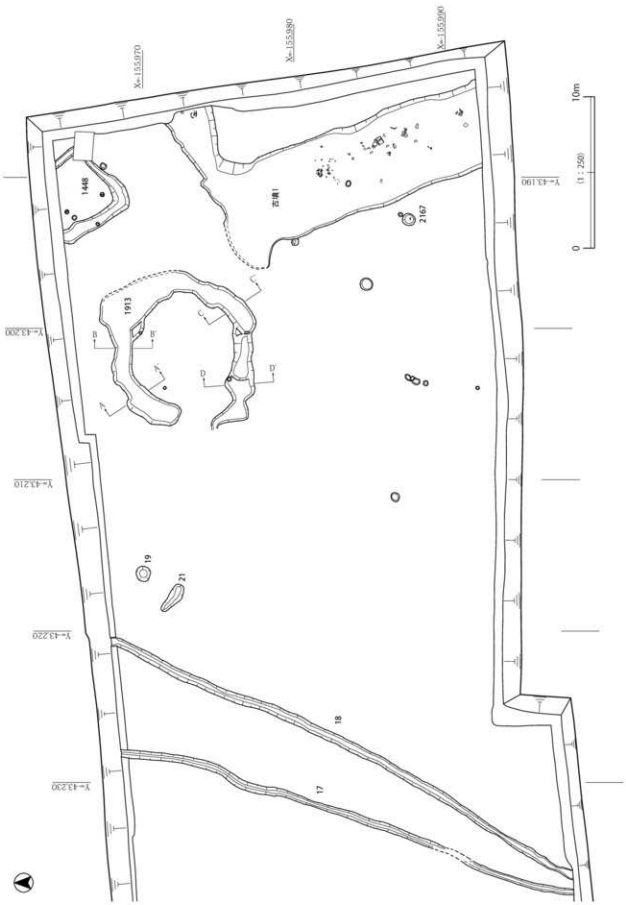
(4・5)の高坏は脚台を残し、前者は坏底部内面に同心円紋当て具痕を残す。脚柱部と脚台部の境目に突線紋を1条巡らす。脚柱部の四方に長方形の透かしを穿つ。(5)は小型で脚柱部から屈曲しわずかに広がる脚台端部の下端が凹面をもつ。(7)は甕の口縁部で、屈曲しさらに斜め外方へ延びる口縁端部が内傾する段をもつ。屈曲部に凹線紋1条・以下に波状紋を施す。(8)は、椀形の鉢で平底のものである。口径10.0㎝・器高6.0㎝を測る。把手が付く可能性がある。(12・13)は大型の甕で、口縁部端部下に突線紋1条を施し、後者はそれに加えて以下に凹線紋を2条ずつ2帯施している。体部外面に叩き目後カキメを施す。内面は両者伴に同心円紋当て具痕を施す。(6)は須恵質の飯蛸壺を再加工したもの



第55図　包含層出土遺物実測図（6）

で、紐孔部分を残し、周縁を研磨している。土師器の甑（9）は口縁部を残し、上端部がわずかに内方につまみ出され、面をもつ。内外面伴にナデを施し、指押さえを残す。（10・11）は大型の甕で、短く外反する口縁部の端部が前者が面をもち、後者がわずかにつまみ上げられ面をもつ。体部外面にハケメを施す。埴輪には、円筒埴輪があり、大部分のものが古墳1出土と同様のもので、（16）が『日置荘型』埴輪で、器壁の分厚いものである。

以上の遺物は、5世紀～6世紀にかけてのものである。



第56図　第３調査区　弥生時代～古墳時代平面図

3．第３調査区の遺構と遺物

この調査区は、遺構が西半部では希薄で、東端部で第２調査区から続く遺構が検出されている。

遺構には、土坑・溝などがある。

１）古墳

この地区から検出された古墳１については、すでに第２調査区で記述している。ここでは、古墳１の北西部に接するように検出された1913溝について述べる。

1913溝　（第56・57図、図版36－１・２）

1913溝は、幅 1.2 m～ 1.8 mの溝が径約10mの円形状に巡るもので、西側の１箇所が途切れる。深さは、残存しているところで約 0.1 mを測り、地震による変動の痕跡により、かろうじて確認されたものである。

埋土は、黒色粘土～シルト１層である。

出土遺物は、土器の底部破片がわずかにある。

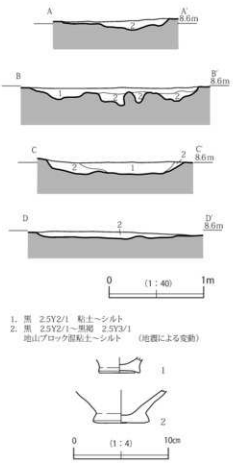
この溝は、古墳１との位置関係から、古墳の残骸の可能性を指摘するに留める。

２）土坑

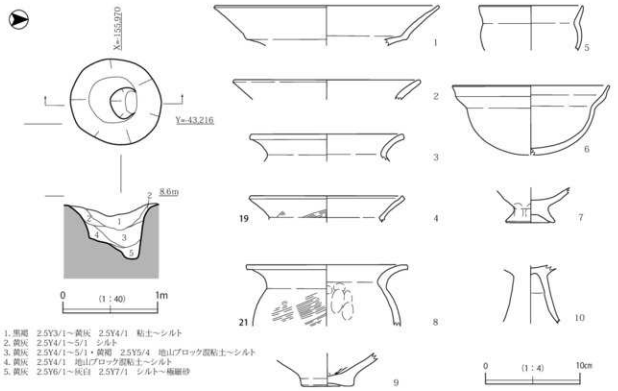
土坑は、２基検出している。

19土坑　（第56・58図、図版35－４・５）

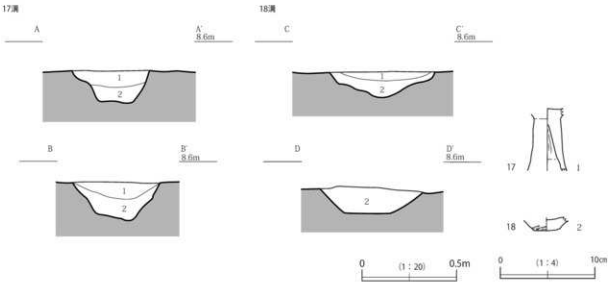
19土坑は調査区東半部の北西側で検出された不正円形の



第57図　1913溝断面および出土遺物実測図



第58図　19土坑平面・断面および19・21土坑出土遺物実測図



第59図　17・18溝断面および出土遺物実測図

土坑である。径0.9m×1.0m・深さ 0.6 mを測る。東側が深く段掘り上になる。

埋土は5層で、主に地山ブロックが混じる黄灰色の粘土～シルトである。

規模および埋土の状況から、柱が抜き取られた柱穴の可能性を残す。

出土遺物には、二重口縁壺(第58図－１・２)・甕(３・４)がある。いずれも、小破片で、古墳時代前期初頭に属す。

21土坑　(第56・58図)

21土坑は、19土坑の南西側に位置し不定形な土坑である。

出土遺物には、甕・鉢・高坏など小破片がある。

(６)のような丸底の二重口縁鉢が出土することから、古墳時代前期初頭に属す。

３)溝

溝は、調査区中央部を縦断するように２条検出された。

17溝　(第56・59図、図版35－１・２)

17溝は、両端が調査区外に伸び、検出長31.2m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は２層で、上層に地山ブロックが混じる黒褐色の粘土～シルト、下層に黄灰色のシルトが堆積していた。

遺物は、高坏の脚柱部が１点のみ出土している。

18溝　(第56・59図)

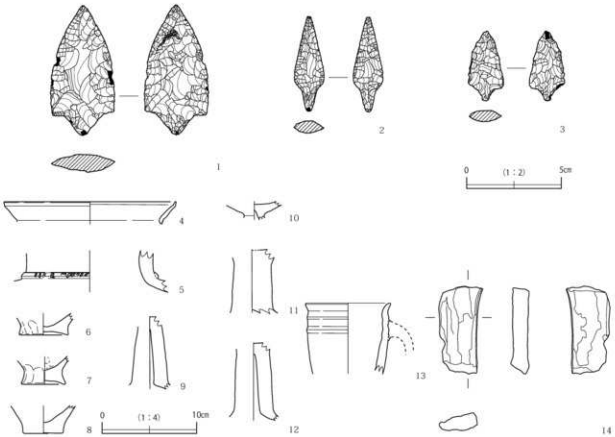
18溝は17溝の東側に位置し、わずかに方向を違え両端が調査区外へ伸びる。検出長34.3m・深さ 1.0 mを測る。

出土遺物は、叩き目を施す甕の底部１点のみである。

４）包含層

包含層出土遺物には、石器および土器がある。

石器には、(第60図－１)の縄文時代の有舌尖頭器および弥生時代中期の有茎石鏃(第60図－２・３)がある。(１)は全長 7.0 ㎝・幅 3.2 ㎝・厚さ 1.0 ㎝を測る。(２)は全長 5.1 ㎝・幅 1.6 ㎝・厚さ 0.7 ㎝を



第60図　第３調査区　包含層出土遺物実測図

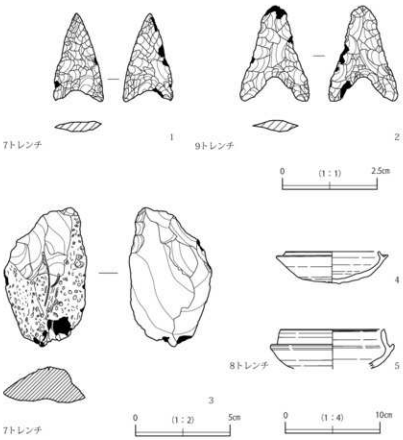
測る。（３）は全長 3.8 ㎝・幅 1.9 ㎝・厚さ 0.6 ㎝を測る。

土器には弥生時代後期～古墳時代前期初頭のものや中期の須恵器(13)・土師器竈(14)などがある。

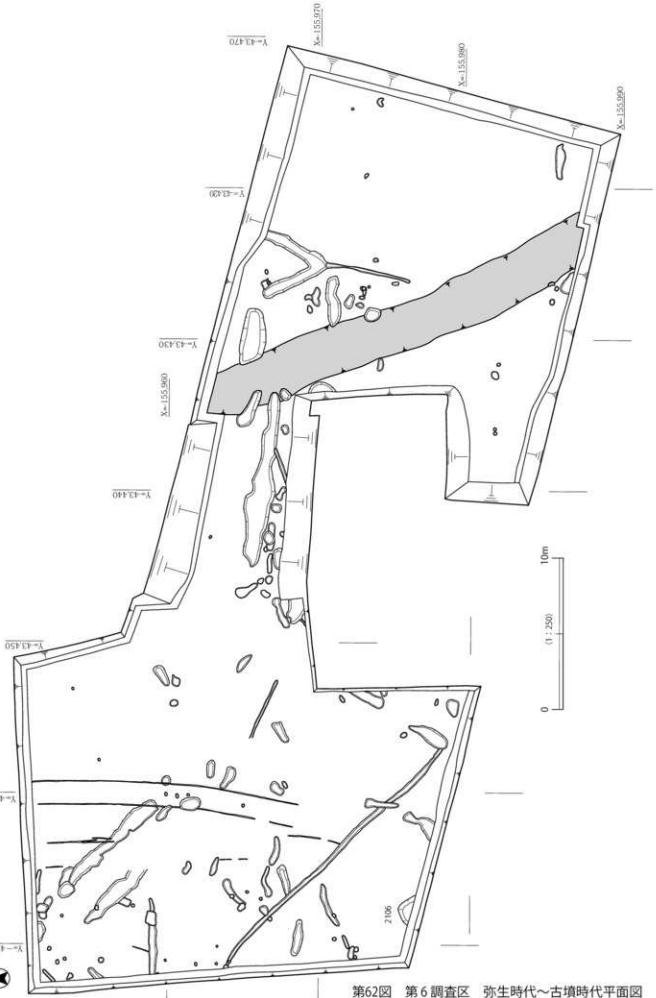
４．第４・５調査区の遺構と遺物

この調査区の遺構は皆無であった。包含層からわずかに、縄文時代の無茎石鏃(第61図－１・２)・石核(３)、および古墳時代の須恵器坏身(４・５)が出土した。

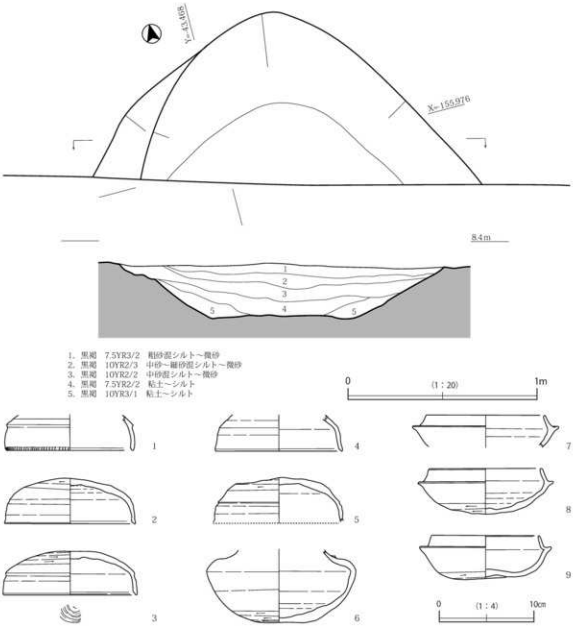
（１）は全長 2.3 ㎝・幅 1.2 ㎝・厚さ 0.3 ㎝を測る。（２）は、全長 2.4 ㎝・幅 1.3 ㎝・厚さ0.25㎝を測る。（３）は全長 7.0 ㎝・幅 4.2 ㎝・厚さ 1.9 ㎝を測る。風化が著しい。



第61図　第４・５調査区包含層出土遺物実測図



第62図　第６調査区　弥生時代～古墳時代平面図



第63図　2106土坑平面・断面および出土遺物実測図

5．第６調査区の遺構と遺物

第６調査区は、当調査区の最西端部に当り、土坑・溝などが検出されているが、ほとんどのものが遺物が出土しておらず、詳細が不明である。

１）土坑

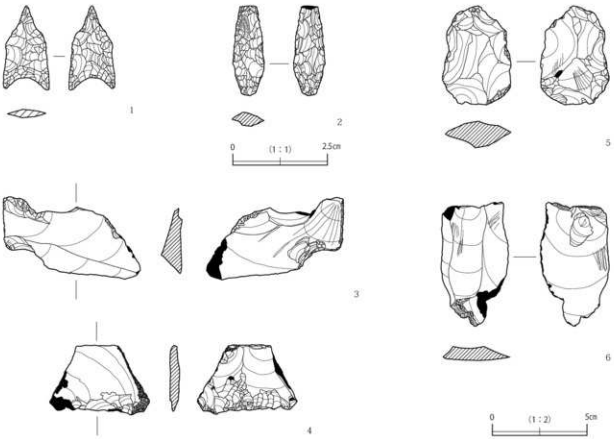
2106土坑　（第62・63図、図版46－３・66）

南西部で１基のみ検出している。この土坑は、南側が調査区外に伸びるため全容が不明である。検出長約２ｍ・検出幅 0.9 ｍ・深さ 0.3 ｍを測る。

埋土は、５層に区分されるが、概ね黒褐色で、上層が粗砂～微砂、下層が粘土～シルトである。

出土遺物は、須恵器の蓋坏・短頸壺(第63図)がある。

蓋には、（１～５）の５点があり、口径14cm前後・器高５cm前後のもので、口縁部の端部が内傾する段をもつものと内傾する面をもつものがある。口縁部と天井部の境目に段をもつものである。（１）の口縁



第64図　第６調査区　包含層出土遺物実測図

部端部に櫛による刻み目が施され、（３）の天井部内面には同心円当て具痕が残る。

坏身には（７～９）の３点があり、口径12㎝前後・器高５㎝前後のもので、口縁部端部は丸く終わる。

（６）の短頸壺は口縁端部を欠損し、肩部に蓋の溶着痕を残す。復原口径 9.6 ㎝・器高 8.4 ㎝を測る。

以上の遺物から、この遺構は６世紀代のＴＫ10に並行すると思われる。

２）轍

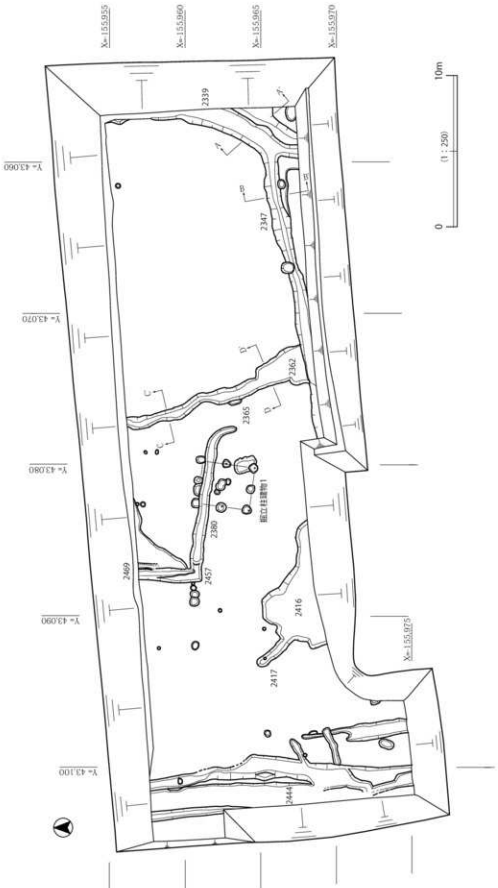
轍　（第62図、図版46－２）

轍は、第６調査区西端部で検出され、幅約 0.1 m・深さ0.1～0.2mの小溝が幅約 1.5 mの間隔で２条平行している。それらが数箇所で確認でき、最長のもので17.5mを測る。

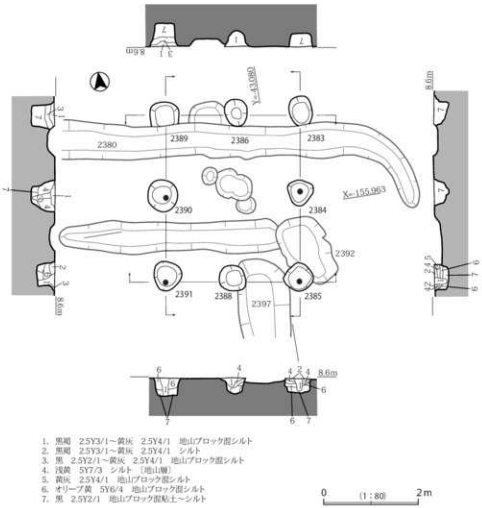
３）包含層

第６調査区の包含層から出土した遺物には、石器(第64図)がある。（１）は縄文時代の無茎石鏃で、ほぼ完形である。全長 2.3 ㎝・幅 1.2 ㎝・厚さ0.25㎝を測る。（２）は弥生時代中期の有茎石鏃で、先端部を欠損する。全長 4.8 ㎝・幅 1.6 ㎝・厚さ 0.8 ㎝を測る。

（３～６）は不定形の剥片である。（３）は全長 3.7 ㎝・幅 7.4 ㎝・厚さ 1.1 ㎝を測る。（４）は全長 3.8 ㎝・幅 5.2 ㎝・厚さ 0.5 ㎝を測る。一部に自然面を残す。（５）は全長 5.3 ㎝・幅 3.6 ㎝・厚さ 1.5 ㎝を測る。（６）は全長 6.6 ㎝・幅 3.4 ㎝・厚さ 0.8 ㎝を測る。一部に自然面を残す。



第65図　第１調査区　古代平面図



第66図　掘立柱建物１平面・断面図

第４節　古代の遺構と遺物

古代の遺構は、第２調査区を中心に、第１調査区から第３調査区東端部にかけて、掘立柱建物18棟や井戸・土坑・溝などが検出された。なお、第６調査区でも土坑や溝が検出されている。以下、調査区ごとに記述していく。

１．第１調査区の遺構と遺物

１）掘立柱建物

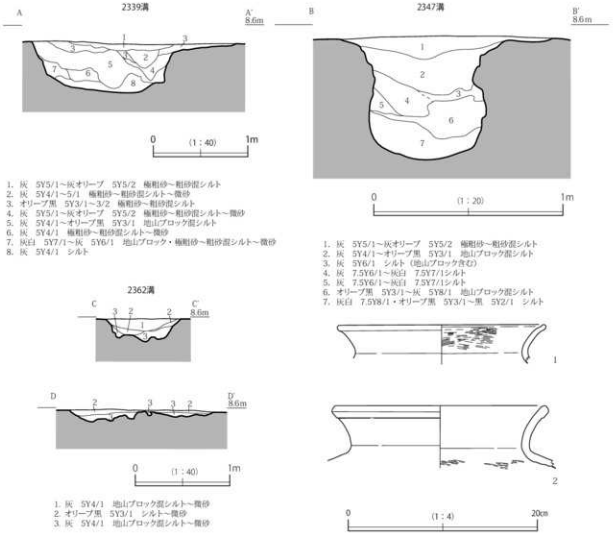
本調査区では、１棟を検出したのみである。

掘立柱建物１　（第65・66図、図版６）

調査区中央で検出され、規模は南北２間（3.6 m）×東西２間（2.8 m）、約10.1㎡である。長軸方向でN－9.5°－Eである。柱間距離は、南北方向が 1.8 m～ 2.0 m、東西方向が約 1.8 mを測る。柱痕が残存していたのは2384・2385・2390・2391柱穴で、径約15㎝を測る。他は、抜き取られていた。

掘方の平面形は、2389柱穴が隅丸方形である以外は不整円形である。断面形は逆台形のものが多く、東西方向中央の2386・2388柱穴はU字形である。柱穴の深さは、東側が 0.3 mとやや浅く、西側が 0.5 mとやや深い。

埋土には、地山ブロックが多く含まれ、４層のように、地山層で構成される点が特徴的である。



第67図　2339・2347・2362溝断面および2347溝出土遺物実測図

出土遺物は、総ての柱穴から認められたものの、図化しえなかった。

2）溝

第１調査区中央部および東南端部、西端部で、計５条の溝が検出された。

2339溝　（第65・67図、図版５－１・２）

調査区東端で検出された溝で、両端が調査区外へ伸びる。南東側に、幅約 0.5 m・深さ 0.1 mの浅い段を設ける。断面形はU字形で、検出長約10m・幅 2.1 m・深さ 0.5 mを測る。

埋土は、最下部に灰色シルト層、中層にブロック土が混じることから埋め戻されたと思われる。その後再掘削が行われている。

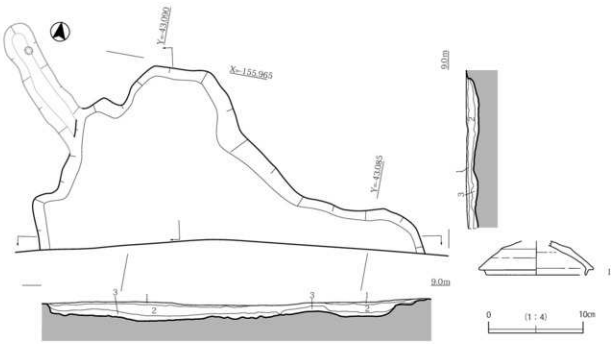
出土遺物には、須恵器・土師器・弥生土器の小片があるが図化し得なかった。

2347溝　（第65・67図、図版５－１・３）

調査区東半南側で検出されたやや南に振る東西方向の溝で、その東端は上述の2339溝と接続する。断面形はU字形で、検出長18.5m・幅0.7m～1.1m・深さ0.65mを測る。

埋土は、１層を除きブロック状であり、埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器・弥生土器があり、２点を図化した。（１）は土師器甕で、口縁部が外反し、端部がわずかにつまみみ上げられ面をもつ。内面にハケメを施す。（２）は須恵器甕で、外反する口



1. 褐灰　10YR4/1～灰黄褐　10YR4/2　粗砂・地山ブロック混粘土～シルト　土器片多い
2. 黒　10YR2/1　地山ブロック混粘土～シルト
3. 黄灰　2.5Y5/1　シルト

第68図　2416落込み平面・断面および出土遺物実測図

縁部端部が肥厚し面をもつ。これらの遺物から、8 世紀頃と考えられ。

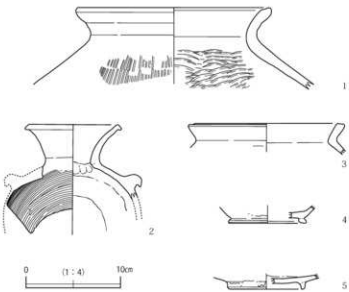
2362溝　（第65・67図）

調査区中央部で検出された南北方向の溝で、北端は調査区外へ伸び、南端は2347溝に切られる。検出長12.5m・幅0.8m～1.5m・深さ 0.1 m～0.25mを測る。南半部分で幅広く浅くなる。

埋土は 3 層で、南半部では 2 層である。出土遺物は、土師器小片がわずかにある。

2444溝　（第 6 ・65図）

調査区西端で検出された南北方向の溝で、溝内に複数の畦畔状の高まりがあるが、最大幅約 3 m・深さ約 0.2 mを測る。埋土は黒褐色～黄灰色の粗砂である。出土遺物は小片で図化し得ず、時期も不明である。



第69図　第1調査区　包含層出土遺物実測図

3）落込み

調査区で 1 基検出された。

2416落込み　（第65・68図）

調査区南西側で検出された不整形な落込みである。南側が調査区外となり、検出幅約 4 m・深さ 0.2 mである。埋土は、下層にシルト、その後地山ブロックを含む粘土～シルトで埋め戻されている。

出土遺物は、須恵器壺蓋が 1 点である。

4）包含層

包含層から出土した遺物は、（第69図）に示すものである。

第70図　第2調査区　古代平面図

2．第２調査区の遺構と遺物

第２調査区で検出された遺構は、掘立柱建物・ピット・井戸・土坑・溝などがあり、当遺跡内で最も多くの遺構を検出している。

1）掘立柱建物

本調査区では、16棟を検出した。

掘立柱建物２　（第70・71図、図版16・67）

調査区東半部の南端で検出された東西方向の側柱建物である。方向は、N－３°－Wで、ほぼ方位に一致する。

建物の規模は、東西方向４間（8.4 m）×南北方向２間（4.6 m）で、面積は約38.6㎡である。

掘方の平面形は、隅丸方形のものが多く、一辺が0.8～1.0mを測る。断面形は逆台形を基本とするものが多く、U字形のものもある。各柱穴の深さは、約0.4 mを測り、823柱穴・821柱穴は、0.2 mと浅い。

埋土は、黒褐色の粘土～シルトを基本とし、地山ブロックが混じるものも見られる。

柱痕は、816・820・821・823・1222柱穴で確認でき、いずれも径は約20㎝である。

柱間寸法は、820・821柱穴間が2.1 m、820・816柱穴間は3.8 mあり、１間は1.9 mとなり、東西方向の柱間寸法が1.9～2.1mと推測され、南北の１間が約2.15～2.45mに相当すると思われる。

遺物は、各柱穴の掘方からわづかずつではあるが出土し、図化し得たものを第71図に示す。土師器には皿・坏・甕・鍋などがあり、須恵器には坏身・甕などがある。

（１～４）は816柱穴から出土した土師器で、いずれも小破片である。（１）は径９㎝の小皿で口縁端部が内傾する面をもつ。内外面伴にナデを施す。（２）は大型の鍋の把手部分を残存し、外面にハケメ・内面にナデを施す。（３）は羽釜の鍔部分を残存し、外面に煤が付着する。角閃石を含む生駒西麓産の土器である。（４）は皿で、内面に螺旋状の暗紋を施す。

（５）は、818柱穴から出土した土師器坏で、口縁端部がわずかに肥厚する。

（６～８）は、820柱穴から出土したもので、（６）は土師器大型甕・（７）は高坏である。（８）は須恵器坏Ｂの底部である。

（９～11）は819柱穴から出土したもので、（９）は須恵器甕で、外反する口縁部端部がわずかに肥厚する。体部外面に叩き目後カキメ・内面に同心円紋当て具痕を残す。（11）は須恵器の脚台部である。（10）は土師器甕の口頸部破片で、口縁部端部が凹面をもつ。体部外面にハケメ・内面にナデを施す。

（12）は822柱穴から出土した土師器坏で、口縁部端部がわずかにつまみ上げられる。外面に丁寧なヘラミガキ・内面に放射状ヘラミガキを施す。

これらの出土遺物から、８世紀中頃に属すと思われる。

今回の調査で検出された掘立柱建物の中で最大規模で、掘立柱建物３・４を切っている。

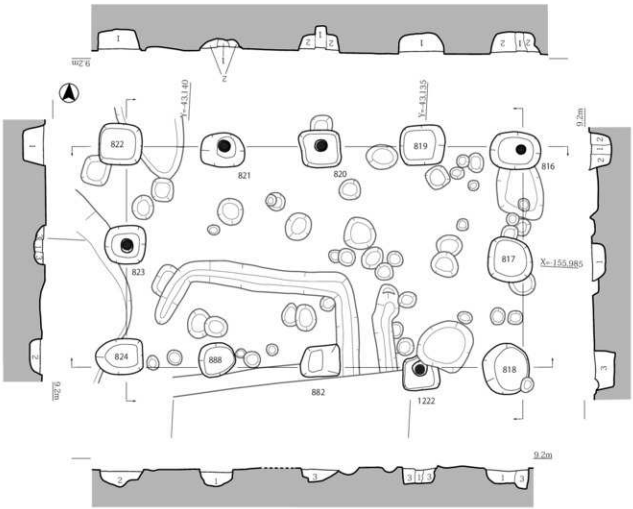
なお、建物の規模は異なるが、後述する掘立柱建物柱10・11・12は、いずれも同様な方位である。

掘立柱建物３　（第70・72図、図版16－１・17－１～４）

調査区東半部の南側、掘立柱建物４の東側で検出された東西方向の側柱建物である。方向はN－11°－Eを測る。

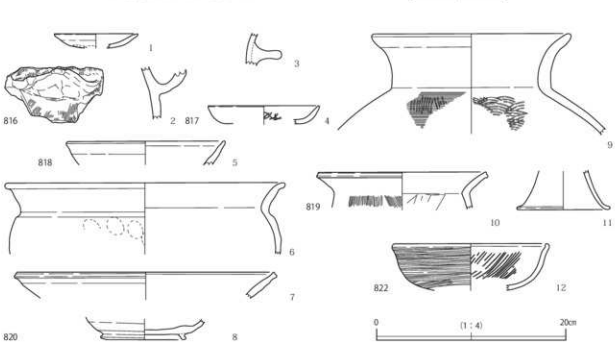
建物の規模は、東西方向３間（5.2 m）×南北方向２間（3.6 m）で、面積は約18.7㎡である。

掘方の平面形は不整円形のものが多く、径0.5～0.7mを測る。断面形は逆台形のものが多く、浅いU

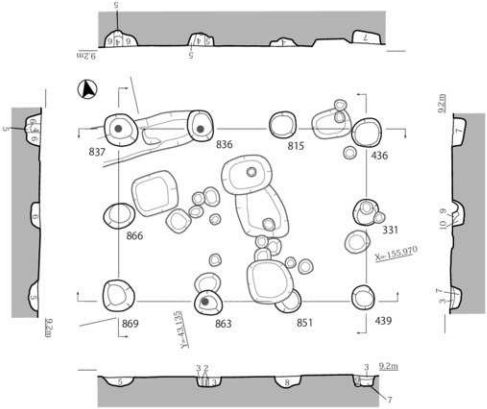


1. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　地山ブロック混粘土～シルト
2. 黒　2.5Y2/1～黒褐　2.5Y3/2　地山ブロック混粘土～シルト
3. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　粘土～シルト

0　(1：80)　2m



第71図　掘立柱建物２平面・断面図および各柱穴出土遺物実測図



第72図　掘立柱建物３平面・断面図

字形のものもある。柱穴の深さは、南側より北側が若干深く0.2m～0.4mを測る。

埋土は、黒褐色の粘土～シルトが主体であり、869柱穴では地山ブロックが他の柱穴に比べやや目立つ。

なお、836・837・863柱穴では、径15～20cmの柱痕が見られた。柱間寸法は、836・837柱穴間で1.8mを測る。南北・東西伴に１間が約1.8m前後であると推測できる。

439柱穴の底部には、径0.2m程度の石が検出されているが、根石とすると南北の柱通りが通らなくなる。

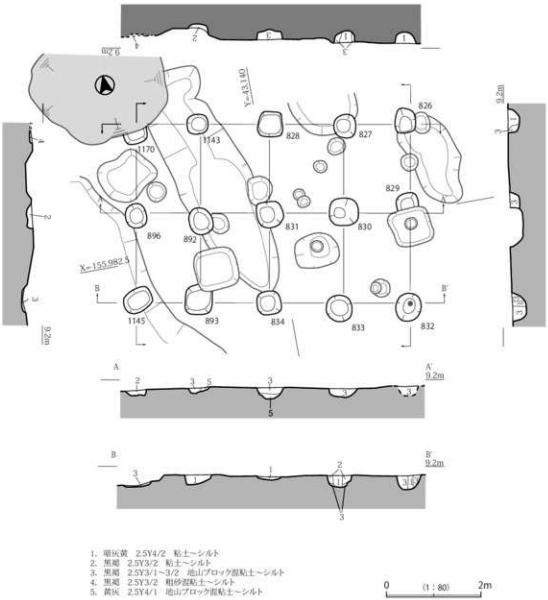
上述の掘立柱建物２に切られる。

遺物は、863柱穴を除き、わずかに掘方から出土しているが、いずれも、土師器の小片で図化し得なかった。

掘立柱建物４　（第70・73図、図版16－1・17－5～8）

調査区中央部の南側で検出された東西方向の総柱の建物である。掘立柱建物３の西側に位置する。方向はN－10°－Eである。建物の規模は、東西方向４間（5.8m）×南北方向２間（3.8m）で、面積は約22㎡を測る。

掘方の平面形は、隅丸方形のものと不正円形のものがあるが、本来は隅丸方形を基本としていたと推



第73図　掘立柱建物４平面・断面図

測される。一辺0.5～0.6mを測る。断面形は、U 字状を呈するものが多い。柱穴の深さは、0.2～0.4m を測り、834・1170柱穴のようにごく浅いものも見られる。1143・1145柱穴は、本来的には弥生時代の遺構の上面で検出されるはずであったが、遺構埋土が黒褐色の同様な土であったために、遺構底面で検出されたものである。また、1170柱穴は北側を撹乱で切られてる。

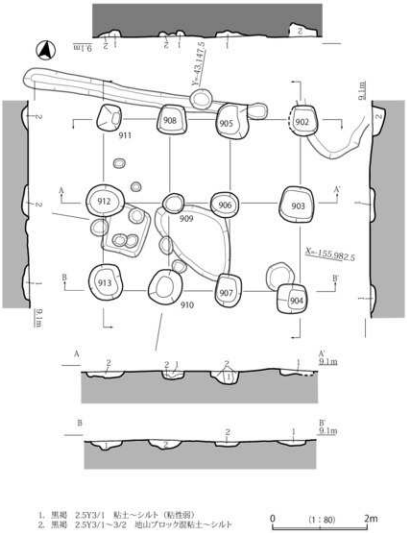
埋土は、いずれも黒褐色の粘土～シルトで、地山ブロックが見られるものもある。なお、832 柱穴では、径10cm強の柱痕が唯一検出されている。

柱間寸法は、柱や柱痕が残存しておらず、確とはし難いが、南北方向が約 1.8 m、東西方向が約1.45 mを測る。

出土遺物は、832・833 柱穴を除き見られたが、いずれも、土師器の小片で図化し得なかった。

この建物は、掘立柱建物３と同様に掘立柱建物２に切られる。

掘立柱建物３と４は、長軸の方向がほぼ一致し、両建物の南辺および北辺は、概ね並ぶ。このことから、両建物が同時並存の可能性が考えられる。



第74図　掘立柱建物５平面・断面図

掘立柱建物５

（第70・74図、図版18）

調査区中央の南側で、掘立柱建物４・６に挟まれ検出された東西方向の総柱建物である。長軸方向はＮ－９°－Ｗを測る。

建物の規模は、東西方向３間（4.2m）×南北方向２間（3.6m）で、面積は約15.1㎡を測る。

掘方の平面形は隅丸方形を指向したものが多い。一辺が0.6～0.7ｍのものが大半を占めるが、909柱穴は径0.4ｍと小規模である。

断面形は、Ｕ字形のものが多い。深さは、0.15ｍと浅いものが多く、902・906柱穴が0.4ｍとやや深い。

埋土は、黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混じるものも見られる。

柱痕が残っている柱穴は、確認されなかった。

柱間寸法は、東西方向で約1.4ｍ、南北方向で約1.9ｍを測ると推測される。

出土遺物は、総ての柱穴から見られたが、いずれも、土師器の小片で図化し得なかった。

掘立柱建物６　（第70・75図

図版18－１・19）

調査区西半部のやや南側、掘立柱建物５・７の間で検出された東西方向の側柱建物である。方向は、Ｎ－15°－Ｗを測る。

建物の規模は、東西方向３間（3.9ｍ）×南北方向２間（3.1ｍ）で、面積は約12.1㎡である。

掘方の平面形は、不正円形である。これらの径は、0.4～0.6m程のものが多いが、967柱穴は楕円形で、長径0.8ｍ・短径0.6ｍである。断面形は、逆台形かＵ字形である。深さは0.1～0.3mを測り、南東側の971・959・961柱穴がやや浅めである。

埋土は、黒色もしくは黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが一部で混じる。

柱痕は検出されていない。柱間寸法は、東西方向が約1.3ｍ、南北方向が約1.55mを測ると考えられる。

遺物は、961・967・971・978・979の各柱穴から見られたが、いずれも、土師器・須恵器の小片で図化し得なかった。

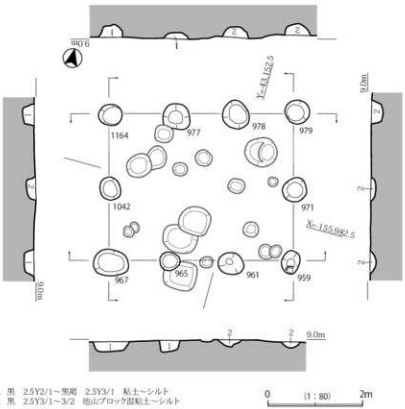
掘立柱建物７　（第70・76図、図版20－１～６）

調査区南西半部の南側、掘立柱建物６の西側で、検出された南北棟の総柱建物である。長軸の方向はＮ－17°－Ｗを測る。

建物の規模は、南北方向３間（5.0 m）×東西方向２間（3.8 m）で、面積は約19㎡である。

柱痕は、残存していなかったが、1048・1050・1054柱穴には掘方より一段深くなっている部分があり、それらを柱の沈み込みと捉えることができる。

なお、1055柱穴では、隅丸方形の25.0㎝×18.2㎝・厚さ12.8㎝石が見られた。



第75図　掘立柱建物６平面・断面図

掘方の平面形は、隅丸方形のものが多く、1049・1052・1053柱穴が不正円形である。

柱穴の一辺の長さは、0.6～0.8 mである。

断面形は、逆台形のものが多く、1050・1054柱穴のように二段掘りのものもある。

深さは、0.2～0.3mと全体的に浅い。ただし、1052柱穴のみ0.45mと際立って深い。

埋土は、黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混ざる部分もある。

柱間寸法は、南北方向中央列の1054・1055柱穴間が 1.8 m、同東辺の1048・1050柱穴の２間分が 3.3 m、東西方向の1050・1054柱穴間が 1.8 mである。よって、南北方向の１間は約 1.7 m、東西方向の１は1.8～2.0mであると推測できる。

出土遺物は、1048・1050・1055・1056・1057・1058・1059の各柱穴から見られたが、いずれも小片で図化し得なかった。なお、1048・1057・1058柱穴から土師器と弥生土器、1050柱穴から須恵器・土師器や弥生土器、1055柱穴から土師器、1056・1059柱穴からは弥生土器がそれぞれ出土している。

掘立柱建物８　（第70・77図、図版20－１・６・７）

調査区西半部南側で検出された、ほぼ正方形の側柱建物である。上述の掘立柱建物７の北側に位置する。方向は、Ｎ－20°－Ｗを測る。

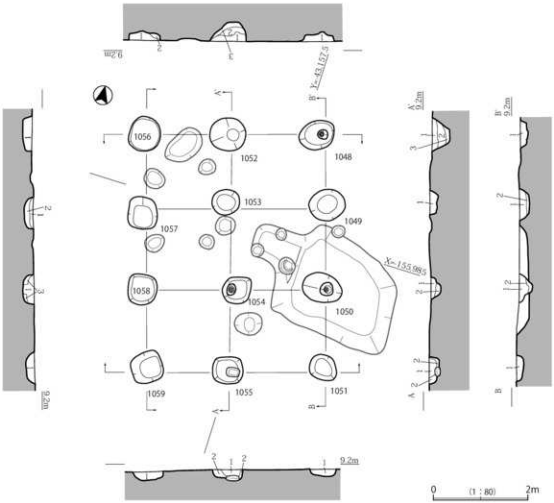
建物の規模は、南北方向２間（1.8 m）×東西方向２間（1.8 m）で、面積は約 3.2 ㎡である。

1083・1086・1184柱穴に柱痕が残り、径10～15㎝である。

掘方の平面形は、不正円形のものが多く、1078柱穴のみ楕円形である。

各柱穴の径は、0.2～0.3mである。断面形はＵ字形で、深さは北西側が 0.4 mと深く、南側が 0.2 mと浅い。

埋土は、黒色もしくは黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混ざるものも見られる。



1. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　粘土～シルト
2. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　地山ブロック混粘土～シルト
3. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　粘土～シルト

第76図　掘立柱建物７平面・断面図

柱痕は、1083・1184柱穴に残存しており、その径は約10cmを測る。なお、1086柱穴には、柱が沈み込んだと思われる窪みがある。柱間寸法は、１間が約 0.9 mと考えられる。

出土遺物は、いずれの柱穴からも見られなかった。

掘立柱建物９　（第70・78図、図版21）

調査区東端中央部で検出された東西棟の側柱建物である。方向は、N－５°－Wを測る。

建物の規模は、東西方向１間（3.9 m）×南北方向２間（3.6 m）で、面積は約14㎡である。

掘方の平面形は不正円形で、これらの径は0.7～0.8mである。断面形は、いずれも逆台形である。深さは0.1～0.2mを測り、357柱穴が0.35mとやや深めである。

埋土は、黒色もしくは黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混ざる部分もある。

なお、1795柱穴の最上部に見られる１層は、基本層序の中世層相当と思われる。

柱痕は1803柱穴にのみ残存しており、径15cmを測る。柱間寸法は、東西が 3.9 m、南北が約 1.8 mを測ると考えられる。

遺物は、357・1795・1803・1834柱穴から出土した。このうち図化し得たものが第78図に記した２点である。いずれも、357柱穴出土の須恵器である。（１）は甕の頸部破片で、凹線紋２条以上を施す。

（2）は坏蓋である。なお、図化し得なかった遺物には、土師器や弥生土器などがある。

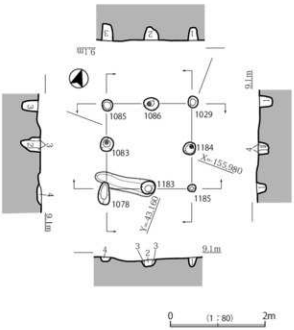
掘立柱建物10　（第70・79図、図版21）

調査区東半部の北側で検出された、南北棟で側柱建物である。長軸の方向はN－5°－Wを測る。

建物の規模は、南北方向３間（4.2 m）×東西方向２間（3.2 m）だが、西辺には東辺の1769柱穴と対に当たる位置で柱穴を検出できなかった。概ね検出が予想される位置には、1737土坑が存在する。この土坑は1744柱穴に切られることから、建物以前と考えられるが、埋土が類似するために検出できなかったと思われ、本来は柱穴が存在したと思われる。

また、南辺の中央に当たる北辺の1757柱穴と対になる柱穴は、精査したが検出されなかった。

面積は約13.4㎡である。



1. 黒　2.5Y2/1　粘土～シルト（粘性強）
2. 黒褐　2.5Y3/1～暗灰黄　2.5Y4/2　細砂混粘土～シルト
3. 黒　2.5Y2/1～黒褐　2.5Y3/1　粘土～シルト（粘性強）
4. 黒褐　2.5Y3/1　地山ブロック混粘土～シルト

第77図　掘立柱建物８平面・断面図

掘方の平面形は、隅丸方形の1762・1766柱穴、円形の1736・1772柱穴などがある。一辺の長さは0.6～0.7 mのものが多いが、1744柱穴が0.3 mと小さい。1744柱穴周辺は、複数の遺構が重複しており、正確な形状を捉え切れなかった可能性がある。

断面形は、逆台形のものが多い。深さは、北側が南側より深い傾向が見られ、1767柱穴が0.45mと最も深く、1736柱穴は0.15mと浅い。

埋土は、黒色～黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混じる。

柱痕が残るものは、1772柱穴のみで、柱が掘方より沈み込んでいる様子を窺うことができる。1766柱穴も同様の沈み込みとするならば、南北２間間の柱間寸法は、2.95mを測る。なお、南北方向の柱間寸法は、1.25～1.5 m、東西方向が1.6 mと推測される。

出土遺物は、1772柱穴を除き、各柱穴から見られたが、いずれも小片で図化し得なかった。

なお、1736柱穴から土師器もしくは弥生土器、1744柱穴から土師器、1746・1762柱穴から土師器と弥生土器、1757・1769柱穴から土師器と庄内式土器を含む弥生土器、1766柱穴から弥生土器がそれぞれ出土している。

先述したように、小片であることから、遺物からは時期を追えなかった。

掘立柱建物11　（第70・80図、図版23）

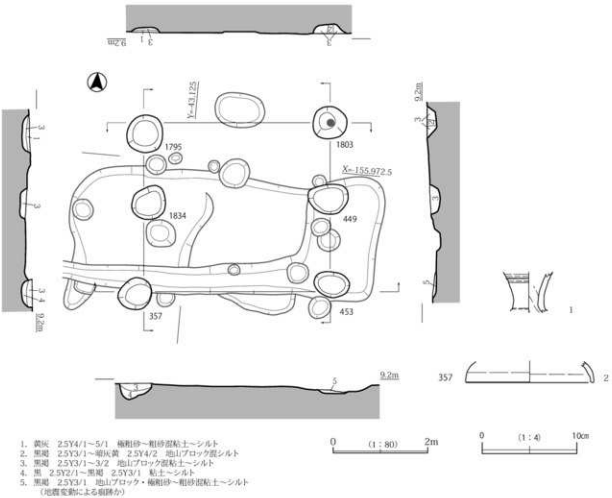
調査区中央部の北側で検出された東西棟の側柱建物である。上述の掘立柱建物10の西側に位置する。方向は、N－2－°Wを測る。

建物の規模は、東西方向３間（5.9 m）×南北方向３間（4.2 m）で、面積は約24.8㎡である。

掘方の平面形は、隅丸方形を基本とするが、1844柱穴のような不整円形のものもある。

なお、1840柱穴は、北端が上記確認調査時の側溝により残存しないが、他の柱穴よりも大きい。各柱穴の一辺の長さは、0.6 m程度のものが多い。

断面形は逆台形状を呈するものが多く、垂直に掘削される1653・1840柱穴も見られる。深さは、0.3



第78図　掘立柱建物９平面・断面および柱穴出土遺物実測図

～0.4 mを測り、1674・1681柱穴のように0.1 m前後と浅いものがある。概して、四隅の柱穴が深い。

埋土は、黒色～黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混ざるものも見られる。埋土の様相は上述した掘立柱建物10と類似する。

1651柱穴の検出位置は、対になるべき1674柱穴の位置と一致しないことから、この柱穴はこの建物に伴わない可能性が考えられる。

なお、1674柱穴と対になるべき位置には、当該部分に確認調査(30－１トレンチ)の側溝が掘削されていたため、見落とした可能性も考えられる。

また、東辺の1840・1844柱穴間にも柱穴の存在が推定でき、複数回の精査を行ったが、検出には至らなかった。

柱痕は、1674・1853・1692・1851柱穴で残存しており、径15cmを測る。柱間寸法は南辺の1674・1853柱穴間で 2.2 m、1853・1692柱穴間で 1.9 mである。これらのことから、南北方向は約1.4～1.5m、東西方向が約1.8～2.2mと考えられる。

出土遺物は、1651・1844柱穴を除く各柱穴から土師器や弥生土器が見られたが、いずれも、小片で図化し得なかった。

掘立柱建物12　(第81図、図版24)

調査区中央部の北側で検出された東西棟の側柱建物である。上述の掘立柱建物11の西側に位置する。

方向は、N－3°－Wを測る。

この建物の規模は、東西方向1間（4.0 m）×南北方向が2間（2.8 m）で、面積が約11.2㎡である。

掘方の平面形は、東辺では比較的明瞭に隅丸方形であるが、西辺は両端の柱穴が不正形である。

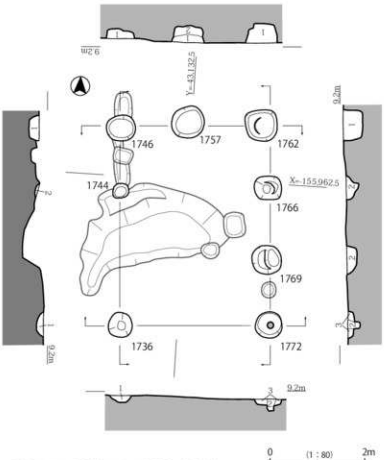
各柱穴の一辺は、0.6 m前後のものが多いが、1647柱穴は約1 mと一回り大きい。

断面形は逆台形である。深さは、0.15～0.3 mを測る。

埋土は、黒色もしくは黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混じる。

柱痕は1589柱穴にのみ残存しており、径0.2 mを測る。柱間寸法は、南北方向が約1.4 m、東西方向が約2 mと考えられる。

出土遺物は、1645柱穴を除く各柱穴から土師器や弥生土器が見られたが、いずれも小片で図化し得なかった。



1. 黒褐　2.5Y3/1～暗灰黄　2.5Y4/2　地山ブロック混シルト
2. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　粘土～シルト
3. 黒　2.5Y2/1～黒褐　2.5Y3/2～3/1　地山ブロック混粘土～シルト

第79図　掘立柱建物10平面・断面図

この建物の東西方向は、1間が約4 mと幅広く、本来中間にもう1基柱穴があった可能性がある。北辺のその位置には、1608土坑があり、その遺構と重複して検出されなかった可能性がある。しかしながら、南辺では精査をしたが、柱穴は認められなかった。

なお、この建物は、調査区外の北側に伸びる可能性も考えられる。

掘立柱建物13（第82図、図版25）

調査区西半部の北側で検出された南北棟の側柱建物である。方向は、N－9°－Eを測る。

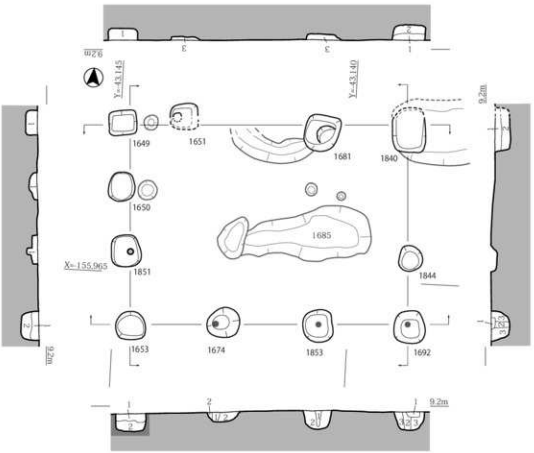
建物の規模は、南北方向3間（3.8 m）×東西方向3間（3.6 m）で、面積は約13.7㎡を測る。北西隅の柱穴は、精査したが確認できなかった。

掘方の断面形は、いずれも隅丸方形で、各柱穴の一辺は0.6～0.8mである。断面形は、逆台形のものが多い。深さは、0.15～0.4 mを測り、1516・1545柱穴が浅い。

埋土は、黒色～黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混ざるものも見られる。

柱痕は、1381・1513・1545柱穴に残存していた。径は約15cmを測る。

また、1543柱穴では、柱痕は残存していなかったが、柱の沈み込み痕が確認された。それらにより、柱間寸法は、1381・1513柱穴の2間分が2.3 m、1543・1545柱穴の2間分が2.4 mを測り、東西方向の1間が1.15～1.2 mとなる。



第80図　掘立柱建物11平面・断面図

出土遺物は、1374柱穴を除く各柱穴から見られるが、いずれも小片で図化し得なかった。

なお、1513・1543・1545柱穴から土師器と弥生土器、1516・1546・1547柱穴から土師器、1542柱穴から須恵器、1381・1514・1544柱穴から弥生土器がそれぞれ出土している。

掘立柱建物14　（第83図、図版26）

調査区西半部の北側で検出された南北棟の側柱建物である。長軸の方向はN－22°－Wを測る。

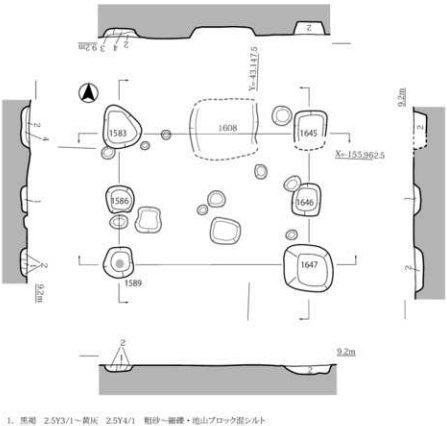
建物の規模は、南北方向２間(3.95m)×東西方向２間(3.1 m)で、面積は約12.2㎡である。

柱穴の径は、0.5～0.6mのものが多いが、1409柱穴のみ0.3 mと小ぶりである。

断面形は、逆台形のものが多いが、1396柱穴はU字形である。1401～1403柱穴のように、二段掘りになっているものもある。深さは、0.25～0.4 mを測る。1397柱穴が浅い以外は、ほとんど同様な深さである。

埋土は、黒褐色の粘土～シルトを基本とするが、やや黒味が弱く黄灰色系である。地山ブロックは量的にさほど多くはない。

柱痕は、1396・1397・1409柱穴で検出され、径15cmを測る。1403柱穴では、柱の沈み込んだ痕跡が確認された。それらから、柱間寸法は、1396・1397柱穴間で1.6 m、1409・1403柱穴間で2.35mを測る。よって、東西方向の柱間は1.5・1.6mで、南北方向は西辺南側の１間が幅広く、東辺は1.85・2.1 mと南北の柱間寸法に差異が生じている。



第81図　掘立柱建物12平面・断面図

出土遺物は、1397・1409柱穴を除く各柱穴から見られたが、いずれも小片で図化し得なかった。

なお、1396・1399・1401・1402・1403柱穴から土師器と弥生土器、1398柱穴から弥生土器が、それぞれ出土している。

掘立柱建物15　（第84図、図版27－１～４）

調査区中央部付近で検出された東西棟の側柱建物である。方向はＮ－８°－Ｗを測る。

建物の規模は、南北方向２間（3.6 m）×東西方向２間（3.4 m）で、面積は約12.2㎡である。

なお、建物南西隅部分には、916落込みが位置する。同落込みは994柱穴に切られており、建物以前である。このため、916落込み部分に、この掘立柱建物15に伴う柱穴が存在することが想定されたものの、検出には至らなかった。

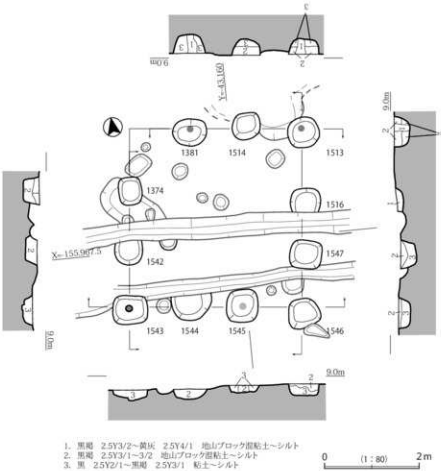
掘方の平面形は、基本的に隅丸方形である。さらに、990～993柱穴は、隅丸長方形をである。それぞれの一辺は、0.6～0.9mである。

断面形は逆台形かＵ字形である。深さは、0.25～0.4 mを測り、東側が西側よりもやや深い傾向が見られる。

埋土は、黒色もしくは黒褐色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックが混じる部分もあるが、さほど多くはない。

柱痕は検出されていない。柱間寸法は、南北方向が1.7 m、東西方向が1.8 mと考えられる。

出土遺物は、各柱穴で見られ、このうち６点を第84図に示した。（１・２）は991柱穴出土で、いずれも須恵器杯蓋の小破片で口縁部の端部が内傾する段をもち、口縁と天井部の境目に凹線紋を施す。（２）



第82図　掘立柱建物13平面・断面図

は、天井部に箆記号を施す。（3・4）は992柱穴から出土した。（3）は、弥生時代後期の直口壷の口頸部を残しており、下層からの混入と思われる。（4）は須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境目が屈曲し、強いナデが施される。口縁部外面にカキメが部分的に施される。（5）は989柱穴から出土した須恵器高坏で、脚部に長方形透かしを2段4方に穿つ。（6）は994柱穴から出土した須恵器脚部で、器形は不明である。

なお、これ以外の図化し得なかった遺物として、989柱穴から布留式土器を含む土師器と弥生土器、990柱穴から弥生土器、991柱穴から土師器、992柱穴から庄内式土器を含む土師器と弥生土器、993柱穴から須恵器や庄内式土器を含む土師器と弥生土器、994・1002柱穴から土師器と弥生土器が、それぞれ挙げられる。

以上から、所属時期は須恵器からＭＴ85と考えられる。

掘立柱建物16　（第85図、図版27－５・６）

調査区北西端で検出された建物で、その南辺が確認されたのみで、調査区外へ伸びる。この建物南辺軸の方向は、Ｎ－79°－Ｗを測る。

建物の規模は不明だが、一辺4.8ｍである。

掘方の平面形は、概ね円形であり、径は0.5～0.6ｍである。断面形は、概ね逆台形である。深さは、1298・1333柱穴が0.4ｍを測り、1346柱穴が0.3ｍと浅い。実際の底面レベルで見ると、前者との差異は約0.3ｍを測る。

埋土は、黒褐色の粘土～シルト主体で、比較的明瞭に地山ブロックが混ざる。

出土遺物は、いずれの柱穴からも見られなかった。

掘立柱建物17　（第85図、図版27－５・７・８）

調査区の北西端で検出された建物で、その南辺が確認されたのみで、調査区外に伸びる。この南辺軸方向は、N－81°－Eを測る。

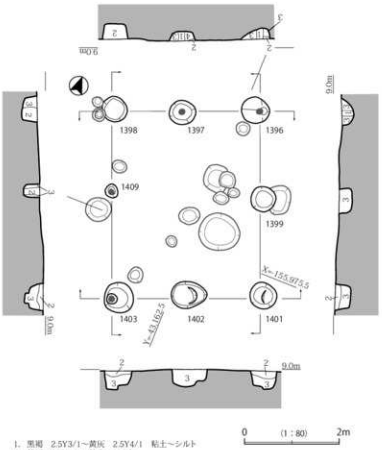
建物の規模は不明だが、南辺は約3.2 mである。

掘方の平面形は、いずれも不正円形で、径は、0.5～0.75mである。

断面形は、U字形を呈する。

深さは、0.3 mで、1273柱穴がやや浅く規模も小さい。

埋土は、黒色の粘土～シルトが主体で、地山ブロックがわずかに混じる。



第83図　掘立柱建物14平面・断面図

出土遺物は、いずれの柱穴からも見られなかった。

以上、第２調査区から検出された掘立柱建物は16棟あり、それらを俯瞰すると、幾つかの固まりがあることが判る。

建物の方向性で見るならば、ほぼ方位に沿う建物の２・11・12、わずかに西に振る建物５・９・10・15・17、さらに西に振る建物６～８・14、東に振る建物３・４・13・16の４群に区分できる。

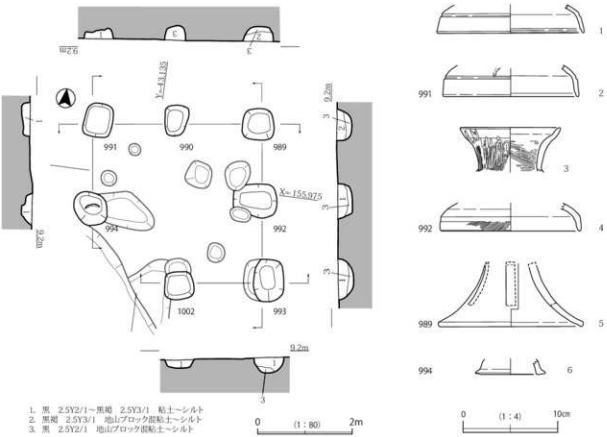
さらに、建物２と建物11・12とは、約16m離れていることから、別群と考えられ、それぞれが調査区外へ拡がる可能性がある。なお、建物11・12は、いずれも、東西棟の側柱建物で、北辺を揃え建物間の距離が1.5 mと隣接する。また、建物10はわずかに軸線が異なるが、建物11と南北両辺がほぼ揃うことから、同一群と考えられる。建物10と建物11の距離は約５ mを測る。

また、建物３・４と建物13・16とは約20mの距離があり、別群と考えられる。建物３・４は、いずれも東西棟で、東側に側柱建物、西側に総柱建物が南辺をほぼ揃えている。建物間の距離は約1.25mである。この建物群は、建物２に切られていることから、先行して築かれてことが判る。建物13・16は、方向は揃うが辺を揃えていない。建物間の距離は約６ mである。

同様に、建物５・15、建物９、建物17が距離的に離れており、３群に分かれる可能性がある。

建物５・15は、前者が総柱建物で、後者が側柱建物であり、前者の東辺と後者の西辺がほぼ一直線に並ぶ。建物間の距離は約５ mを測る。

建物６～８・14の一群は、建物７が総柱建物で、他は側柱建物である。建物６と14がほぼ同規模で、



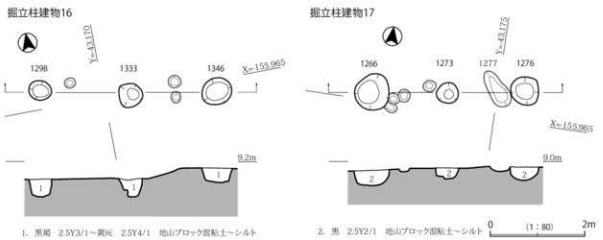
第84図　掘立柱建物15平面・断面および柱穴出土遺物実測図

長軸を90度振る。建物間の距離は10mを測る。建物７・８および14は西辺をほぼ揃えている。

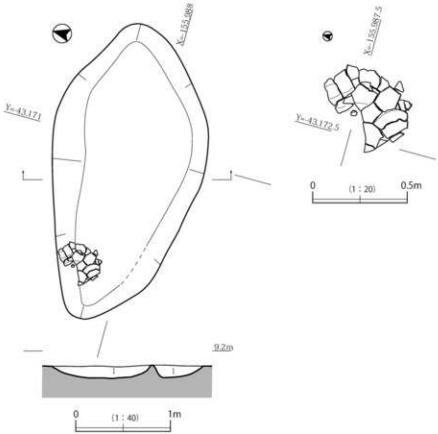
掘立柱建物は、第１調査区～第３調査区にかけて東西約200ｍと広がりを見せる。

以上の建物群は、ほとんどのものが、切り合い関係が無く、出土遺物もわずかで、時期を確定できる要素にかける。概ね、８世紀代と考えられる。

他に、柱穴と思われるピットが多数検出されている。建物として復原できなかったものであるが、写真図版31－２～８に掲載する。



第85図　掘立柱建物16・17平面・断面図



1．黒褐　2.5Y3/1～明灰黄　2.5Y4/2　粗砂混粘土～シルト

第86図　1182土坑平面・断面図

2）土壙墓

土壙墓は、当調査区で２基検出されている。いずれも、西端部の古墳１の墳丘が削平された部分である。

1182土坑　（第70・86・87図、図版29－１・２・67）

1182土坑は、調査区南西端部で検出された土坑で、東西に長い不定形なものである。長径 3.2 m・短径 1.6 m・深さ 0.1 mを測る。

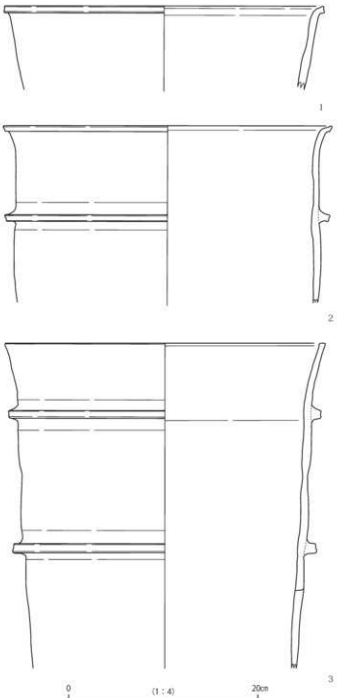
埋土は、黒褐色の粗砂が混ざった粘土～シルトが１層である。

遺物は、西端部で遺構から浮いた形で出土しており、本来的にはもっと深さがあったと思われる。

出土遺物は、円筒埴輪が３点である（図87）。（１）は、口径33.6cmを測る口縁部のみを残すもので、口縁部の端部がわずかに外反し、わずかにつまみあげられ凹面をもつ。内外面にナデを施している。（２）は、口縁部を含む２段分を残す。口径34.4cmを測る。口縁端部はわずかに外反し、つまみあげられ面をもつ。端部下約10cmの所に断面M字形の突帯を付す。内外面伴にナデを施す。（３）は、口縁部を含む３段分を残す。口径34.0cmを測る。口縁部はわずかに開き、端部が内方へわずかに肥厚し、上端に面をもつ。口縁部端部下10cmに断面M字形の突帯を付し、以下15cmにも突帯を付す。透かしを穿つが、残りが悪く形態は不明である。内外面にナデを施す。外面の縦位方向に黒斑を残す。

以上の埴輪は、古墳１に設置されていたものと考えられ、この土坑に円筒棺として、再利用されたと考えられる。

他に、遺物は出土していない。



第87図　1182土坑出土遺物実測図

759 土坑　（第70・88～90図、図版28・68）

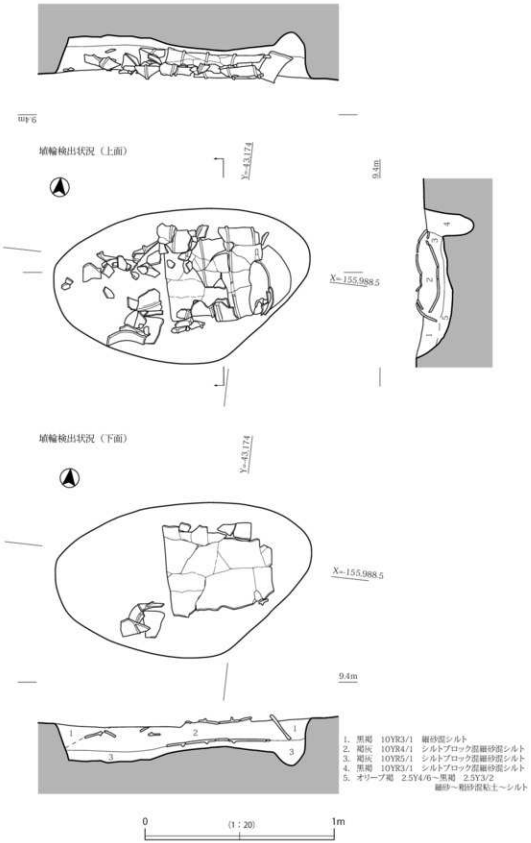
759 土坑は、南西端部の1182土坑の西側で検出された。

平面形は不正楕円形で、長径1.35m・短径 0.8 m・深さ約 0.2 mを測る。

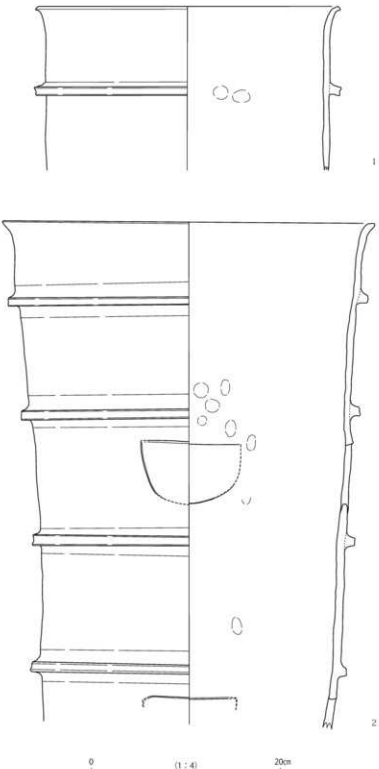
埋土は、大きくは上下 2 層に区分され、上層に細砂混じりの黒褐色シルト層が、下層にシルトブロックが混ざる褐灰色の細砂混じりのシルト層が堆積していた。

3 層上面に、円筒埴輪 3 段分が口縁部を西側に向け出土し、東端には、他の円筒埴輪片が立てられ、小口として使用されていた。土坑の西半部には、壊された埴輪片が置かれていた。

出土した遺物は、円筒埴輪が 4 点である（第89・90図）。



第88図　759 土坑平面・断面図



第89図　759 土坑出土遺物実測図（1）

（第89図－１）は、口縁部を含む２段分を残す円筒埴輪で、口径31.4cmを測る。口縁部が短く外反し、端部が面をもつ。口縁部端部下約10cmの所に、断面M字形の突帯を付す。内外面にナデを施し、内面に指押さえを残す。（２）は当遺跡で最も残りが良い円筒埴輪で、５段分を残す。口径39.2cm・残存長53.6cmを測る。口縁部はわずかに外反し、上端に面をもつ。端部下約10cmの所に断面M字形の突帯を付し、以下12～14cm間隔で３帯の計４帯を付す。径約10cmの半円形の透かしを相対する２方に１対、上から３

段目と５段目に穿っている。調整は、内外面伴にナデを施し、内面に指押さえを残す。外面の口縁部に黒斑を残す。

（第90図－１）は、４段分を残す円筒埴輪で、口径33.6cmを測る。外反する口縁部の端部が内方へわずかに肥厚し、上端に面をもつ。口縁部下約10cmの所に断面M字形の突帯を付し、以下14cm間隔で計４帯付している。調整は内外面伴にナデを施す。透かしは、全周していないために不明である。（２）は、基底部を含む２段分を残すもので、底径26.8cmを測る。わずかに裾窄まりの底部は、下端部に面をもつ。下端部から約20cmの所に断面M字形の突帯を付し、その上部14cmの間隔で、もう１帯付している。調整は外面にナデで、基底部付近には板状のナデを施し、内面には指ナデおよび指押さえを施す。器壁の厚みは、基底部付近が約２cmと最も分厚くなる。

以上の円筒埴輪は、古墳１から出土したものと類似性が高く、古墳１に使用されていたものを転用し、土器棺として使用したと考えられる。

他に、遺物は出土していない。

３）井戸

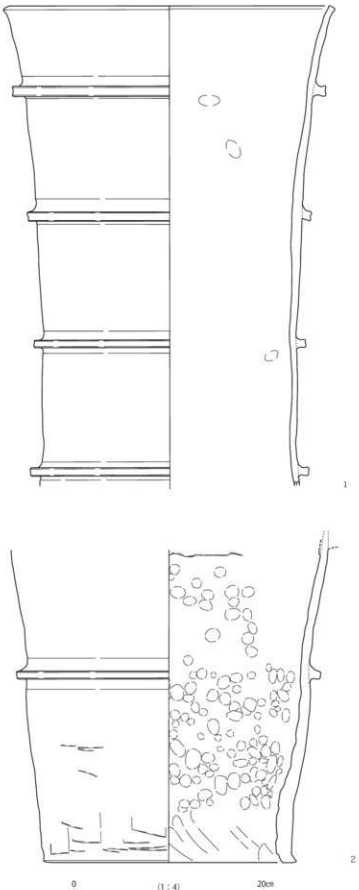
この調査区で、井戸は２基検出されている。

344井戸　（第70・91～94図、
図版29－３～５・69～71）

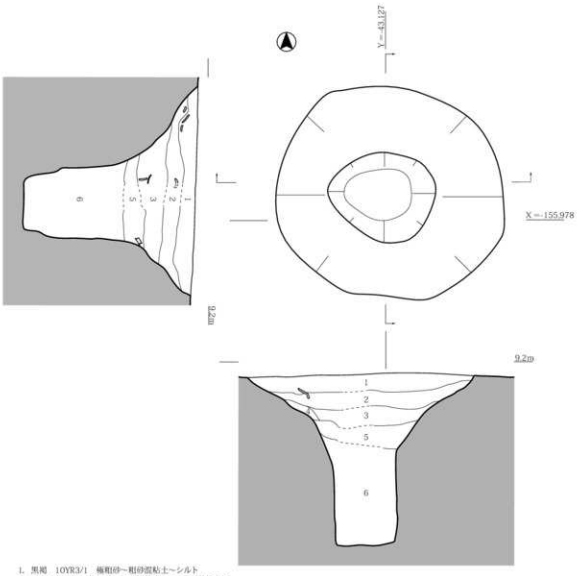
344井戸は、調査区東端部の掘立柱建物９の南西約１mのところに位置する。

平面形が不正円形で、断面形が上半が逆台形で、下半が長方形の素掘りの井戸である。径2.2～2.4m・深さ1.8mを測る。下半は径0.65mを測り、底部は平坦である。

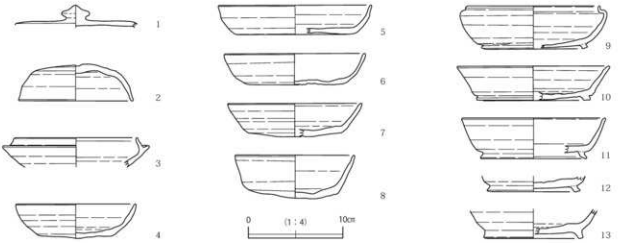
埋土は、６層に分層されるが、いずれ



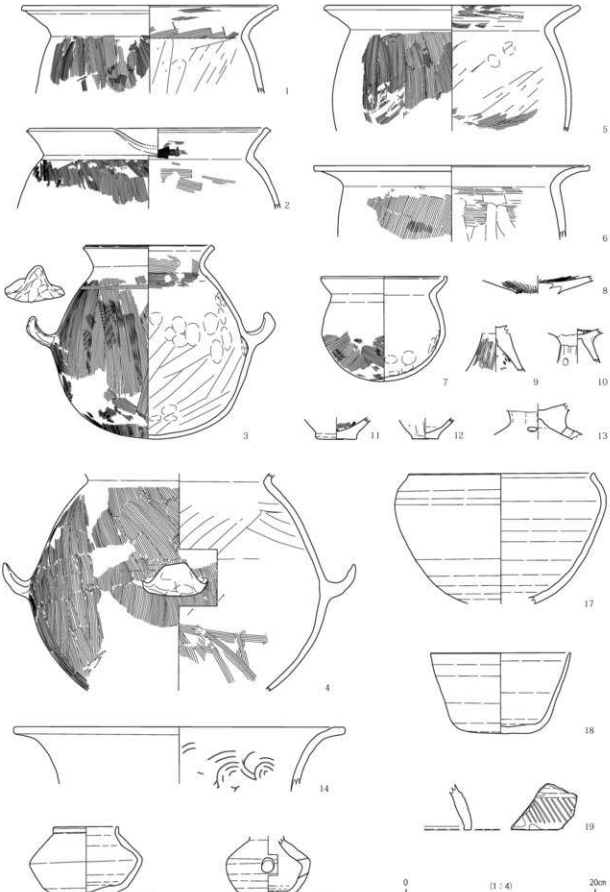
第90図　759土坑出土遺物実測図（２）



第91図　344 井戸平面・断面図



第92図　344 井戸出土遺物実測図（1）



第93図　344 井戸出土遺物実測図（2）

も、極粗砂～粗砂が混ざる黒色から黒褐色の粘土～シルト層である。

遺物は、主に、1～4層の上層に大量に含まれ、6層からは出土していない。

出土遺物には、須恵器と土師器がある。

須恵器には、蓋坏・甕・鉢・甕・短頸壷・器台などがある(第92・93－14～19)。

(第92図－1)は蓋のつまみ部を残すもので、宝珠つまみをもつものである。(2)は完形の坏蓋Hで、口径12.0cm・器高4.0cmを測る。

坏身には、坏H(3)、坏G(4～8)、坏B(10～13)がある。(4)は、口径12.4cm・器高3.8cm、(6)は、口径14.8cm・器高3.4cm、(8)は、口径12.4cm・器高4.7cm、(10)は、口径16.0cm・器高3.8cmをそれぞれ測る。

(14)は大型の甕の口縁部で、外反する口縁部の端部が面をもつ。外面に回転ナデ・内面に同心円紋当て具痕後ナデ消している。

(17)は口縁部が内傾する鉄鉢形のもので、底部を欠損する。(18)は口縁部がやや開く直口の小型のもので、口径14.4cm・器高8.6cmを測る。

(16)の甕は口頸部を欠損し、体部のみを残す。

短頸壷の(第92図－9)は、短く直立する口縁部に、扁平な体部に高台が付くもので、口径14.0cm・器高4.8cmを測る。(第93図－15)はほぼ完形で、口径6.8cm・器高8.2cmを測る小型のものである。

(19)の器台は、脚台端部の小破片を残し、脚台端部は下端面をもつ。外面に、箆描斜線紋を施す。

土師器には、蓋・皿・坏・甕・鉢・鍋がある(第93－1～7・94図)。

他に、弥生土器(第93図－8～13)がある。

(第94図－1)は約1/2を残し、口径17.6cm・器高5.5cmを測る。口縁部はわずかに開き端部がわずかに肥厚する。天井部に径2.8cm・厚さ0.6cmのつまみを付ける。外面に丁寧なヘラミガキ、内面の口縁部に放射状暗紋・天井部に螺旋状暗紋を施す。短頸壷の蓋と思われる。

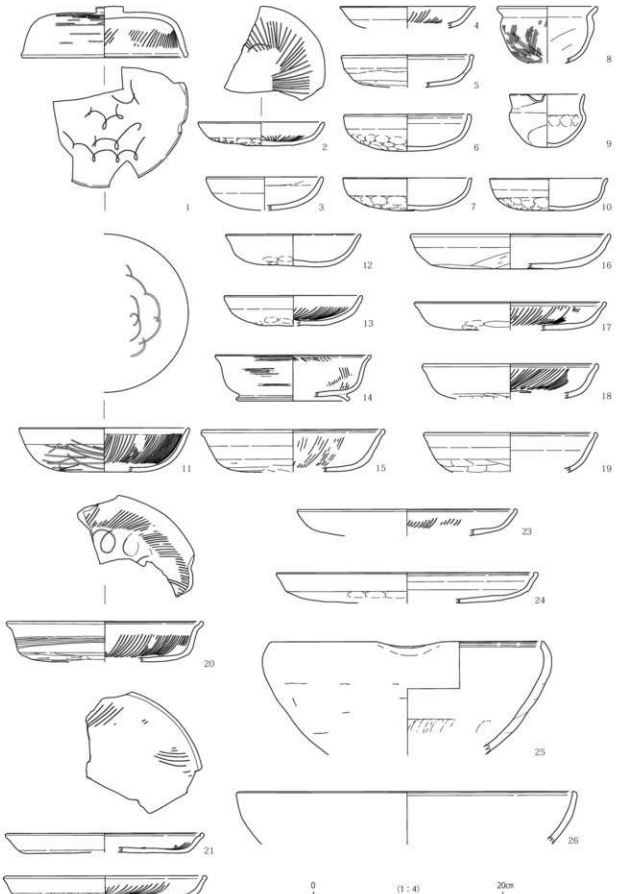
皿には、口径が13～14cmの(2・4)、20～21cmの(17・21・22)、23cmの(23)、27.6cmの(24)がある。(2・4)は、口縁部端部が丸みをもち、内面に放射状暗紋を施す。(17・21～23・24)は、口縁部端部が内方へ肥厚し、沈線を1条巡らすもので、(24)が内面にヨコナデを施す以外は、内面に放射状暗紋を施す。

坏には、口径が15cm以下の(3・5～7・10・12・13)、15cm～20cmの(11・15・16・18・19)、20cm以上の(20)と、高台が付く(14)がある。皿と同様に、口縁部端部が丸く終わるもの(7・10～13)と、口縁部端部が内方へ肥厚し沈線を1条巡らすもの(前述以外のもの)がある。後者の中には、(5・6)のように退化しかけているものもある。

内面に放射状暗紋を施すものと、ナデを施すものがある。(15・16・20)は、底部外面に面取り状のヘラケズリを施し、(18・19)は、面取り状のナデ、他は、指押さえをするものが多い。

(14)の高台が付くものは、表面が摩滅のため図示しえなかったが、外面に丁寧なヘラミガキ・内面に2段放射状暗紋を施す。

甕には、小型の(第93図－7、第94図－8・9)、大型の(第93図－1・5・6)がある。(9)は、口径7.9cm・器高5.8cmを測り、口縁部に打ち欠きを施す。(8)は底部を欠き、口径8.4cmを測る。前者は体部外面にナデ、後者はハケメを施す。(第93図－7)は約1/2を残存し、口径13.0cm・器高11.2cmを測る。短く外反する口縁部の端部がわずかにつまみ上げられる。体部外面ハケメ後上半にナデ・内面に



第94図　344 井戸出土遺物実測図（3）

ナデを施し、下半に指押さえを残す。外面に煤が付着する。大型の(同図－１・２・５・６)は、口径を25～28cmを測り、口縁部端部をわずかにつまみ上げ面をもつものである。体部外面にハケメ・内面にハケメおよびヘラケズリを施す。(２)は片口をもつ。いずれも、外面に煤が付着する。

鉢には、大型の(第93図－25・26)がある。前者は、内傾する口縁部の端部が凹面をもつ。片口のもので、内外面伴にナデを施し、外面に多量の煤が付着する。後者は、直口の口縁部端部がわずかに内方へ肥厚し、上端面をもつ。内外面伴にナデを施す。

鍋には中型の(第93図－３)と大型の(同図－４)がある。前者は復原完形で、口径13.2cm・器高20.4cmを測る。口縁端部がわずかに上下に拡張し凹面をもち、下膨れの体部に丸底である。器高の約１／２位の相対する２方に把手を付す。外面にハケメ・内面に指ナデを施し、指押さえを残す。外面に、肩部を除き煤が付着する。(４)は、口縁部端部および底部を欠損するもので体部は丸みをもつ。相対する２方に把手を付す。外面にハケメ・内面に指ナデ後、下半にハケメを施す。

以上の遺物は、須恵器坏Ｈ・Ａ・Ｂがあり、土師器の皿・坏に１段放射状暗紋が多く、１点(14)のみ２段放射状暗紋があることなどから、８世紀代前半に属すと考えられる。

1135井戸　(第70・95・96図、図版29－６～８・71・72)

1135井戸は、調査区中央部に位置し、掘立柱建物15の南東約１m、掘立柱建物４の北側約２mに位置する。

径約１mの不正円形で、深さ0.7 mを測る。深さ0.4 mのところで、段掘りになり径0.55mとなる。底部に径43.2cm・高さ32cmの円筒埴輪が設置されていた。

埋土は、10層に区分され、７～10層が井筒内部の堆積層で、５・６層が掘り方埋土である。１～４層は埋め戻された土層である。基本的に黒色～黒褐色の粘土～シルトである。

遺物は、主に井筒内の８層から出土している(第96図)。

出土した遺物には、須恵器蓋坏・甕、土師器坏・甕・鍋などがある。

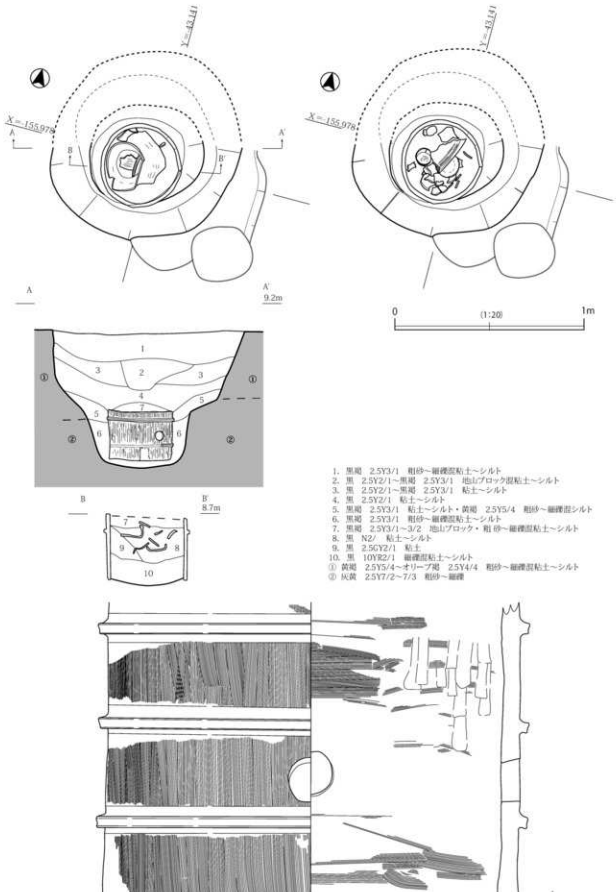
他に、弥生時代後期～古墳時代前期初頭に属するものがある。

須恵器の蓋Ｈ(９)はほぼ完形で、口径 8.0 cm・器高 4.0 cmを測る。天井部に箆記号を施す。(10)の坏Ｇは完形で、口径 8.0 cm・器高 3.6 cmを測る。(17)の甕は口頸部破片で、口径24.8cmを測る大型のものである。外反する口縁部の端部は、内方へ肥厚し、上端面をもつ。体部外面に叩き目後カキメを施し、内面に同心円絞当て具痕を残す。

(12)の坏はほぼ完形で、口径12.8cm・器高 4.0 cmを測る。外面の調整は表面摩滅のため不明で、内面にはわずかに放射状暗紋を残す。

(11)は小型の甕で、約２／３を残す。口径12.2cm・器高10.0cmを測る。上方に短く伸びる口縁部の上端が面をもち、やや扁平な体部に丸底のものである。体部外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。外面に煤が付着する。(13)は約４／５を残し、口径14.0cm・器高16.4cmを測る中型の甕で、短く外反する口縁部の端部が面をもち、球形の体部に丸底である。体部外面下半にハケメを施し、上半に指押さえを残す。内面ナデを施し、底部に指押さえを残す。外面に煤が付着する。(16)は長胴形の甕で、底部を欠損する。口径26.8cmを測る。口縁部の端部が面をもつ。体部外面にハケメ・内面口頸部にハケメ、体部にヘラケズリ後部分的にハケメを施す。体部内面上半に指押さえを残す。外面に煤が付着する。

(14・15)は、鍋の把手部分のみが１個ずつ残存し、大きさがわずかに違うことから、別個体と判断した。



第95図　1135井戸平面・断面および出土遺物実測図

第96図　1135井戸出土遺物実測図

出土遺物には、井筒に転用された円筒埴輪（第95図－１）がある。径43.2cmを測る大型のもので、基底部を含む４段分を残存している。器壁が２cmと分厚く、基底部から約10cmの所に断面M字形の突帯を付し、以上に、約10cm間隔で突帯を付す。外面にタテハケ・内面にナデ後部分的にハケメを施す。

２段目の相対する２方に径約５cmの円形の透かしを穿つ。形態から『日置荘型埴輪』である。

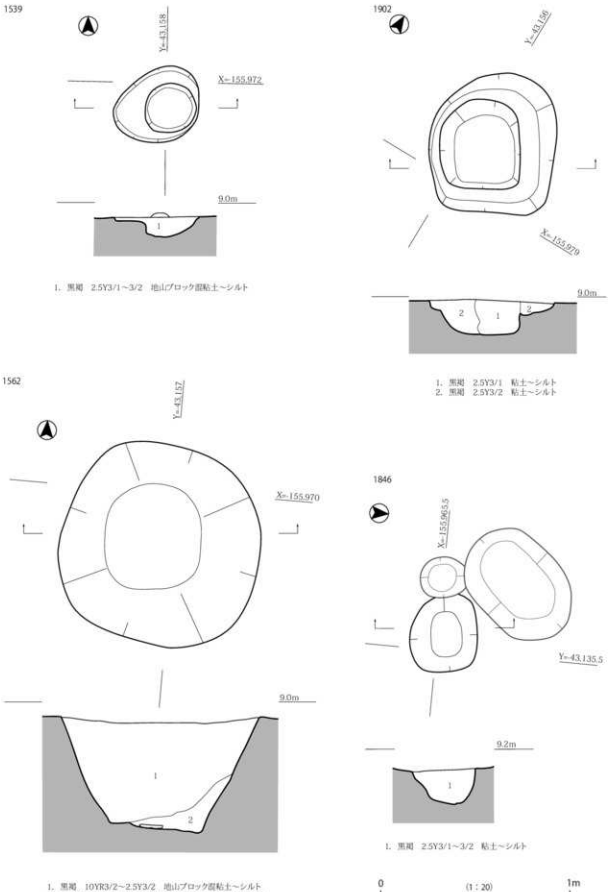
1539土坑　（第70・97・98図、図版30－２・72）

1539土坑は、調査区西半部のやや北よりの掘立柱建物14の東側で検出された土坑である。平面が不正楕円形で、径0.4×0.5m・深さ0.1ｍを測る。

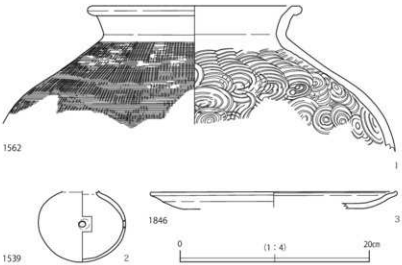
埋土は、地山ブロックが混じる黒褐色の粘土～シルト１層である。

遺物は、土師器甕が１点のみ出土した。

（２）は口頸部を欠損するもので、やや扁平な体部に丸底のもので、体部中央に0.5cmの円形の透かしを



第97図　1539・1562・1846・1902土坑平面・断面図



第98図　1539・1562・1846土坑出土遺物実測図

1箇所穿つ。表面摩滅のため、内外面伴に調整不明である。

1562土坑　（第70・97・98図、図版30－1）

1562土坑は、調査区西半部の北より、掘立柱建物13の南東約2mで検出された。径約1.1m・深さ0.6mを測る。平面形が不正円形で、断面形が逆台形である。

埋土は2層で、下層の黒色から黒褐色粘土～シルトが東肩から流れ込むように堆積しており、その上層に地山ブロックが混じる黒褐色の粘土～シルトが堆積していた。

遺物は、下層から須恵器甕が1点のみ出土した。

（第98図－1）は、須恵器の大型甕で、口頸部から体部上端を残存する。短く外半する口縁部の端部がわずかに外方へ肥厚し、上端に凹面をもつ。体部外面に叩き目後回転カキメを施し、内面に同心円紋当て具痕を残す。

1846土坑　（第70・97・98図）

1846土坑は、調査区東半部北側の掘立柱建物10・11の間で検出された。径0.4×0.3m・深さ0.2mを測る。

埋土は、黒褐色の粘土～シルト1層である。

出土遺物は、土師器皿か高坏の坏部が1点のみである。（第98図－3）は、浅い皿状の坏部に外方へわずかに伸びる口縁部の端部がわずかにつまみ上げられ、面をもつ。表面摩滅のため、調整不明である。

1902土坑　（第70・97図、図版30－4）

1902土坑は、調査区西半部の掘立柱建物14の東側約5mで検出された。不正形なもので、0.8×0.7m・深さ0.2mを測る。

埋土は2層で、黒褐色の粘土～シルトである。

遺物は出土していない。

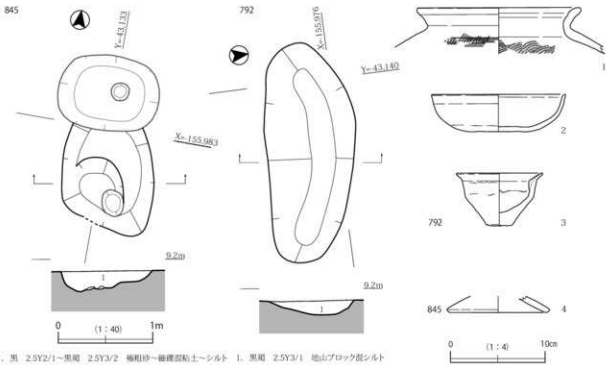
792土坑　（第70・99図、図版30－5・72）

792土坑は、調査区東半部の掘立柱建物15の東側約2mに位置し、345溝を切っている。

東西にやや長い楕円形の土坑で、長径2.4m・短径0.8m・深さ0.15mを測る。

埋土は、地山ブロックが混じる黒褐色シルトが1層である。

出土遺物は、須恵器甕、土師器坏、弥生時代後期鉢の3点である。（第99図－1）は、口頸部破片で、短く外反する口頸部の端部が外方へわずかに肥厚する。体部外面に叩き目後カキメを施し、内面に同心円紋当て具痕を残す。（2）は約1／3を残し、口径14.0㎝・器高4.2㎝を測る。表面摩滅のため、調整は不明である。（3）は小型のもので、口径8.7㎝・器高3.8㎝を測る。この遺物は、下層遺構の混入と考えられる。



第99図　792・845土坑平面・断面図および出土遺物実測図

845 土坑　（第70・99図、図版30－６）

845 土坑は、調査区東半部の南側で検出され、掘立柱建物２の北東隅の 816 柱穴に切られる。

平面形は不正形で、検出長 1.2 m・幅 1.0 m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は、極粗砂～細礫が混じる黒色から黒褐色の粘土～シルトが１層である。

出土遺物は、土師器・須恵器の小片がわずかにあり、図化できたものは、（第99図－４）が１点のみであった。（４）は、土師器高坏の脚台部破片である。

５）溝

溝は、調査区を縦断するものと横断するものがある。

335 溝　（第70・100図、図版30－７）

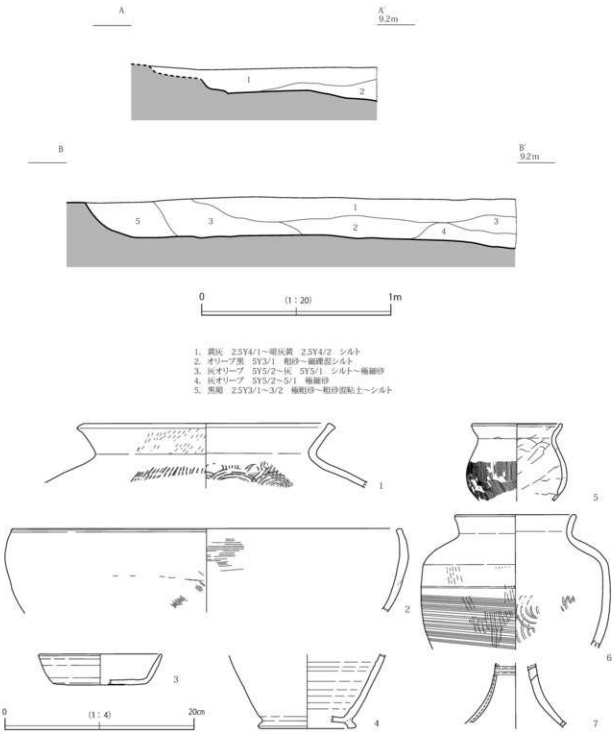
335 溝は、調査区の東端部で南北方向に検出され、その東肩部は調査区外へ伸びる。検出長約30m・検出幅1.3～3.3m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は、最大６層に区分され、南側では２層であった。数度の掘り直しがあったと考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器である（第 100 図）。

須恵器には、坏・甕・壺・高坏などがある。（３）は坏Ａで、口径12.4㎝・器高 4.0 ㎝を測る。（１）は大型の甕で、口径26.0㎝を測る。短く外反する口頸部の端部がわずかにつまみあげられ面をもつ。体部外面に叩き目を施し、内面に同心円紋当て具痕を残す。（４・６）は壺で、前者は高台部を残すもので、後者は短頸壺で、下半部を欠損する。後者は、叩き目後上端部がナデ消し・下半がカキメを施し、内面に同心円紋当て具痕後ナデ消している。（７）は、長脚２段透かしの脚柱部破片で、透かし間に凹線紋２条を施す。

土師器には、甕と鉢がある。（５）は小型のもので、底部を欠損する。口径 9.2 ㎝を測り、短く外反する口縁部端部がわずかに肥厚する。体部外面にハケメ・内面にナデを施す。（２）は大型鉢の口縁部破片で、口径40㎝を測る。内傾する口縁部の端部がわずかに肥厚し、上端面をもつ。内外面伴に表面摩滅著



第100図　335 溝断面および出土遺物実測図

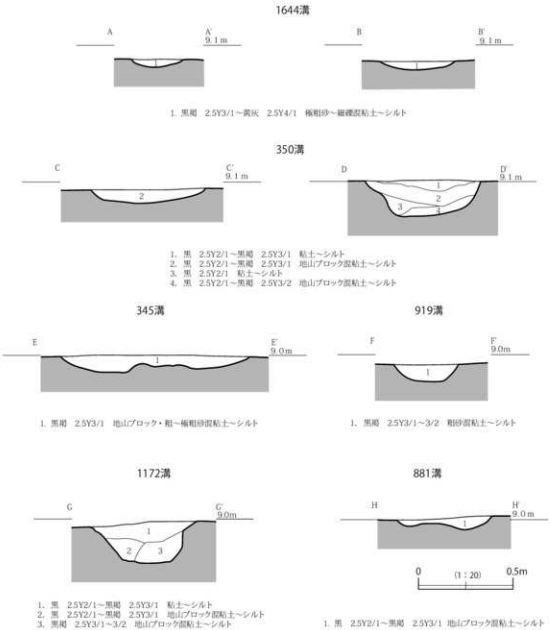
しく、わずかにハケメが残る。外面に粘土紐の継ぎ目を残す。

1644溝　（第70・101図）

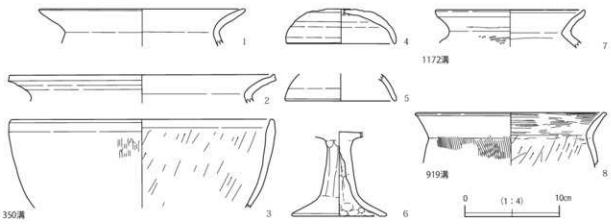
1644溝は、調査区東半部の中央付近を東西に流れる溝で、途中で、数箇所途切れているが、本来は、同一の溝と思われる。検出長26mで、さらに西側の溝を加えるならば、総延長37.5mになる。幅0.25～0.4 m・深さ 0.1 m以下である。

埋土は、極粗砂～細礫が混じる黒褐色の粘土～シルトが１層である。

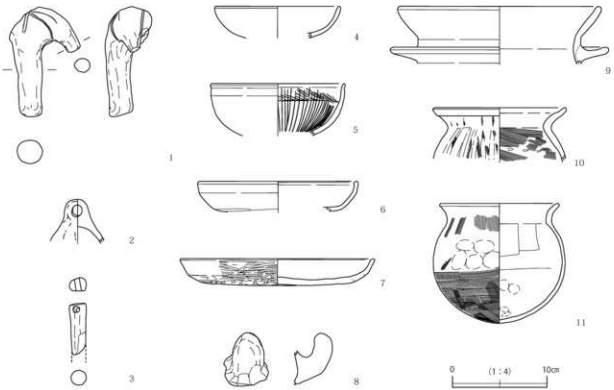
遺物は、土師器・須恵器の小片が出土しているが、図化しえなかった。



第101図　第２調査区　溝断面図



第102図　各溝出土遺物実測図



第103図　第２調査区　包含層出土遺物実測図

350溝　（第70・101・102図）

350溝は、調査区東半部の中央部で、1644溝の南側約４mのところで、ほぼ平行して流れる東西方向の溝である。検出長19.5mを測り、東端部は方形の土坑状に拡がり、西端部は792土坑に切られる。幅0.6 m前後・深さ0.1～0.2mを測る。

埋土は、中央部では地山ブロックが混じる黒色の粘土～シルト１層で、西端部分では４層に細分される。２・４層に地山ブロックが混じることから、掘り直された可能性がある。

出土遺物は、須恵器蓋坏、土師器甕・鉢・高坏などがある（第102図）。

（４・５）は、いずれも坏Hの蓋で、前者は口径11.6cm・器高3.8 cmを測る。（１・２）は、土師器の甕の口頸部破片で、後者は口縁端部がわずかにつまみあげられ面をもつ。（３）は大型の鉢で口径27.6cmを測る。外面にヘラミガキ・内面にヘラケズリを施す。（６）は高坏の脚部片で、脚柱部外面は面取り状のナデを施し、内面に指押さえを残す。

345溝・919溝　（第70・101・102図、図版30－８）

345溝・919溝は、調査区東半部の南側で検出された東西方向の溝である。先述の350溝の南側約２～3.5 mに位置する。途中、掘立柱建物４・５付近で途絶え、さらに伸びる。総延長31.7mを測る。幅0.3～1.0m・深さ0.1 mを測る。

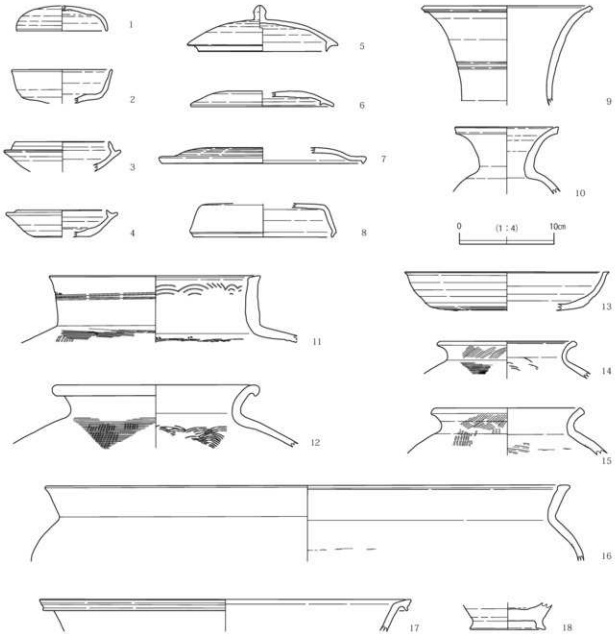
埋土は、黒褐色の粗砂が混じる粘土～シルト１層で、東側では地山ブロックが混じる。

出土遺物は、土師器の甕が１点図示できた（第102図－８）。甕は口頸部破片で、短く外反する口縁部の端部がわずかに外方へ肥厚し、上端面をもつ。体部外面にハケメ・内面にヘラケズリを施す。

掘立柱建物５に切られている。

1172溝　（第70・101・102図、図版31－１）

1172溝は、調査区中央部付近で検出された北西から南東方向の溝で、両端を他の遺構に切られる。検



第104図　第２調査区　包含層出土遺物実測図

出長42.5m・幅0.55m・深さ 0.2 mを測る。

埋土は３層で、黒色～黒褐色の粘土～シルトが主体で、２・３層には地山ブロックが混じる。

遺物は、図化できたものに、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の甕(第 102 図－７)があるが、他に、土師器・須恵器の小片が出土している。

881 溝　(第70・101 図)

881 溝は、調査区中央部の南端で検出された「コ」の字形の溝で、南側は調査区外へ伸びる。掘立柱建物２に切られる。検出長 6.5 m・幅 0.5 m・深さ0.05mを測る。

埋土は、地山ブロックが混じる黒色から黒褐色の粘土～シルト１層である。

遺物は、出土していない。

類似の1567溝が、北端部で検出されている。

包含層からは、(第103・104図、図版72)に示した遺物が出土した。

3．第３調査区の遺構と遺物

第３調査区の古代の遺構は、東端部に集中して検出され、西半部では、希薄であった。

検出された遺構は、掘立柱建物・ピット・土坑・溝などである。

１）掘立柱建物

当調査区で検出された掘立柱建物は、１棟である。

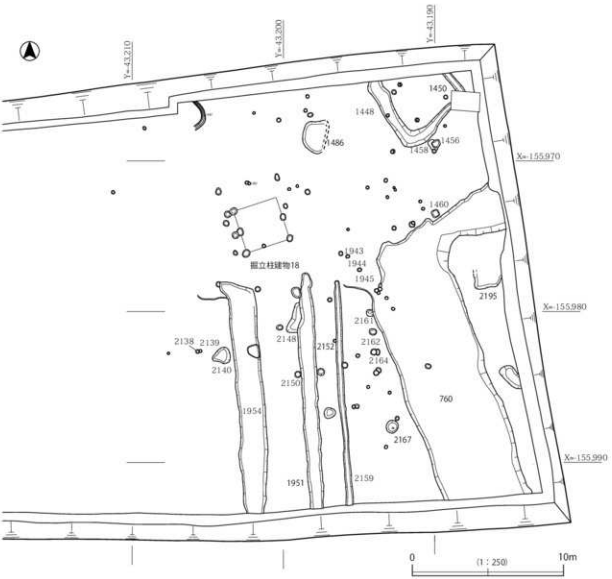
掘立柱建物18（第105・106図、図版36－１・３～７）

掘立柱建物18は、調査区東側のやや北よりで検出された、１辺2.95mの南北２間・東西１間の正方形の建物である。N－19°－Wを測る。柱穴の平面形は、不正円形で、断面形はU字形のものと逆台形のものがある。径3.5～5.5m・深さ0.3～0.4mである。

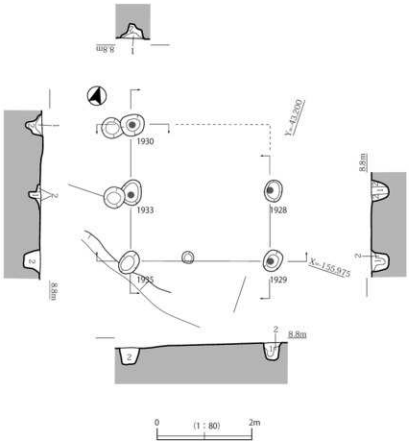
埋土は、地山ブロックが混じる黒褐色の粘土～シルトが主体である。

柱痕は、1928・1929・1933柱穴で検出され、1933柱穴では柱の沈み込みの痕跡が確認された。それらから、南北辺の中間寸法は、1.45～1.5mとなる。

遺物は出土していない。



第105図　第３調査区東端部　古代平面図



1. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　粘土～シルト
2. 黒褐　2.5Y3/2　地山ブロック混粘土～シルト

第106図　掘立柱建物18平面・断面図

北東隅の柱穴は、確認トレンチ部分に当たり、検出されていない。1913溝を切っている。

２）土坑

土坑は、東端部で数基検出されているが、遺物が出土し、時期が確定できるものは少ない。

1486土坑　（第105・107図、図版73）

1486土坑は、掘立柱建物18の約５m北東に位置し、東側を後世の遺構に切られている。長径 2.1 m・検出幅 1.3 m・深さ 0.1 mを測る。

埋土は、粗砂混じりの黒褐色から暗灰黄色の粘土～シルトが１層である。

遺物は、須恵器が２点出土した。（１）は口縁部を欠損する甕で、細い筒状の頸部に、やや扁平な体部に丸底のものである。（２）は大型の直口の壷である。やや外方へ開く口縁部の端部が、わずかに外方へつまみ出され、上端面をもつ。口頸部の境目に、凹線紋２条を施す。体部内面に同心円紋当て具痕を残す。

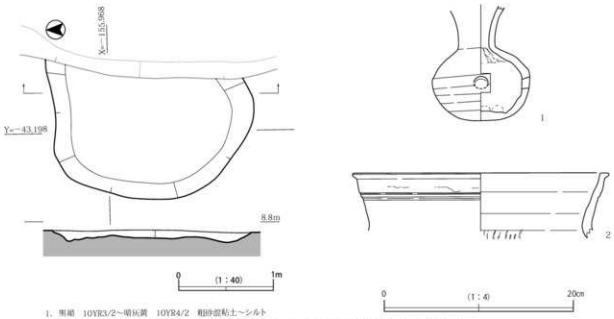
2167土坑　（第105・108図、図版35－６・７・73）

2167土坑は、南側で検出された土坑で、平面形が不正円形である。径 0.8 m・深さ 0.1 mを測る。

埋土は、２層で、下層に地山ブロックが混じる黒褐色から黄灰色の粘土～シルト、上層に黒色の粘土～シルトが堆積していた。

遺物は、上層から出土している。

（１）は須恵器の坏蓋で、ほぼ完形である。口径10.8㎝・器高 3.8 ㎝を測る。口縁部はわずかに上方へ



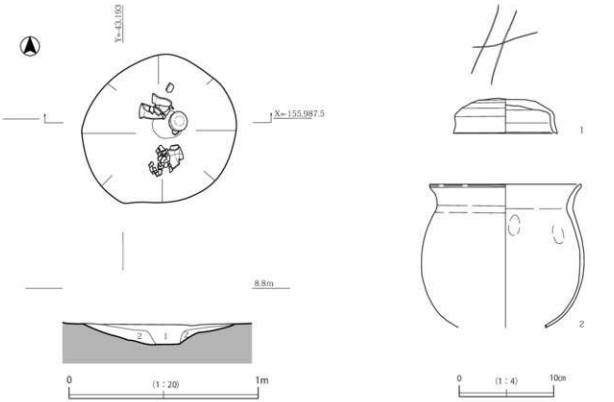
1．黒褐　10YR3/2～明灰黄　10YR4/2　粗砂混粘土～シルト

第107図　1486土坑平面・断面および出土遺物実測図

広がり、端部は凹面をもつ。天井部との境目は、丸みを帯びる。天井部外面に、箆記号を施す。（２）は底部を欠損する土師器の甕で、口径16.0cmを測る。体部内外面にナデを施す。外面に煤が付着する。

３）溝

溝は、南北に伸びるものが数条平行して走るものと、第２調査区で検出された1567溝のような周溝状のものがある。この時期、古墳１の周溝は、760溝として、わずかに窪み、残存していたようである。



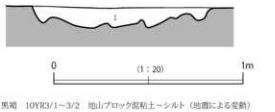
1．黒　2.5Y2/1～3/2　粘土～シルト
2．黒褐　2.5Y3/2～黄灰　2.5Y4/1　地山ブロック混粘土～シルト

第108図　2167土坑平面・断面および出土遺物実測図

1951溝　(第105・109図)

1951溝は、南北方向の溝で、南端部は調査区外へ伸びる。検出長15.8m・幅0.9 m・深さ0.1 mを測る。

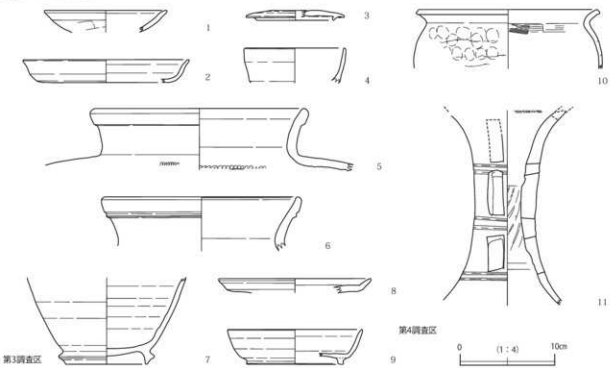
埋土は、地山ブロックが混じる黒褐色の粘土～シルトが1層であったが、底面の凸凹が激しく、地山の黄褐色土が埋土と混在した状態であったことから、地震変動によると考えられ、本来の溝の痕跡を残すものと思われる。



第109図　1951溝断面図

この調査区の包含層からは、(第110図－1～9)に図示する遺物が、わずかに出土した。

(1・2)は土師器坏の口縁部破片である。須恵器の(3)はつまみ部を欠損する壺蓋、(4・9)は高台をもつ坏身、(5・6)は大型甕の口頸部破片、(7)は壺の体部下半を残し、(8)は土師器皿を模した須恵器の皿である。



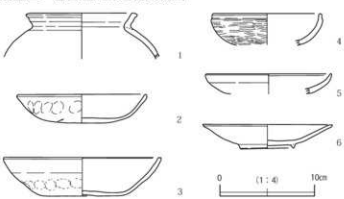
第110図　第3・4調査区　包含層出土遺物実測図

4．第4調査区の遺構と遺物

第4調査区のこの時期の遺構は、皆無であるが、遺物がわずかに包含層から出土している(第110図－10・11)。

(10)は土師器甕の上半部を残すもので、短く外反する口縁部の端部が面をもつ。体部外面に指押さえを残し・内面の上端にハケメ・以下にナデデを施す。

(11)は須恵器の筒型器台の脚部で、上端



第111図　第5調査区　包含層出土遺物実測図

内面に同心円宛具痕が残ることから、坏部との接合痕であろう。脚柱部に長方形の透かしを三方に３段穿ち、その間および下部に凹線紋を２条ずつ施す。内外面伴に表面摩滅が著しい。

５．第５調査区の遺構と遺物

第５調査区のこの時期の遺構は、第４調査区同様に皆無で、包含層からわずかな遺物が出土している（第111図）。

（１～６）は土師器である。（１）は上端部を残す短頸壷で、短く斜め上方へ開く口頸部の上端部が面をもつ。体部内外面にナデを施す。（２・３）は坏で、口径13.6・16.4㎝、器高 3.1 ・ 4.2 ㎝を測る。両者伴に外面に指押さえを残し、内面にナデを施す。（４）は底部を欠損する坏で、口縁部端部に強いヨコナデを施す。外面に丁寧なヘラミガキ・内面にナデを施す。（６）のは皿で約１／３を残し、口径13.6㎝・器高 2.6 ㎝を測る。内外面にナデを施す。内面の一部に、煤が付着する。

これらの遺物は、９世紀代のものである。

６．第６調査区の遺構と遺物

第６調査区の遺構には、東端部と西端部に検出され、中心部では希薄である。地山面直上の遺構面には、先述したように、古墳時代後期の遺構が同一面で検出されている。さらに、遺構から出土する遺物が少なく、遺構の時期を確定できる要素に欠けるが、ここでは、古代に属すと考えられるもののみ、記述していく。

ピット・土坑・溝などが検出されている。この調査区のみ、古代の遺構面が３面検出されている。

１）溝

溝には、東側の北西から南東方向の大溝と、西側の南北方向の小溝がある。

2338溝　（第112・113図、図版47－１・２）

2338溝は、調査区の東半部で検出された北西から南東方向の溝で、両端は調査区外へ伸びる。検出長27.5m・幅3.6～4.0m・深さ 0.4 mを測る。

埋土は、10層に区分されるが、部分的に違っており、大きくは上下２層に分かれる。褐灰色のシルト～微砂が主体である。

遺物は、須恵器坏身が１点のみ図化でき、他は土師器の小片があった。

2009溝　（第112・114図）

2009溝は、調査区の西半部で検出されたやや西に振る南北方向の溝で、北端部が調査区外へ伸びる。検出長23.3m・幅 1.7 m・深さ0.05mを測る。

埋土は、粗砂が混じる褐灰色の粘土～シルトである。

遺物は、出土していない。

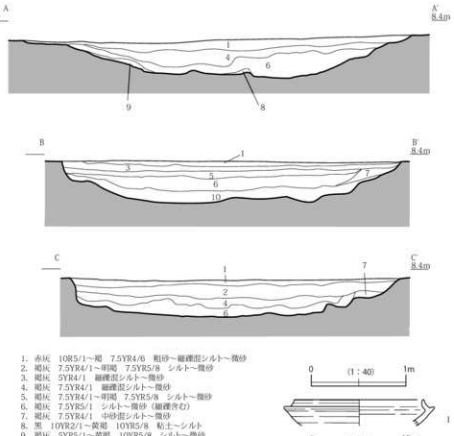
２）ピット

調査区の東端部で数基のピットが検出されているが、遺物が出土せず、時期が不明である。北西部で１基のみ遺物が出土した。

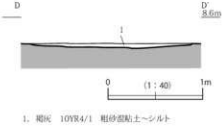
2004ピット　（第112・115図、図版47－３・73）

2004ピットは、調査区北西部で検出された、不正円形の浅いピットである。径約 0.9 m・深さ 0.1 m を測る。

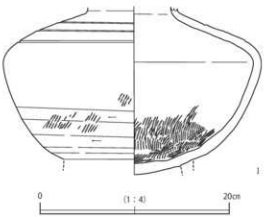
X=155270
X=155280
X=155290
Y=43470
Y=43420
Y=43430
X=155280
Y=43440
Y=43450
Y=43460
Y=43470
2206ピット
2209ピット
2210ピット
2211ピット
2212ピット
2213ピット
2214ピット
2215ピット
2216ピット
2217ピット
2218ピット
2219ピット
2220ピット
2221ピット
2222ピット
2223ピット
2224ピット
2225ピット
2226ピット
2227ピット
2228ピット
2229ピット
2230ピット
2231ピット
2232ピット
2233ピット
2234ピット
2235ピット
2236ピット
2237溝
2238溝
2239溝
2240溝
2241溝
2242溝
2243溝
2244溝
2245溝
2246溝
2247溝
2248溝
2249溝
2250溝
2251溝
2252溝
2253溝
2254溝
2255溝
2256溝
2257溝
2258溝
2259溝
2260溝
2261溝
2262溝
2263溝
2264溝
2265溝
2266溝
2267溝
2268溝
2269溝
2270溝
2271溝
2272溝
2273溝
2274溝
2275溝
2276溝



第113図　2338溝断面図



第114図　2009溝断面図



第115図　2004ピット出土遺物実測図

埋土は、２層あり、褐灰色の粘土～シルトが主体である。

遺物は、須恵器の壺が１点出土した。この壺は、体部のみを残存している。肩部が張り、丸底の底部で、外面に脚部の接合痕を残す。調整は、外面に叩き目後ナデ消しを施し、下半部に回転ヘラケズリを施す。内面の底部に同心円紋当て具痕を残す。肩部に疑凹線紋３条を施す。この土器のほとんどの部分は、包含層から出土している。

7．古代水田

ここでは、調査区毎ではなく、調査区全体を通して、俯瞰していく。

古代水田（第116図）

今回の調査地部分では、現地表面において、条里地割が良好には遺存しない。しかし、周辺地域から敷衍して観ると、東西方向の坪境が第5調査区(12トレンチ)南端付近に（『松原市史』第1巻　足利健亮氏復原図のＹ4ライン）、南北方向の坪境が第2調査区中央（同Ｂ0ライン）、第3調査区西端（同Ａ5ライン）、第5調査区西端（同Ａ4ライン）に、それぞれ存在する可能性が推測された。

調査の結果、第2調査区を除く各調査区の第Ⅱ－1面で条里畦畔が検出された。

東西方向の坪境については、第5調査区で幅1.0～1.5m、高さ最大0.3m程の2124坪境畦畔が検出されている。

なお、その西側は、後世の坪境溝と推測される2201溝により切られて残存しない。畦畔頂部の座標値は、Ｘ＝－156,009である。

一方、南北方向の坪境については、第3調査区西端で10坪境畦畔が検出された。畦畔東半部が検出されたのみだが、幅2m以上、高さ0.1m程度である。畦畔頂部の座標値は、Ｙ＝－43,260である。

さらに、これ以外に検出が予想された第2調査区の中央部では、1町109mと推測した場合に、Ｙ＝－43,151付近での検出が予想されたが、検出には至らなかった。

ただし、中世面では当該部分で坪境に伴うと推測される**737溝**が検出されている。

また、第5調査区西端では、Ｙ＝－43,369付近での検出が予想された。この推測では、微かながら第5調査区内ではあるのだが検出されず、若干西側にずれる可能性がある。全ての坪が可視的な遺構により区分されているのではないが、今回の調査では4つの坪が確認できたことになる。

以下では、仮に東から坪Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄと称しておく。

坪Ａでは、第1調査区で南北方向の**2331畦畔**と**2332・2333溝**、東西方向の**2335畦畔**が検出された。南北方向畦畔と溝の位置は、坪境からの約11m間隔と不一致だが、これには第1・2調査区間の阿麻美許曽神社参道（下高野街道）の影響が推測される。

また、**2335畦畔**は、東西方向坪境から北約42mの位置にあたり、現状では中途半端な位置にあることから、畦畔をこの位置に築いた理由が不明である。

ただし、下高野街道を境に、東へ地形が下がり、理念どおりに長地型地割を施工することが不可能であったためとも推測される。

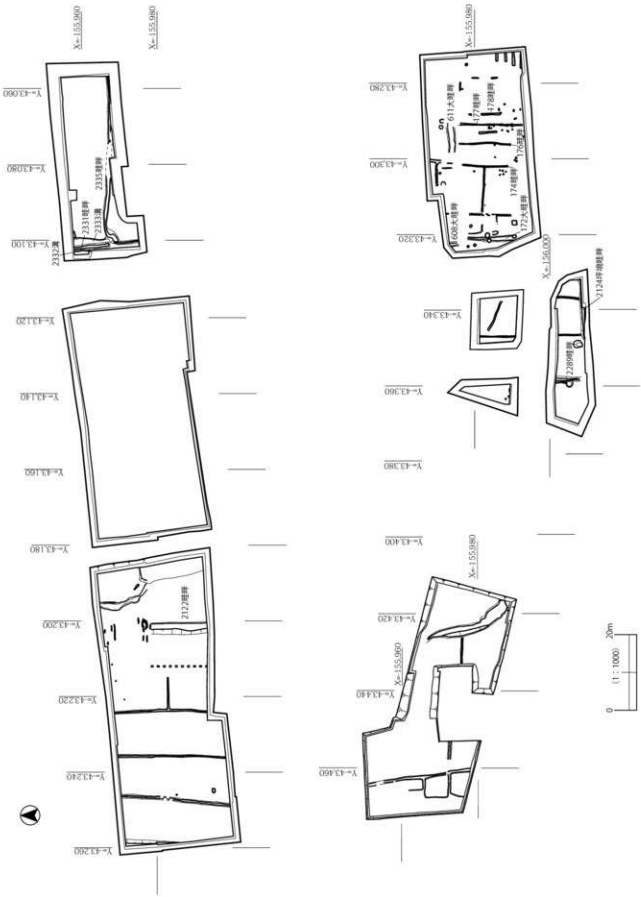
さらに、少々計算上の数値からはずれるが、東西方向坪境より長地型地割で4段(24歩)分とする見方の可能性もありうる。

坪Ｂでは、第3調査区で約10～11m間隔を基本とし、南北方向の畦畔が検出された。坪内は南北方向の長地型地割であったと推測できる。

なお、**2122畦畔**は、他よりも幅広のものだが、坪内の半町分である点や地形が東へ向かい高まる点がその理由であろう。

また、坪Ｂは10坪境畦畔部分がやや高く、**2122畦畔**より東側へは高まっていく。このことから、10坪境畦畔西側に、水路の存在が推測されるが、坪東側は地形的に高いにもかかわらず、坪Ａ・Ｂ間に溝が見られない。このことからは、坪Ｂ東半以東は水田として使用されていなかった可能性がある。

坪Ｃでは、坪Ｂ同様第4・5調査区でも、南北方向の長地型地割に基づき畦畔が築かれていたようで



第116図　古代水田平面図

ある。

しかし、第４調査区、176・178畦畔間には177畦畔が、174畦畔の西約６ｍには172畦畔が築かれている。

また、172畦畔北延長は、攪乱を受け詳細不明だが、608大畦畔と直線上に位置せず、両者がクランク状に接続していた可能性や水口を有していた可能性が考えられる。

南北方向の遺構だけではなく、東西方向でも611高まりが見られ、東西方向坪境から北約35ｍにあたる。このような変則的な形状・位置の畦畔構築は、地形の制約によるところが大きいと推測される。

ただし、少々計算上の数値からはずれるが、東西方向坪境より長地型地割で３段(18歩)分とする可能性もありうる。

なお、坪Ｃは10坪境畦畔から西へ下がる地形である。同坪の第５調査区では、11ｍ前後の間隔で畦畔が確認されたが、2289畦畔は大畦畔状であった。先述したことと同様な理由によるものであろう。

さらに、調査区外のため不確定だが、地形を考慮すれば、第５・６調査区間（坪Ｃ・Ｄ間）には、この地点における排水路の存在が推測される。

坪Ｄでは、第６調査区でも条里畦畔が検出されたが、整然とした条里景観ではない。坪Ｄの東半は、調査区外のため不明だが、その西端に当たる第６調査区東側は、地形がやや高く、さらに同調査区西端も再度高まっている。その間の谷状部分を水田として使用したと推測される。南北方向の畦畔は、いずれも、第５調査区西端、すなわち坪Ｃ・Ｄ間の坪境からの距離が約11ｍの倍数位置ではない。

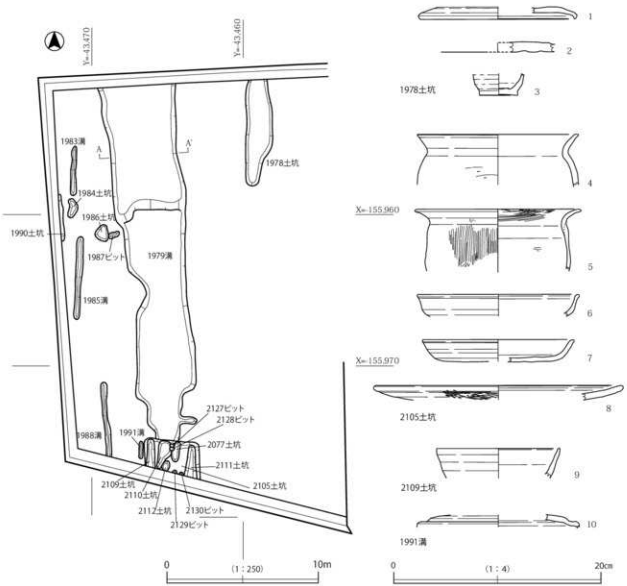
これら古代水田の時期は、10世紀頃と考えられる。

当遺跡における過去の調査では、当センターが平成13年度に調査を行った（その７）調査区でも同様な時期の水田が検出されているが、整然とした条里景観ではない。今回の調査でも、必ずしも広域的に地形を克服した条里水田が広がる様相ではない。このことは、当該期の当遺跡周辺の条里開発の限界を示していると推測される。

なお、10坪境畦畔と、他調査地との位置関係を若干記しておく。

まず、当遺跡の東側所在の池内遺跡３－２区では、10坪境畦畔から約11町東側にあたる位置（Ｙ＝－42,054）で、677溝が検出されている。

また、条里施工の基準とも目される『難波大道』の中心が稿山洋氏（「難波大道と難波京」『シンポジウム畿内の都城と大道』）によりＹ＝－43,803.75とされており、10坪境畦畔までは約５町である。このように、現在遺存する地割からのみならず、発掘調査による知見により、当遺跡や周辺地域の条里景観が面的ではないにせよ、明らかにされつつあるといえる。



第117図　第６調査区西端部　古代平面および各遺構出土遺物実測図

７．第６調査区西端部Ⅱ－１面の遺構と遺物

第６調査区の西端部では、東側よりも１段高くなり、水田面と中世面の間に、もう１面遺構面が確認されている。

この面からは、土坑・溝・ピットなどが検出されている。

１）土坑

土坑は、散在的に数基が検出されている。

1978土坑　（第117図）

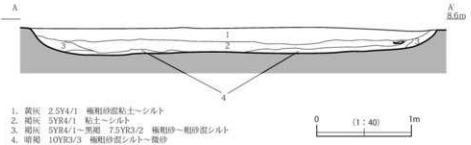
1978土坑は、北端部で溝状に検出された不定形の土坑で、検出長約７ｍ・幅1.7ｍ・深さ0.1ｍを測る。

埋土は、褐灰色粘土～シルトが１層である。

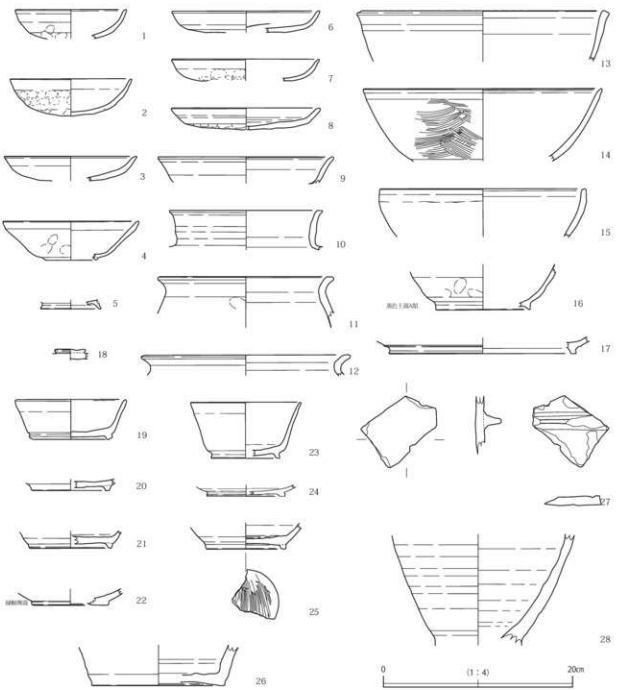
遺物は、須恵器の坏Ｂ蓋（１）・硯に転用された壺底部（２）・小型壺の底部（３）などが出土した。

2105土坑　（第117図）

2105土坑は南端部で検出された隅丸方形の土坑で、南側は調査区外へ伸びる。検出長2.5ｍ・幅3.75



第118図　1979溝断面図



第119図　1979溝出土遺物実測図

m・深さ0.2 mを測る。当初、壁が直になることから竪穴建物とも考えられたが、複数の遺構が重複することから、詳細は不明である。

埋土は、褐灰色粘土～シルトが1層である。

遺物は、土師器の坏(6・7)・甕(4・5)・高坏(8)の5点が図化できた。

2109土坑 (第117図)

2109土坑は、2105土坑の西端で検出された溝状の土坑で、南端部がさらに調査区外へ伸びる。検出長約2 m・幅0.8 m・深さ0.1 mを測る。

埋土は、褐灰色～黒褐色の粘土～シルトが1層である。

遺物は、図化できたのは(9)の須恵器坏が1点のみである。

2）溝

溝は、南北方向のものが数条検出されている。

1991溝 (第117図)

1991溝は、2105土坑の西側で検出された小溝である。検出長1.25m・幅0.5 m・深さ0.1 mを測る。

埋土は、褐灰色粘土～シルトが1層である。

遺物は、須恵器の坏B蓋が1点のみ出土している。

1979溝 (第117～119図、図版48－4・73)

1979溝は南北方向の溝で、北端部は調査区外へ伸び、南端部は2105土坑に切られる。検出長23.5m・幅2.75～5.0 m・深さ0.1～0.25mを測る。北半部が1段深くなり、南半部が浅くなる。

埋土は4層で、大きくは、1層と2～4層の上下2層に区分される。

遺物は、主に、2層から出土している。

出土した遺物には、土師器・須恵器がある(第119図)。

土師器には、坏・皿・甕・壷・鉢があり、須恵器には、坏・壷などがある。他に、緑釉陶器がある。

土師器の(1～5)は坏で、(2)は口径12.8cm・器高4.0 cm、(4)は口径14.4cm・器高4.2 cmを測る。(4・5)が高台をもつものである。(1)は2段ナデを施す。いずれも、外面に指押さえを残す。

(6～8)は皿で、(8)が口径15.6cm・器高2.4 cmを測る。(7)は1段ナデ、(6・8)は2段ナデを施す。(10)は直口壷の口頸部を残し、(11・12)は甕の口頸部破片である。(13～17)は鉢で、(13～15・17)が大型で、(16・17)は高台をもつものである。(14)の外面に丁寧なヘラミガキを施す以外は、ナデである。

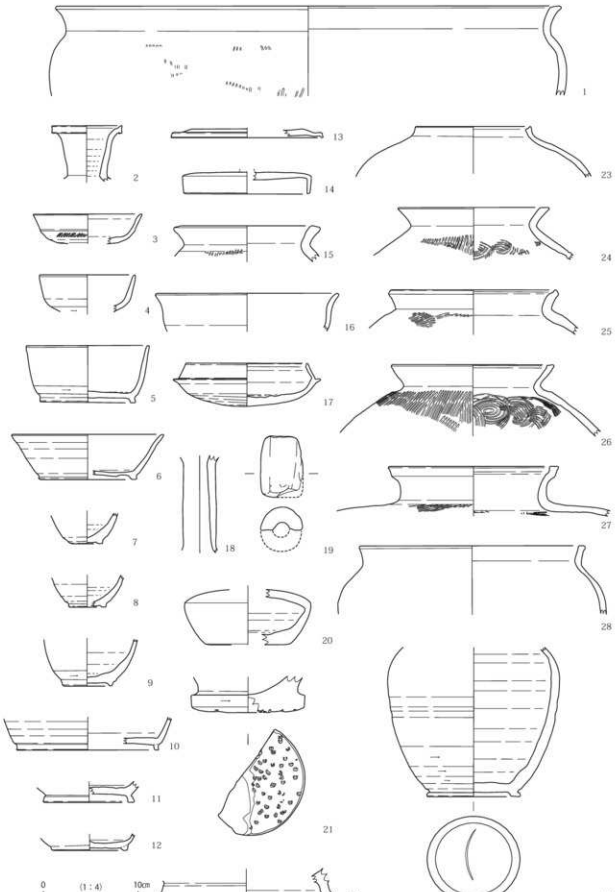
須恵器の(18)は坏B蓋のつまみ部のみを残存し、(19～21・23・24)は高台をもつ坏Bで、(19)は口径11.2cm・器高4.3 cmを測る。(23)は口径11.4cm・器高6.0 cmを測る。(25・26・28)は壷の底部と思われる。(25)は高台をもつもので、底部外面にカキメを残す。(26)はわずかに窪む底部をもつ。(28)は体部下半を残すものである。(27)は突帯を付す体部破片で、大型のものであるが、器種は不明である。

(22)は、緑釉陶器の幅広輪高台をもつものである。

以上の遺物から、この溝は、9世紀前半代に属すと考えられる。

3）包含層 (第120～123図、図版73～75)

第6調査区から出土した包含層の遺物は、他の調査区と比較して、最も多くある。しかしながら、3面ある遺構面に対しての各包含層として分類できたものではなく、ここで掲載した遺物は、最上面の遺構面を検出している段階で出土した遺物がほとんどを占める。



第120図　包含層出土遺物実測図(1)

遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土している。

須恵器には、蓋坏・高坏・甕・壷・平瓶などがある(第120図)。

(13)は坏B蓋で、(5・6・10)が、坏Bである。(5・6)は、口径12.8・15.6㎝、器高6.2・4.7㎝を測る。(17)は坏Hで、口径12.8㎝・器高4.7㎝を測る。(3・4)は長脚高坏の坏部で、前者は列点紋を施す。(16)は口縁部が短く外反する椀である。

(15・24～27)は甕の口頸部破片で、大型で口頸部が短いものが多い。いずれも、体部の外面に叩き目を施し、内面に同心円紋当て具痕を残す。

壷には、小型のもの(2・7～9)と、短頸壷(23・28)、口頸部を欠損するもの(29)がある。なお、その蓋(14)もある。(11・12・22)は高台部を残す。

(1)は大型の鉢で、口径52.8㎝を測る。(21)は捏ね鉢の底部破片で、竹管による刺突紋が施されている。(20)は小型の平瓶の体部破片である。

(18)は、筒状の上下がわずかに開くもので、用途は不明である。

土師器には、坏・高坏・甕・壷・鉢・甑などが出土している(第121図)。

坏には、小型で椀形のもの(5)、外方へ開く口縁部にわずかな平底をもつもの(4・6～8)、皿状のもの(9・32・33・35)がある。また、高台が付くもの(23～25・30)などがある。(4～8)は、外面に指押さえを残す。(9)は、2段ナデを施す。(35)は表面摩滅のため調整が不明であるが、内面に放射状暗紋があった可能性がある。

高坏には、坏部を残すもの(31)と、脚柱部を残すもの(10・11)がある。前者は、わずかに外反する口縁部をもち、外面に指押さえを残す。後者は面取り状のナデを施す。

(34)は皿で、2段ナデを施す。

甕は、多量に出土しており、小型のものから大型のものまで各種ある(14・15・17～22・37～44)。いずれのものも、口頸部破片である。

(44)は壷で、わずかに外反する口縁部短部の上端が凹面をもつ。表面摩滅のため調整は不明である。

鉢には、小型で外方へ開く口縁部を持つ(36)と、大型で内傾する口縁部に片口のもの(16)がある。前者の内面には、ヘラミガキがわずかに残る。

(13)は甑の口縁部を残し、(12)は竈の焚口付近の破片である。

黒色土器には、内黒のA類と両黒のB類がある。前者には、(2・3・26・28・29・45)があり、後者には(29)がある。

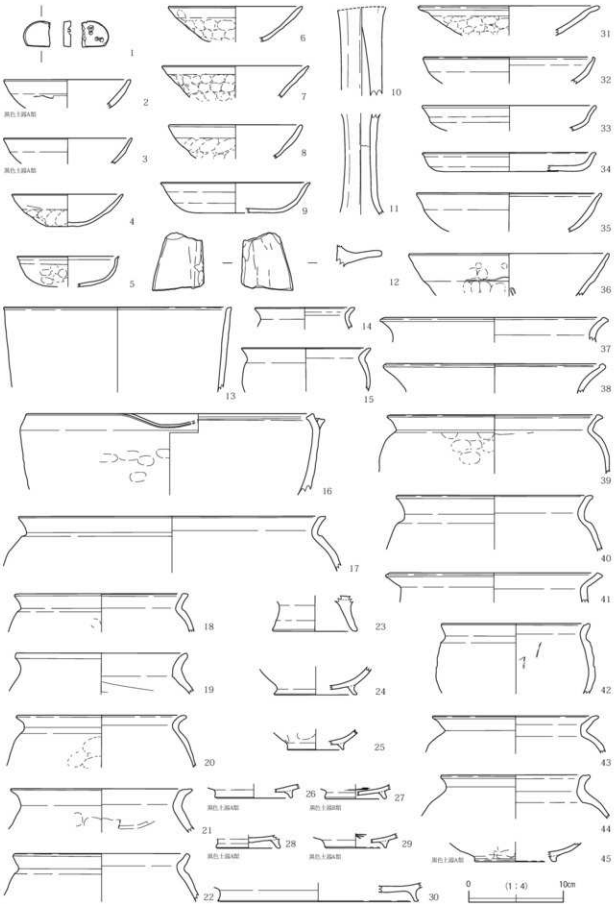
緑釉陶器には、(第122図－1～6)があり、(4)は皿で、他は椀である。

灰釉陶器には、(第122図－7～10)があり、(7・8)が皿で、他は椀である。

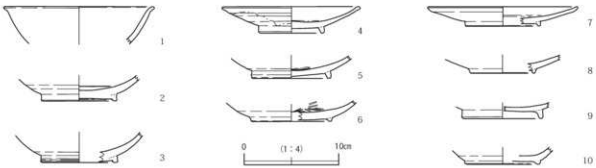
(第120図－19)は土製の錘で、約1/2を残す。

(第121図－1)は石帯で、約2/3を残す。黒色の粘板岩製と思われる。

以上の遺物から、9世紀後半～10世紀前半に属すと思われる。



第121図　包含層出土遺物実測図（2）



第122図　包含層出土遺物実測図（3）

第５節　中世の遺構と遺物

中世の遺構は、第３調査区を除く各調査区で、居住や耕作にかかわる遺構が見られた。特に、第４調査区が、遺構・遺物ともに豊富である。

以下、調査区ごとに、記述していく。

１．第１調査の遺構と遺物

掘立柱建物１棟・柵３条の他、小規模な溝やピット、畦畔が検出された。

１）掘立柱建物

１棟が検出された。

掘立柱建物19（第123・124図、図版８）

本調査区の北東側で検出された掘立柱建物で、調査区外へさらにのびると推測される。南北棟・側柱の建物で、西側に庇を有する。長軸の方向は、N－３°－Wで、概ね方位に一致する。

建物の規模は、南北方向２間以上、東西方向３間（4.8 m）である。

柱痕は総ての柱穴に残っていた。柱間寸法は、2351・2352柱穴間が 2.0 m、2348・2350柱穴間が 1.9 m、東西方向が西側より2.5m・2.3mである。庇は、西辺から西へ 2.4 m程である。

柱穴の平面形は円形ないしは楕円形で、いずれも、直径0.2～0.3m・深さ 0.4 mである。

埋土は、灰色の粘土～シルトで、地山ブロックが混じる。

遺物は、出土していない。

以上から、出土遺物による時期判断は不可能だが、埋土の特徴から、中世頃とは推定できる。

２）柵

調査区の北東部で１条、南西部で２条が検出された。

柵１（第123・124図）

調査区の北東部、掘立柱建物19の西側で検出された。N－２－°Wと掘立柱建物19と同様の軸を有する。

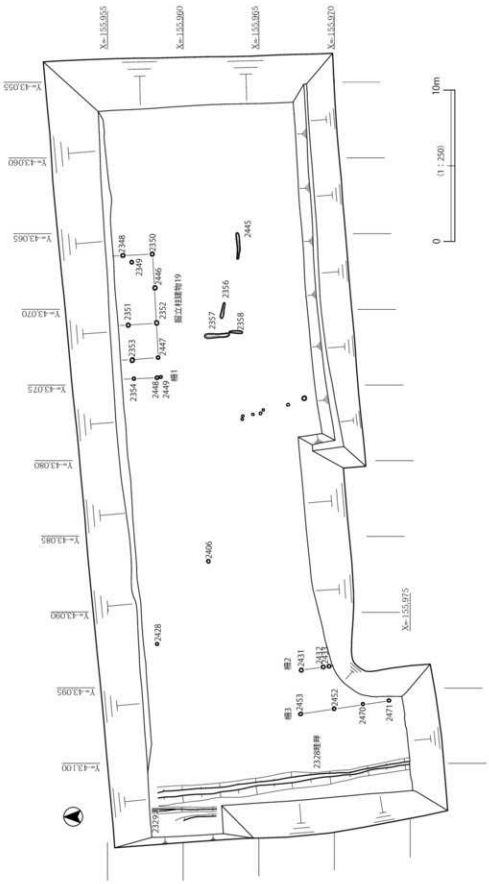
柱痕は残存しており、2354・2448柱穴間の柱間寸法は、 1.6 mである。

柱穴の平面形は円形で、径 0.2 mを測る。深さは、2448柱穴が 0.2 m・2354柱穴が 0.4 mである。

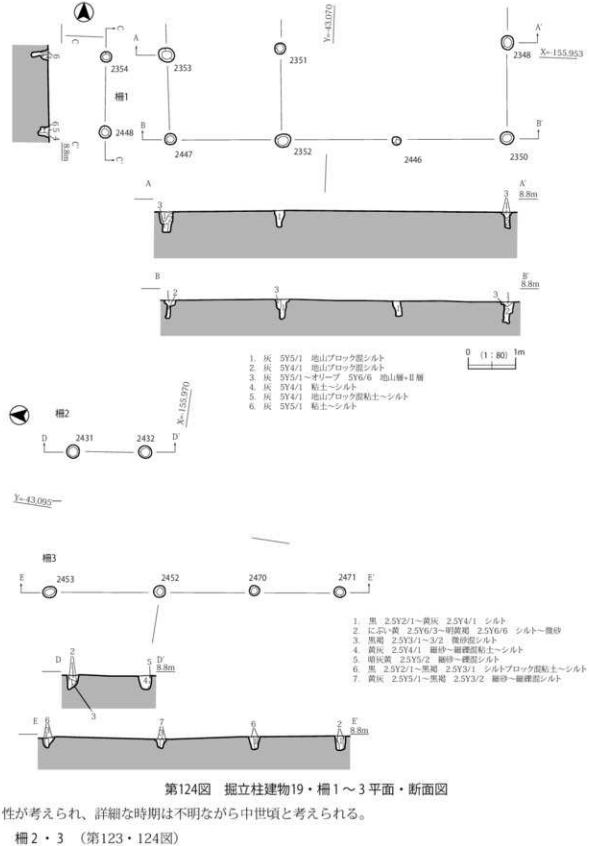
埋土は、地山ブロックの混じり方が掘立柱建物20とやや異なるところもあるが、基本的に同様な灰色の粘土～シルトである。

出土遺物は、いずれの柱穴からも見られなかった。

掘立柱建物19の西側庇列から、西へ 1.3 m程に位置し、軸もほぼ一致することから、同時並存の可能



第123図　第１調査区　中世平面図



第124図　掘立柱建物19・柵１～３平面・断面図

性が考えられ、詳細な時期は不明ながら中世頃と考えられる。

柵２・３　（第123・124図）

調査区南西端で検出され、両柵はいずれも、軸がＮ－９°－Ｗであり、平行する。

柵２は２基の柱穴からなり、の2431・2432柱穴間の距離は、 1.5 mを測る。

埋土は、黒色のシルトが見られる部分もあるが、黄灰色などの砂が混じるシルトがベースであり、古

代の柱穴とは異なる。遺物は検出されなかった。

柵3は4基の柱穴からなり、さらに、南側に伸びる可能性がある。総ての柱穴に柱痕が残っていた。各柱穴間距離は、北側より2.3m・2.0m・1.8mである。

埋土は、上記の柵2同様、黒色や黒褐色のシルトなどが見られる部分もあるが、明黄褐色や黄灰色の砂混じりシルトなどがベースであり、色調は柵2の柱穴とやや異なるが、同様な特徴の埋土である。

出土遺物は、2452柱穴から弥生土器と思われる小片が出土したのみある。

両柵は、埋土の特徴からは、中世頃の可能性が考えられる。

3）その他の遺構

上記の遺構以外に、溝・ピット・畦畔が検出された。

溝

調査区東半で、東西方向の2445・2356溝、南北方向の2357・2358溝が検出された。いずれも、幅0.1～0.3m・深さ0.05m程度である。埋土は暗青灰色の粗砂混シルトで、耕作に伴う素掘り溝であろう。出土遺物はない。埋土の特徴から、中世頃と考えられる。

ピット

調査区北東部では、掘立柱建物20部分で、2349ピットが、柵1部分で2449ピットが検出された。建物や柵1と同様な規模のピットである。埋土は、柵1の6層と類似し、地山ブロックが多く混じるシルトである。柵と同様な時期のピットであろう。いずれからも、出土遺物はない。

2328畦畔

調査区西端で検出された。幅0.6～0.75m・高さ0.3mで、大畦畔である。軸は、N－8°－Wで、上述の柵2・3と同方向である。この遺構の時期は、中世頃と思われるが、詳細な時期は不明である。

なお、この部分には、古代以降連綿と溝や畦畔が築かれている（第6・116図参照）。当遺跡を含む周辺では、条里施工に伴い、正方位地割が展開していた。

2．第2調査区の遺構と遺物

ピット・土坑・溝等が検出された。

1）ピット・土坑

ピットは、調査区南反部で多数検出されているが、遺物が出土して、時期が確定できるものは、ほとんど検出されなかった。

398ピット（第125・126図）

398ピットは、調査区南東部の第3面で検出つされ、出土した遺物から、中世に属す遺構である。

出土遺物は、瓦器椀が1点のみである。

2）溝

313溝など小規模な溝が多数ではあるが、比較的大規模な溝として、672・737溝が見られる。

672溝（第125・127・129図）

調査区の北半部を横断するように検出され、東端部では南北方向の溝と合流している溝である。平面形は、やや蛇行しながら概ね方位に沿う。幅7～9mと幅広だが、深さが最も深い部分でも0.3mである。

埋土は、シルトを主とし、明瞭な砂層は見られなかった。

出土遺物には（第129図－1～6）がある。（1）は近世陶器で、（2・3）は中世の土師器小皿、（4）は

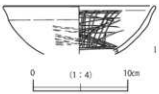
第125図　第２調査区　中世平面図

瓦器椀、(5・6)は須恵器である。遺物の出土量が少なく、確とはし難いが中世～近世まで利用されていた水路と考えられる。

737 溝を切っている。

737 溝　(第125・128・129図)

調査区中央の南半部で検出された南北方向の溝である。幅は最大 5.5 m で、溝内には小規模な高まりが見られる。深さは 0.1 m未満と浅い。



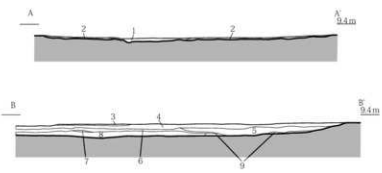
第126図　398ピット出土遺物実測図

埋土は、シルトを中心とするが、上述の 672 溝より色調がやや濃く、比較的粘性が強い。

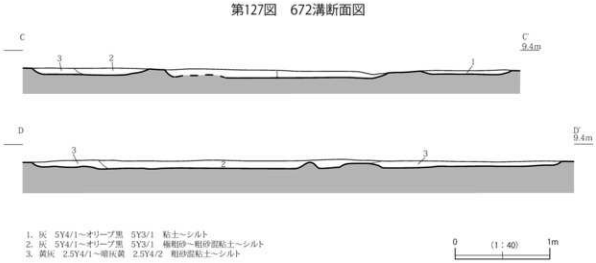
出土遺物には、(第 129 図－7～9)がある。(7)は弥生時代後期の器台、(8)は古代の須恵器坏身、(9)は瓦器椀の底部である。

なお、古代水田で記したように、この部分は推定南北方向坪境にあたる。672 溝を挟んだ北側で、この延長が見られず、遺構形状が不整形ではあるが、中世の坪境溝として評価しておきたい。

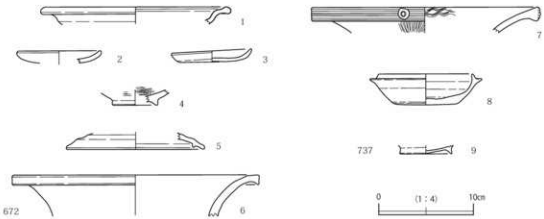
なお、これらの溝以外にも、幅 0.5 m程の小規模な溝が多数検出されている。672 溝南北部分の南延長で検出された 313 溝などは、上述のとおり、672 溝に伴うものと推測される。これ以外の、672 溝南側では、東西方向の小溝が多数見られる。これらは、耕作に伴う小溝と推測される。



第127図　672溝断面図



第128図　737溝断面図



第129図　672・737溝出土遺物実測図

3）包含層出土遺物　（第130図）

第２調査区から出土した包含層の遺物には、土師器小皿、瓦器小皿・瓦器椀などがわずかにある。土師器小皿（１・２）は小片で、口径7.6㎝・9.6㎝を測る。（３）は瓦器小皿で、外面にナデ、内面にヘラミガキ・底部には平行暗紋を施す。（４）は小型の瓦器椀で、口径10.8㎝・器高 4.6 ㎝を測る。約１／３を残す。内外面伴にヘラミガキを施す。

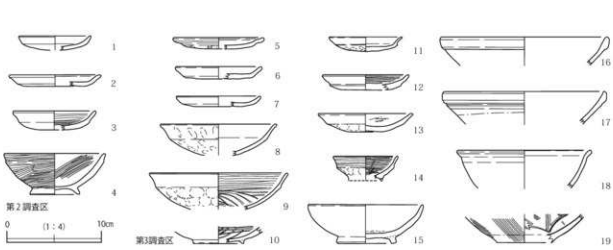
３．第３調査区の遺構と遺物

第３調査区は、中近世の遺構がほとんど検出されておらず、この時期は空白地帯である。わずかに包含層から、土師器小皿・椀、瓦器小皿・椀、白磁碗、青磁碗などが出土している。

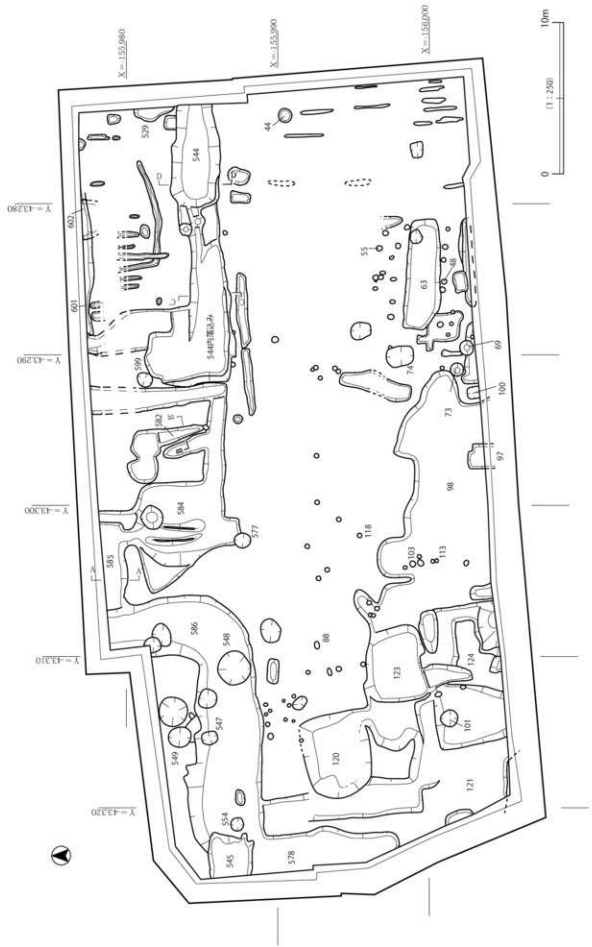
（５～７）の土師器小皿は、口径９㎝前後で、（５）は手の字口縁のものである。土師器椀(15)は、高台をもつもので約１／５を残す。口径12.0㎝・器高 4.2 ㎝を測る。調整は、表面摩滅のため不明である。(11～13)瓦器小皿で、口径7.6㎝～9.6㎝を測る。内面に、(11)がナデ、(12・13)がヘラミガキを施す。（８～10・14)は瓦器椀で、（８）は口径12㎝の小型で、高台が退化傾向のものと思われる。（９・10)は、口径14.4㎝前後で、内面に粗いヘラミガキを施すものである。(14)は口径 7.2 ㎝を測り、内外面にヘラミガキを施す。

(16・17)は、口縁部端部が玉縁状の白磁碗で、いずれも、口縁部破片である。

(18・19)は、青磁碗で、前者が無紋で、後者がカキメ紋様を施す。



第130図　第２・３調査区包含層出土遺物実測図



第131図　第４調査区　中世平面図

4．第４調査区の遺構と遺物

この調査区からは、井戸・土坑・ピット・溝など多数の遺構があり、その他に、流路が検出された。

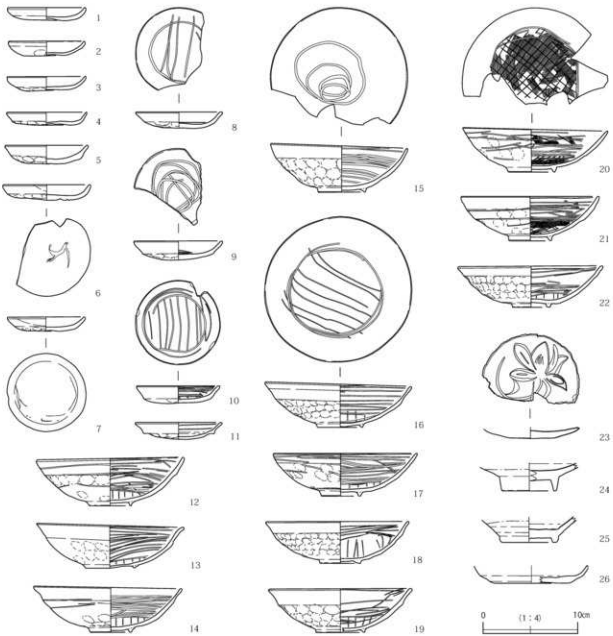
遺構の記述をする前に、東半の北端部で、第４調査区中近世面と古代水田面との間に中世遺物を多量に含む層が検出された。当初は、601・602土坑として、遺物を取り上げられていたが、検証の結果、包含層Ⅰ－２層として扱うこととした。調査区外へ拡がるため、遺構であった可能性も否定できない。

１）Ⅰ－２層出土遺物　（第132図、図版75・76）

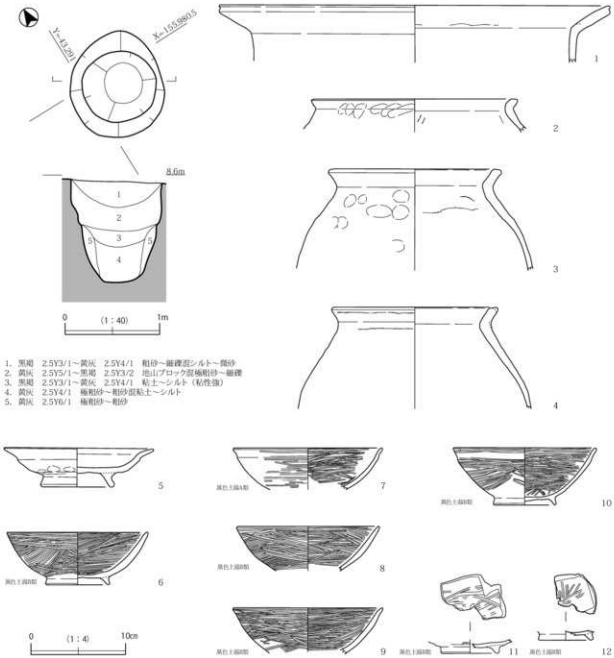
上述したとおり、Ⅰ－２層（第12図－16層参照）からは、土師器小皿、瓦器小皿・椀、白磁皿・碗などの一括遺物があり、他に、須恵器坏が出土した。

（１～７）の土師器小皿は、完形もしくはそれに近いものがあり、口径８～９㎝を測る。いずれも、１段ナデで、底部に指押さえを残す。（６・７）の底部外面には、粘土の繋ぎ目を残す。

（８～11）は瓦器小皿で、口径９㎝程で、外面にナデを施し、内面底部に粗い平行暗紋ないしは螺旋状



第132図　第４調査区　Ⅰ－２層出土遺物実測図



第133図　599井戸平面・断面および出土遺物実測図

暗紋を施す。

(12～22)は瓦器椀で、完形のものが多く、口径が14.5cm前後・器高4.5～5.0cmで、外面に粗いヘラミガキを残すもの、指押さえを残すものがある。内面の底部には、平行暗紋を施すものが多く、(20)のように、細かいハケメ後斜格子暗紋を施すものもある。

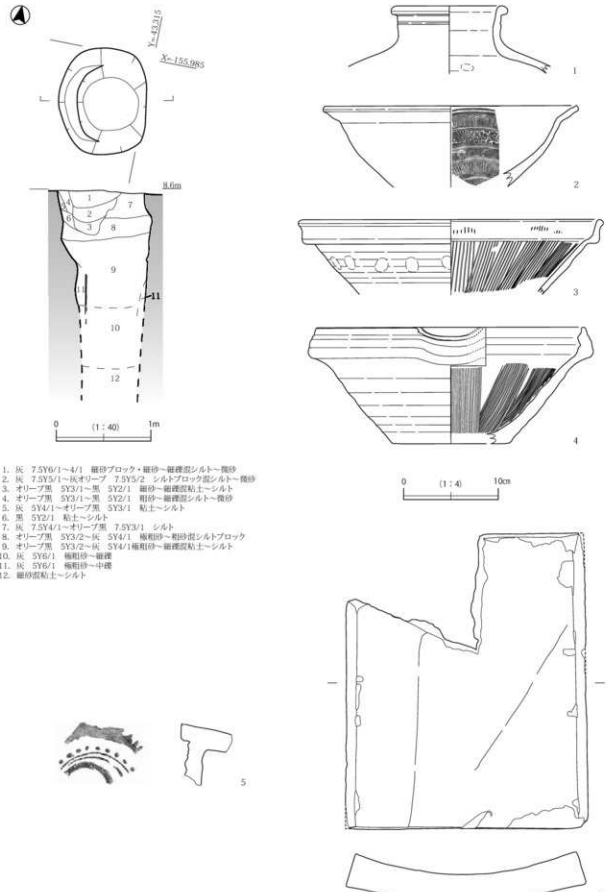
(23)は白磁皿の底部を残すもので、花紋が描かれている。(24・25)は、白磁碗の高台部を残す。

(26)は、須恵器坏Gの底部を残す。下層からの混入と思われる。

以上の遺物から、この層は中世前期に属するものである。

2）井戸

調査区北西側で、溝と重複する状態で、まとまって検出された。調査区中央北側や同南側などでも散見された。



1. 灰　7.5Y6/1～4/1　細砂ブロック・細砂～細礫混シルト～微砂
2. 灰　7.5Y5/1～灰オリーブ　7.5Y5/2　シルトブロック混シルト～微砂
3. オリーブ黒　5Y3/1～黒　5Y2/1　細砂～細礫混粘土～シルト
4. オリーブ黒　5Y3/1～黒　5Y2/1　粗砂～細礫混シルト～微砂
5. 灰　5Y4/1～オリーブ黒　5Y3/1　粘土～シルト
6. 黒　5Y2/1　粘土～シルト
7. 灰　7.5Y4/1～オリーブ黒　7.5Y3/1　シルト
8. オリーブ黒　5Y3/2～灰　5Y4/1　極粗砂～粗砂混シルトブロック
9. オリーブ黒　5Y3/2～灰　5Y4/1極粗砂～細礫混粘土～シルト
10. 灰　5Y6/1　極粗砂～細礫
11. 灰　5Y6/1　極粗砂～中礫
12. 細砂混粘土～シルト

第134図　547井戸平面・断面および出土遺物実測図

599 井戸　（第131・133図、図版41－１・77）

調査区中央北側の544溝が北側へ屈曲した部分の北側で検出された素掘りの楕円形井戸である。長径1.1 m・短径1.0 m、深さ1.1 mである。断面形はU字形で、下半で径0.8 mの２段掘りである。

埋土は５層であり、比較的粗粒の砂や礫が多く混ざるシルトなどで、上層の１・２層は最終的な埋め戻し土である。下層については、湧水のため十分に断面観察ができなかった。ただし、３層はその上下層と異なり粘性が強い層である。

遺物は、（第133図－１・４・10）が３層から、それ以外が４層から出土している。

出土遺物には、土師器皿・甕・羽釜、黒色土器椀がある。（５）は土師器の台付皿で、短く外反する口縁部に皿状の底部をもち、ハの字状の脚台部をもつ。口径14.8㎝・器高4.2㎝を測る。内外面にナデを施す。内外面に煤が付着する。（１）は土師器の口径が40㎝以上ある大型の甕で、外反する口縁部の端部が凹面をもつ。（３・４）の甕は、類似するものであるが、若干口径に差異がある。短く外反する口縁部の上端部に面をもつ。内外面にナデを施す。前者は、体部外面に指押さえを残す。両者伴に外面に煤が付着する。（２）は羽釜の口縁部で、短く外反する口縁部の上端部が面をもつ。外面に多量に煤が付着する。

（６～12）は黒色土器椀で、（７）を除き、両黒のＢ種である。口径14.8～16.0㎝・器高5.6～7.2㎝を測る。内外面伴に丁寧なヘラミガキを施す。

以上から、所属時期は11世紀前半と考えられ、当遺構面で最も古い時期の遺構である。

547 井戸　（第131・134、図版41－２・77図）

調査区北西側の586溝肩部で検出された井戸で、下部は木桶を井戸枠として使用している。ただし、湧水のため井戸底までを検出できなかった。586溝を切っている。平面形は楕円形で、長径約1.15m・短径約0.9 mで、深さ2.2 m以上である。

埋土は12層からなり、11層は井筒裏込めである。７層から以下は、砂礫層が漸移的に堆積し、１～６層までは、径0.7 m・深さ0.5 mの再掘削が行われている。この部分については、別遺構とも考えられる。

出土遺物は、８層以上から出土している。

出土遺物は、短く外反する口縁部の端部が玉縁状の常滑焼壺（１）、外反する口縁部をもつ志野焼き鉢（２）、口縁部が屈曲し上方へ伸びる備前焼擂鉢（３・４）、巴紋軒丸瓦（５）、唯一法量が判る平瓦（６）が出土した。平瓦は、長さ31.2㎝・幅25.6㎝・厚さ3.0㎝である。

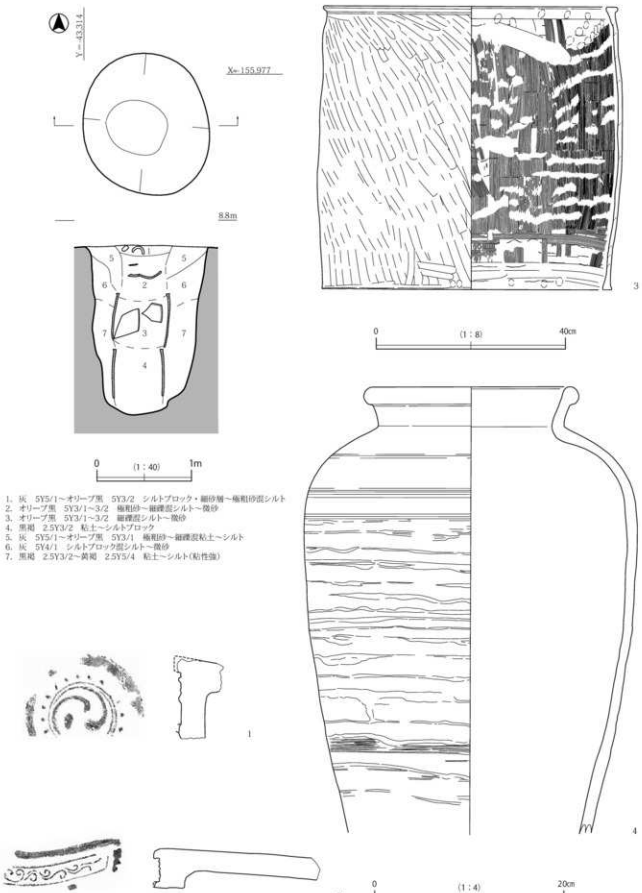
以上から、この井戸の時期は18世紀と思われる。。

549井戸　（第131・135・136図、図版41－３～５・78）

調査区の北西側で547井戸の北側約１mで検出された井戸で、瓦質井戸枠を使用している。平面形が楕円形で、長径1.5 m・短径1.35m・深さ1.8 mを測る。断面形はU字形である。

埋土は、井戸枠内の１～４層と、裏込めの５～７層である。下層の掘方部分は７層の黒褐色の粘土～シルトで、井戸枠内は埋め戻し土である３・４層の粘土～シルトでブロック状を呈する。これより上層も、断面の観察から、井戸枠が本来存在し、抜き取られ、埋め戻されたと推定できた。

井戸枠の瓦質土器は、調査時に２段が残存し、枠内にも同様な破片が見られたことから、これらがその井戸枠と推定された。しかし、出土遺物を接合したところ、ほぼ同形の瓦質井戸枠が４点復原でき、４段であった可能性が考えられる。４段とすると地表面に井戸枠が飛び出すことから、遺構面の削平が



第135図　549井戸平面・断面および出土遺物実測図(1)

あった可能性を示唆している。

遺物は、1層から瓦や土器が、2・3層から井戸枠が出土している。

（1）は、備前焼き壷で、底部を欠損する。口径20.8cmを測る。口縁部が玉縁状の大型のものである。

（2）は軒丸瓦で、三巴紋である。

（第135－3・136図）は、井戸枠に使用された瓦質のもので、いずれも、完形もしくは復原完形である。口径60.0～62.4cm・器高60cm前後を測る。円筒形のもので、口縁部をわずかに内傾させ、端部を内・外方へ肥厚させ、上端面をもつ。底端部は、下端面をもつ。外面に板状のナデ・内面にハケメを施す。やや焼きの甘いものである。

井戸内からは、4個体分が復原できたことから、本来の井戸の深さは、2.4m以上あったものと考えられる。

以上から、時期は中世後期から近世と考えられる。

554井戸　（第131・137図）

調査区北西側の586溝部分で検出された素掘りの井戸で、直径約0.9m・深さ約1.75mを測る。ほぼ垂直に掘削されている。

埋土は5層で、砂礫等が混じる粘土～シルトが主である。湧水が著しく、井戸底は確認しえたものの、4層下半以下の埋土の詳細な検討はできなかった。

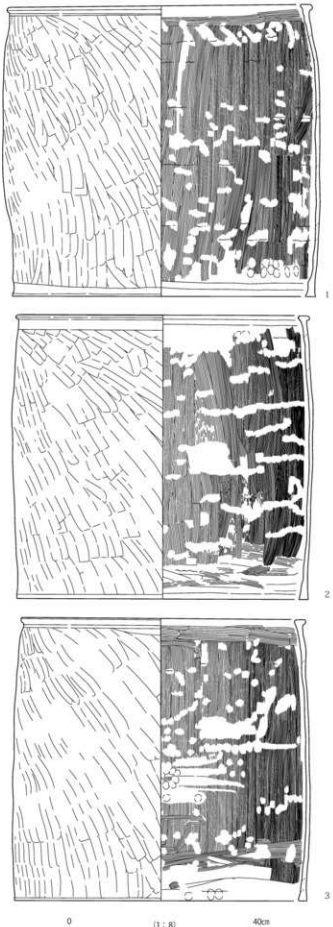
出土遺物は、陶器甕が1点のみである。

以上から、時期は近世と思われる。

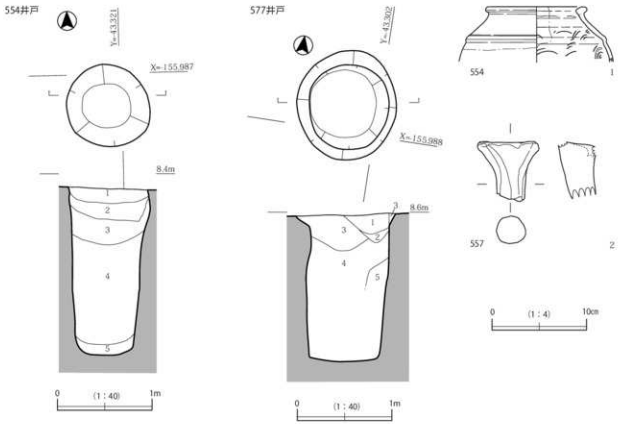
577井戸　（第131・137図）

調査区中央部の584溝の南西隅で検出された素掘りの井戸で、長径1.15m・短径1.05m・深さ1.5mである。上端部を除き、ほぼ垂直な壁である。

埋土は4層で、粘土を主体とした地山等のブロックが混じる砂礫層が主体である。下層については湧水のため断面が十分に観察できなかっ



第136図　549井戸出土遺物実測図(2)



第137図　554・577井戸平面・断面および出土遺物実測図

たが、埋土の様相に大きな差はなかった。

なお、埋没後に再掘削が行われているようだが、深さ 0.3 mであり、基本層序Ⅰ層と地山層のブロック土である。

遺物は、上層から土師器鉢の把手部分が出土している（２）。

以上から、時期は近世と考えられる。

134 井戸　（第131・138図、図版41－７）

調査区南西側で検出された井戸で、井戸枠は曲げ物である。掘方は隅丸方形状で、長辺 1.3 m・短辺 1.2 m・深さ 1.0 mである。

埋土は、東側の掘り方(12～14層)が残存しているが、西側は９～11層が残っていた。掘方部分は極粗砂を主とし、枠内埋土は（７・８層）で、下層が粗砂と粗く、中層以上はシルトを主とする。

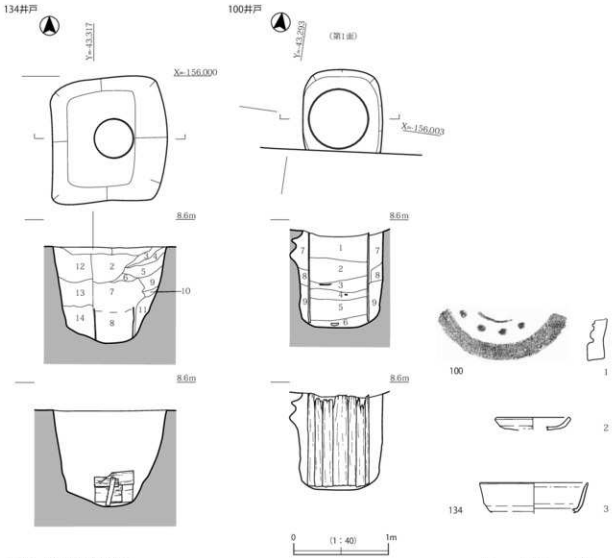
なお、断面観察からは、井戸底に残存する曲げ物の上部にも井戸枠が存在した可能性が考えられる。その形態は不明である。また、２～６層は最掘削されたと思われる。

出土遺物は、中世の土師器小皿と古代の須恵器坏Ｇの２点が図化できたのみである。

以上から、時期は中世以降と思われる。

100 井戸　（第131・138図）

調査区中央南端で検出された井戸で、南側が調査区外へ伸びる。井戸枠は木桶である。掘方は隅丸方形状で、検出長 0.9 m・幅0.85m・深さ 0.1 mである。井戸枠は直径約 0.6 mを測る。



第138図　100・134井戸平面・断面および出土遺物実測図

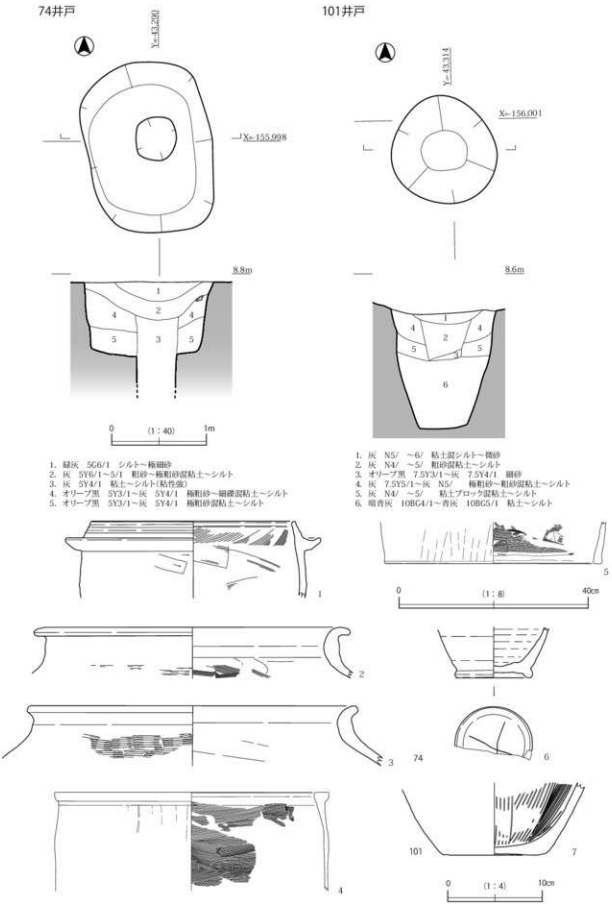
埋土は９層で、掘方部分が７～９層で、下層が中礫層、これより上層がシルトを主とし、地山などのシルトブロックが混じる。井戸枠内の埋土は、４層以下の下層がシルトを主とし、明瞭な植物遺体層である４層以下にも有機物が多く見られ、色調も暗色を呈する。上層は、粗砂～細礫が混ざる粘土～シルトである。

出土遺物は、巴紋軒丸瓦が１点のみである。

以上から、時期は近世以降と考えられる。

74井戸　（第131・139・140図、図版44－８）

調査区中央のやや南東側で検出された井戸で、平面形は隅丸方形である。長辺1.85m・短辺 1.3 mで



第139図　74・101井戸平面・断面および出土遺物実測図（4・5は1／8縮小）

74井戸

1

2

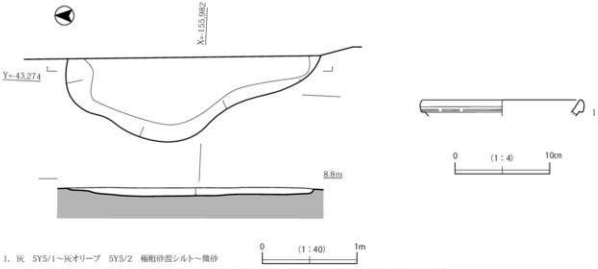
101井戸

3

4

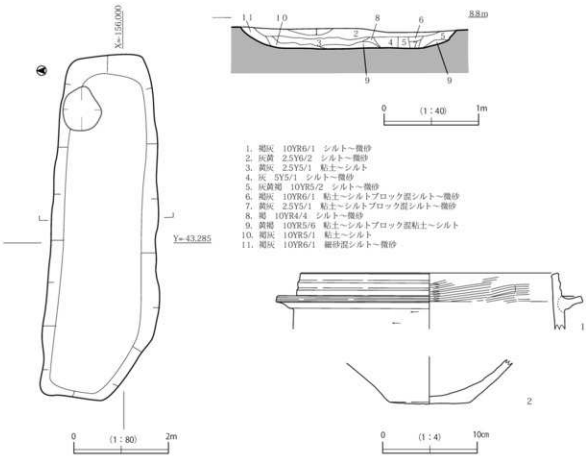
0 (1：4) 10cm

第140図　74・101井戸出土遺物実測図（2）



1. 灰　5Y5/1～灰オリーブ　5Y5/2　極粗砂混シルト～微砂

第141図　529土坑平面・断面および出土遺物実測図



第142図　63土坑平面・断面および出土遺物実測図

ある。二段掘りで、検出面から一段目までの深さは約0.8 m、中心部分については、湧水のため井戸底までを確認できず、1.2 m以上である。

埋土は5層で、砂礫が混じる部分も見られるが、比較的細粒で、粘土～シルトが主体である。

出土遺物は、(第139図1～6・第140図－1・2)がある。(1)は瓦質羽釜で、(2・3)は瓦質甕、(4・5)は瓦質井戸枠、(6)は須恵器壺底で、(第140図－1)が巴紋軒丸瓦、(2)が唐草紋軒平瓦である。

瓦質の井戸枠が出土していることから、本来、この井戸にもそれらの井戸枠が使用されていた可能性がある。

以上から、時期は中世後期から近世にかけてと思われる。

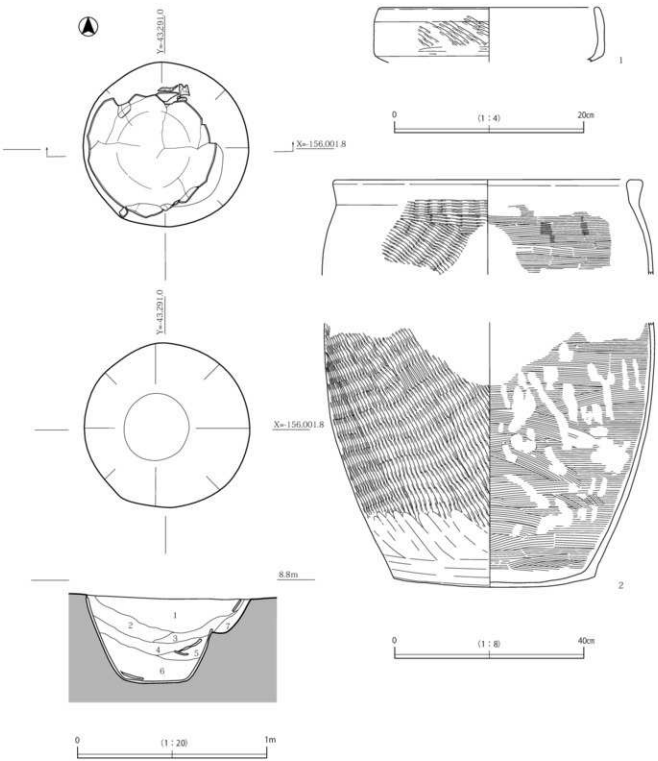
101井戸　(第131・139・140図、図版41－1)

調査区南西部の98流路部分で検出された井戸で、直径1.1 m・深さ1.2 mである。断面形は逆台形である。

埋土は6層で、下層の6層の粘土～シルト層が分厚く堆積している。本来、この6層は細分できたのかもしれないが、湧水が著しく詳細な検討ができなかった。この6層より上層は、ブロックが混じる粘土～シルトを主体とする。

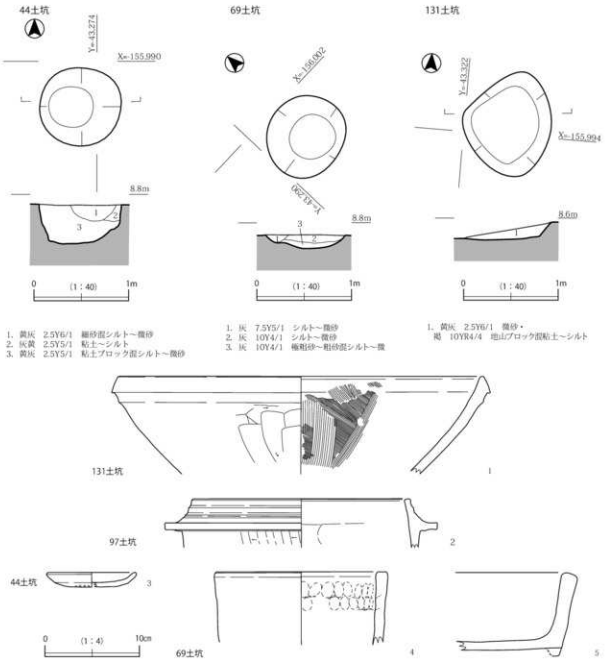
出土遺物は、(第139図－7)の瓦質擂鉢の底部と、(第140図－3・4)の瓦がある。(3)は、先述の74井戸から出土したものと同類の唐草紋軒平瓦で、(4)は丸瓦である。

以上から、時期は中世以降と考えられる。



1. 緑灰　7.5GY5/1　細砂混シルト～微砂
2. 緑灰　10GY5/1　細砂混シルト～微砂
3. 青灰　10BG5/1　粘土～シルト
4. 灰　N5/　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
5. 緑灰　5G6/1　細砂混シルト～微砂
6. 緑灰　10GY5/1　シルト～微砂
7. 灰　10Y5/1　シルト～微砂

第143図　73土坑平面・断面および出土遺物実測図



第144図　44・69・97・131土坑平面・断面および出土遺物実測図

3）土坑

土坑は、北半部では少なく、南半部で数基検出された。

529土坑　（第131・141図）

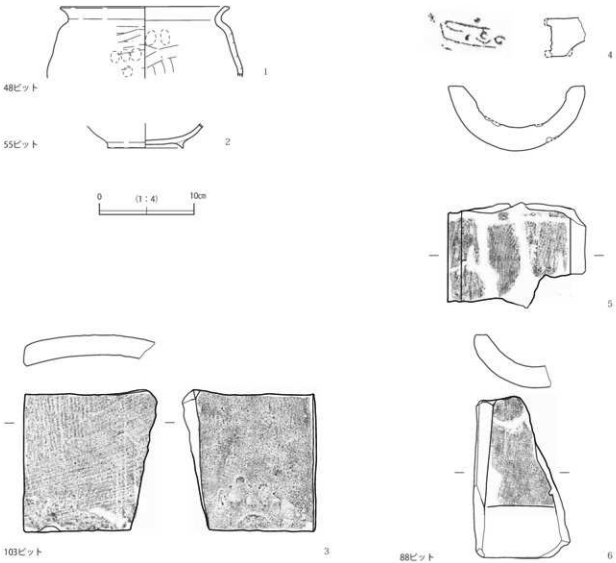
調査区北東端で検出された不定形な土坑で、東側を側溝で切られる。現状で長軸 2.7 m・短軸 0.9 m 以上、深さは最も深い部分で 0.1 m程度である。

埋土は、極粗砂混じりのシルト～微砂で、やや軟質である。

図化できた遺物は、白磁碗の口縁部破片が 1 点である。

なお、これ以外にも時期不明の土師器片が 1 点出土している。

以上から、時期は中世以降と考えられる。



第145図　ピット出土遺物実測図

63土坑　（第131・142図）

調査区南西側で検出された長方形の土坑で、長辺約 7.2 m・短辺約 1.2 m・深さ約 0.2 mである。

埋土はシルトを主とし11層に区分されるが、3層以下ではブロックが多く混じる。

出土遺物は、瓦質羽釜・捏ね鉢がある。

なお、これ以外にも陶器・瓦質土器・瓦器、須恵器・土師器、瓦など多数の遺物が出土している。

以上から、時期は中世後期以降と考えられる。

73土坑　（第131・143図、図版42－２・３）

調査区中央やや南東側、調査区南辺近くで検出された土坑で、100井戸の北東約１mに位置する。直径約1.75m・深さ約 0.9 mを測る。土坑には、すっぽりと土器が収まっている。いわゆる埋甕遺構であり、甕の固定のため土坑と甕の間に、板状の木製品が一部で差し込まれていた。同様の埋甕は、当センターが調査を行った、堺環濠都市遺跡（ＳＫＴ 960 地点）でも見られ、埋甕遺構（155 埋甕など）が検出されている（新海正博編　2008　『堺環濠都市遺跡Ⅱ（ＳＫＴ 960 地点）』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 178 集）。

埋甕内の埋土は６層に分かれ、シルト～微砂を主体とする。

出土遺物は、湊焼き甕・土師器鉢がある。(1)は底部を欠損するもので、口縁部がわずかに内傾し、上端面をもつ。外面に叩き目・内面にナデを施す。外面に煤が付着する。(2)は本来完形であったと思われるが、接合の結果、全部品が揃っていなかった。口径64.0cm・推定器高約72cmを測る。口縁部が肥厚し、上端面をもつ。体部外面に叩き目後、下端部に指ナデを残し、内面にハケメを施している。

以上から、時期は近世に属すと思われる。

44土坑 (第131・144図、図版42－4)

調査区東端で検出された円形の土坑で、直径0.85m・深さ0.4mを測る。

埋土は、地山起源の10cm大の粘土ブロックが多く混じるシルト層で大部分が埋め戻される。1・2層は類似し、いずれもシルトを主とする埋土である。

出土遺物は、土師器小皿が1点のみ図化できた(第144図－2)。なお、図化以外にも、瓦片が出土している。

以上から、時期は中世以降と考えられる。

69土坑 (第131・144図)

調査区中央南端、100井戸の東側約3mで検出された土坑で、長径0.9m・短径0.8m・深さ0.15mを測る。

埋土は、シルトを主とし、下部には砂が混じる。

出土遺物は、(第144図－3・4)の土師器火鉢と瓦質火鉢が出土している。

以上から、時期は中世後期以降と考えられる。

131土坑 (第131・144図)

調査区西端部付近で検出された不正形の土坑で、長軸1.1m・短軸0.95m・深さ0.1mを測る。

埋土は、粘土～シルトを主とし、小粒の地山ブロックが混じるが、顕著ではない。

出土遺物は、(第144図－1)の瓦質擂鉢が1点図化できた。

以上から、時期は中世以降と考えられる。

4) ピット

調査地の西側や南側で散在的にピットが検出された。径はいずれも0.2～0.3m程で、深さは0.1mかそれ以下の浅いもの、0.15～0.3m程のものの二者に大きく区分できる。後者については、柱穴の可能性も考えられるが、対になり、建物を構成する状況ではなかった。

これらのピットのうち、出土遺物を図化したのが、48・55・88・103の各ピットである(第145図)。(1)は48ピット出土の土師器甕、(2)は55ピット出土の土師器椀である。(3)は103ピット出土の軒平瓦、(4～6)は88ピット出土の軒平瓦・丸瓦である。

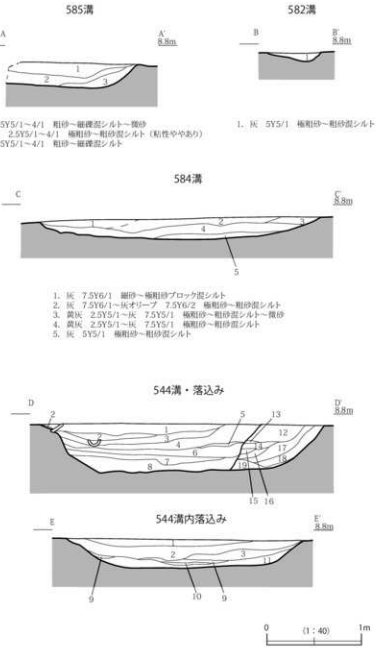
5) 溝・流路・落込み

調査区北側で多数の溝が検出され、概ね直角に屈曲するものも見られた。なお、これら以外にも調査区東側で、主に南北方向の小溝群が検出された。これらは、耕作に伴う溝であろう。

流路は、調査区中央南端から調査区西側へ向かい検出され、その延長の一部は、後述する第5調査区でも確認された。

544溝・544溝内落込み (第131・146・147図、図版42－5・79)

調査区北東側で検出された東西方向の溝で、Y＝－43,283～43,292部分の低まり部分を544溝内落込みとしている。当該東西ラインの西延長には、586溝も見られ、途切れながらも同様なライン上に溝



1. 灰　5Y5/1～4/1　粗砂～礫礫混シルト～微砂
2. 黄灰　2.5Y5/1～4/1　極粗砂～粗砂混シルト（粘性ややあり）
3. 灰　5Y5/1～4/1　粗砂～礫礫混シルト

1. 灰　5Y5/1　極粗砂～粗砂混シルト

1. 灰　7.5Y6/1　細砂～極粗砂ブロック混シルト
2. 灰　7.5Y6/1～灰オリーブ　7.5Y6/2　極粗砂～粗砂混シルト
3. 黄灰　2.5Y5/1～灰　7.5Y5/1　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
4. 黄灰　2.5Y5/1～灰　7.5Y5/1　極粗砂～粗砂混シルト
5. 灰　5Y5/1　極粗砂～粗砂混シルト

544溝内落込み
1. 灰　7.5Y5/1～6/1　粗砂～礫礫混シルト～微砂
2. 灰　5Y6/1～5/1　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
3. 灰　7.5Y6/1～5/1　極粗砂～礫礫混シルト～微砂
4. 灰　10Y6/1～5/1　極粗砂～礫礫混シル
5. 灰　5Y5/1　極粗砂～礫混シルト～微砂
6. 黄灰　2.5Y5/1　極粗砂～粗砂混シルト（粘性ややあり）
7. 灰白　7.5Y7/1～灰　7.5Y5/1　シルト～粗砂
8. 黄灰　2.5Y4/1～黒褐　2.5Y3/1　粘土～シルト
9. 黒褐　2.5Y3/1～3/2　粘土～シルト
10. 黄灰　2.5Y5/1～4/1　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
11. 黄灰　2.5Y4/1～黒褐　2.5Y3/1　粘土～シルト

544溝
12. 灰　10Y6/1　極粗砂～粗砂混シルト
13. 灰　5Y4/1　極粗砂～粗砂混シルト
14. 灰　5Y6/1　極粗砂～粗砂混シルト
15. 灰　5Y4/1　極粗砂～粗砂混シルト
16. 灰　10Y6/1　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
17. 灰　5Y5/1～灰オリーブ　5Y4/4　シルト
18. 灰　5Y5/1～灰オリーブ　5Y4/4　シルト
19. 灰　7.5Y6/1　粘土～シルト

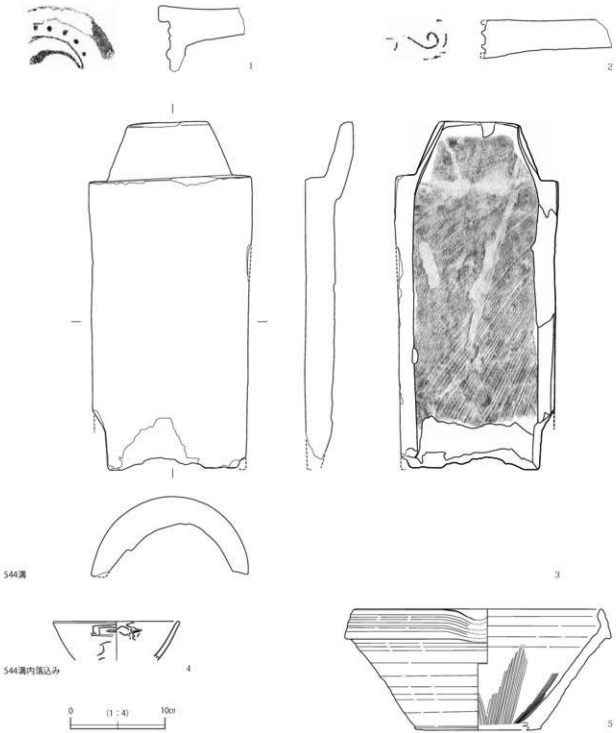
第146図　544・582・584・585溝断面図

が連続している。東端は調査区外へ伸びる。幅約２～３ｍ・深さ約0.5ｍを測る。

埋土は、19層に区分されるが、シルト～微砂を主とし、極粗砂～粗砂が混じる。１～８層は再掘削後堆積したものである。

なお、埋土の全体的な様相は、後述の584・585溝とも比較的類似する。

（第147図）の出土遺物には、青磁碗（４）・備前焼擂鉢（５）があり、瓦には、三つ巴紋軒丸瓦（１）・唐

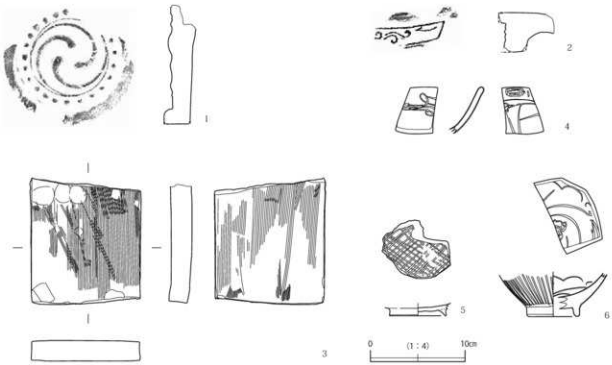


第147図　544溝・溝内落込み出土遺物実測図

草紋軒平瓦(2)・丸瓦(3)がある。

以上から、時期は近世と考えられる。

この溝中心ラインの座標値は、X＝－155,986前後であり、推定東西方向の坪境から北へ約23mである。計算上の数値からは少々ずれるが、長地型地割で約2段ではある。しかし、坪内地割の方向が、概ね同様な時期と考えられる小溝群が南北方向であり、古代水田においても南北方向であったため、長地型地割とは直接的には関係しないのかもしれない。ただし、古代水田でも記したように、この544溝と重複する位置に、611高まりが見られる。この点では、この東西ラインが坪内区画における重要な位置



第148図　578溝出土遺物実測図

であったとも考えられる。

578溝　(第131・148図)

調査区西端で検出された南北方向の溝で、北側は586溝と連続する。一方の南端は、西側へ屈曲していると推測される。溝の西側が調査区外となるため、正確な形状は不明だが、検出幅2.5ｍで、連続する548溝同様と仮定すれば、幅5ｍ程と考えられる。深さは約0.4ｍである。

埋土はシルトが主体で、下層に砂礫が多く混じる部分も見られる。後述の584・585溝埋土と類似する。

なお、最上部は後述する98流路の延長が切っている。

(第148図)の出土遺物には、瓦器椀底部で、内面に斜格子暗紋を施す(５)、内外面に文様を施す青磁碗(４・６)がある。瓦には、三つ巴文軒丸瓦(１)・唐草紋軒平瓦(２)・平瓦(３)などがある。

以上から、時期は中世以降と考えられる。

582溝　(第131・146図)

調査区中央、やや北よりで検出された溝で、溝の南側で584溝と近接するが、接続はしない。

埋土は、シルト層に粗砂が多く混じる。

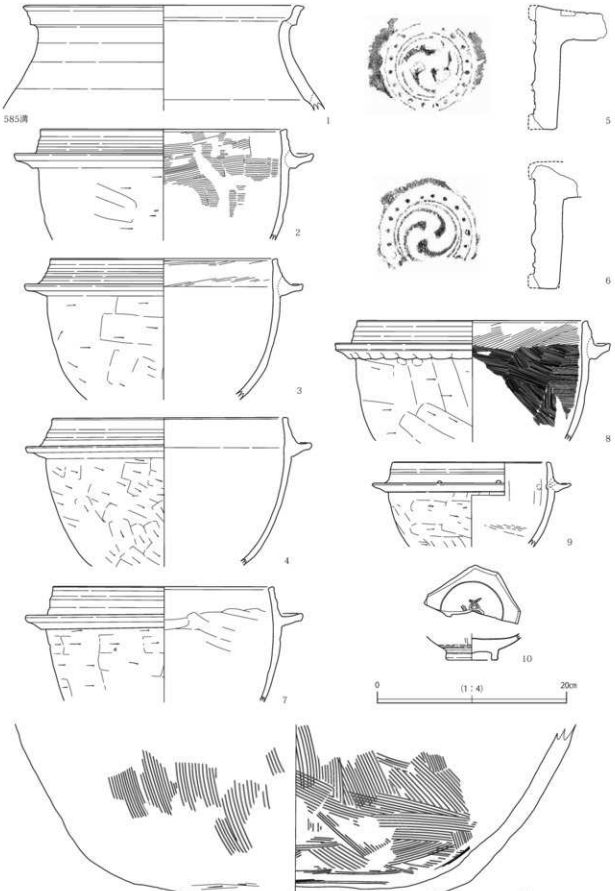
出土遺物は、黒色土器Ａ類の小片１点のみである。

584溝　(第131・146・149図)

調査区の中央部で検出された溝で、幅は最大約７ｍだが、概ね５ｍ弱程度である。深さは約0.25ｍである。

埋土は、585溝と同様であり、１～３層が585溝の１層、４層が同じく２層、５層が同３層に、それぞれ相当すると推測される。

出土遺物には、(第149図－２～11)がある。(２～５・８～９)は瓦質ないしは土師質の羽釜で、外面に煤が付着する。



第149図　584・585溝出土遺物実測図

(11)は土師質の湊焼き大型甕の底部である。

(6・7)は、いずれも、三つ巴紋軒丸瓦である。

以上から、時期は中世末～近世と思われる。

585溝（第131・146・149図、図版42－7）

調査区中央北端で検出された東西方向の溝で、南東側に584溝が、南西側に586溝が接続する。北側は側溝に切られ、調査区外に伸びる。検出幅は2m以上、深さは0.2m程度である。

埋土は、シルトを主とし、1層と3層は層の様相が類似する。明瞭な砂層は観察できず、流水があった状況ではない。

なお、溝底のレベルは、584溝と同様であるが、西側の586溝とは明瞭な段差がある。別の遺構番号を付してはいるが、584溝と一連の遺構である。

98流路（第131・150・151図、図版42－8・80）

調査区南端中央から西端にかけて検出された流路で、幅は10m程、深さは0.5m程である。

埋土は、砂礫混じりのシルトで、全体的に淘汰が悪い。この98流路の北肩は、調査区南端中央から蛇行しながら西北西に向かうことが確認されたが、123落込みより北西側では不明確であった。

一方、南肩は大部分が調査区外であるが、調査区南西端でわずかに肩が検出できた。

なお、調査区南西側で流路を掘削中に120・123落込みなども掘削したが、形状が比較的明瞭であり、これらは流路以前の人為的な遺構であろうか。

また、98流路の南東延長に、後述する第5調査区2201溝の東延長が存在したと推測できる。この2201溝と98流路が同一のものであった可能性も考えられる。

出土した遺物は、(第150・151図)に示すとおりである。

(第151図－1・6)は瓦器小皿で、前者が口径9.0㎝で、内外面に丁寧なヘラミガキを施すのに対して、後者は口径7.8㎝と小さく、内外面にナデを施している。

(11～13・14)は瓦器椀で、(12)は口径15.6㎝を測り、内面に粗いヘラミガキを施し、他は口径13.5㎝前後・器高3.4～4.4㎝を測り、内面のヘラミガキは粗い。高台はわずかに残る。

(2～9)は土師器小皿で、(4・8・9)がいわゆるヘソ皿で、他は1段ナデを施すものである。

(5・10・14)は土師器皿で、(5)が口径12㎝の2段ナデ、(14)が口径14㎝の1段ナデである。

(16～20)は青磁碗で、(17)が箆描蓮華紋であり、(18)の見込みは陽刻である。

(21)は白磁碗で、高台部のみを残す。

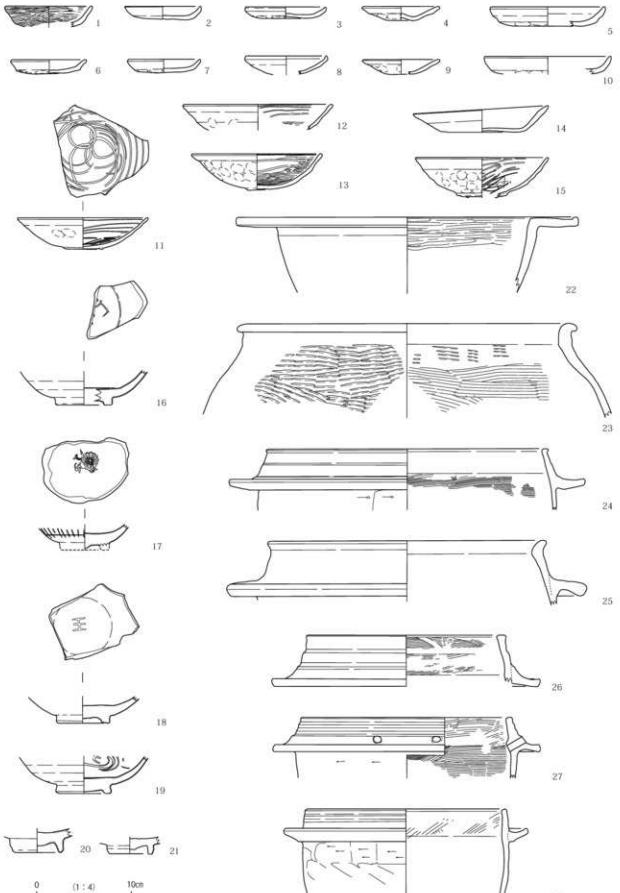
(22)は瓦質火鉢で、水平に伸びる口縁部の端部がわずかにつまみあげられ面をもち、半球状の体部をもつ。内面にヘラミガキを施す。

(23)は大型の瓦質甕で、口径34㎝を測る。口縁端部がわずかに外方へ肥厚する。体部外面に叩き目・内面に粗いハケメを施す。

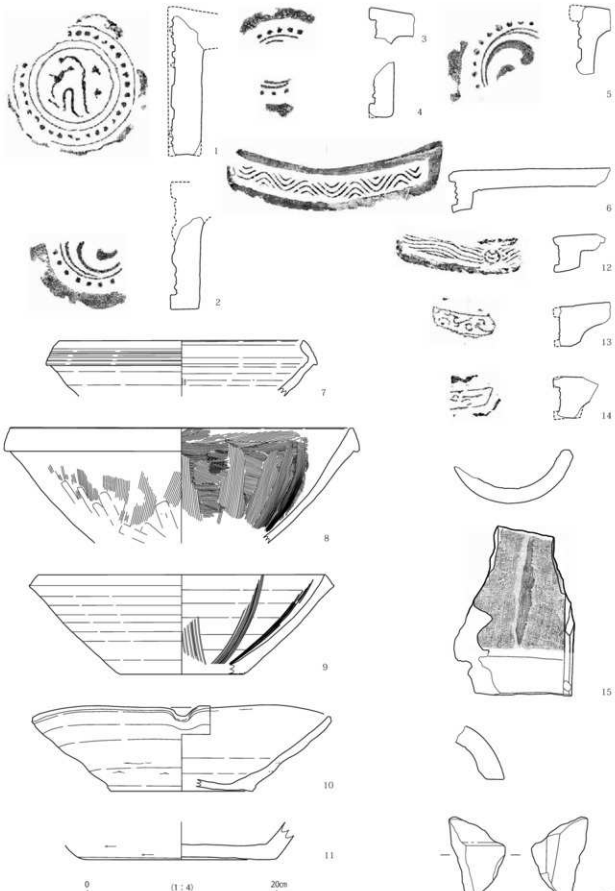
(24～28)は、瓦質ないしは土師器羽釜である。(25)は土師器で、口縁部がわずかに外反し、丸みをもつ。他は、瓦質のものである。(27)は鍔上部に2個1対の円孔を、相対する2方に穿っている。

(第151図－7・9)は備前焼擂鉢、前者は、口縁部が屈曲しさらに内方へ立ち上がるもので、上端部に凹面をもつ。口縁部に疑凹線紋3条を施す。後者は外方へ開く口縁部の端部が面をもつ。

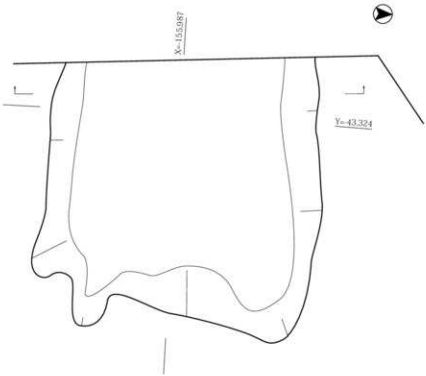
(8)は瓦質擂鉢で、外方へ開く口縁部の端部がわずかに垂下し、面をもつ。外面にハケメ後ヘラケズリ・内面にハケメを施す。



第150図　98流路出土遺物実測図（1）

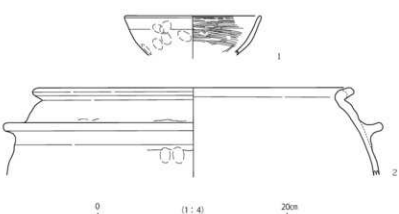


第151図　98流路出土遺物実測図（2）



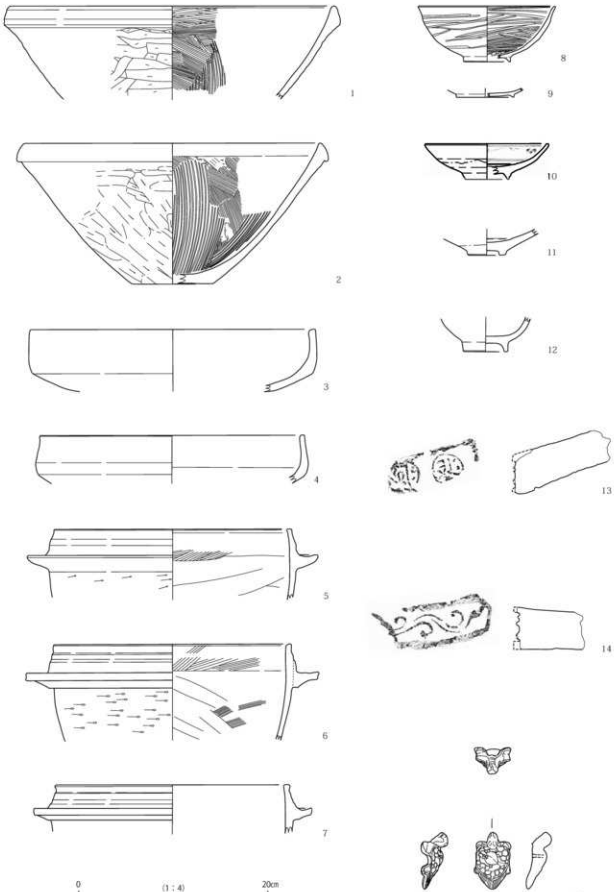
1. 灰　5Y4/1～5/1　粗砂～細礫混シルト～微砂
2. 灰　5Y4/1　粗砂～細礫混シルト～微砂
3. 灰　N4/ ～黄灰　25Y4/1　極粗砂～細礫炭粘土～シルト
4. 灰　5Y6/1　粗砂～細礫
5. 黄灰　25Y4/1～灰　N6/～5/　シルト～細砂
6. 灰　5Y6/1　細砂～細礫

0　(1：40)　1m



0　(1：4)　20cm

第152図　545落込み平面・断面および出土遺物実測図



第153図　包含層出土遺物実測図

(10)は常滑焼捏ね鉢で片口をもつ。外方へ開く口縁部の端部が面をもつ。焼け歪がある。

(11)は須恵質捏ね鉢の底部のみを残存している。

(1)は凡字軒丸瓦・(2～5)は巴紋軒丸瓦の(2)が二つ巴紋で(5)が三つ巴紋である。(6・12)は波状紋軒平瓦・(13・14)は唐草紋軒平瓦、(15・16)は丸瓦である。

以上から、中世～近世までの遺物があり、所属時期は近世以降と考えられる。

545落込み (第131・152図)

調査区北西端で検出された方形の落込みで、586溝の埋没後の掘削である。上部は、98流路の延長部分と推測され、これに切られる。東肩の平面形がやや不正形で、西側は側溝に切られる。検出長は3m以上、幅は約2.8m、深さは最も残りが良いところで1.0m程である。ほぼ垂直に掘りこまれるが、途中階段状を呈する部分も見られる。底面は平坦である。

埋土は、6層に分層され、最下層が細砂～細礫で、5層がシルト～細砂、3層が粘土～シルトで、上層にシルト～微砂が堆積している。全体的に砂礫が多く混じる。

出土遺物は、(1)の瓦器椀と(2)の土師器羽釜が図化できた。前者は、高台部を欠損するもので、口径14.2cmを測る。外面に指押さえを残し、内面にヘラミガキを施す。後者は、口径33.2cmの大型で、内傾する口縁部が短く外反する。鍔部以下に煤が付着する。

以上から、時期は中世前期と考えられる。

6）包含層出土遺物

包含層から出土した遺物には、瓦器椀(第153図－8・9)、瓦質擂鉢(1・2)・瓦質羽釜(5～7)、土師器鉢(3・4)、磁器皿(10)・磁器椀(11・12)、陶器置物(15)などがあり、他に、(13・14)の凡字軒平瓦および唐草紋軒平瓦がある。

4．第5調査区の遺構と遺物

当調査区からは、井戸・土坑・溝・落込みなどが検出された。また、第4調査区で検出された98流路の延長が一部かかる(第157図)。

1)井戸

第4調査区同様、多数の井戸が検出された。

273井戸 (第154～156図、図版45－1)

調査区北東部(9トレンチ)で検出された井戸で、東側を側溝で切られる。長径1.1m・復原の短径約1.0m・深さ1.3mである。

埋土は5層で、上部の1・2層がシルトブロックや粗砂が混じり、以下の3・4層には砂礫が多数混じる。5層は、湧水とこれによる崩落のため、十分に観察できなかったが、層の様相に大きな変化は見られず一括した。

出土遺物には、瓦質の井戸枠(第156図－1)と瓦質羽釜(同図－2～5)がある。いずれも、小破片であった。

以上から、時期は中世末～近世初頭と思われる。

1995井戸 (第154・158図、図版81)

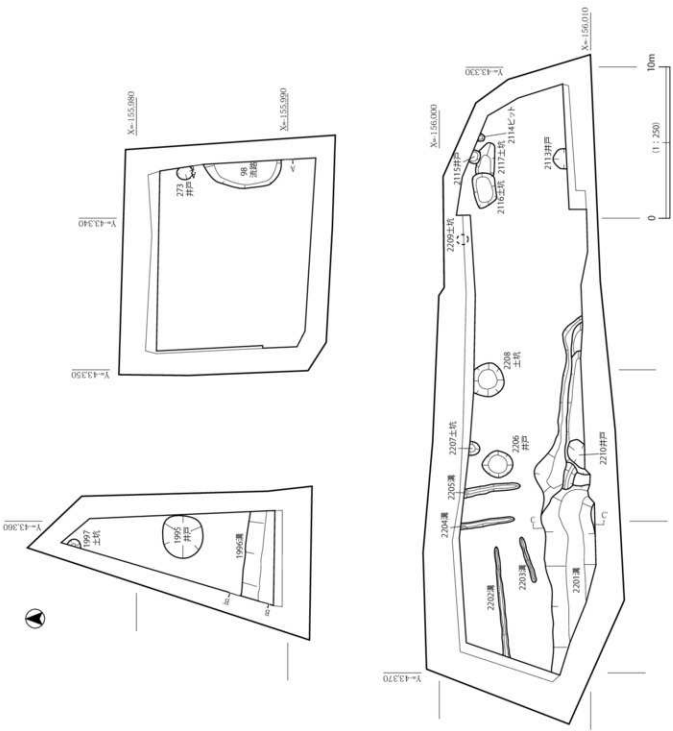
調査区北西部(10トレンチ)で検出された円形の井戸で、直径2.5mを測る。当初、攪乱と誤認していたが、掘削したところ、その形状などから井戸と再判断した。深さは1m以上だが、湧水のため底面まで

は確認できなかった。

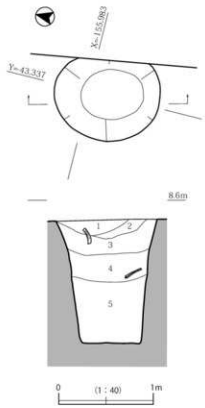
埋土は、ブロックを含むシルトである。

出土遺物は、（第158図－１）の常滑焼壷で、口頸部および体部上端部破片である。短く外反する口縁部の端部がわずかに垂下し面をもつ。体部外面に格子状叩き目を施す。（２）は瓦質の捏ね鉢の口縁部破片で、内面にハケメを施す。（３～５）は瓦質の羽釜で、（５）は口径36.0cmを測る大型である。いずれのものも、口縁部を含む破片で、口縁部に段をもつ。体部外面にヘラケズリ・内面にハケメを施す。

以上から、時期は中世後期に属すと考えられる。



第154図　第５調査区　中世平面図



1. 灰黄　2.5Y6/2～黄灰　2.5Y5/1　シルトブロック・極粗砂～粗砂混粘土～シルト
2. 灰白　5Y7/1～灰　5Y5/1　シルトブロック混極粗砂～細礫
3. 灰　7.5Y6/1～4/1　極粗砂～粗砂混粘土～微砂
4. 灰　5Y6/1～4/1　シルトブロック・極粗砂～粗砂混シルト～微砂
5. 暗緑灰　5G4/1　粘土～シルト

第155図　273井戸平面・断面図

1997井戸　（第154・159図、図版45－５・81）

調査区北西端（10トレンチ）で断面で検出された井戸で、正確な形状は不明である。井戸の東端一部が確認できたと思われる。

確認できた埋土は、暗青灰色～青灰色のシルトで、下部はやや粒度が細かい。

出土遺物は、瓦質羽釜２点（第159図－１・２）と、（３）の須恵器体部片がある。羽釜は同様な形態をもち、口縁部の段がわずかに残る。体部外面にヘラケズリ・内面にハケメを施す。両者伴に煤が多量に付着する。

以上から、時期は中世後期と考えられる。

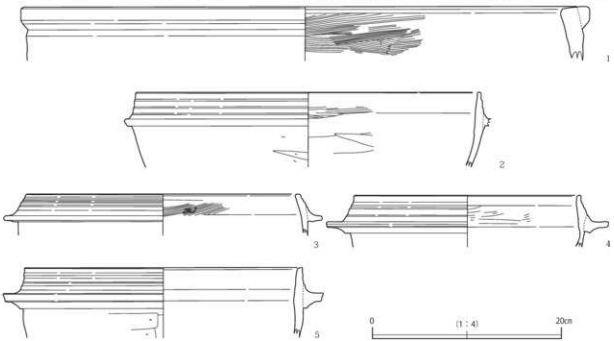
2113井戸　（第154・160図、図版45－２・３・81）

調査区南東端（11トレンチ）で検出された井戸で、南側を側溝で切られる。曲げ物の井戸枠である。直径 1.2 m・深さ約 0.9 mである。井戸枠の径 0.4 m・残存高 0.6 mを測る。

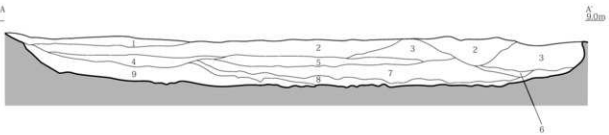
埋土は、掘方が７～11層で、上層の７・８層には地山起源のシルトブロックが多く混じる。同下層の９層以下は粘土～シルトを主とする。

井戸枠内埋土は６層に区分され、いずれもシルト～微砂を主とするが、下層の５層以下には、植物遺体が多く混じる。

出土遺物は、瓦器小皿（２～４）、瓦器椀（５～８）、土師



第156図　273井戸出土遺物実測図



1. 暗青灰　5B4/1～青灰　5B5/1　粘土～シルト
2. 暗青灰　5B4/1～青灰　5B5/1　粗砂混粘土～シルト
3. にぶい黄褐　10YR5/4　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
4. 灰　5Y6/1～5/1　極粗砂～粗砂混シルト～微砂
5. にぶい黄褐　10YR5/4～灰　10Y6/1　粗砂混シルト～微砂
6. 灰黄　2.5Y6/2　極粗砂～細砂
7. 黄灰　2.5Y5/1～暗灰黄　2.5Y4/2　極粗砂～粗砂ブロック混シルト
8. 黄灰　2.5Y5/1～暗灰黄　2.5Y4/2　極細砂～細砂ブロック混シルト
9. 暗　10YR4/4～にぶい黄橙　10YR6/4　極粗砂～粗砂混シルト

第157図　98流路断面図

器羽釜(９・10)、備前焼き壷(１)がある。

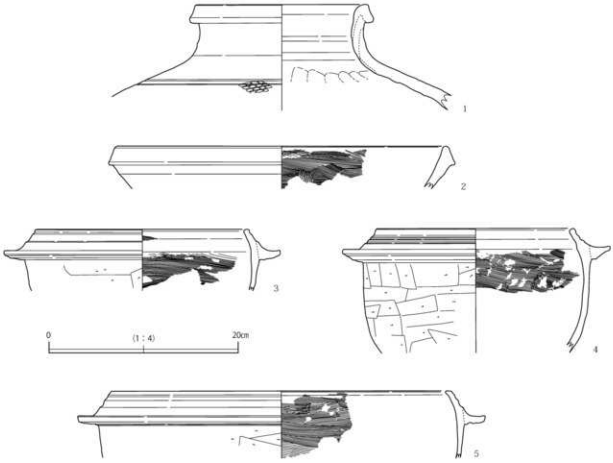
瓦器小皿は、口径 9.5 ㎝・器高 2.2 ㎝程で、内面にヘラミガキを施す。

瓦器椀は完形のものが無く、口径14～17㎝で、外面に粗いヘラミガキを施し、指押さえを残す。内面は、やや粗いヘラミガキで、底部に粗く平行暗紋ないしは斜格子暗紋を施す。

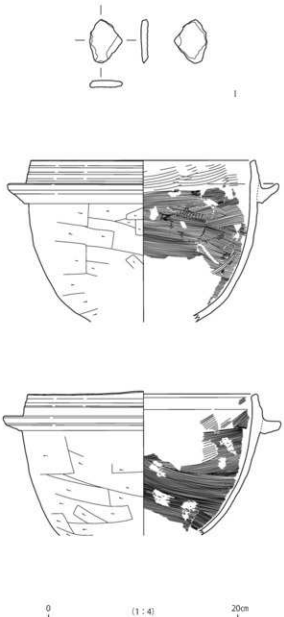
土師器羽釜は、いずれも口縁部破片で、短く外反する口縁部をもつ。

備前焼き壷は、大型でわずかな平底をもつ、体部下半を残す。

以上の遺物から、中世前期に属すと考えられる。



第158図　1995井戸出土遺物実測図



第159図　1997井戸出土遺物実測図

2206井戸　(第154・161図、図版45－4・82・83)

調査区南西部(12トレンチ)で検出された素掘りの不正楕円形井戸で、長径 2.0 m・短径1.55m・深さ 1.6 mである。

埋土は13層に区分されるが、大きくは、3層である。上層の1～4層が細砂混じりのシルトを主としている。中層の5～7層は粘土～微砂層で、以下の下層が粘土～シルトで、比較的粘性が高い。

9層中には、特に、多くの遺物が混じっていた。

出土遺物には、(第161図－1)の備前焼き壺の上半部を残すもの、(2・3)の瓦質の羽釜、(4・5)の瓦質の捏ね鉢および(6)の瓦質の擂鉢がある。

他に、(7～10)の軒平瓦・(11)の軒丸瓦などがある。

以上から、時期は中世後期に属すと考えられる。

なお、これら以外に、調査区南東部では断面にかかる2115井戸も検出されている。直径約0.95m・深さ 1.4 mである。

埋土は、上層がシルトブロック混じりのシルト層で、最終的に埋め戻され、以下の層は砂混じりのシルト層である。埋土の様相が、上層と下層でやや異なる。

遺物は出土していない。

2）土坑

土坑は、調査区南半部(11・12トレンチ)で、数基検出されている。

2116土坑　(第154・162図)

調査区南東部(11トレンチ)で検出された、不正隅丸長方形の土坑で、長辺 2.3 m・短辺 1.4 m・深さ 0.1 mである。

埋土は4層で、1・3層が粗砂で、2・4層が粘土～シルト層である。

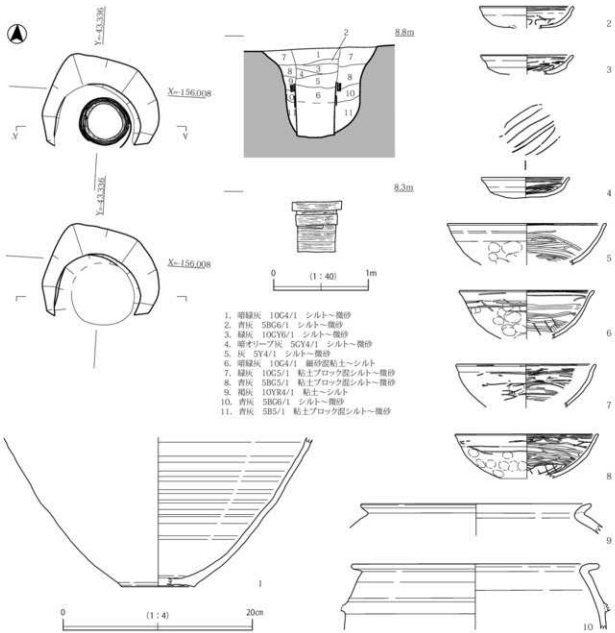
2117土坑を切る。

出土遺物は、瓦器椀が1点のみ図化できた。口径13.2cm・器高 3.5 cmを測る。内面に、粗い螺旋状のヘラミガキを施す。わずかな高台が付く(第162図－1)。

以上から、時期は中世である。

2207土坑　(第154・162図)

調査区中央部(12トレンチ)で検出された楕円形の土坑で、北側は調査区外である。検出長 0.6 m・短軸 0.7 m・深さ0.15mである。



第160図　2113井戸平面・断面および出土遺物実測図

埋土はシルト～微砂が１層である。

出土遺物は、瓦器椀が１点のみ図化できた（第 162 図－２）。口径14.8㎝・器高 5.0 ㎝を測る。残りが悪く調整は不明である。

以上から、時期は中世と考えられる。

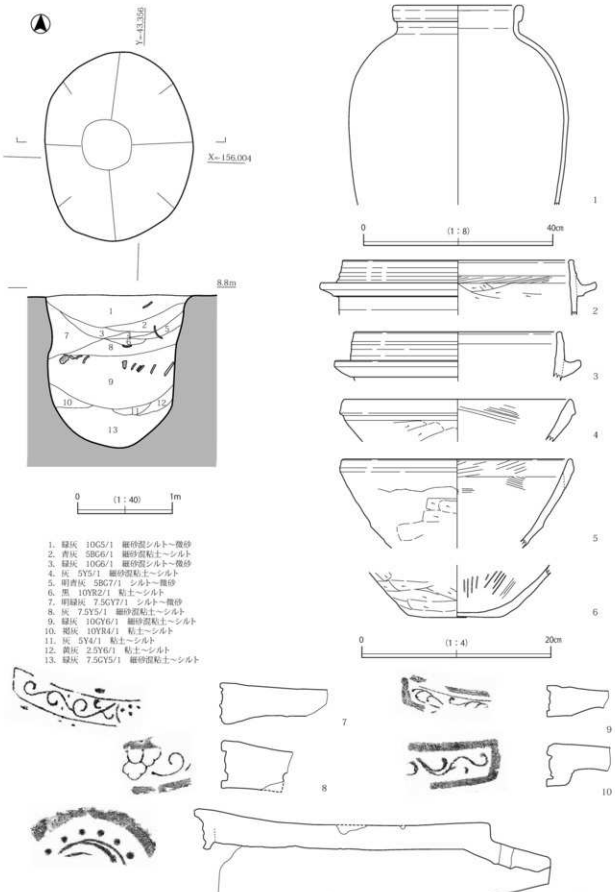
2209土坑　（第154・162図、図版45－６）

調査区南東部（11トレンチ）の北側断面で確認できた土坑で、正確な形状は不明である。

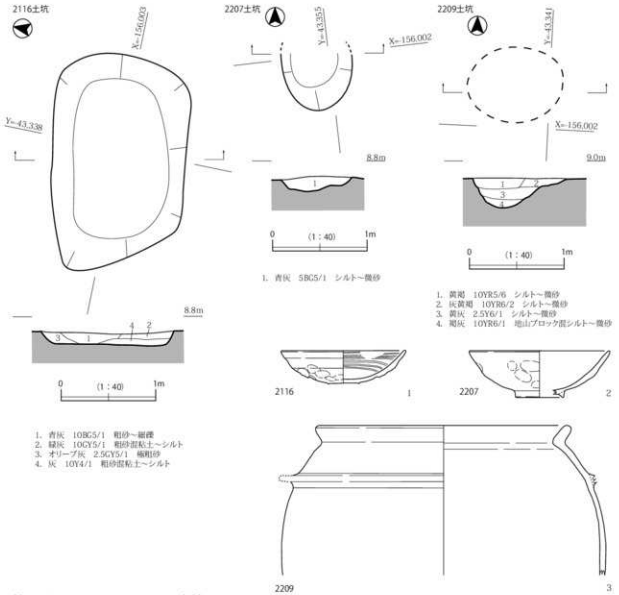
埋土は４層に区分でき、シルト～微砂を主とする。最下層の４層には地山ブロックが混じるが、小粒でさほど顕著には見られない。３層はやや淡い色調で、上下層よりやや細粒である。

出土遺物は、（（第 162 図－３）に示す、土師器羽釜が１点のみである。

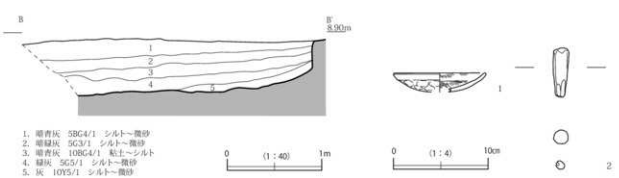
以上から、時期は中世である。



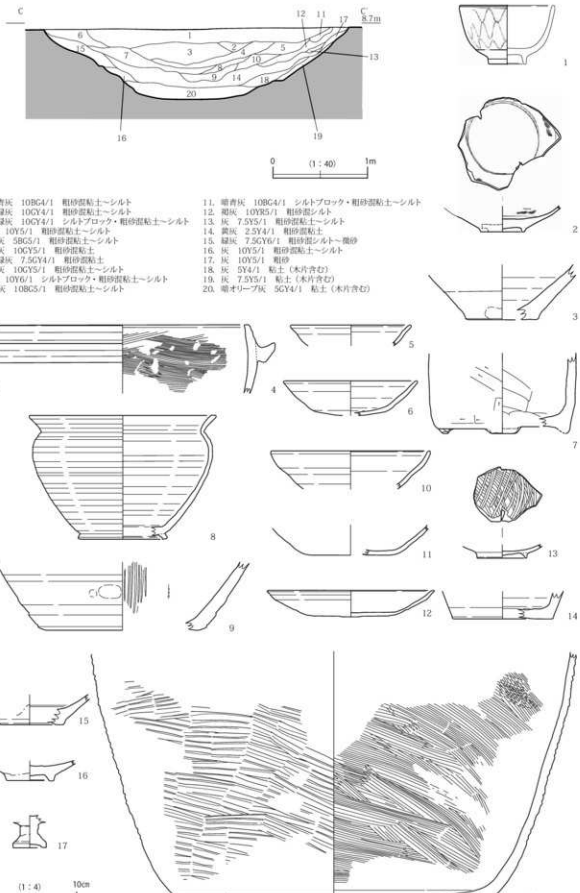
第161図　2206井戸平面・断面および出土遺物実測図



第162図 2116・2207・2209土坑平面
・断面および出土遺物実測図

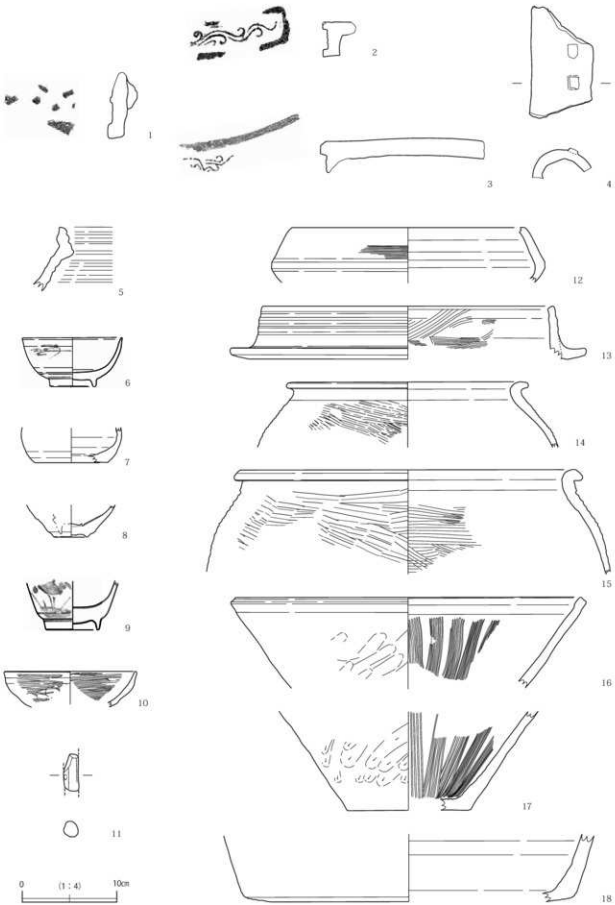


第163図 1996溝断面および出土遺物実測図



1. 暗青灰　10BG4/1　粗砂混粘土～シルト
2. 暗緑灰　10GY4/1　粗砂混粘土～シルト
3. 暗緑灰　10GY4/1　シルトブロック・粗砂混粘土～シルト
4. 灰　10Y5/1　粗砂混粘土～シルト
5. 青灰　5BG5/1　粗砂混粘土～シルト
6. 緑灰　10GY5/1　粗砂混粘土
7. 暗緑灰　7.5GY4/1　粗砂混粘土
8. 緑灰　10GY5/1　粗砂混粘土～シルト
9. 灰　10Y6/1　シルトブロック・粗砂混粘土～シルト
10. 青灰　10BG5/1　粗砂混粘土～シルト
11. 暗青灰　10BG4/1　シルトブロック・粗砂混粘土～シルト
12. 暗灰　10YR5/1　粗砂混シルト
13. 灰　7.5Y5/1　粗砂混粘土～シルト
14. 黄灰　2.5Y4/1　粗砂混粘土
15. 緑灰　7.5GY6/1　粗砂混シルト～微砂
16. 灰　10Y5/1　粗砂混粘土～シルト
17. 灰　10Y5/1　粗砂
18. 灰　5Y4/1　粘土（木片含む）
19. 灰　7.5Y5/1　粘土（木片含む）
20. 暗オリーブ灰　5GY4/1　粘土（木片含む）

第164図　2201溝平面・断面および出土遺物実測図



第165図　2210落込み出土遺物実測図

3）溝

1996溝　(第154・163図)

調査区北西部(10トレンチ)で検出された概ね東西方向の溝で、南肩は調査区外である。検出長幅 6.3 m・検出幅 3.1 m・深さ 0.6 mを測る。

埋土は5層からなり、シルト～微砂が堆積している。

出土遺物は、(第163図－1)の瓦器小皿と、(2)の瓦質羽釜の足のみがある。

以上から、時期は中世である。

2201溝　(第154・164図、図版45－7)

調査区南端(12トレンチ)で検出された東西方向の溝で、南肩は一部で確認できたのみである。検出長23.8m・幅 3.1 m・深さ0.75mを測る。

埋土は20層に区分され、下層の18～20層には粘土が堆積しており、それ以上では粗砂が混じる粘土～シルト層を基本としている。特に、下部では有機物も含む。数度に渡り、再掘削がおこなわれている。

古代水田の項でも記したように、この溝は坪境溝の可能性が考えられる。検出範囲の東端で南に屈曲しているようにも見えるが、基本的には東西方向に溝が掘削されていたと考えられる。

(第164図)に示す出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器などがある。

(1)は伊万里系の網目紋碗で、(2)は伊万里系染付け皿で、口縁部端部を欠損する。(17)は磁器の仏具の脚部である。(3)は備前焼き壷底部、(7)は土師器火鉢で、口縁部を欠損する。四脚である。

(4)は瓦質羽釜の口縁部破片で、(13)は瓦器椀高台部で、(9)は備前焼擂鉢の底部である。(15・16)は白磁碗の高台部を残している。

(8・14)は須恵器壷、(5～12)は土師器坏である。

以上の出土した遺物は、古代から近世まで幅広くあるが、遺構の所属時期は近世と思われる。

4）落込み

落込みは、南端部で1箇所確認している。

2210落込み　(第154・165図、図版83)

調査区南端中央で検出された落込みで、南側は調査区外である。当初、2201溝として掘削していたものの、この部分のみ深まるため、2210落込みとして別呼称したものである。

埋土の状況も2201溝と類似するが、調査区南壁の断面観察からは、2201溝に切られると推測される。

なお、素掘りの井戸の可能性もある。

検出長約 1.7 m・幅 1.5 m・深さ 0.5 mを測る。

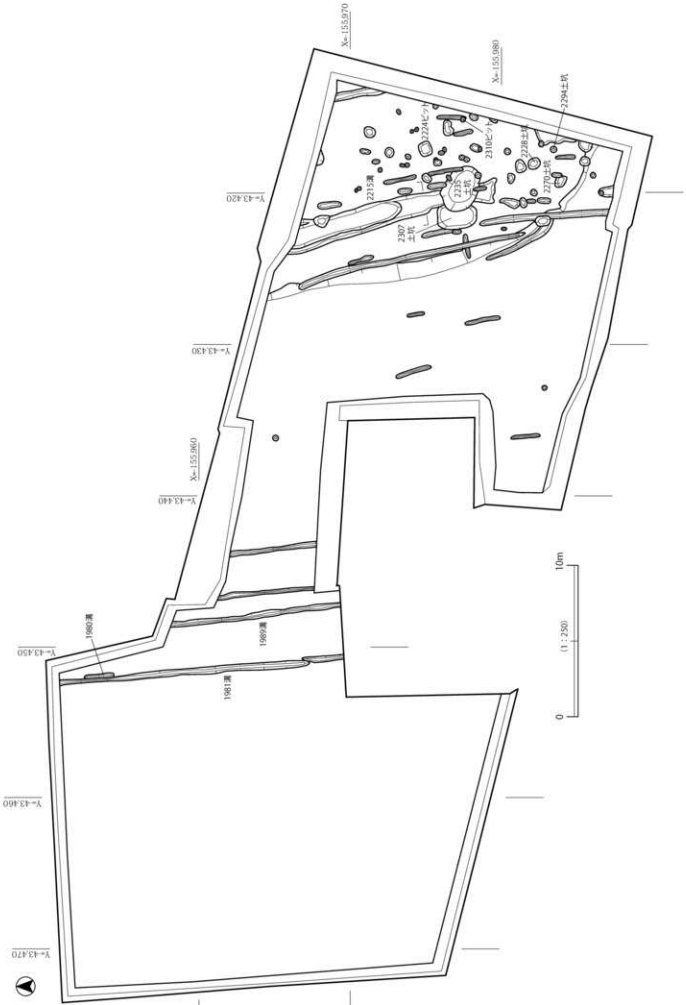
出土遺物には、近世磁器・土師器、瓦器椀・瓦質土器、備前焼き・常滑焼などがある。他に、瓦がある(第165図)。

(6・9)は染付け碗で、(8)は志野焼き碗である。(5・7・18)は備前焼の擂鉢、小型壷および大型甕の底部である。(12)は土師器鉢の口縁部破片で、(15)は土師器湊焼きの大型甕である。

(10)は瓦器椀で、(13)は瓦質羽釜、(14)は同甕、(11)は同三足の脚部のみを残している。(16・17)は常滑焼の擂鉢の口縁部破片と底部を残すものである。

瓦は、(1)が巴紋軒丸瓦、(2・3)が唐草紋軒平瓦、(4)は道具瓦と思われる。

以上から、時期は近世と考えられる。



第166図　第６調査区　中世平面図

5．第６調査区の遺構と遺物

調査区の東端が相対的に高まり、その部分で多数の遺構が検出された。

1）土坑

土坑は東端部で、数基検出された。

2228土坑　（第166・167図、図版50－２・83）

調査区南東部で検出された楕円形の土坑で、長軸0.85m・短軸0.7 m・深さ0.65mを測る。

埋土は４層に区分され、シルトを主とし、最下層の４層が相対的にやや質が細かい。１層には地山起源のブロックが混じり、特に10cm大以上のブロックが目立つ。掘削時には、若干の湧水が見られたが顕著ではない。３層は、当遺跡に顕著に現れる地震変動による地山ブロックである。

出土遺物には、（第167図）に示すように、瓦器椀がある。口径15cm前後・器高5.2 cmを測る。外面に指押さえを残し、内面にやや粗いヘラミガキを施す。。

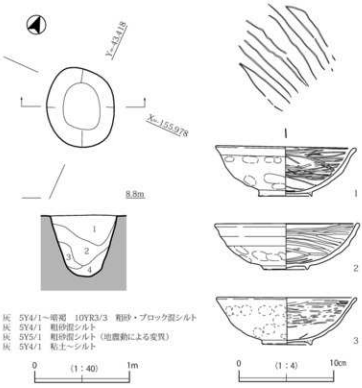
以上から、時期は中世前期に属す。

2307土坑　（第168・168・169図、図版50－５・84）

調査区東部で検出された隅丸長方形の土坑で、後述する2235土坑に切られる。長軸2.6 m・推定短軸約1.7 m・深さ0.65mである。

埋土は17層からなり、最下層に褐灰色の粘土～シルト、直上の16層に炭化物を含む黒褐色粘土～シルト、15層に黄灰色のシルト混じり粗砂～中砂層が薄く見られ、この直上に網代状の木製品が土坑中心部で見られた。さらに、この上層には褐灰色粘土～シルト、褐灰色～黄褐色の粗砂～シルトの堆積が見られる。

その後、６・７層などを切るように再掘削がなされたようで、その部分に、上層の１～５層が堆積する。その埋土は最下層（４層）に粘土～シルトが堆積し、その後極粗砂～粗砂層で埋まる。



第167図　2228土坑平面・断面図および出土遺物実測図

出土遺物は、（第169図－１～10）に図示した。

（１～５）は土師器小皿である。

（１・４）が口径9.5 cmの２段ナデを施し、（２・３・５）が手の字口縁をもつもので、口径９cm前後である。

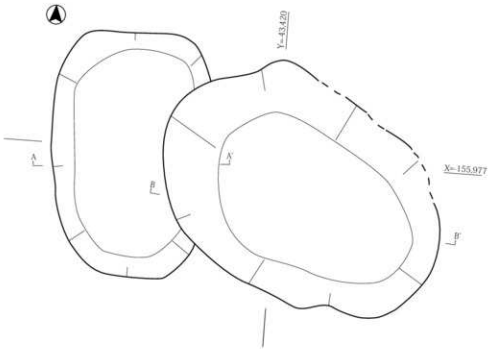
（６）は、土師器皿で、口径15.6cmで１段ナデを施す。

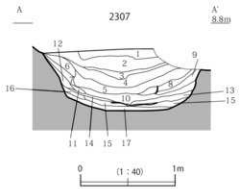
（７）は土師器羽釜で、口径20.0cmを測るやや小振りのもので、底部を欠損する。内外面にナデを施す。

外面に煤が多量に付着する。

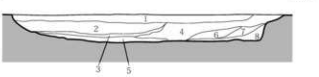
（８～10）は瓦器椀で、口径15.6cm・器高5.2 cmを測る。内外面にヘラミガキを施し、内面底部には斜格子状の暗紋ないしは平行暗紋を施す。

以上から、時期は中世前期に属す。





1. 褐灰　10YR6/1～褐　7.5YR4/6　小礫混極粗砂～粗砂
2. 褐灰　10YR5/1～褐　7.5YR4/6　小礫混極粗砂～粗砂
3. 明褐　7.5YR5/8～褐灰　10YR6/1　極粗砂～粗砂
4. 褐灰　10YR5/1　粘土～シルト
5. 黄灰　2.5Y5/1～明褐　7.5YR5/8　粗砂混粘土～シルト
6. 褐灰　10YR5/1～褐　7.5YR4/6　小礫混粗砂～中砂
7. 褐　7.5YR4/6～暗赤褐　5YR3/4　粗砂
8. 褐灰　10YR5/1～黄褐　10YR5/8　粗砂～中砂褐灰
9. 褐灰　10YR5/1～黄褐　10YR5/6　粗砂～中砂
10. 黄灰　2.5Y5/1　粘土～シルト
11. 10YR4/1～黄褐　10YR5/8　粗砂～中砂
12. 褐灰　10YR6/1～褐　10YR4/6　粗砂～中砂
13. 褐灰　10YR4/1　粘土～シルト
14. 黒褐　10YR3/1　粘土～シルト（炭化物含む）
15. 黄灰　2.5Y4/1　シルト混粗砂～中砂
16. 黄褐　10YR5/6～褐灰　10YR5/1　中砂～細砂混シルト
17. 褐灰　10YR5/1　粘土～シルト



1. 灰白　10YR7/1～黄褐　10YR5/8　シルト混粗砂
2. 褐灰　10YR6/1～黄褐　10YR5/8　シルト混極粗砂～粗砂
3. 褐灰　10YR4/1　シルト～微砂
4. 緑灰　10GY5/1　中砂混灰
5. 2.5Y6/1～黄褐　10YR5/8　粗砂～中砂混シルト
6. 灰　5Y4/1　中砂
7. 緑灰　7.5GY5/1　中砂
8. 緑灰　10GY6/1　細砂～中砂

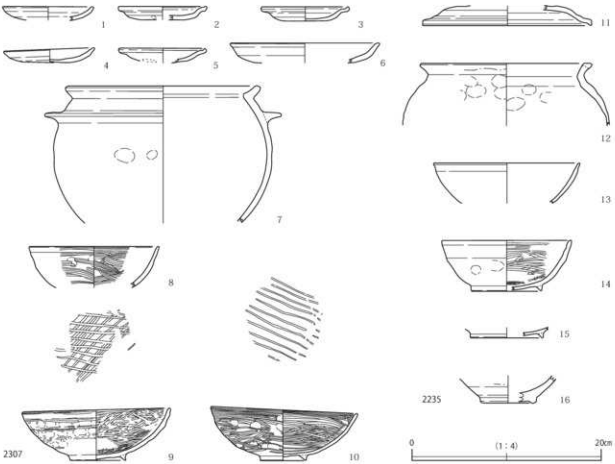
第168図　2307・2235土坑平面・断面図

2235土坑　（第168・169図、図版50－３・84）

調査区東部で検出された土坑で、上述の2307土坑を切る。長軸3.25m・短軸 2.2 m・深さ 0.3 mである。

埋土は８層からなり、４層以下の下層に細砂～中砂が堆積し、上層にシルト混じりの粗砂である。

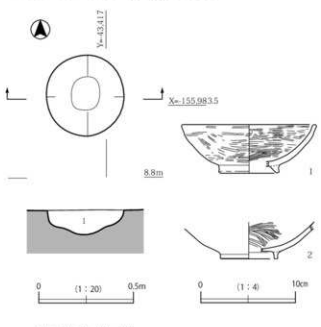
出土遺物は、（第 169 図－11～16）に図示した。(11)は須恵器坏Ｂ蓋の口縁部破片で、(12)は土師器甕である。



第169図　2307・2235土坑出土遺物実測図

(13)が瓦器椀で、(14・15)は黒色土器椀A種で、の口径13.6㎝・器高 5.4 ㎝を測る。内面にヘラミガキを施す。(16)は白磁碗の底部である。

以上から、時期は中世前期である。



第170図　2294土坑平面・断面および出土遺物実測図

2294土坑　(第166・170図、図版50－４)

調査区南東端部で検出された土坑で、上述の2228土坑の南東側約２mに位置する。直径 0.4 m・深さ0.15mを測る。

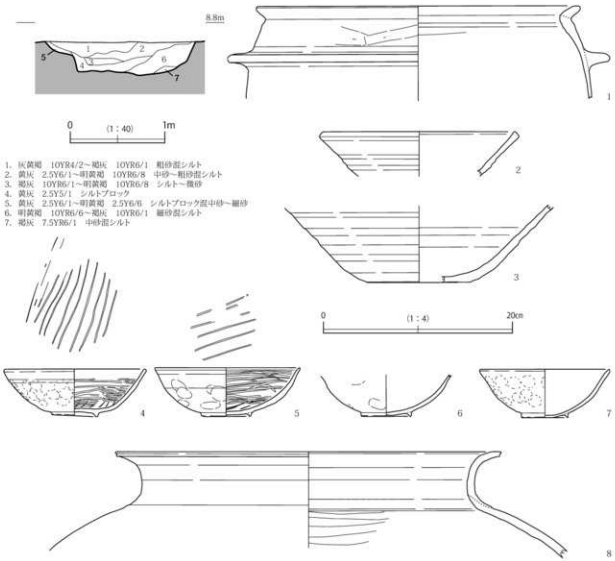
埋土は中砂～粗砂が１層である。

出土遺物は、(第 170 図)に図示する瓦器椀が２点である。(１)は、口径14.0㎝・器高 5.2 ㎝を測る。内外面にヘラミガキを施す。

以上から、時期は中世前期である。

これらの他、調査区南東部に、2294土坑の西約２mで2270土坑が検出された(第 166 図)。長軸約 0.9 m・短軸約 0.7 m・深さ約0.15mである。

埋土は、３層に分層でき、上層が灰色（５Ｙ５／１)中砂、中層が黒褐色(7.5ＹＲ３／２)シ



第171図　2215溝平面・断面および出土遺物実測図

ルトで地山などのブロックが多く混じり、下層が中層と類似るが、色調が黒褐色(10ＹＲ２／３)とやや淡い。埋土の中層以下は、黒色を呈し基本層序のⅡ層系であるが、上層(Ⅰ層)は基本層序のⅠ層系である。

出土遺物は、瓦器椀、須恵器、土師器などのいずれも小片が出土している。これらから、時期は中世頃と考えられ、埋土の様相と矛盾しない。

２）溝

溝は、南北方向の小溝が平行するように数条あるが、遺物の出土がなく、時期が確定できるものはわずかである。

2215溝　(第166・171図、図版50－７・84)

調査区東部の高まり上で検出された溝で、北側は調査区外へ伸びる。南側を2235土坑に切られる。検出長約15m・幅は1.1～1.6m・深さ0.4ｍである。北側がやや低くなる。

埋土は７層に分層され、１・２層の上層に粗砂が混じるシルトが堆積し、中層の５層はシルトブロック層で、下層の６・７層は中砂～細砂が混じるシルト層である。

遺物には、(第171図)に示す土器がある。

（1）は土師器羽釜の口縁部破片で、（2・3）は東播系の須恵器捏ね鉢である。前者が口縁部破片で、後者が底部を残すものである。

（4～7）は瓦器椀で、（4・5）は口径15cm前後・器高5.0・5.4cmを測り、残りの2点は口径13.6cm・器高5.2cmである。前者は内面にやや粗いヘラミガキ、底部に平行暗紋を施す。後者は、表面摩滅のため、調整不明である。

（8）は常滑焼の甕の口縁部破片で、口径40.8cmの大甕である。外反する口縁部の端部が凹面をもつ。

以上から、時期は中世前期に属すと考えられる。

1989溝・1981溝・1980溝　（第166図）

いずれも調査区中央やや西側で検出された、南北方向の小溝である。幅0.5m・深さ0.1～0.2m程度の浅い小規模な溝である。

埋土は基本層序Ⅰ層系である。

出土遺物は、1989溝からは見られなかったが、1980溝と1981溝からは、いずれも土師器の小片がわずかに出土しているのみである。

なお、これら以外の調査区東端の高まりより西側で検出されている同様の小溝は、いずれも耕作に伴う素掘り溝であろう。

3）ピット

ピットは、土坑や溝と同様に東端部の高まり上で検出されたが、建物として復原できるものがなかった。

2224ピット　（第166図、図版50－1）

調査区東端で検出されたピットで、平面形は隅丸方形状を呈し、断面形逆台形である。長辺0.9m・短辺0.75m・深さ1.0mである。柱根の下部が残存する。

埋土は、掘方部分の下層がシルト混じり粗砂、中層の一部が細砂混じりシルトで、上層が下層と同様のシルト混じり粗砂である。柱痕部分は、極粗砂～粗砂である。

少々平面規模は小さいが、第2調査区で検出された古代の掘立柱建物を構成する柱穴群と似る。このピットと対になるような柱穴が見られなかった。

出土遺物は、柱材を除き、土師器の小片のみであり、詳細な時期は不明である。掘方埋土上層が、基本層序Ⅰ層系と考えられることからも、遺構の時期は中世と考えられる。

第５章　総括

第１節　遺構の変遷

大和川今池遺跡における、当調査地の成果は前章で述べてきたが、これらを総括的に見るならば、大きく、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期・後期、古代、中・近世の４時期に区分される。ここでは、調査地全体を見てみることとした。

１．弥生時代後期～古墳時代前期

弥生時代中期以前の遺物は、石器類を除き、皆無である。弥生時代後期の遺構は、第２調査区の中央部で検出されるが、時期の確定できる遺構としては、894土坑があり、集落の縁辺部を構成しているようである。

894土坑から出土した多量の遺物の特徴としては、長頸壷の口縁部の長さが太く短くなる傾向と、体部の調整にハケメが多用されることや、甕の体部が球形に近くなるものがあることなどから、新しい傾向を読み取ることができる。

同様に古墳時代前期初頭の庄内・布留期の遺構がその周辺で、土坑などがわずかに検出されるが、さらに、集落としての様相からは希薄である。

865・1140・1152土坑からは、庄内甕や小型の椀形高坏などが出土し、1017土坑からは、小型器台が出土している。

さらに、409・897・916落込みからは、庄内甕や二重口縁壷・手焙形土器などが出土することからも、古墳時代前期初頭に属すものである。

第３調査区の17・18溝を境に、その西側では、これらの時期の遺構が全く検出されなくなり、遺物も出土しない。

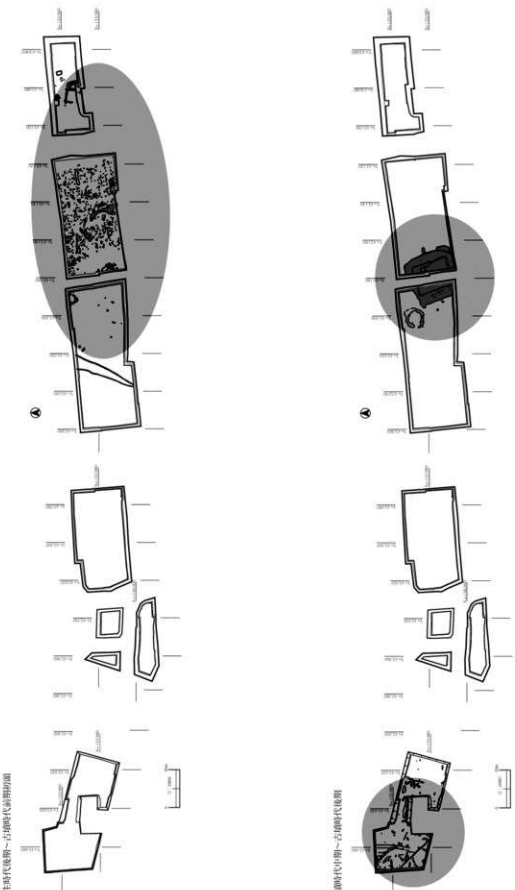
これらの状況は、包含層から出土した遺物からもいえ、第２調査区からが最も多く、第１・３調査区からわずかに出土する以外は、皆無である。

それは、先述したように、第２調査区が、T.P.9.1～9.2mと最も遺構面として安定しており、両側に向かって下がっていくことからもうなずけるものである。弥生時代後期～古墳時代前期の集落は、当遺跡の中でも検出されていないが、第２調査区の南側に拡がると考えられる。

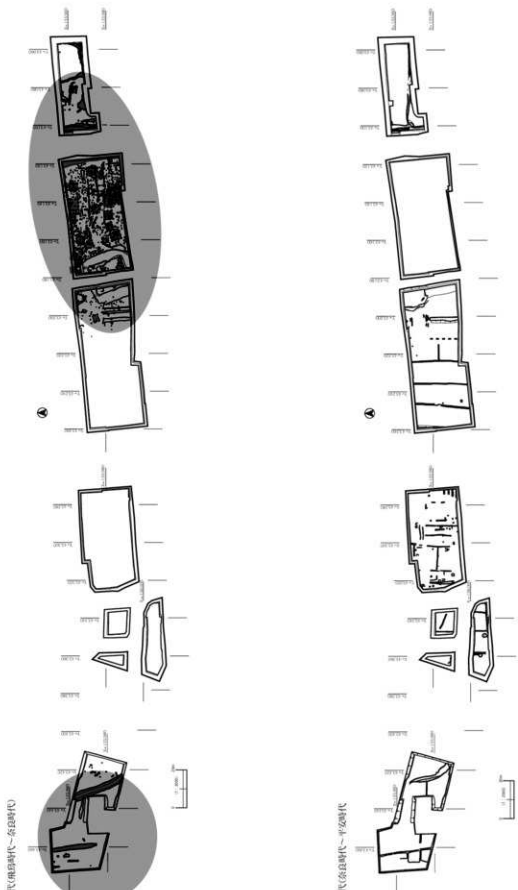
２．古墳時代中期・後期

古墳時代中期になると、第２・３調査区で、一辺約20mの方墳が造られる。この古墳１は家型埴輪を７個体以上・円筒埴輪を20数個体以上もっており、小さい古墳の割りに埴輪が多数設置されていた様子が窺われる。さらに、第３調査区の古墳１に隣接するように検出された1913溝を円墳と捉えるならば、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の集落域と重なるように、微高地上に古墳群が造営されていた可能性がある。

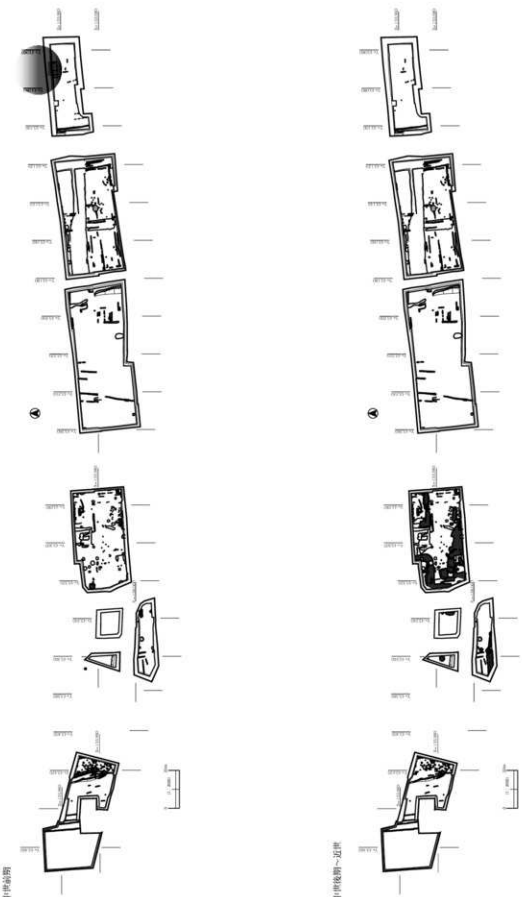
残念ながら、古墳１の主体部は、現代水路によって、喪失しているが、当遺跡周辺にも、５世紀代の小古墳群が埋没していると考えられる。



第172図　大和川今池遺跡変遷図(1)



第173図　大和川今池遺跡変遷図(2)



第174図　大和川今池遺跡変遷図(3)

なお、古代の井戸枠に転用された『日置荘型埴輪』が出土することから、古墳1に引き続いて、6世紀代にも、これらの埴輪を設置した古墳が近隣に造営されていた可能性も否定されるものではない。

このように、当遺跡で今までに、検出されていなかった埋没古墳が確認されたことにより、周辺地域にこの時代の集落があったことも予測される。

古墳時代後期の遺構は、散見されるものの、面的な拡がりは希薄である。ただし、第6調査区の南西端部で検出された2106土坑からは、一括の須恵器が出土しており、より西側でこの時代の集落が拡がっている可能性を示唆することができた。

3．古代

古代の遺構面は、基本的には、地山直上の弥生時代後期～古墳時代の遺構と同一面で検出される遺構群と、その上面の水田面の2面からなり、第6調査区でのみ水田面の上にもう1面検出され、計3面がある。

1）集落域

先述したように、古代に属す遺構が検出されたのは、第1～3調査区および第6調査区である。これは、遺構面が前代と同様に第2調査区が最も高く、両側に低くなり、第5調査区でT．P．8.0～8.1mと最も低くなり、第6調査区では、西側に向かって高くなっていることからも検証されるものである。

掘立柱建物群は、第1・3調査区で各1棟ずつ検出される以外は、第2調査区で16棟検出され、計18棟がある。これらの掘立柱建物群の構造は、遺構の項でも記述したが規模や方向性などから、数群に分かれることが判明した。掘立柱建物の切り合い関係が希薄であることと、遺物の出土する柱穴が少ないことから、時期の確定には至らなかった。掘立柱建物の並びから想定して南北にさらに拡がる様相を見せる。

344・1135井戸などから出土する一括遺物から、飛鳥時代Ⅱ～奈良時代に属すと考えられるものである。

第6調査区では、土坑・溝・ピットなど遺構が散見され、遺物もわずかに出土している。

包含層からの出土遺物は、多寡があるものの全域からある。第1・6調査区から灰釉陶器や緑釉陶器が出土することから、他の調査区よりも新しくなる。

また、第1・2調査区間には、阿麻美許曽神社参道（下高野街道）が現在でも使用されており、第1調査区西端部および第2調査区東端部で検出された溝(2444・335溝)がその側溝と考えるならば、神社建立の大同年間（大同元年＝806年頃）と差異が生じないと考えられる。

2）生産域

水田面は、第2調査区を除く全域から出土しており、T．P．8.4～8.6mに立地するところから、第2調査区部分がこの時期も、まだ周辺よりも高かったと推測される。第6調査区では、3枚ある遺構面のうち、第2面目に水田面が検出されており、第Ⅱ－1面の1979溝から出土した遺物に緑釉陶器や黒色土器椀A類が出土していることから、この面の時期が9世紀中頃となる。このことから、この水田面は、奈良時代以降から9世紀前半の時期に該当すると考えられる。

3）集落域

この面の調査は、第6調査区西端部のみで検出されているため、詳細は不明である。南北方向溝が数条検出されることから、これら以西の集落の東辺を区切る溝群の可能性もある。このことは、第6調査

区が、西端部で0.2～0.3mの段差でT.P.8.6～8.8mと西に向かって高くなることからも傍証される。

4．中近世

中近世の遺構が検出されるのは、全域である。この遺構面は、第1調査区がT.P.9.0mを測り、第5調査区に向けてT.P.8.4mと徐々に低くなり、そこから第6調査区に向けて徐々に高くなり、西端ではT.P.8.7mとなる。

中世と断定できる遺構は、深さがある井戸や土坑である。

599井戸は、この時期の遺構としては最も古いもので、黒色土器A・B類が出土することから、11世紀前半と考えられる。

次いで、第4調査区Ⅰ－2層および545落込み、第5調査区の2113井戸、第6調査区の2228・2307・2235土坑および2215溝などである。いずれも、瓦器椀を含むもので、中世前期の範疇にはいるものである。ただし、土師器・常滑焼・備前焼などを含むが、輸入陶磁器をほとんど含んでいない一群である。

第1調査区で検出された掘立柱建物は1棟のみのもので、調査区北側に伸びることから、さらに北側に建物が検出される可能性をもつ。遺構からの遺物が出土していないことから、時期は確定できていないが、埋土の状況から中世と考えられるため、ここに記述しておく。

同調査区の西端部で畦畔を検出していることから、第3調査区にかけて、耕作面が拡がっていた可能性がある。

さらに、中世後期～近世にかけての遺構の内、確実なものとしては、第4・5調査区に拡がる溝群や流路・井戸などがある。

中世後期～近世の遺物のなかで、特徴的なものとして、この地域特有の瓦質井戸枠が上げられる。この井筒は、焼きの甘いもので、瓦質羽釜と同様に土師器化傾向の強いものである。

他に、各遺構から軒丸瓦・軒平瓦などの瓦類が多数出土しており、完形になるものが少なく、中には破損後煤が付着するものもある。中世から近世にかけてのもので、従来出土しているものと差異のないものである。

以上、時期を追って調査区を眺望してきた。

本遺跡は、南北約1㎞・東西約1.5㎞と広範囲におよぶ。既存の調査も中心部北半(下水処理場)の調査が主に行われており、自然河川が作用する微高地と氾濫原が遺跡の成り立ちを如実に現している。

今回の調査では、今まで知りえなかった北東部の様相を窺うことができた。それらにより、各時期単位で、幾つかの画期があることが判明した。遺跡全体としては、ほんの一部であることは歪めないが、新たな知見を得ることができた。

写　真　図　版

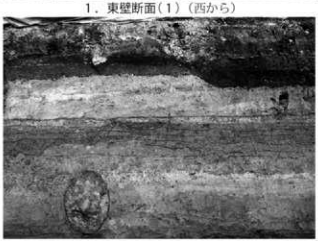
１．大和川今池遺跡　遠景（西南西から）

図版２　出土遺物

１．大和川今池遺跡　古墳１・779土坑

１．東壁断面（１）（西から）

２．東壁断面（２）（西から）



３．東壁断面（３）（西から）

４．東壁断面（４）（西から）

５．第３面　全景（西から）

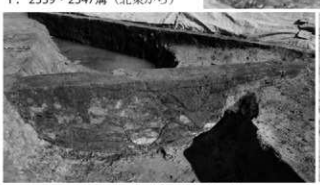
図版４　第１調査区

１．第３面　西半部全景（南から）

２．第３面　東半部全景（南西から）

図版５　第１調査区　弥生時代後期～古代

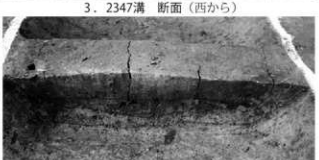
１．2339・2347溝（北東から）



２．2339溝　断面（南西から）

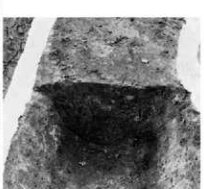
３．2347溝　断面（西から）

４．2467 土坑（北西から）



５．2397溝（西から）

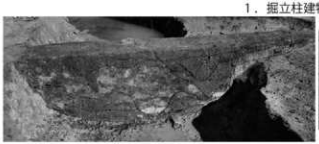
６．2355溝　全景（南から）



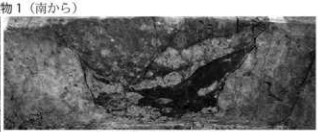
７．2355溝　断面（東から）

図版６　第１調査区　古代

１．掘立柱建物１（南から）

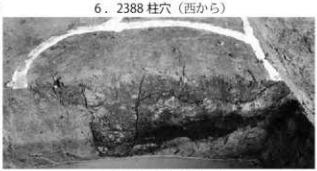


２．2389 柱穴（北から）

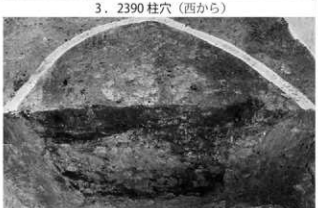


６．2388 柱穴（西から）

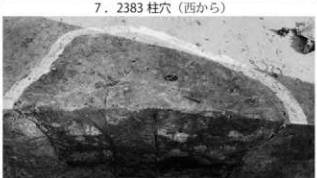
３．2390 柱穴（西から）



７．2383 柱穴（西から）

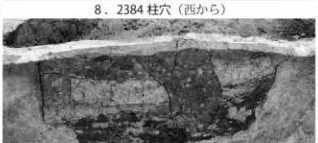


４．2391 柱穴（西から）



８．2384 柱穴（西から）

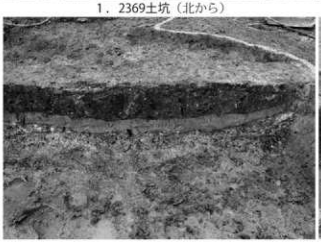
５．2386 柱穴（東から）



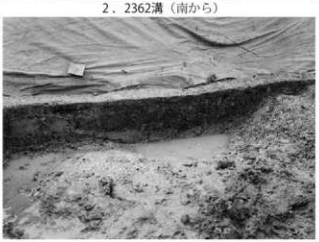
９．2385 柱穴（南西から）

１．2369土坑（北から）

２．2362溝（南から）



３．2461落込み（東から）



４．2461落込み（北から）

５．第２面　全景（東から）

図版８　第１調査区　中世

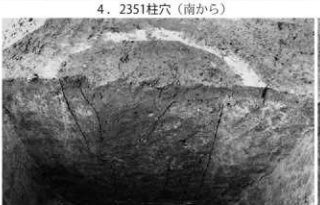
１．掘立柱建物19
（東から）

２．2348柱穴（南から）

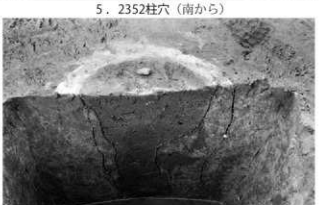
３．2350柱穴（南から）

４．2351柱穴（南から）

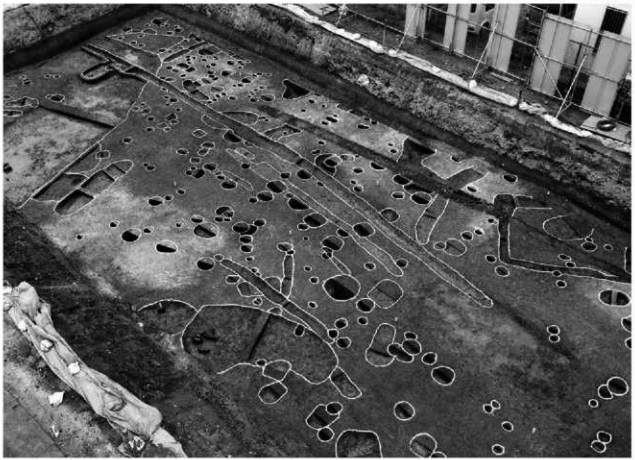
５．2352柱穴（南から）



６．2353柱穴（南から）



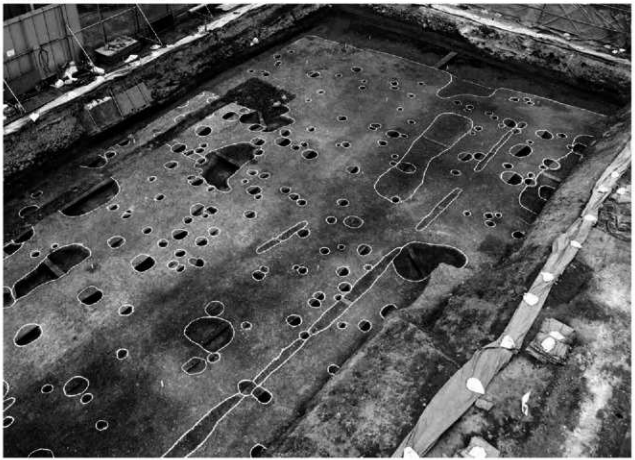
７．2354柱穴（南から）



１．第３面　3－1トレンチ東端部（南東から）

２．第３面　3－1トレンチ中央部（南から）

図版10　第２調査区



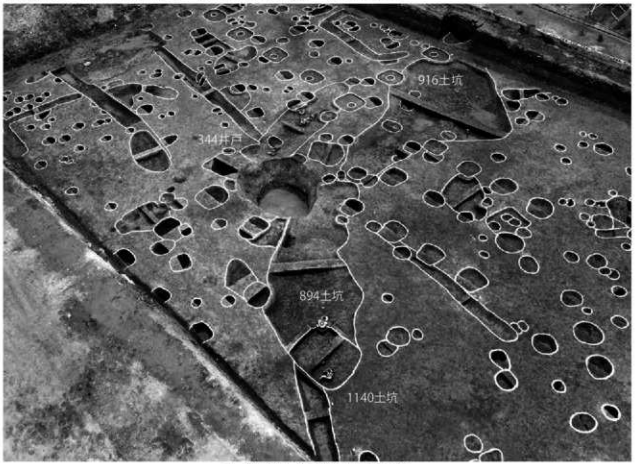
１．第３面　3－1トレンチ西端部（南から）

２．第３面　4－2トレンチ全景（西から）

１．第３面　4－1トレンチ全景（東から）

２．南壁断面（北西から）

図版12　第２調査区　弥生時代後期～古墳時代



１．第３面　検出状況（北西から）

２．894土坑　断面（南から）

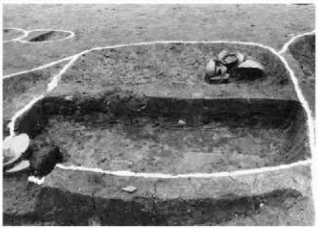
３．894土坑　出土遺物（１）（南西から）

４．894土坑　出土遺物（２）（北西から）

５．897落込み（南から）

図版13　第２調査区　弥生時代後期～古墳時代

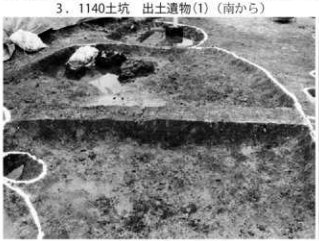
1．916落込み（南東から）



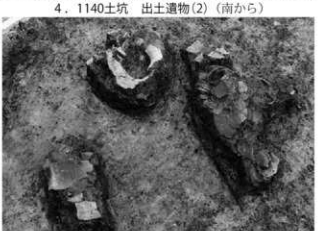
2．1140土坑（東から）

3．1140土坑　出土遺物(1)（南から）

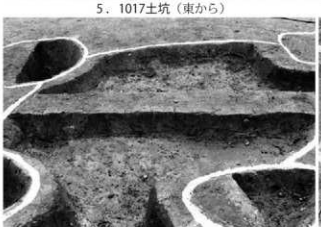
4．1140土坑　出土遺物(2)（南から）



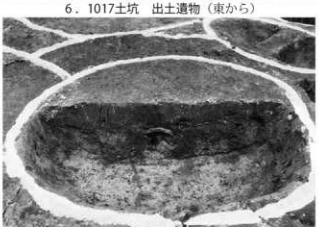
5．1017土坑（東から）



6．1017土坑　出土遺物（東から）



7．923土坑（東から）

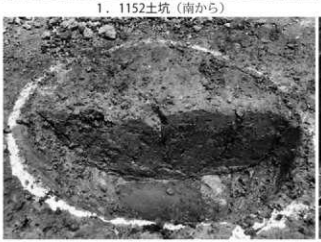


8．898土坑（南から）

図版14　第２・３調査区　弥生時代後期～古墳時代

１．1152土坑（南から）

２．372土坑（南から）



３．1784ピット（南から）

４．409落込み（東から）

５．古墳１（３－１トレンチ　西から）

６．古墳１（４－２トレンチ　西から）

７．古墳１（３－２トレンチ　南から）

８．古墳１（６－２トレンチ　西から）

１．古墳１　断面(1)（東から）

２．古墳１　断面(2)（北から）

３．古墳１　埴輪検出状況（１）（北から）

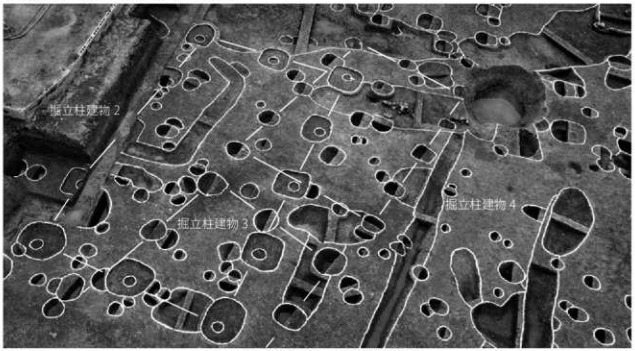
４．古墳１　埴輪検出状況（２）（北から）

５．古墳１　埴輪検出状況（３）（東から）

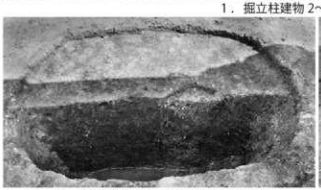
６．古墳１　埴輪検出状況（４）（南東から）

７．古墳１　埴輪検出状況（５）（東から）

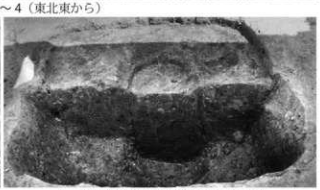
図版16　第２調査区　古代



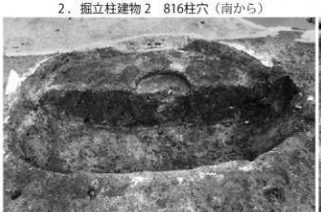
1．掘立柱建物 2～4（東北東から）



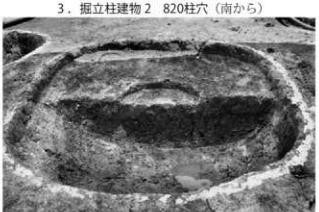
2．掘立柱建物２　816柱穴（南から）



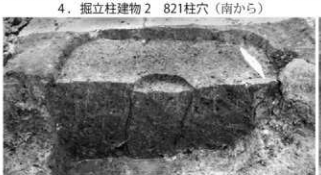
3．掘立柱建物２　820柱穴（南から）



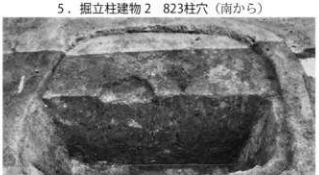
4．掘立柱建物２　821柱穴（南から）



5．掘立柱建物２　823柱穴（南から）



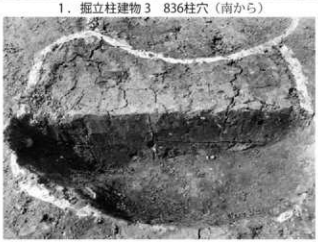
6．掘立柱建物２　1222柱穴（北から）



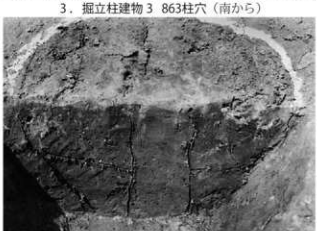
7．掘立柱建物２　865柱穴（南から）

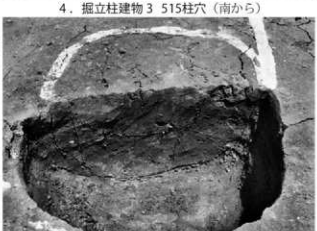
1．掘立柱建物３　836柱穴（南から）

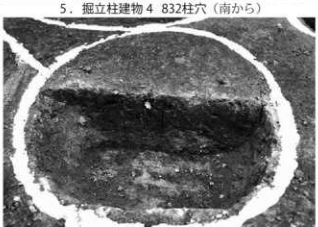
2．掘立柱建物３　837柱穴（南から）

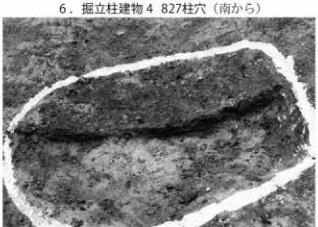

3．掘立柱建物３　863柱穴（南から）

4．掘立柱建物３　515柱穴（南から）

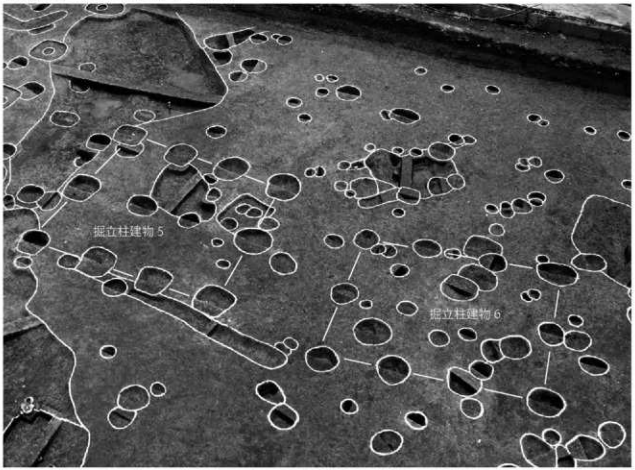

5．掘立柱建物４　832柱穴（南から）


6．掘立柱建物４　827柱穴（南から）

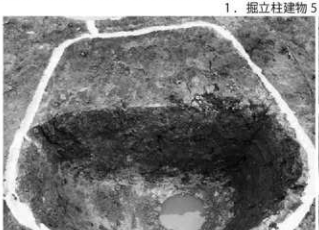

7．掘立柱建物４　1143柱穴（南から）


8．掘立柱建物４　1145柱穴（南から）

図版18　第２調査区　古代

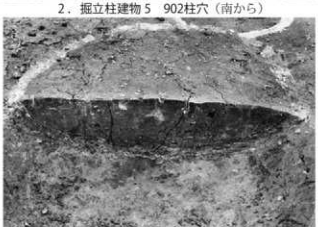


１．掘立柱建物５・６（西北から）



２．掘立柱建物５　902柱穴（南から）

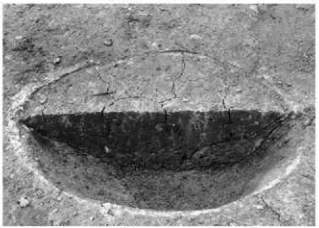
３．掘立柱建物５　903柱穴（南から）



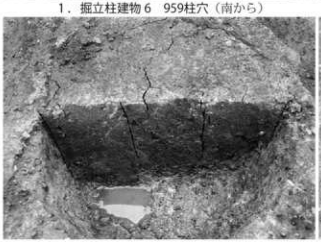
４．掘立柱建物５　910柱穴（南から）

５．掘立柱建物５　913柱穴（南から）

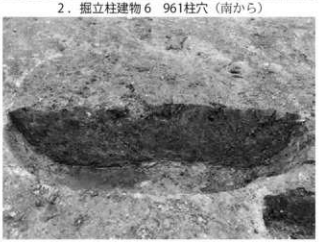
1．掘立柱建物６　959柱穴（南から）



2．掘立柱建物６　961柱穴（南から）

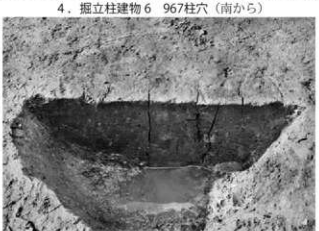


3．掘立柱建物６　965柱穴（南から）

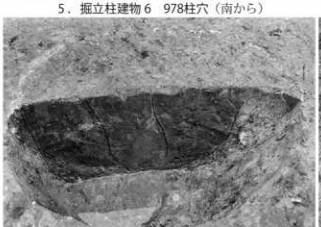


4．掘立柱建物６　967柱穴（南から）

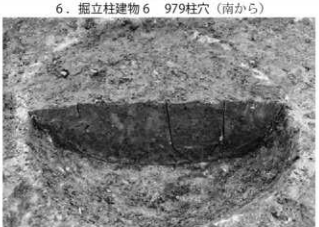
5．掘立柱建物６　978柱穴（南から）



6．掘立柱建物６　979柱穴（南から）

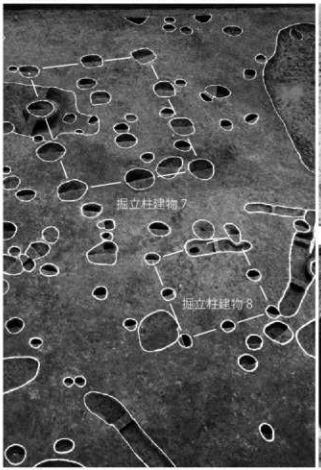


7．掘立柱建物６　1040柱穴（南から）



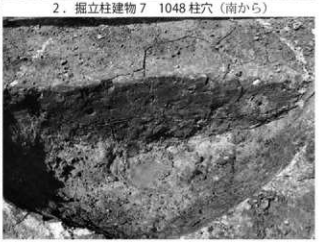
8．掘立柱建物６　1042柱穴（南から）

図版20　第２調査区　古代

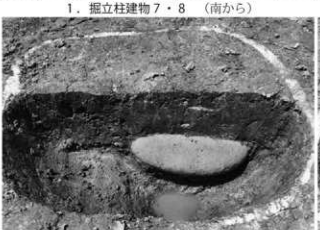


１．掘立柱建物７・８　（南から）

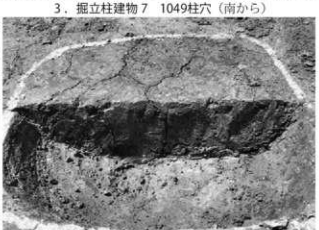
２．掘立柱建物７　1048 柱穴（南から）



３．掘立柱建物７　1049柱穴（南から）



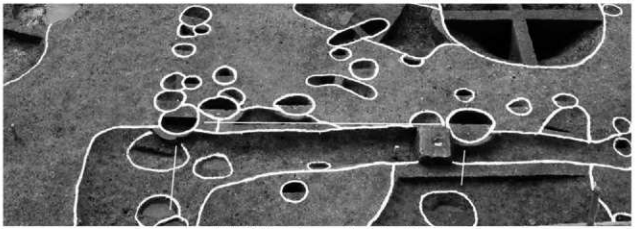
４．掘立柱建物７　1055柱穴（南から）



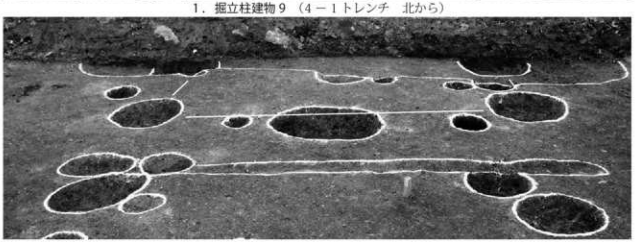
５．掘立柱建物７　1059柱穴（南から）

６．掘立柱建物８　1029柱穴（南から）

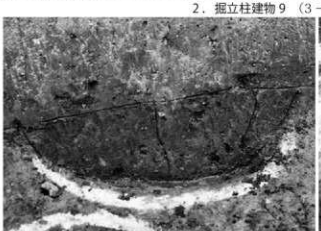
７．掘立柱建物８　1183柱穴（南から）



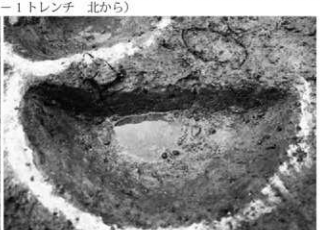
1．掘立柱建物９（４－１トレンチ　北から）



2．掘立柱建物９（３－１トレンチ　北から）

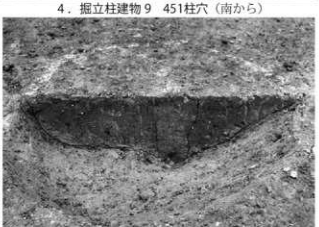


3．掘立柱建物９　449柱穴（南から）



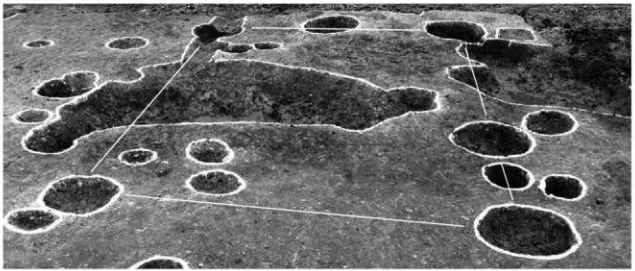
4．掘立柱建物９　451柱穴（南から）

5．掘立柱建物９　1616柱穴（南から）



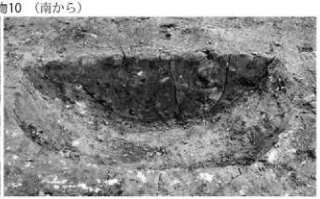
6．掘立柱建物９　1803柱穴（南から）

図版22　第２調査区　古代

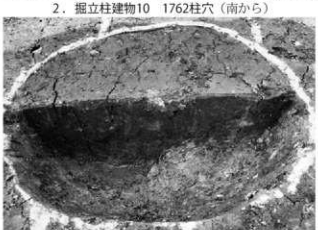


1．掘立柱建物10 （南から）

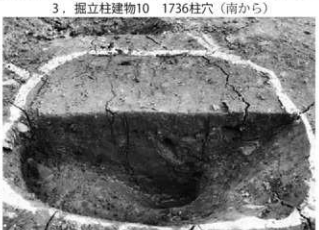
2．掘立柱建物10　1762柱穴（南から）



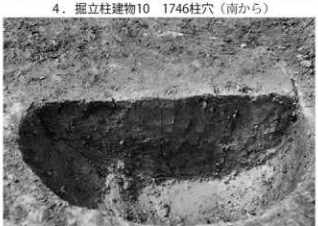
3．掘立柱建物10　1736柱穴（南から）



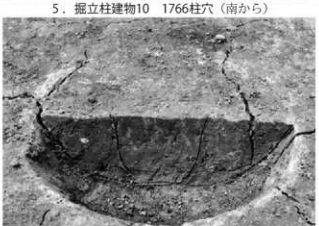
4．掘立柱建物10　1746柱穴（南から）



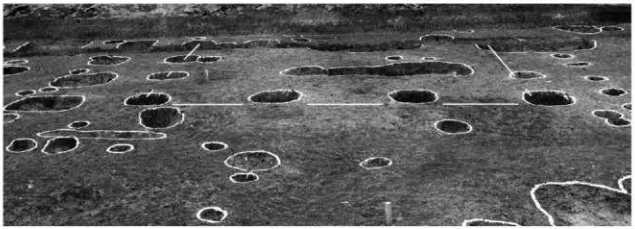
5．掘立柱建物10　1766柱穴（南から）



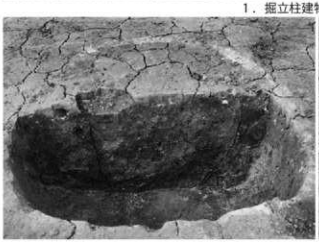
6．掘立柱建物10　1772柱穴（南から）



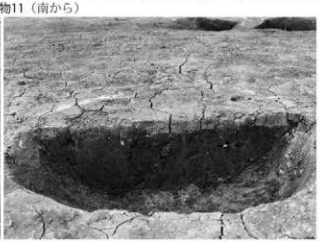
7．掘立柱建物10　1774柱穴（南から）



1．掘立柱建物11（南から）



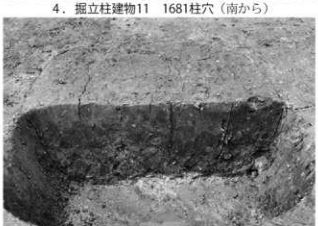
2．掘立柱建物11　1653柱穴（南から）



3．掘立柱建物11　1674柱穴（南から）

4．掘立柱建物11　1681柱穴（南から）

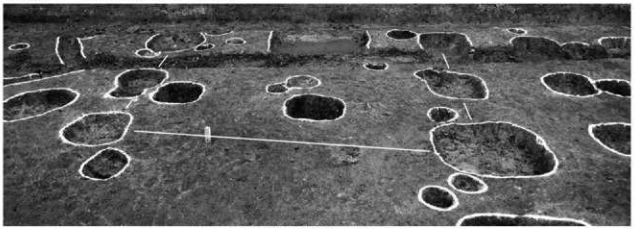
5．掘立柱建物11　1692柱穴（南から）



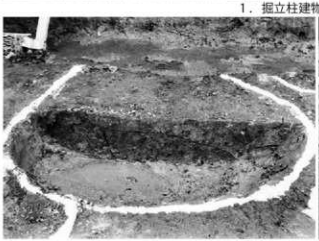
6．掘立柱建物11　1851柱穴（南から）

7．掘立柱建物 11　1853柱穴（南から）

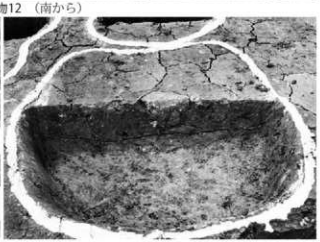
図版24　第２調査区　古代



1．掘立柱建物12　（南から）



2．掘立柱建物12　1583柱穴（南から）



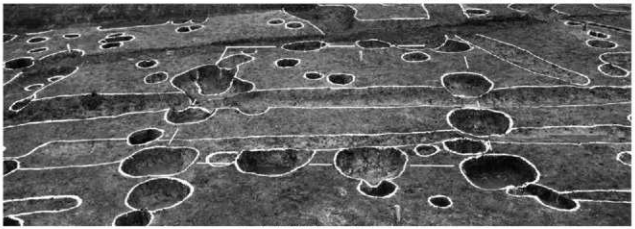
3．掘立柱建物12　1586柱穴（南から）

4．掘立柱建物12　1589柱穴（南から）

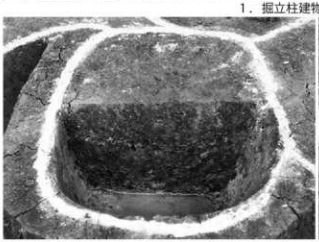
5．掘立柱建物12　1645柱穴（南から）

6．掘立柱建物12　1646柱穴（南から）

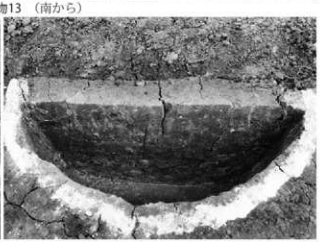
7．掘立柱建物９　1616柱穴（南から）



1．掘立柱建物13（南から）

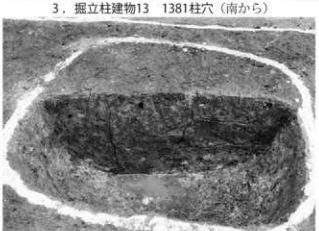


2．掘立柱建物13　1374柱穴（南から）

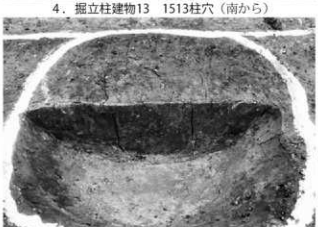


3．掘立柱建物13　1381柱穴（南から）

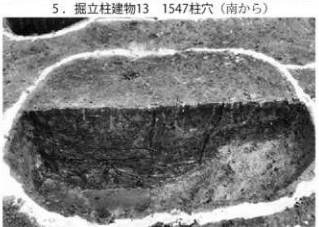
4．掘立柱建物13　1513柱穴（南から）



5．掘立柱建物13　1547柱穴（南から）

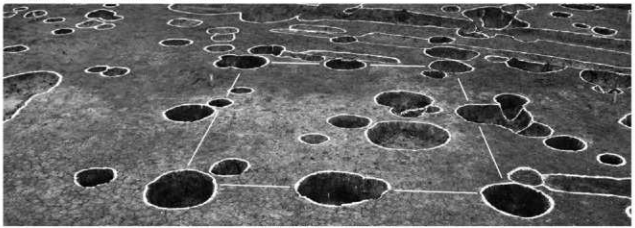


6．掘立柱建物13　1545柱穴（南から）

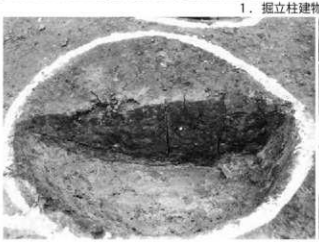


7．掘立柱建物13　1543柱穴（南から）

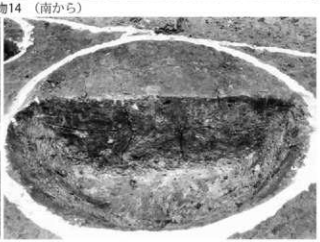
図版26　第２調査区　古代



1．掘立柱建物14　（南から）

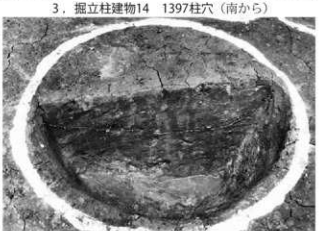


2．掘立柱建物14　1396柱穴（南から）

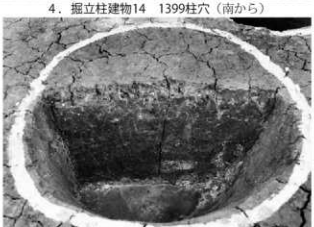


3．掘立柱建物14　1397柱穴（南から）

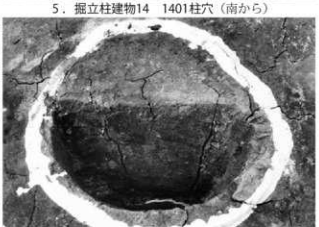
4．掘立柱建物14　1399柱穴（南から）



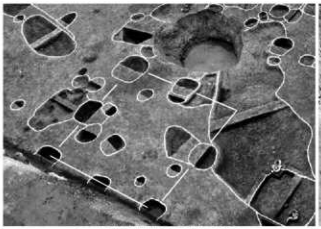
5．掘立柱建物14　1401柱穴（南から）



6．掘立柱建物14　1403柱穴（南から）

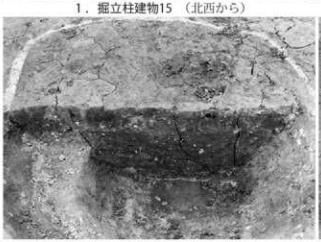


7．掘立柱建物14　1409柱穴（南から）

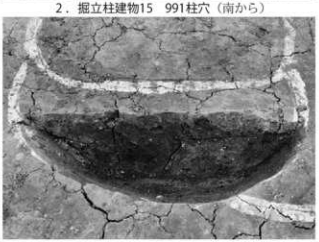


1．掘立柱建物15　（北西から）

2．掘立柱建物15　991柱穴（南から）



3．掘立柱建物15　993柱穴（南から）

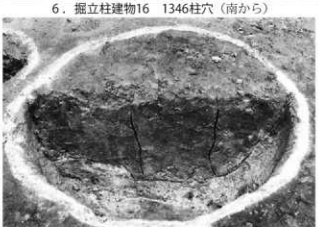


4．掘立柱建物15　1003柱穴（南から）

5．掘立柱建物16・17　（北西から）

6．掘立柱建物16　1346柱穴（南から）

7．掘立柱建物17　1263柱穴（南から）



8．掘立柱建物17　1273柱穴（南から）

図版28　第２調査区　古代

1．759土坑　検出状況（南から）

2．759土坑　検出状況（東から）

3．759土坑　埴輪上層検出状況（南から）

4．759土坑　埴輪下層検出状況（南から）

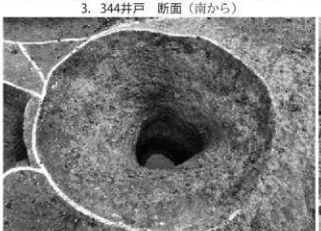
5．759土坑　断面（南から）

1．1182土坑（南から）

2．1182土坑　埴輪検出状況（東から）

3．344井戸　断面（南から）

4．344井戸　第２層出土遺物（南から）



5．344井戸　完掘状況（南から）

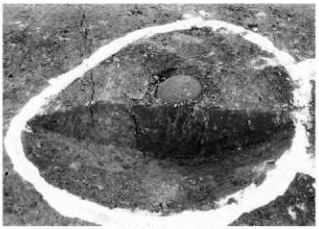
6．1135井戸　断面（南から）

7．1135井戸　上層出土遺物（南から）

8．1135井戸　下層出土遺物（南から）

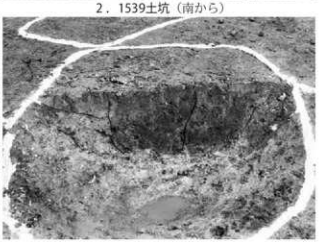
図版30　第２調査区　古代

１．1562井戸（南から）



２．1539土坑（南から）

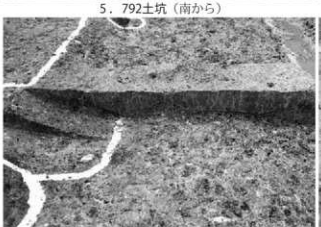
３．1739土坑（南から）



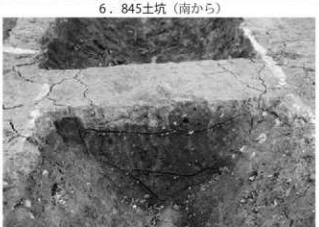
４．1902土坑（南から）

５．792土坑（南から）

６．845土坑（南から）



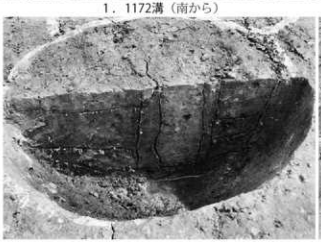
７．335溝（南から）



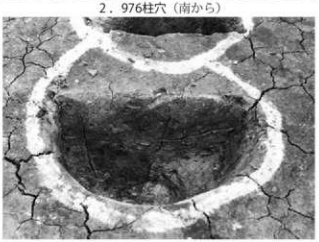
８．345溝（南から）

1．1172溝（南から）

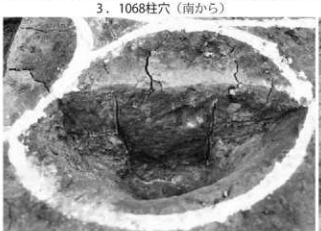
2．976柱穴（南から）



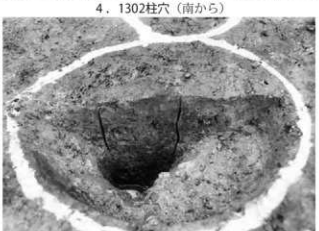
3．1068柱穴（南から）



4．1302柱穴（南から）

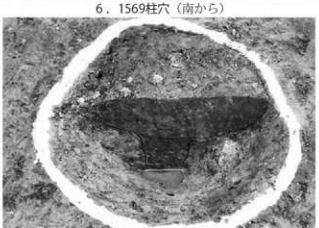


5．1395柱穴（南から）



6．1569柱穴（南から）

7．1698柱穴（南から）



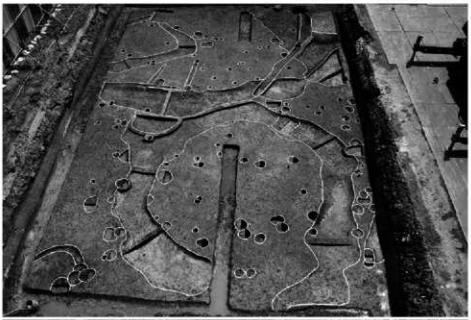
8．1892柱穴（南から）

図版32　第２調査区　中世

1．第１面全景
（3－1トレンチ　西から）

2．第１面全景
（4－1トレンチ　東から）

3．第１面全景
（4－2トレンチ　東から）



1．第３面　全景
（３－２トレンチ　西から）

2．第３面　全景
（５トレンチ　東から）

3．第３面　全景
（６－２トレンチ　西から）

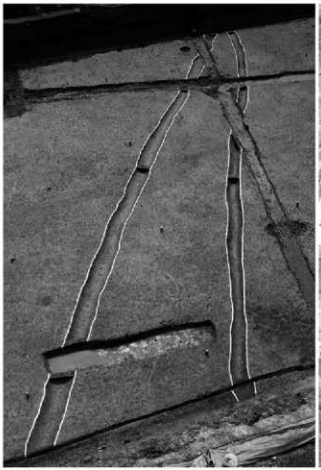
図版34　第３調査区

1．第３面　全景
（6－2トレンチ　東から）

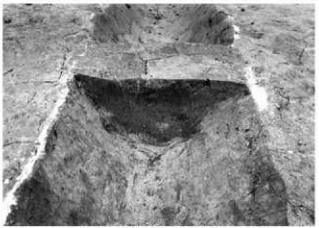
2．第３面　全景
（6－1トレンチ　東から）

3．南壁断面
（6－2トレンチ　北から）

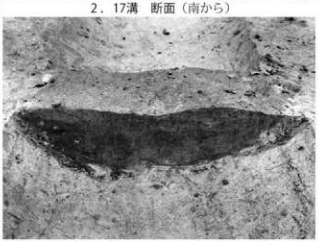
図版35　第３調査区　弥生時代後期～古代



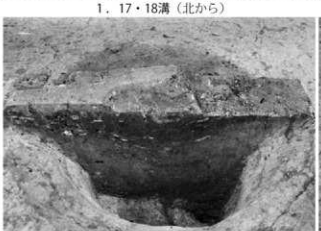
1．17・18溝（北から）



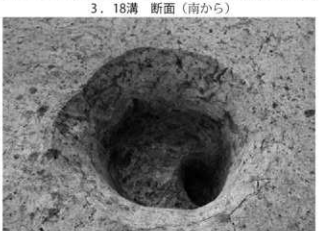
2．17溝　断面（南から）



3．18溝　断面（南から）



4．19土坑（南から）

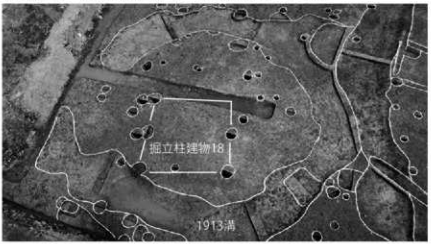


5．19土坑　完掘状況（南から）

6．2167土坑（西から）

7．2167土坑　出土遺物（西から）

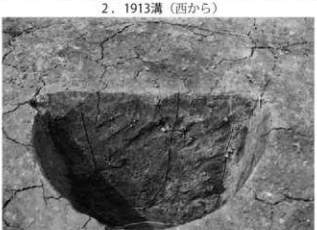
図版36　第３調査区　古墳時代～古代



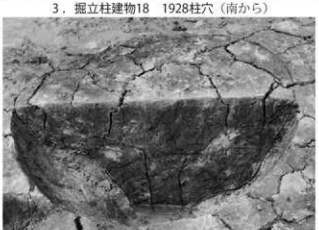
1．1913溝・掘立柱建物18
（南から）

2．1913溝（西から）

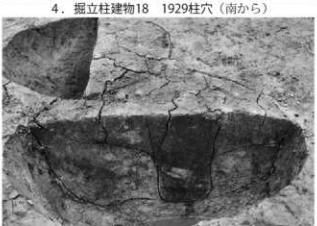
3．掘立柱建物18　1928柱穴（南から）



4．掘立柱建物18　1929柱穴（南から）



5．掘立柱建物18　1930柱穴（南から）



6．掘立柱建物18　1933柱穴（南から）

7．掘立柱建物18　1935柱穴（南から）

図版37　第３調査区　古代

1．第２面
（３－２トレンチ　西から）

2．第２面
（5トレンチ　北から）

3．第２面
（６－２トレンチ　西から）

4．第２面
（６－１トレンチ　北から）

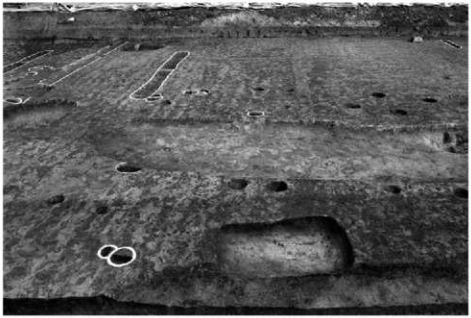
図版38　第４調査区

1．第3面（７トレンチ　西から）

2．第3面（８トレンチ　東から）

3．第２面
（７トレンチ　南東から）

4．第２面
（７トレンチ　北東から）



1．第２面　東端部
（８トレンチ　南から）

2．第２面　中央部
（８トレンチ　南から）

3．第２面　西端部
（８トレンチ　南から）

図版40　第４調査区　中世～近世

1．第１面
（７トレンチ　東から）

2．第１面
（８トレンチ　東から）

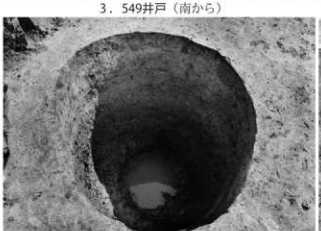
3．南壁断面
（８トレンチ　北東から）

1．599井戸（南から）

2．547井戸（南から）

3．549井戸（南から）

4．549井戸　2段目（南から）


5．549井戸　完掘（南から）

6．100井戸（南から）

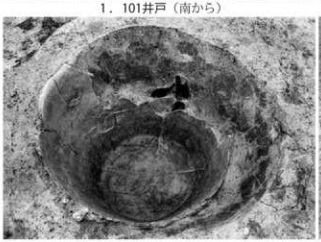
7．134井戸（南から）

8．74井戸（南から）

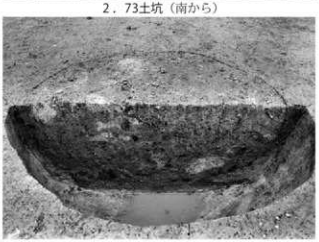
図版42　第４調査区　中世～近世

1．101井戸（南から）

2．73土坑（南から）

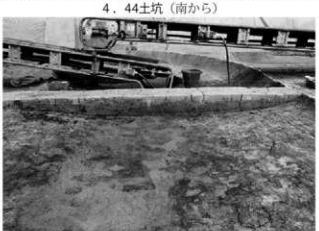


3．73土坑　出土遺物（南から）

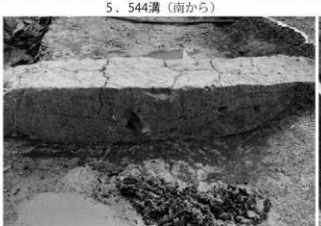


4．44土坑（南から）

5．544溝（南から）



6．584溝（南から）



7．585溝（南から）

8．98流路（北西から）

1．第２面（９トレンチ　西から）

2．第２面（10トレンチ　北から）

3．第２面（11トレンチ　東から）

4．第２面（12トレンチ　西から）

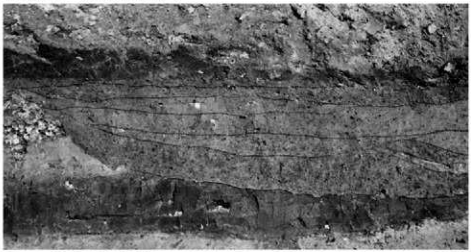
5．第１面（９トレンチ　南東から）

6．第１面（10トレンチ　北から）

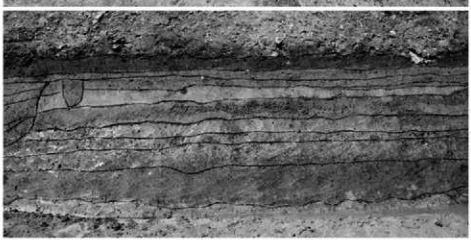
7．第１面（11トレンチ　東から）

8．第１面（12トレンチ　東から）

図版44　第５調査区



1．東壁断面
（９トレンチ　西から）



2．西壁断面
（10トレンチ　東から）

3．南壁断面
（11トレンチ　北から）

4．南壁断面
（12トレンチ　北から）

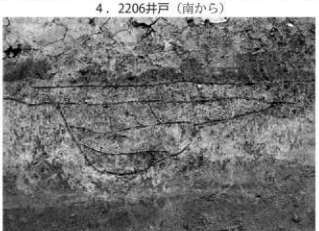
1．273井戸（南から）

2．2113井戸（南から）

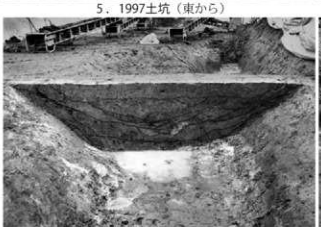
3．2113井戸　曲物井筒（南から）

4．2206井戸（南から）

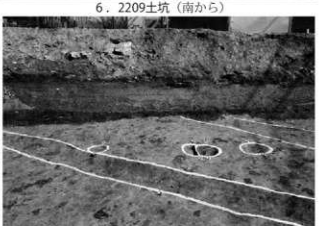
5．1997土坑（東から）



6．2209土坑（南から）



7．2201溝（西から）



8．98流路（西から）

図版46　第６調査区

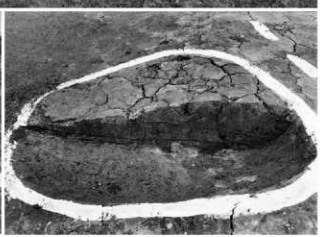
1．第３面
（13・14トレンチ
南東から）

2．第３面（15トレンチ　南東から）

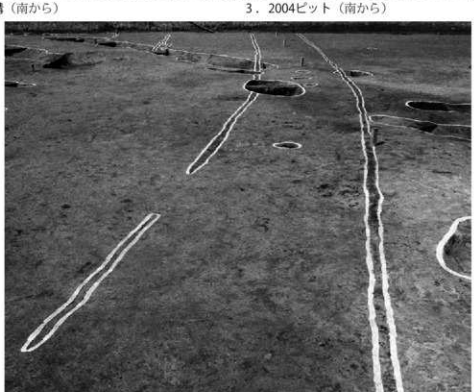
3．2106土坑（北から）

1．2338溝（南から）

2．2338溝（南から）



3．2004ピット（南から）



4．轍（南から）

図版48　第６調査区　古代

1．第２面
（13・14トレンチ
南東から）

2．第２－２面
（15トレンチ
南東から）

3．第２－１面
（13・14トレンチ
南東から）

4．1979溝（南から）

1．第１面
（13・14トレンチ
南東から）

2．第１面
（15トレンチ
南東から）

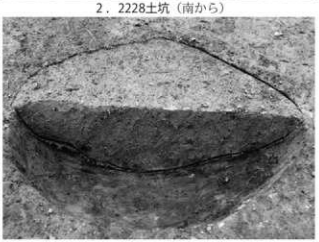
3．西壁断面
（13・14トレンチ
東から）

図版50　第６調査区

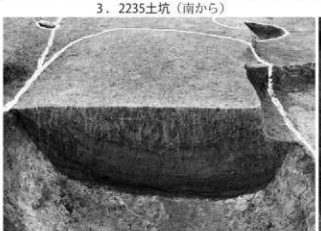
１．2224柱穴（南から）

２．2228土坑（南から）

３．2235土坑（南から）

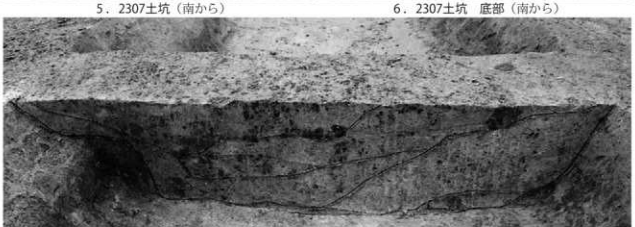


４．2294土坑（南から）



５．2307土坑（南から）

６．2307土坑　底部（南から）



７．2215溝（南から）

図版51　第１～３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

2467・2468土坑、2397溝

図版52　第２・３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第24図 - 3

第24図 - 2

第22図 - 18

第25図・5

第25図・4

第25図・2

写真・1　写真・2

第25図・6

図版54　第２・３調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

写真・3

写真・4

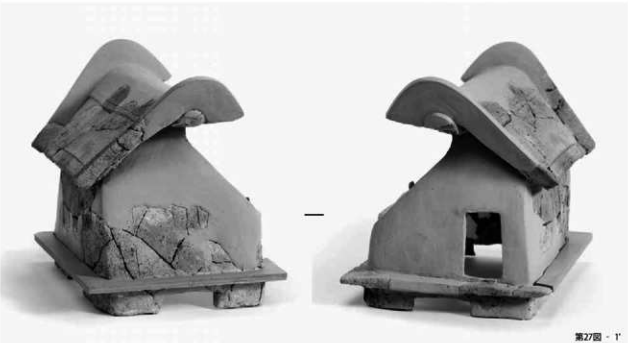
第26図・1

第26図・1'

第26図・1"

写真 - 5

第27図 - 1



第27図 - 1'

図版56　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第30図 - 7

第32図 - 1

865土坑

第32図 - 8

第32図 - 7

第32図 - 10

第32図 - 11

894土坑

第32図 - 18

第32図 - 19

第32図 - 21

第33図 - 3

第33図 - 4

図版58　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第32図 - 14

第32図 - 20

第33図 - 8

第33図 - 7

第34図 - 2

第34図 - 3

第34図 - 4

894土坑

図版59　第 2 調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第34図 - 5

894土坑

第35図 - 1

第35図 - 5

第36図 - 3

第35図 - 2

1140土坑

第36図 - 1

1152土坑

第41図 - 1

1784 ピット

図版60　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第38図 - 7　第38図 - 13

第38図 - 10　第38図 - 9

第38図 - 15

第38図 - 14

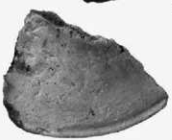
1017 土坑

第38図 - 4

第40図 - 2

第40図 - 1

第40図 - 3



第40図 - 4

1167 土坑

図版61　第 2 調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第44図 - 2

第48図 - 8　第48図 - 3

第44図 - 5

第48図 - 18　第48図 - 16

第44図 - 9

第48図 - 25　第48図 - 24

第45図 - 2

916 落込み

第48 - 19

897 落込み

図版62　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第50図 - 19

第50図 - 21

第50図 - 12

第50図 - 25

第50図 - 24

第50図 - 5

第51図 - 12

第51図 - 3

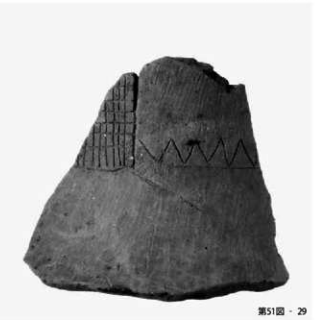
第51図 - 14

包含層（１）

第51図 - 21

第51図 - 28

第51図 - 24

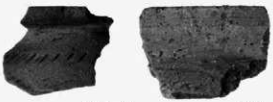


第51図 - 29

第51図 - 10

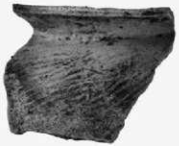
第51図 - 20

図版64　第２調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物



第53図 - 20　第53図 - 19

第54図 - 4



第53図 - 12

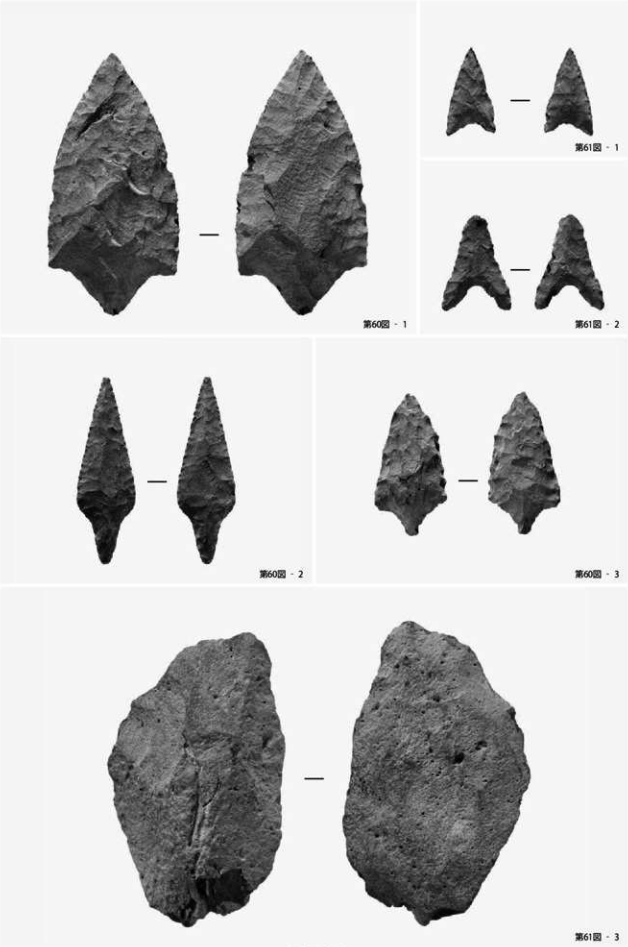
第54図 - 6

第53図 - 11

第53図 - 17

第54図 - 7

図版65　第２～４調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物



包含層（4）

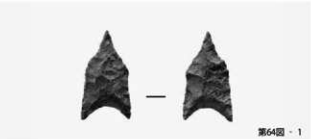
図版66　第６調査区　弥生時代～古墳時代出土遺物

第63図 - 2

第63図 - 8

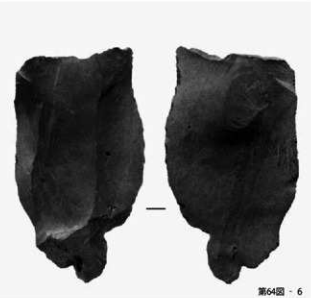
第63図 - 9

2106 土坑



第64図 - 1

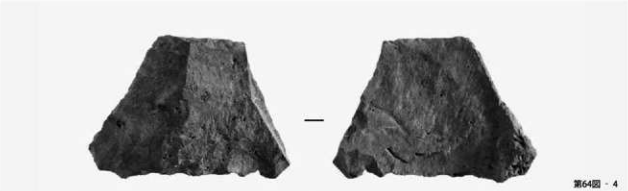
第64図 - 2



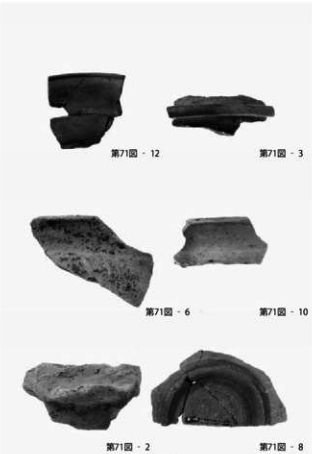
第64図 - 6

第64図 - 3

包含層



包含層



掘立柱建物２

1182 土坑

図版68　第２調査区　古代出土遺物

第89図 - 2

第89図 - 1

第90図 - 2

第90図 - 1

759 土坑

図版69　第２調査区　古代出土遺物

第92図 - 2

第92図 - 6

第92図 - 7

第92図 - 8

第93図 - 18

第93図 - 17

第92図 - 9

第93図 - 16

第93図 - 15

図版70　第２調査区　古代出土遺物

第93図 - 2

第94図 - 25

第93図 - 4

第93図 - 3

第94図 - 1

第94図 - 12

第94図 - 7

第94図 - 10

第94図 - 9

第96図 - 7

344 井戸

第96図 - 9

第96図 - 10

第96図 - 17

第96図 - 12

第95図 - 1

1135 井戸

図版72　第 2 調査区　古代出土遺物

第96図 - 16

第98図 - 2

1539 土坑

第96図 - 11

第99図 - 2

792 土坑

第96図 - 13

1135 井戸

第103図 - 1

第 2 調査区　包含層

第108図 - 1

第108図 - 2

2167 土坑

第107図 - 1

1486 土坑

第119図 - 2

1979 溝

第115図 - 1

2004 ピット

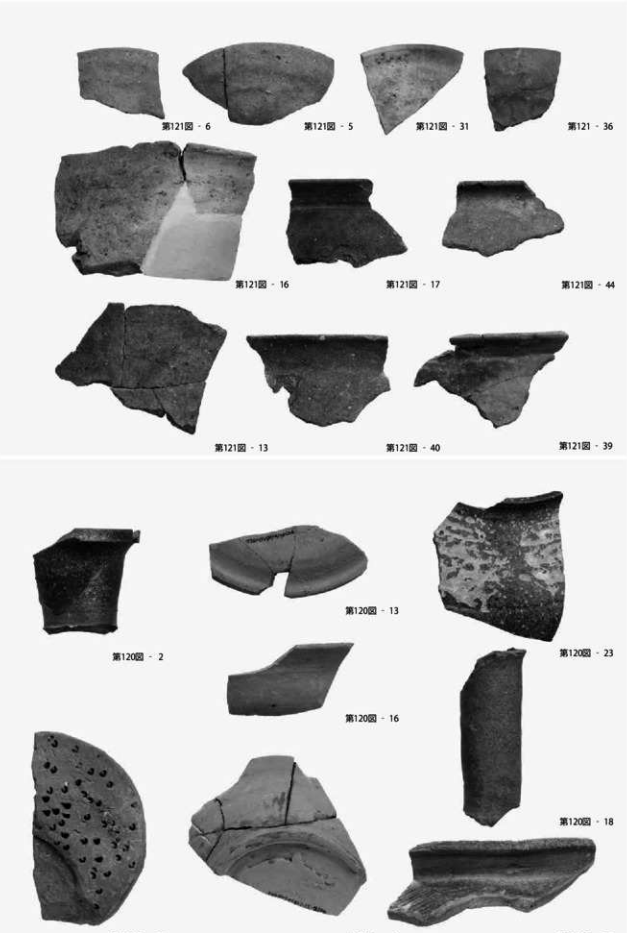
第120図 - 26

第121図 - 5

第122図 - 4

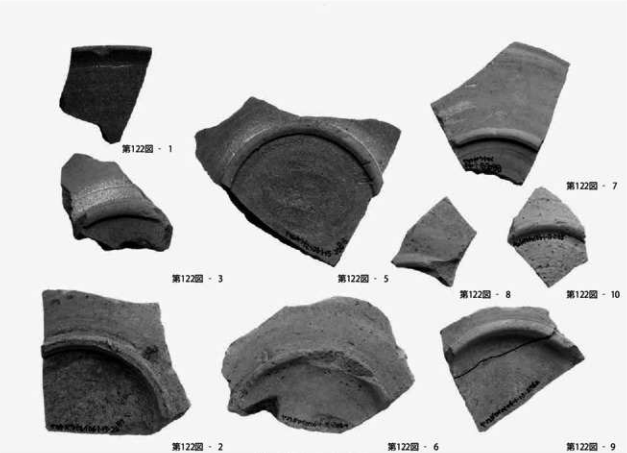
第 6 調査区　包含層

図版74　第６調査区　古代出土遺物

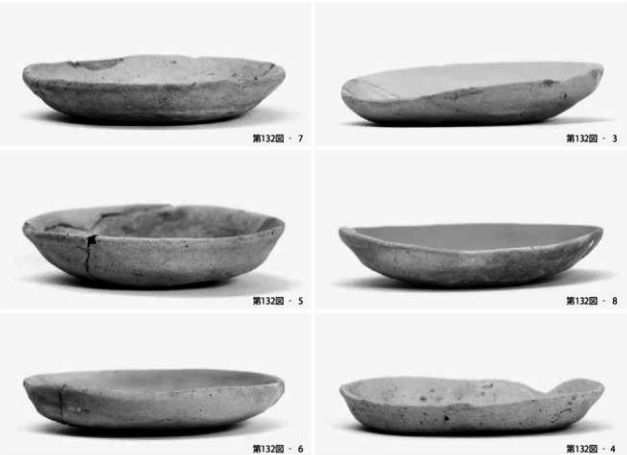


第６調査区　包含層

図版75　第４・６調査区　古代・中世出土遺物



第６調査区　包含層



第４調査区　Ⅰ－２層

図版76　第４調査区　中世出土遺物

第132図 - 10

第132図 - 17

第132図 - 12

第132図 - 18

第132図 - 14

第132図 - 19

第132図 - 15

第132図 - 20

第132図 - 16

第132図 - 22

第４調査区　Ⅰ－２層

第133図 - 9　第133図 - 6

第133図 - 2

第133図 - 4

第133図 - 5

第133図 - 10

599 井戸

第134図 - 5

第134図 - 6

547 井戸

図版78　第４調査区　中近世出土遺物

第135図 - 1

第140図 - 3

第135図 - 4

第140図 - 2

74・101 井戸

第135図 - 3

第136図 - 1

549 井戸

第149図 - 7

第149図 - 4

584 溝

第147図 - 1

第147図 - 2

第148図 - 1

578 溝

第147図 - 3

544 溝

図版80　第４調査区　中近世出土遺物

585溝

第149図 - 1

第150図 - 22

第150図 - 23

第150図 - 19

第151図 - 9

第151図 - 8

第150図 - 17

第150図 - 2

第150図 - 14

第150図 - 13

第151図 - 1

第151図 - 10

第151図 - 12

第153図 - 13

第153図 - 14

第４調査区　包含層

第158図 - 1

第158図 - 4

1995 井戸

第160図 - 4

2113 井戸

第159図 - 3

1997 井戸

図版82 第 5 調査区　中近世出土遺物

第161図 - 2

第161図 - 5

第161図 - 1

第161図 - 11

第161図 - 8

第161図 - 7

第161図 - 10

2206 井戸

写真 - 6

2206 井戸

第165図 - 13　第165図 - 12

第165図 - 14　第165図 - 16

第165図 - 15

2210 落込み

第167図 - 1

第167図 - 2

第167図 - 3

2228 土坑

図版84　第６調査区　中近世出土遺物

第169図 - 12

第169図 - 4

第169図 - 9

第169図 - 7

第169図 - 10

2307・2235 土坑

第171図 - 1　第171図 - 2

第171図 - 4

第171図 - 8

第171図 - 5

2215 溝

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまとがわいまいけいせき に
書　名	大和川今池遺跡Ⅱ
副書名	都市計画道路大和川線および都市計画道路堺松原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	(財) 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 192 集
編著者名	市村　慎太郎　森屋　美佐子
編集機関	財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒 590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号　℡ 072(299)8791
発行年月日	2009 年 8 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまとがわいまいけ 大和川今池遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらし 松原市 あまみにし 天美西	27217	12	34° 35′ 30″	135° 31′ 50″	2006年8月 ～ 2008年3月 2008年9月 ～ 2009年8月	7,185 ㎡	都市計画道路大和川線および都市計画道路堺松原線建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大和川今池遺跡	集落	弥生	土坑・溝・落込み	土器・石器	
	墓域	古墳	古墳・土坑	土師器・須恵器・埴輪	埋没古墳
	集落 墓域 水田	古代	掘立柱建物・ピット・土壙墓・土坑・井戸・畦畔・溝	土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器	居住域と生産域
	集落	中　近世	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・瓦	居住域と生産域

要　約

弥生時代後期～近世の遺構の検出をおこなった。その画期は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭・古墳時代中期～後期・古代・中世～近世の大きく４時期にある。弥生時代後期～古墳時代前期初頭では、集落の縁辺部を検出している。古墳時代中期～後期では、中期の家型埴輪や円筒埴輪をもつ埋没古墳１基を検出している。後期では、須恵器の一括遺物を含む土坑などを検出している。古代では、遺構面を部分的に３面検出し、掘立柱建物を中心とした集落・水田・集落の縁辺部を確認することができた。中世～近世においては、中世前期の井戸や土坑を散見できた。中世後期～近世の井戸・土坑・溝・流路などを検出し、遺跡の成り立ちの一端を垣間見ることができた。

(財)大阪府文化財センター発掘調査報告書　第192集

大和川今池遺跡 Ⅱ

－都市計画道路大和川線および都市計画道路堺松原線
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行年月日／2009年8月31日発行

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号